

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

風俗草紙

1

1





上の絵は、マゾヒズムの女主人が、黒人の女中に命じて、これから自分の体を鞭打たせようとしているところである。白人が黒人を虐めている絵は多いが、逆の絵は珍しい。しかもこうした女たちは同性愛の場合が多い。一人は虐めながら、一人は虐められながら、興奮するのである。逞ましい体付のこの黒人の女中と、白人の女性が、激しい嗜虐遊戯の後でもつれ合う姿は、恐らく獣じみた凄まじいものであろう。

◇後記◇

お待たせ致しました。一月号をお届け致します。歳末の忙しい気分を忘れて、マニヤックな雰囲気充分満ちて戴くべく、本号は大増頁の上、この号に限り定価も特に百二十円と致しました。巻頭の多色刷にグラビヤ、一色刷口絵もタッブリ染しんで戴けることと思いましたが、本文も思い切った増頁を断行。結局従来の本誌の約三分の一近く増頁された訳で、本社としてはこれは出血的な読者奉仕版であります。

年に一度の新年号を、かくも豪華に装った本誌の微意と努力を、何卒諒とせられむことを乞う次第であります。

尚、この定価は新年号のみで、二月号より又旧定価の百円と致します。最大限の増頁に、費用を惜まずあらゆる材料を蒐集して、全社員の情熱をこめて、御愛顧に報ゆるつもりであります。引続き御愛読の程をお願い申し上げます。

本誌二月号の発売日は一月十日です!! (定価百円)
又々増頁の読者奉仕特別号です。御期待下さい!!
尚『秘蔵版風俗草紙』の発売は十二月二十日です。
部数僅少に付お早くお求めを!!

ます。

サヂズム、マゾヒズム、レスボス、ソドミア、フェチスト、等々、各々の旗じるしを掲げたアブ・マニヤの熱烈な投書、投稿は引きも切らず、机上に山積して、毎日深夜までこれを熟読する編集子の歎びはたとえ様もありません。既に本誌を舞台に、続々とユニークな作家陣が躍り出つてあります。

本誌は今年より未掲載の作品についても、「読者交歓室」末尾にその批評を掲げて、今後より一層の御協力を得るものと致しますが、何卒投書投稿は一度をもつて止めず、二度三度とお送り下さいますようお願い申し上げます。掲載の暁は投稿といえど優遇するにやぶさかではありません。

尚、別掲の如く「式拾万円懸賞原稿大募集」を致します。この機会を逃さず全読者の熱烈な御投稿を期待します。手記小説告白等、

アブノーマルな世界を描き、本誌にふさわしいものであればなんでも結構です。

終りに、愈々今年十二月二十日、「秘蔵版風俗草紙」が発行されます。毎日続々と到着する予約申込の整理に係員は忙殺されてをりますが、僅少部数であり、再版は一寸不可能な状態でありますので、店頭にて御入手予定の方はお早めにお求め下さるようお願い申し上げます。

(編集部 氏家記)

風俗草紙

第二巻 第一号
毎月一回一日発行
定価 百二十円

昭和二十八年十二月二十五日印刷
昭和二十九年 一月 一日発行

編集人 氏家富良
発行人 野村佳秀

印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十三番地

発行所 日本特集出版社
東京都千代田区神田保町二の三四
電話 九段 33 三四二七番
振替 東京 二四二五一番



れい子
三つ子
三つ子



華麗な無惨繪

本誌特写々真



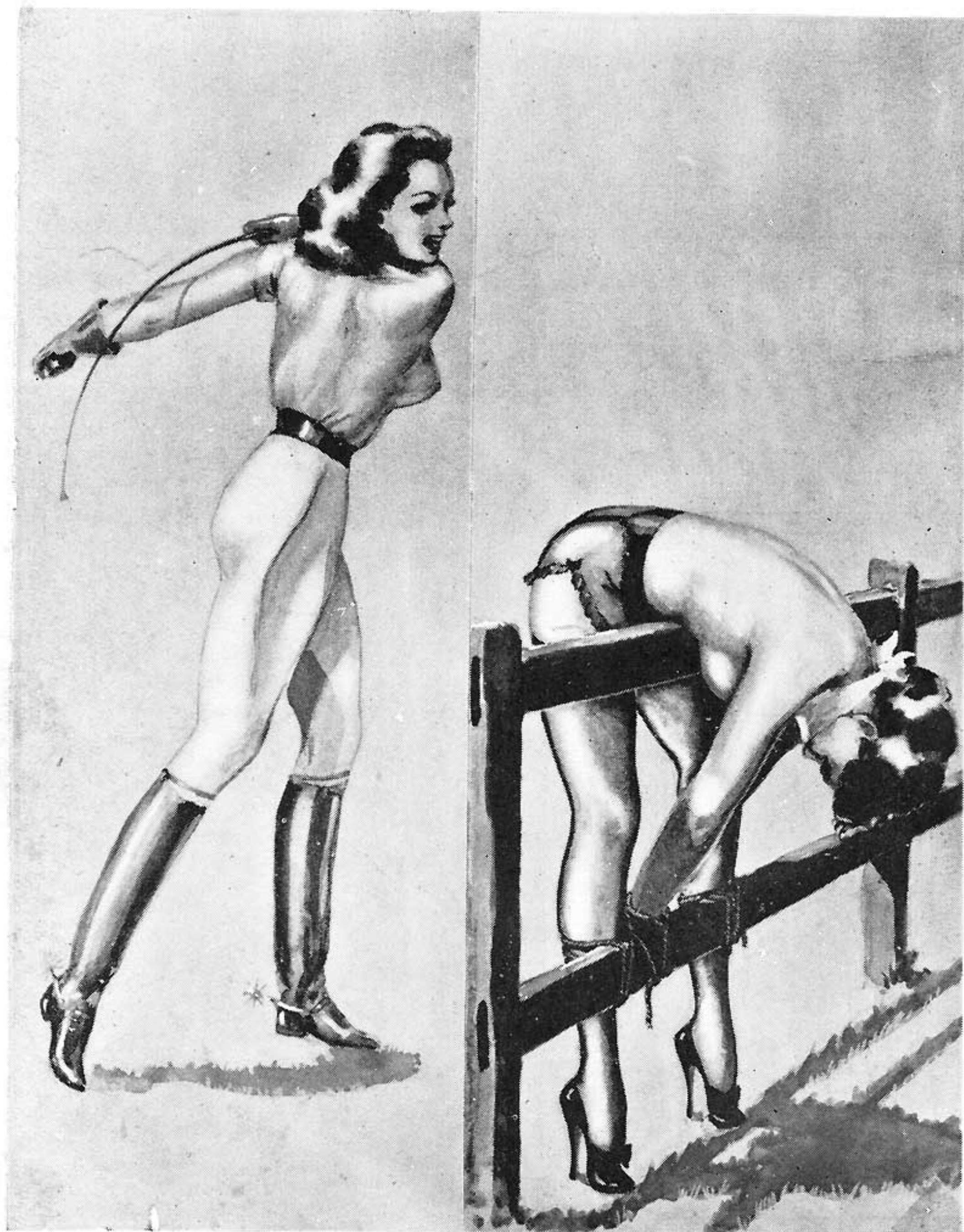


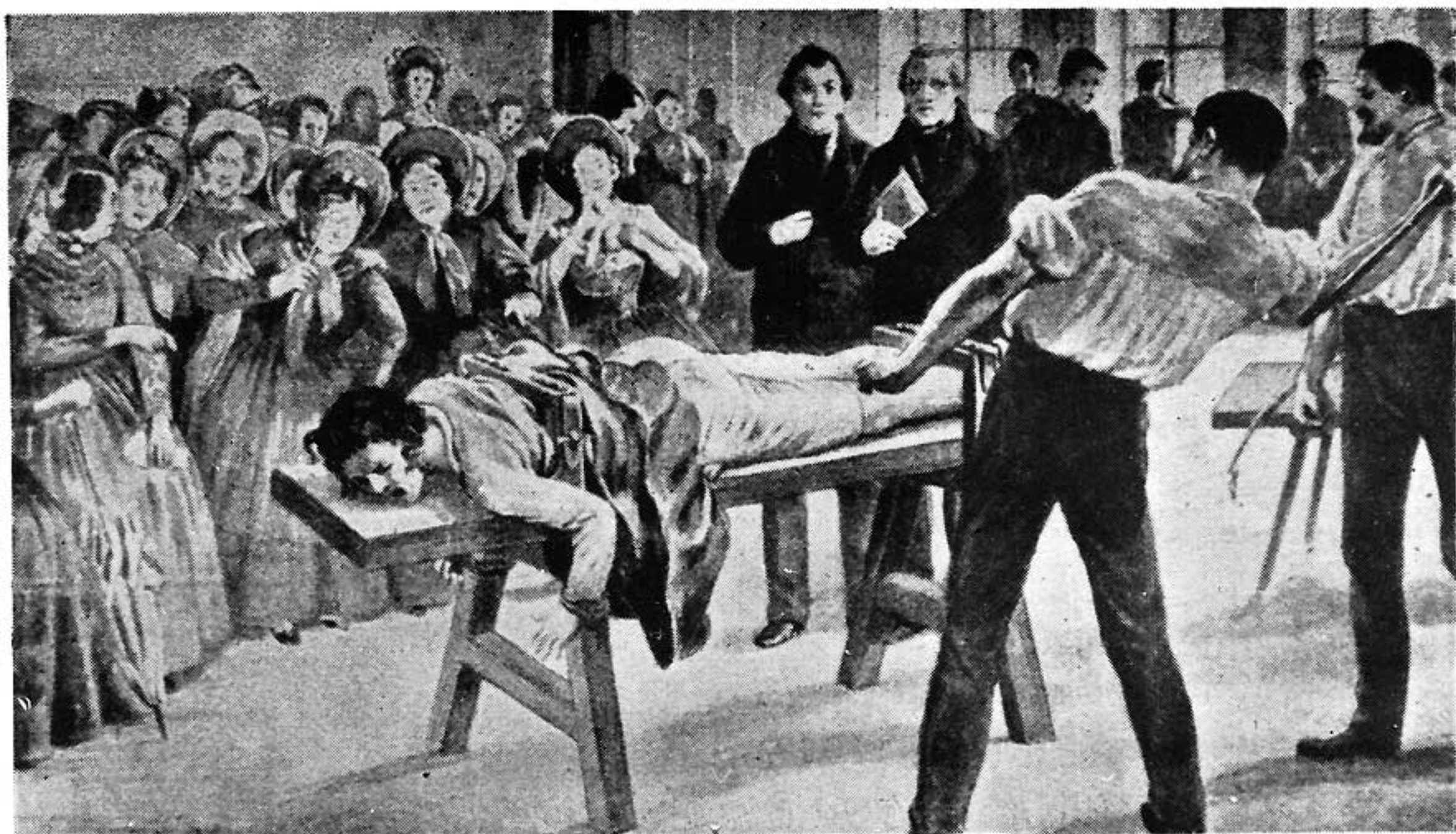


変態 臀 打ち・大画集

アメリカ女性のサデズム

現代アメリカの変態風俗を紹介する資料は殆どない。本誌は特に在米の愛読者と緊密な連絡をとり、今後ドシドシこの種の資料の紹介に努めるつもりである。この絵は白人の女主人が女中らしい黒人の女を折檻する、代表的な“臀打ち”である。





↑ ピシッピシッと鞭が振りおろされる度に、薄いパンタロンの下の、よく発達した娘の臀が、悲鳴といつしよにモクモク、モクモクと蠢動する。厳めしい教師の顔にもやがてサヂズムの歓びがキラキラ浮んで来る……………

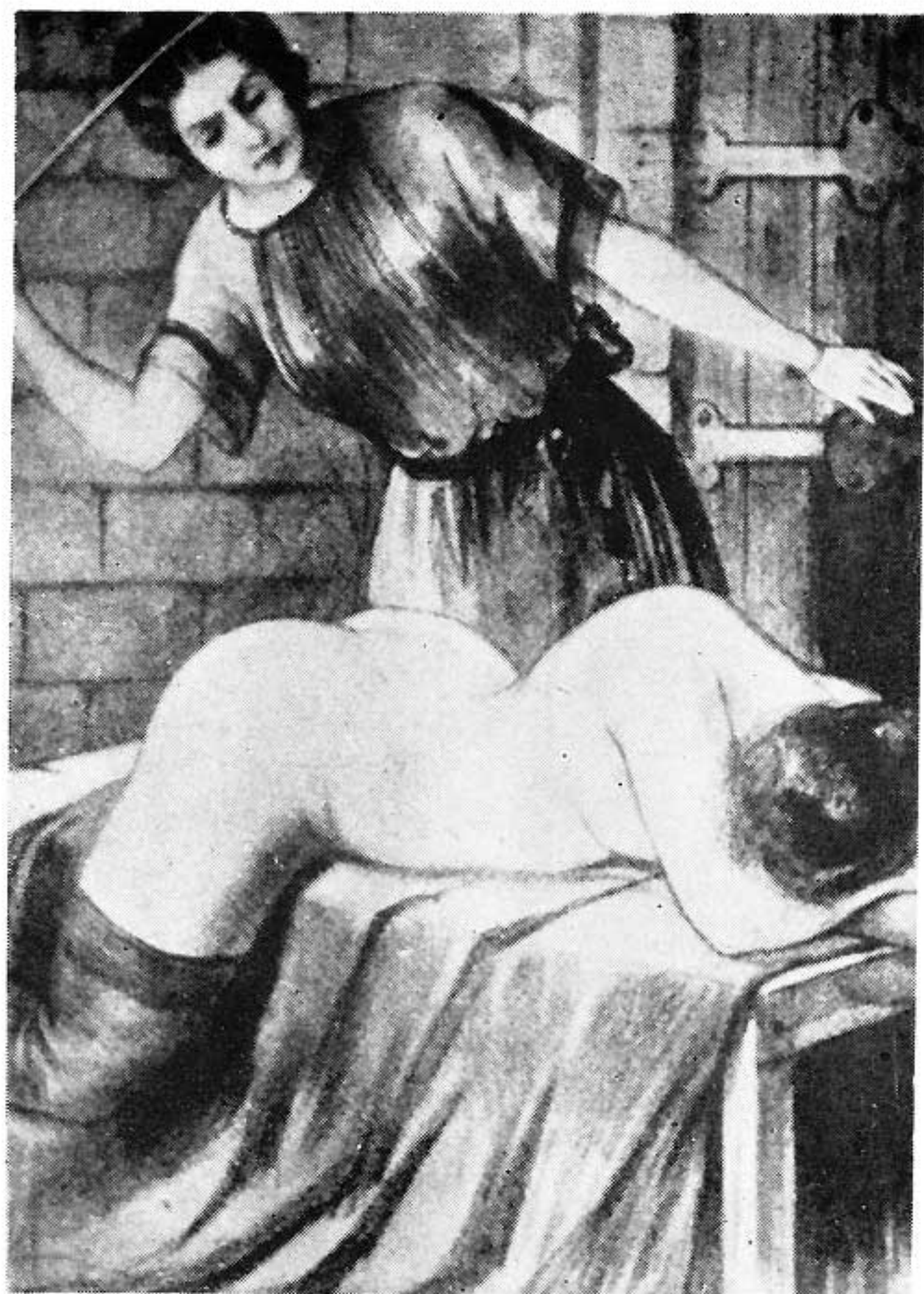


→ オールドミス教師はしつけが厳しい。一寸した事で娘のズロースをおろして尻を打つ。その度に彼女は欲情するのだ。

西洋のムチ打は、女家庭教師と生徒、女子寄宿舎生徒、僧侶と尼僧をあつかつたものが多い。文学も絵画も、たいていこれをモチーフにしている。

上図は「公開のムチ打ち」と題するもので、女学生を教師が打っているもの。あきらかに、男たちは、懲罰をはなれて、娘の尻を打つのを楽しんでいる光景。

下図は、女教師が、生徒のお尻を平手打ちにしているところ。こういうのは、打つほうも打たれるほうも、じつは嬉しいがつて※



← ポツテリと肉付のい、小間使を裸にむいて、その白のように豊かな臀を、女主人は容赦なく打つ。原因は嫉妬とサヂズムに、同性愛がまじっている。

※いる。この絵は、打たれている女生徒が、先生の脚のあいだに顔を入れて何をしているのであろうか？
思春期の若い娘は、ふくらんで行く乳房やお尻、じぶんの肉体を見せびらかしたい。しかし、見られることは怖い。そこに快樂があり、お尻は、羞恥と誇りの焦点である。
偽善的な、教師とか僧侶は、その焦点のお尻に、欲望の発散を求める。

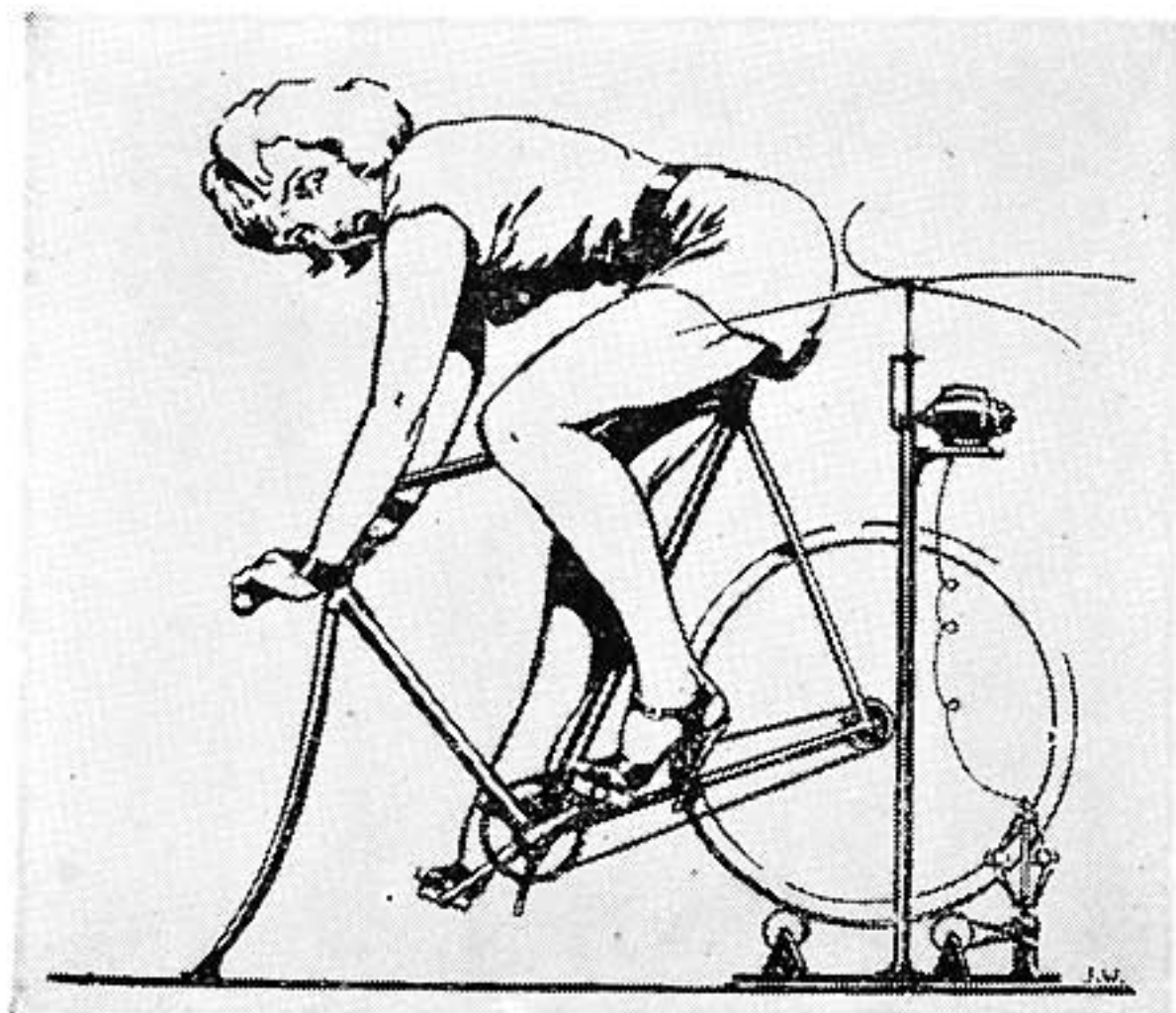


← これも女学生を折檻するオールドミス教師。哀願するのもしき入れず、彼女の手は素早く動いてズロースをずりおろす。ウブ毛の光る可愛い、しかも女になり切った生徒のお臀に教師の嫉妬と憎悪に満ちた眼が光る……

まゝ母の折檻。若い娘の尻は年上の女の嫉妬の的となる。



↓アメリカのマゾ女性を諷刺したカリカチュア。



責めの惨酷さは、東西同じである。若い娘を身動き出来ぬように縛りあげて、美しい乳房をいたぶり、形のいいお臀を鞭打つのがサヂストの永遠の夢なのである。





教師ともなれば威厳をつぐろつて固苦しい生活をせねばならない。そこで彼等は徴罰に名を借りて、生徒のお臀を打つては秘かにその性慾やサチズムを満足させる。これは、その実例写真で遅刻して来た生徒の臀打ちだが、この豊満なお臀を見ては誰しも一寸、叩いて見たくなろうというものである。

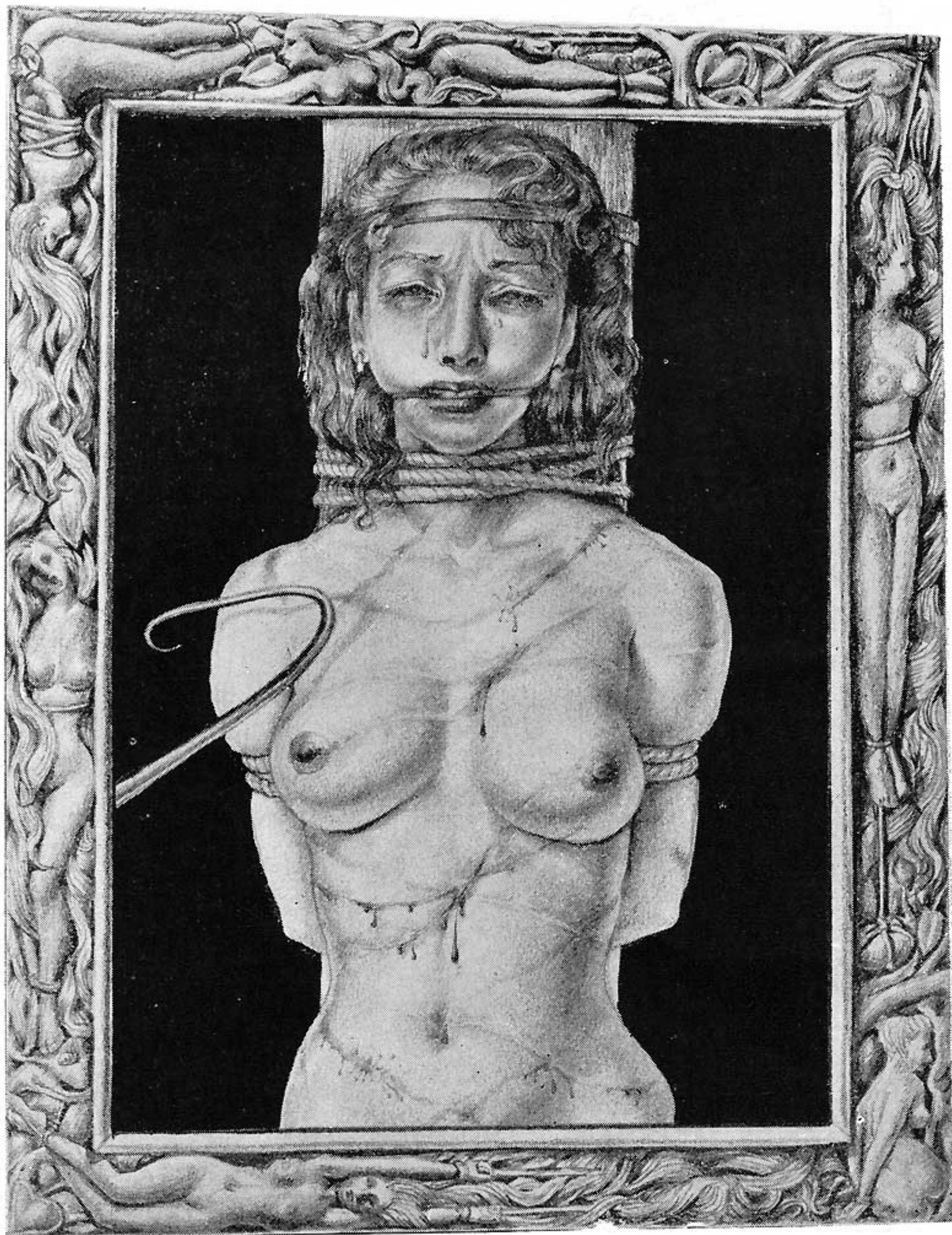


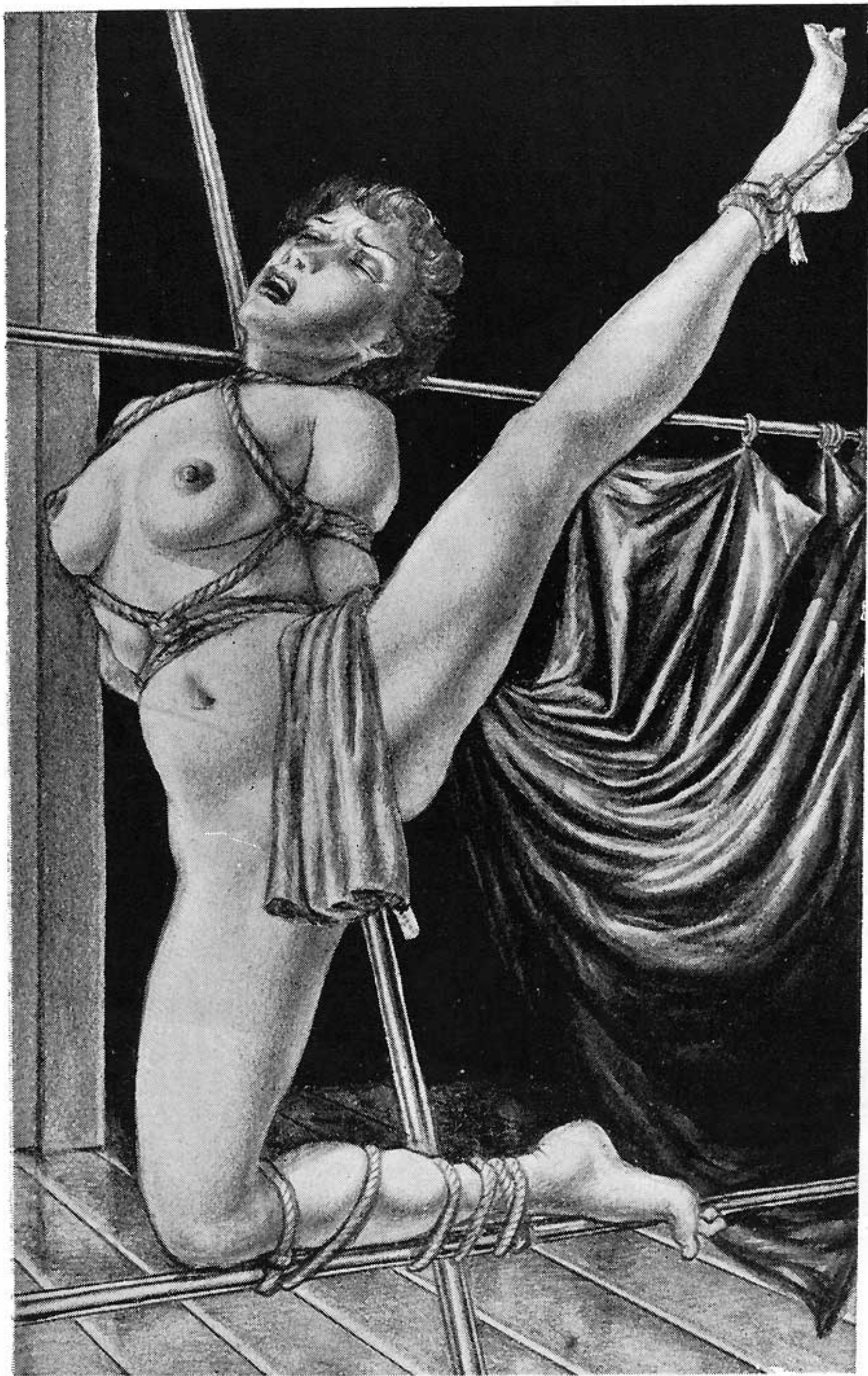
屈伏の涙

中川彩子妖美画集

やわ肌の血

囚はれた処女の、清純な肌に悪魔は喉を鳴らす。火のような憎悪！ 乱打される鞭！ 身もだえる力も尽き果て、乙女の顔を濡らす屈伏の涙！……

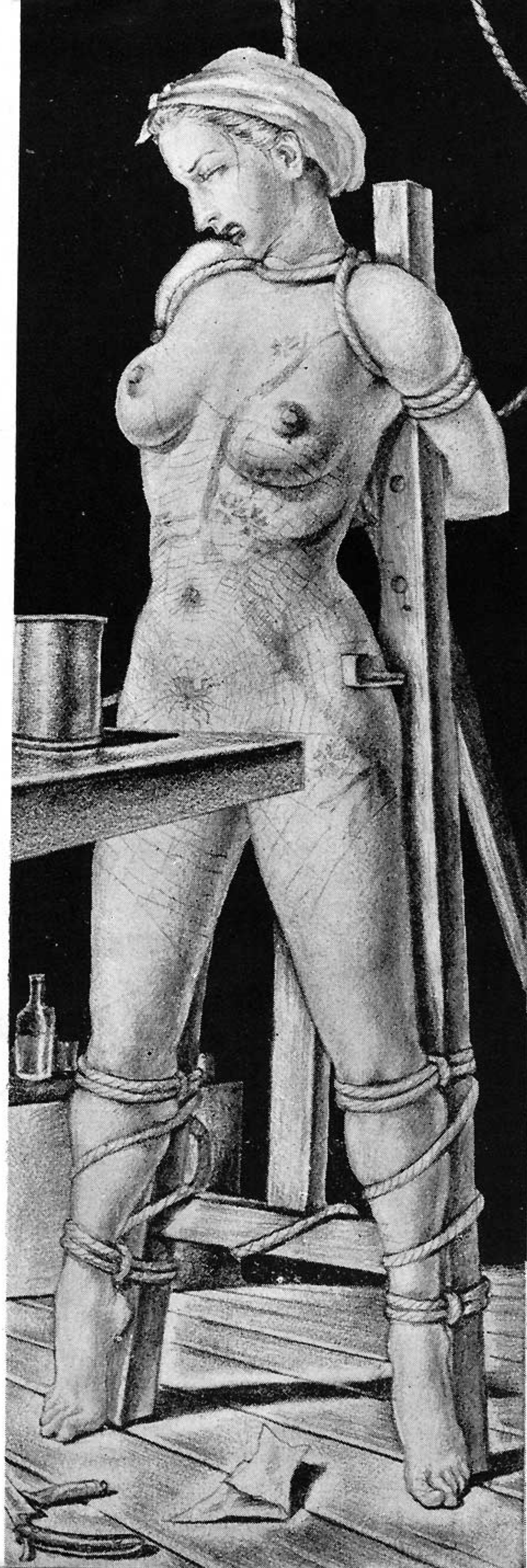




呻　く　顔

ギリギリとしほり上げられるロープにつれて、無惨にも彼女の股は裂けるまでに開く。「アアッ」呻く顔！ その顔に絶頂の美を感じてサチストの心は益々煽られる……………

淫
ら
な
蜘蛛
も



密室に閉ぢ込められた金髪の女！ ムッチリと肉のついた見事な四肢に描かれた淫らな蜘蛛の妖しさ！ 肌を舐める筆のくすぐり責めに一しきり翻弄された彼女は、なおも新たに加えられる悪魔の責めに戦慄する……………

白 い 玩 具 の 映 像

—囚はれたニュー・フェイス—

八木 静男 画

上品な美貌と豊かな肉体に恵まれたニューフェイスの
奈津子は一日も早くスターになりたい心の焦りをつけ
込まれ、悪質なプロデューサーの罠に掛った。



強い酒をしたゝか飲まされて、フト気がつ
いた時は、彼

女の体はガンジガ
ラメに縛られ、
既に準備の整

った地下
室の床の
上に横た
わつてい
た。恍々
と四方か

ら彼女を照らすライト。「アッ」彼女は羞恥で
気が狂いそうだった。清純な処女の肌は露
わにされ、淫らな手や視線が体中を舐
め廻しているのだ。呻く顔、もだえ
る体をカメラは冷酷に写して行く
……





奈津子の振られた役は恐
るべき秘密映画のヒロインだ
った。次々と展開されるサデズム
のシーン。吊られ、打たれ、擦られ
地獄の時間はいつ果てるともなく続けら
れてゆく。







蛇

北原 環画

絵	(五色刷)雪責め	喜多玲子画
口	(グラビヤ)華麗な無惨絵	本誌特写真写真
変	屈伏の涙	中川彩子画
蛇	態 臀打ち大面集	編集部編
	白い玩具の映像	八木静男画
		北原環画

連	まにや地獄 視姦の部屋	日夏由紀夫
---	-------------	-------

連れ込みホテルの特別室で痴戯に耽る男女をジット覗き見る獣の眼……

続・臀部マニヤ	白い祭壇	鞭岡麻冬
---------	------	------

猫奇マニヤの手記		
----------	--	--

便所マニヤ	島田政一
-------	------

女便所の臭気に陶酔する男！ 便所から便所へとさまよい続けるマニヤの告白！

尾行日記	相良三郎
------	------

女の後を尾けて行く不思議な戦慄！ 彼の眼前に暴露される彼女たちの正体……

強姦願望	瀬木慧子
------	------

つ、ましく暮す未亡人の肉体をふとらえる愛慾の炎！ 女の哀しみを綴る手記

アフリカマニヤの手記 浣腸器に憑かれた男	久利須照雄
----------------------	-------

マゾヒズム ストオリイ 醒まされたマゾ	鬼山絢策
---------------------	------

マゾ使徒行伝	坂ノ上言夫
--------	-------

奇態同性愛譚	高橋鉄
--------	-----

フロロスに化粧する男！ 切腹にエクスタシーを味わう男！ 巨匠のアブ・ホモ分析……

晴雨 吊り責めさまざま	伊藤晴雨
-------------	------

秘稿 特選サヂズム・ストオリー——

処女をいたぶる	鬼頭浩一郎
---------	-------

美貌の女学生を狙う悪魔の觸手！ 一枚一枚剥がされて舐め廻される処女の肌！

姦楽病院	佐々木恭
------	------

ヒョウヒイッ！と手術室から洩れる女の声！ 飯面をぬいだサヂストの執拗な責め！

玲子十二ヶ月画集 松	喜多玲子
------------	------

続・男色喫茶店	鹿火屋一彦
---------	-------

最新ソドミア社交場案内

現場写真 真 (ある、カメラマニヤの手記)	大竹謙吾
-----------------------	------

美事な復讐	松岡妙子
-------	------

女装マニヤの手記 現代怪猫伝	相磯秀雄
----------------	------

女装して女を求める男の心理は奇怪な現代の化猫の如きものだ！ 妖しい恋物語……

レスボス通信 (女性だけの秘密な愛のサロン)	園村恵子
------------------------	------

そごみあ通信 (そごみあ秘密な交歓室)	藤井晃
---------------------	-----

読者交歓室 (読者が語り合う新設サロン)

新連載 アフ・官能小説 淫雨熄まず	松井頼子
-------------------	------

永く管底にあった秘材を投入して新鋭アブ作家が自信を持って贈る新連載！

落城秘史 敗走会津城	岩堀光
------------	-----

第四話 怒濤の如くなだれ込んだ西軍の毒牙に踏みこまれる会津の女たち！ 会心の傑作！

変態譚 血みどろの薔薇	マリウス・ボワザン
-------------	-----------

一寸した出来心が招いた恐るべき惨事！ 狂暴な癡病患者に犯される二人の美女……

不具の妖精	香山滋
-------	-----

恋する男に隠れて秘かに自慰する不良少女の哀しい生理！ 筆者が特に本誌に書き下す力作！



秘藏版 風俗草紙

灼熱の絶賛・怒涛の拍手を浴びる「風俗草紙」が平凡な刺戟に飽きた現代の猟奇家に贈る豪華絢爛の秘藏版！ムツと鼻をつくヨニの臭気にも似た変態性慾の異臭！魂を痺らせる地獄絵と秘文字の交響楽！数枚の秘画と現代最高執筆陣に編まれた稀有の圧巻！

豪華責め絵十二人集

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|-----|------|-----|------|-----|------|------|------|------|--------|------------|----------|----------|
| 中川彩子 | 野崎耕作 | 神保朋世 | 由岐葵 | 清水三重 | 北原環 | 伊藤晴雨 | 浜田稔 | 三谷一馬 | 古庄英生 | 喜多玲子 | 八本静男 | 悦虐大写真集 | 東西マゾヒズム美術館 | 秘められた名画集 | 男性緊縛ヌード集 |
|------|------|------|-----|------|-----|------|-----|------|------|------|------|--------|------------|----------|----------|

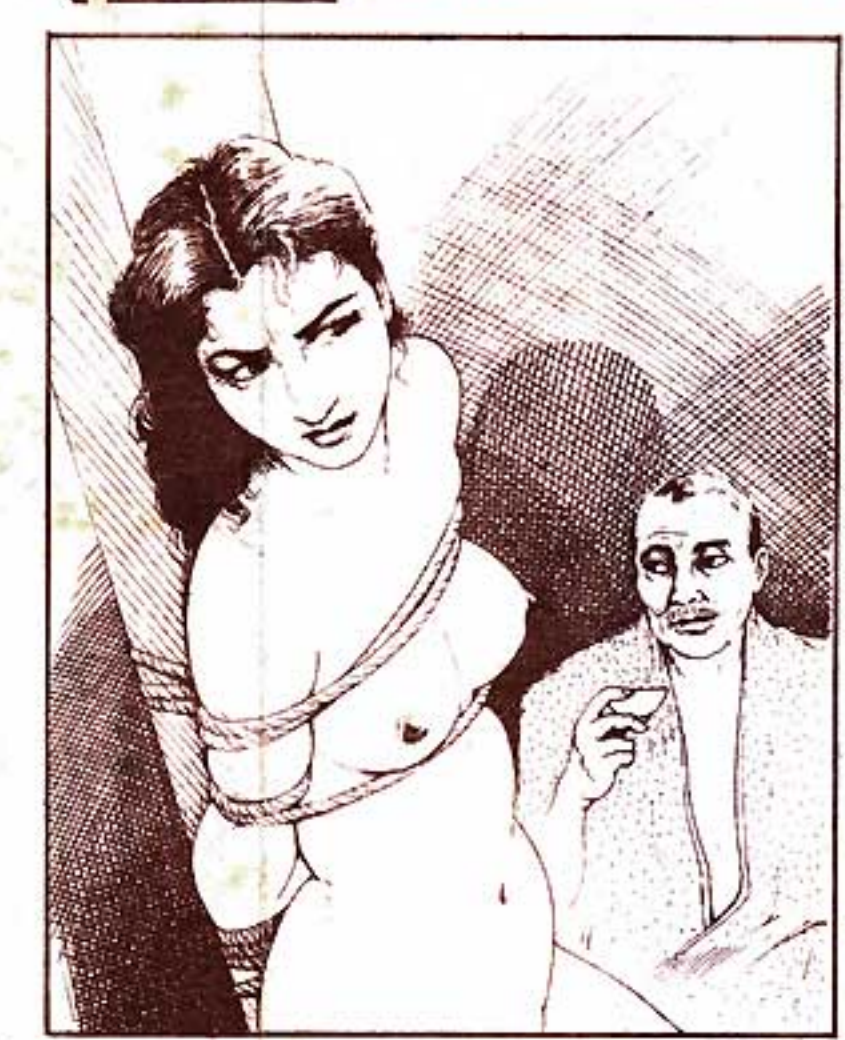
本誌愛読者を完全に魅了する記事満載!!

風俗草紙 異常風俗大鳥瞰書 愈々出来!

堂々B5判
360頁の大冊!

表紙十二色刷
超豪華八色刷折込口絵
アート口絵百頁の異常風俗の大鳥瞰秘藏決定版!

12月20日発売
定価500円送料50円



- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|------|----------|-------|--------|------|----------|-------|--------|------|----------|-------|--------|------|----------|-------|
| 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 | 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 | 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 | 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 |
| 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 | 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 | 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 | 変態奇書物語 | 斎藤昌三 | 変態嗜虐各種技巧 | 坂ノ上言夫 |

特異変態性慾の病態と実例
屍姦今昔譚・獸姦マニヤの性生活記・窃視に憑かれた人々・破られた露出狂者の日記・淫虐の狂態

- | | | | | | | | | | | | |
|-------------|------|----|-----|-------------|------|----|-----|-------------|------|----|-----|
| 現代春本に登場する変態 | 吉田機司 | 変態 | 柳漫稿 | 現代春本に登場する変態 | 吉田機司 | 変態 | 柳漫稿 | 現代春本に登場する変態 | 吉田機司 | 変態 | 柳漫稿 |
|-------------|------|----|-----|-------------|------|----|-----|-------------|------|----|-----|

日本特集出版社

書店へ!! 速刻本誌添附の申込書で 入手漏れなきよう 絶対不可能 数量限定 再版増刷

風

俗

草

紙

現代人の新しい趣味雑誌



一 月 号

(第一回)

ず

まだ灯の入らない赤い角燈と、
齊田ユキのさす赤い傘が、冷たい
雨の中で夕景に滲んでいた。
「求む新女性」
と書いてある入口を、ユキはため
らいがちに見ている。



新連載・アブノーマル官能小説

淫 雨 熄 ま

「さあ、どこぞにかくしてあるか、體中しらべてやるわ」春夫はそう言いながら、ユキの體を撫て廻した。「ここか、ここと違うか？」脇の下を撫て、乳房の上をなで、赤い乳首をもてあそんだ。

松 井 籟 子

喜 多 玲 子 畫

思つたより小さな店
だつた。

齊田ユキがアルバイ
トをしながら通つてい
る学校の演劇部へ、標
準語を教えるに来てくれ

ていた長

瀬小夜子

の酒場な
のだ。

「メーヅ

ンドサ
ヨ」

入ろう

か、入る

まいかと

ユキは迷

つてい

る。

長瀬小

夜子にも

と東京の

新劇団に

いた女優

だつた。



大阪へ

移つて酒場

のマダムにおさ

まつていたが、民間

放送がはじまつてからは、

昔とつた杵づかにも言わせて、

マダムと声優とかけもちで稼いでいる。

ユキの学校の演劇部で週に一回づつ「橋の端を箸を持つて通る」

とか、「雨の日に袖を作る」とかいふ言葉のアタセメントからはじめ

て、時の朗読などを教えている。ユキはとりわけ目をかけてもらつ

ていた。学費を稼ぐのに新聞社附属の会館で雑役をしていることを

知ると、

「私の所へいらつしやいよ。夕方からでいいんだし、いろんな世界

を知ることは、芝居なんかやるには爲になるわ。もしお金のいるこ

とがあつたら、いつでも来なさいね」

そう言ってくれたものだつた。

ユキは父と二人でくらしていた。父は和服の仕立てでは、昔宮家の

の仕事もしたという腕のいい職人だつたが、胸を思つてから弟子も

減り、親娘二人細々と生活していた。

その父の胸の患いが又再発したのだ。学費を稼ぐアルバイトどころか、親娘二人の生活がユキひとりに重くのしかゝつて來たのだ。

さしてゐる傘から洩れるのか、雨はユキの手を冷たく濡らした。雨足も見えない霧の様な雨だった。

ユキはどうしてもメーゾンドサヨへ入つていけなかつた。その赤い角燈は「娼婦マヤ」という芝居のセツトの様で、汚れを厭うむすめ心が、大きく通せんぼをしているのかもしれない。

「齊田さんぢやない？」

姓を呼ばれて振返ると、同じ学校の学生で香月春夫という男だった。演劇部にいたこともあるが、ヂヤズが流行し出したので此の頃は軽音楽部に入っている。何かとアルバイトもやつてゐらしい。学校内でも顔のひろい男だった。

「やつぱり齊田さんか。何してるの、こんな所で……？」

香月に言われ

「私、長瀬先生にお目にかゝりたいと思つて……」

と、ユキは答えた。

「ああ、そう」

と、彼は「メーゾンドサヨ」と書いた扉と「求新女性」と書いた貼札を見くらべていたが

「ねえ君」

と、殊更そばへよつて声をひそめた。

「君、アルバイト探しているのと違ふ？ それやつたら、僕、ええ所紹介してあげるわ」

ユキは一寸ためらつた。

それをユキの心が動いたと見たのか

「まあ、そこらでお茶でものみまほ」

と、さきに立つて近くの喫茶店へ入つて行つた。

「君、モデルやつてみない？ ヌード写真とは違ひまつせ。れつきとした絵かきさんのモデルや。君やつたらきつとええと思うがな」
春夫は言つた。

「そりやあ、やつてみないこともありませんけど、実は、私、少しよけいにお金が必要です。父がわづらつてゐるので……」

「それやつたら、僕から言うてあげる。知つてまつしやろ、眞木千佳子……。きれいな女の絵かきはんや。僕、使うて欲しいと言つたんやけど、男の裸なんか書く氣せえへんいうのやから、しよがあらへん」

眞木千佳子といえば、関西の新進女流画家として、よく新聞にのつてゐる。どんな絵をかく人か、かく絵よりも映画の試写の座談会などで、ユキはその人の名を記憶してゐた。

「でも、モデルつて裸になるんでしょう？」

「そりやあ時と場合や。けど、裸になつたかて相手か女の人やもんかまへんやないか？」

それともうだとユキは思つた。しかし、ユキが欲しいだけの金額が得られるのだらうか。それを言つと、春夫は、

「そりやあ、一時間なんぼつて規定はあるやろけど、とても派手な気性の人やよつて、氣に入つたらなんぼでも出してくれる。なあこれから行こう。阪急の曾根やさかいちぎや」

ユキはとに角行つてみようと思つた。それからもう一度此処まで

帰えつても、夜おそい商売ゆえ、長瀬小夜子に会うことは出来るだろう。香月春夫がどうしてそうまで親切してくれるのかを疑うより、ユキは自分のお金の心配だけで心が一杯だった。

二

「もし私の望みどおりのポーズをとってくればなるなら、お金は今日、いるだけ貸してあげるわ」

眞木千佳子は春夫から話を聞くとユキに言った。

「そのかわり、私の注文少しむずかしいかもしれないわ」

金が出るなら、ユキはどんなことでもしてみようと思つた。

むづかしい注文といつても、画のモデルになるのに、生命や貞操をおびやかされることもないだろう。

「私に出来ることでしたら……」

ユキは答えた。

「ぢやあ、デッサンだけでもすぐかゝりたいから此方へ来て頂だい」

千佳子は長い廊下をはなれのアトリエへ案内した。

香月春夫が後からついて来ようとするのに、

「あんたは用があつたらよぶわ。ラジオでもきいていなさい」と、高びしやに命じた。

アトリエに入ると千佳子はすぐにストーブの火を強くして、

「あんた、ユキさんといったわね。モデルははじめて？」と聞いた。

「ええ」

とユキが答えると

「裸になるの寝いかもしれないけれど、辛抱してね」と、言いながら、部屋の中を少しかたづけて、疊一枚位の大きさの眞赤な絨氈を敷いた。

「あの上へ裸で膝をついて祈るような形をとつてごらんなさい」

ユキはアトリエに千佳子と自分と二人の気易さから、するすると服をぬいだ、赤い絨氈の上で自分の小麦色の皮膚が、美しく見えるような気がした。けれど、錢湯で裸体になつても、女は本能的に手拭で前をかくすように、ユキは片手を胸へ横にして乳房をかくし、片手で下腹部をそつとおさえた。

千佳子はそばへよつて来てポーズをつけた。

「さあ、膝をついて上体をのばして、手を後へ廻して乳を見せてごらんなさい」

ユキは恥しさをこらえながら、言われたとおりにした。

「一寸これをはめさしてもらうわよ」

千佳子に言われて「これ」というのが何かと後へ向くひまもない程素早く「ガチャン」と音がして、後にまわした手首に手錠がはめられていた。

「あつ！」

と、思わず声を出すのを、かまわずに、阿方の足首にも足枷のよな鉄の輪がはめられた。

驚いて立ち上ろうとしたが、手錠と足枷は鎖でつながれているのか、金属のふれ合う冷たい音をたてただけで、横に尻をついて転んでしまった。手と足に金具がくいいて痛かった。

千佳子はユキの体をもとの様におこなしながら

「じつとしていれば痛くないでしょう？一寸辛抱してね」

と、平気な声で言う。

「ええ」

ユキは当惑して答えた。裸にされ、手錠や足枷をはめられるなんていうことは、普通のことではない。しかし、千佳子がさもあたりまえの様にそれをして以上、「私の注文はむづかしいわよ」と、前からことわられているのだから、厭だともかくのも変だつた。ユキは囚人の様に育うなだれて、じつとしているよりしかたがなかった。

「赤い被髪と肌の色と鉄の鎖の色がとてきれいだわ、一寸その乳首のさきを赤くしたらどうやろう」

千佳子はそういうと絵筆でユキの乳首に赤い絵具をぬつた。敏感な乳首のさきを筆でこすられて、ユキはすうつと血が体の中心へ集るような気がした。

「もつと髪が乱れている方がいいわ」

千佳子はユキの髪のかきむしるように、くしゃくしゃにする。何をされてもユキはただ、裸の体の皮膚の色が変わるかと思うような抵抗をかみこしているより道がなかった。くしゃくしゃ



にされた時抜けたのか、肩と胸に毛が二三本すいづくようにまわりついて、痒かった。掻きたいと思つたが、手は動かなかつた。

「じつとしていて」

千佳子は命令した。

しかし、胸についている抜け毛は「さ」をました。僅か二三本の毛が肌を刺戟するのだ。それさええれば痒くなくなる。ユキは胸をあげさげた。赤い乳首がそれだけ別の生きものの様に蠢いた。

「じつとしていてというのに！」

千佳子が怒つたように言つた。

「あう、毛が抜けて、胸についているのが痒くて……」

おづおづとユキが言つたが

「そのくらい我慢してよ。痒いと思うから痒いのやわ。なんやの、毛の一本や二本……」

千佳子はいう。

しかし、一本や二本の毛だからむづ痒いのだ。

ユキはそれを我慢していると、呼吸が普通に出来ないような気がして来た。

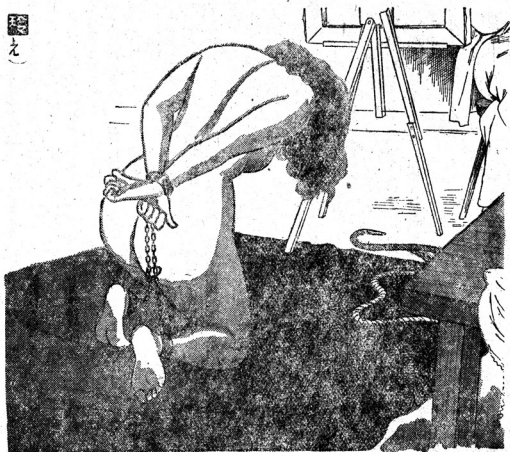
「先生、一寸とつて下さいませんか」

「うるさい人ね、私かてこんな絵、書きとて書いているのやあらへんけど、頼まれたから仕方あらへん。頼むから静かにして、大急ぎで書くさかい……」

千佳子はいらいらした声で言つた。

ユキはだまつた。報酬を貰う以上、千佳子に仕事をさせてあげなければいけないのだ。しかし、痒いということとは、痒くて掻けないということは、何とつらいこと

おで
え



なのだろう。たつた一本か二本の抜け毛が、地獄の責め道具の様につらいという事実をはじめて知った。毛のまつわっている皮膚だけではなくて、痒さは体全体にひろがつていくような気がした。

「ほんまに殺生よ、私にこんな絵書かせるなんて……。想像だけではどうにもうまく書けへんし、あんたにまでつらい思いをさせるんやけど、我慢して頂だい」

千佳子はい言いながら、筆を走らせている。ユキはだんだん胸がしめつけられるように、息苦しくなつて来た。

「先生、ごめんなさい」

思わずユキはポーズをくずして、不自由な体を折りまげるようにして、胸を膝頭へこすりつけた。鎖が引つばられて、背中から尻へ肉をえぐるような痛みを感じさせた。

「駄目ねえ」

千佳子とはぶように傍へ来ると言つた。

「こんな無理なポーズたのむさかい御礼もよけいあげよう思っているんやわ。それなのに、五分も辛抱してくれないんやもん。あんまりやわ。あんた、私に仕事させてくれないつもり？」

ユキは何にも言えなかつた。千佳子にお金をもらわなかつたら困るのだ。

「一番やさしいポーズとつてもらつたのに動くんやつたら、動けないようにするわ。いい？」

ユキはだまつてうなづくより道がない。

「麻縄でぐるぐる巻きに縛りつけてしまえば何でもないけど、私そんなありきたりのポーズ書きたくないの。美しい裸体を書こう思つてるんやもの」

千佳子は手錠と足枷をむすぶ鎖をはづした。そして手錠だけとると足枷はそのまゝに

「その被髭の上へうつ伏せに寝てごらんなさい。手は頭の上へ長くのばして」

と、命じた。

ユキがその通りすると、手首にもう一度ガチンと手錠をはめた。そして、太い縄で足枷を、中二階へ上る階段の下の手すりへ結びつけた。ユキの下半身は、塩饅頭の魚の尻尾の様に、ピンと宙にういてはねあがつた。

千佳子は別の縄をユキの手錠の鎖へ通して、それを長くひきづりながら、中二階へ上つていくと、中二階の手すりを艇子にして、ぐんと引つばつた。ユキの体は、一寸、二寸と被髭の上から浮いた。手首がもがれそうに痛く脇の下の皮膚がビリビリと火傷したように疼いた。

「ああ！、かんにんして下さい」

思わず叫ぶと

「忘れた。又うるさいことといういけないわね」

と、千佳子は舌うちして、二階で縄を引つ張つたまゝ

「春ちゃん、春夫さん」

と、大きな声で呼んだ。

「ああっ！」

ユキは呻いた。そんな自分の姿を香月春夫に見られるなんて、

耐えられないことだつた。のがれようともがいたが、宙に浮いた体は力のいれようもなかつた。

廊下をバタバタとスリッパの音をさせて、香月春夫がとびこんで来た。

「ほうー」

アトリエへ入るなり春夫は感歎詞を発したが

「ユキさんの口へ猿ぐつわをはめてよ」

千佳子に言われ、自分のズボンからハンケチをとり出すと、ユキの口へ押しこもうとした。ユキはさせまいと歯をくいしばつたが、春夫に鼻をつままれ、息の出来ない苦しさ

「ああ」

と思わず口を開くと、ハンケチを押しこまれてしまった。そして上から手拭でしつかり猿ぐつわをはめられてしまったのだ。

「赤いおっぱいか」

春夫はじろじろとユキの赤く塗られた乳首を見た。ユキはいつそ願うたれた方がましだと思つ程、春夫の視線に身をさらしているのがつかつた。思わず涙がにじんで来た。涙は猿ぐつわの手拭にすわれてしまう。ガチンと首をおとせば、ボタリと、眞珠の粒のように床に落ちる。手首も、肩も、脇も、腰も、体中が痛くなつて来た。

千佳子は縄を二階の手すりへかけて下へ投つた。春夫がそれを力まかせに引くと、ユキの体は空中へ一杯にのびて、人間のハンモックのように揺れた。

「さあ、これでいいわ。精出して書こう。あんた、もう帰えつてもいいわよ」

と、春夫にいうと、筆をとつた。

サラサラ、サラサラと鉛筆の走る音がしばらくつゞいて、アトリエは静かだった。

苦痛に体中に玉の汗を流しているユキの呻めき声は、狼くつわに吸われて、生あるものは千佳子ひとりの様に、裸身の責苦はただ紙の上に形をなしていた。

三

くれやすい多の日はいつが暗くなつて、千佳子はアトリエの電気をとめた。

宙づりになっているユキの裸体に明暗の影が出来たが、千佳子は縄をといてくれようとはしなかつた。画用紙を新たにして、又鉛筆を走らせる。

「ううつ、ううつ！」

と、ユキは荒い息をはいっていたが、それは狼くつわに吸われてしまう。ただ、胸からお腹へかけて、まるで裸の皮膚の下に蛇が苦しみもがいているように、筋肉がのたうつた。頭をあげていることが、むづかしかつた。重い頭はのびした手と手の間へガクンと落ちるようにたれてしまう。次は腰が下がる。すると脇腹は破れそうに引きつれて、ビリビリと音をたてるかと思う程だった。

そして、体重のほとんどをかけて上へ引張られている手首は金属が冷たくくいこんで、もげてしまいうさだ。

「苦しい、とつて下さい、苦しい！」

言つても声として出るよりは、ただのどのあたりでそう訴えるにすぎないのだが、ユキは叫んだ。

しかし千佳子は冷酷に筆を走らせるばかりだった。

突然、庭に面した硝子戸があった。

千佳子は筆をおくと、まるで自分の体でユキをかくすようにして、入つて来た人を見た。

「なんや、讓次、いつ来たの？ ひどいわ、だまつて入つてくるなんて……」

急に甘い声音になつた。

讓次とよばれた人はホームスパンのオーバーをぬぎながら、ユキを見て、瞬間その異様なポーズにはつとらしかつたが、わざと平気な顔を作つて言つた。

「ほう、大変なポーズを書いているんだね」

「仕方あらへん。笑わんといて。どうせ見られてしまうたんならもう一寸やさかい書いてしまいうわ、待つてね」

千佳子はもとの所へ戻ると、又、筆をとつた。

「こんな絵でも頼まれたら、厭というてられへんやろ、讓次と遊ぶのに小づかいかせがんならんもん」

千佳子はユキと、書いている画面とを交互に見ながら讓次に話かけていたが、ふと鉛筆をおくと、彼の顔をみつめた。

そして、

「讓次！」

と、激しい声で呼びかけるなり、投げ出すように筆をすてると立ち上つた。

「いやよ、讓次、いや！」

言いながら、彼の腰かけていた椅子へ体をたせかけて、彼の首へ手を廻すと、片手で彼の頬を自分の方へ向けた。

「今の眼、なんやの？」

「え？」

讓次はめんくらつた様に問い返した。

「眼つて？」

「今のあなたの眼よ。あの娘を見ていた眼よ。燃えるような眼してはつたわ。此の頃ついぞ私にあんな眼したことあらへんやないの。私、あなたの顔、何の気なしに見て、ドキツとしたわ。あの眼、うるんだような、酔つたような眼、私、しばらく忘れていたんやわ。そうや、この眼やつた。そう私、思い出したんよ。いやいやよ。讓次が他の人にあんな眼をするなんて……」

千佳子は駄々ッ子の様に自分の頬を彼の頬にすりよせた。

「ばかだなあ。つまらないやきもちやくんぢやないよ。みつともないぢやないか。さあ早く仕事をしてしまつて、あの娘をほどこしておやりよ、可哀想に、苦しそうぢやないか」

「いやよ、讓次は私のものでしょう？ ねえ、私のものだと云つて……」

「ばか」

「ねえ、キスして……」

「大きななりして……笑われるよ」

「だつて、あんな眼をしてあの娘を見ていたんやもの。あの娘好きになつたんやなかつたら、ここでキスしよう」

言いながら千佳子は自分で讓次の唇を追つた。

讓次はそれに軽く唇を合わせたが

「さあ、あの娘をといてやろう」

言いながら彼はユキに近づいた。そして、中二階の手すりへ通して下の柱へ結んである縄をとこうとした。

「駄目よ、讓次、あなた、なんでそんなにこの娘のことを氣いつかうのん？」

千佳子は讓次の手から縄をとろうとした。

二人がもみあつているうち縄がとけて、ぐつとゆるんだので、ユキの上体は手錠をガチャンと床へぶつけて、放り出されるように顔を床へつけ、ザラザラと頬が引きつられた。しかし、まだ足を吊られていたので起き上ることは出来ない。

「讓次、あなた、この娘好きになつたんと違う？」

千佳子はしつこく、彼に身をすりよせた。

「あんなのキスやあらへん、もつと、ちゃんとしてえな」

「ばかだなあ」

「ばかでも何でもええの。千佳子は讓次の愛情だけで生きているんや。讓次が他の女にあんな眼するんやつたら、もう絵なんか書きとらない……」

讓次はフフと軽い溜息をした。

「悪い癖だよ、君の……。さあ、足の方もいってやろう」

「讓次、何でもそうこの娘のことばかり氣いつかうのん？ といてやるわ、とけばいいんやろ」

千佳子は乱暴にユキの足を吊つてある縄をといた。ガチャンと足枷の鎖が鳴つた。ユキは床に這うように長くのびたまゝ、急には体を動かすことも出来なかつた。

「ねえ、愛してー」

「愛しているよ」

「ううん、ねえ、行こう、あつちへ」

「あとでゆつくり出来るんだから、ここを先ず片づけろよ」

「まだ仕事するのよ、中休み……ねえ」

と、千佳子は鼻にかゝった声で謀次の手をとった。

彼が仕方ないというようにうなづくと、急にいそいそと、部屋の隅にあつた毛布を持つて来てユキに着せかけて

「ごめんね、もう少しそうしていてね。御礼はたんと出すよつてに……」

と言つた。まだ書くつもりなのか、手錠も足枷もそのまゝだつた。

「さあ、行こう、謀次、あんたが悪いんやわ、あんな眼するから……。私に思い出させて

しもうたんやわ？」

「いいのかい？ あの子……」

「まだそんなこと言うてる。よし。こうしてやる」

「バカ、くすぐつたい」

「かまへん、どうや、降参か」

「痛いよ。ああ、だめだよそんなに強く……。せつかちだな」

「だつてしょうがない。ねえ」

「仕様のない歌ウツ子だ。

無茶言つた罰にいじめてや

ろうか」

「あつ、バカ、バカ。駄目よ。あつちへ行つてから……」

二人はもつれるようにアトリエを出て行つてしまつた。

ユキの知らない大人の世界だつた。

ユキとても醜態を知らないわけではない。好きな人もいる。しかし自分の清純な思いと比べて、千佳子達を汚れているような気がしたのだ。そのくせ、不思議な好奇心が彼女の体の奥底で謀反を起すようにもくもくと煙になつた。彼女の処女の血も、女の血に変わるはなかつた。



ユキは不自由な手で、そつと乳房を押さえてみた。

その時だった。譚次の入つて来た扉を静かにあけた者がある。

ユキはハッとし乳首のさきまでかたくした。縄はとかれていて、まだ猿ぐつわもはめられたまゝだ。手錠と足枷はユキの自由をうばつてゐる。

ユキは千佳子のかけてくれた毛布の中へ、顔まで押しこむようにして、小さくなつてゐた。

入つて来た人は眞深に帽子をかぶり、黒い布で覆面してゐる。

「泥棒！」

叫ぼうとしたが声は出ない。

覆面の男は外国雑誌や何かと一緒に投げ出してあつた眞木千佳子のライターをとると、又、影のように入つて来た扉から出て行つてしまつた。あつという間の出来ごとだった。

ユキは自分に目もくれずに男が出て行つたのを、ほつとする思いでいた。どんないたづらをされようと、抵抗出来ない状態でのだ。ユキはその恐怖でことさら顔をそむけていたから、入つて来た男の背恰好さへ記憶になかつた。

千佳子が帶をいたまゝの姿で煙草をくわえて入つて来たが、ライターがない。

「変ね。今此処においておいたのに……。あんた知らない？」

と、ユキに聞いた。

しかし猿ぐつわをはめたまゝになつてゐるユキの姿に、聞いても無駄と思つたか、アトリエ中を引つかけ廻すようにして探したが

「譚次、譚次！」

と声高に呼んだ。

その声で廊下を走つて来たのは譚次ではなくて、香月春夫だった。

「彼氏、風呂に入つてはりまつせ。何ぞ用事でつか？」

「ライターがなくなつてしまつたのよ。今ここにおいたのに……あれ、金なのよ。みんな鍍金や思つてゐるよつて、平気で使つていたんやけど、失うたらえらいこつちや」

「けど、ほんまに今なくなつたんやつたら、このまゝにして警察へ知らせなあきまへんやろ」

香月春夫はそう言つたが、ユキに近よると猿ぐつわをといた。

「君、何か知つてゐるか？」

ユキは猿ぐつわをとかれて、フーッと深い息をはいたが、すぐに「今、庭から誰やら入つて来て、盗んで行きましたわ」

やつとそう告げることが出来た。そして續けて、

「お願いです。もうこれとつて下さい。もう今日はかんにんして下さい」

ユキは手をさしのべるようにして哀願した。

「庭から？」

千佳子と春夫は同時に言つたが

「どんな人やつた？」

「あの、黒い覆面して……」

みなまで言わせず春夫が言つた。

「しかし一寸変やな、それやつたら泥棒みたいやけど、齊田さんがみすみ盗まれるのを見ていたのなら、齊田さんをこのまゝにして警官呼んでこなあかんわ」

「あつ、そんな……。もうといて下さい」

ユキは頼んだ。裸で罪人の様に手錠をかけられている姿を、どうしてこれ以上人の目にあらわに出来るだろう。

それなのに春夫はなおも言つた。

「君知つている人と違ふか、その泥棒……。そうやる。ハンドバツクもおいてあるのに金のライターだけ持つて行くなんておかしいぜ。僕が紹介した人よから、もしそうなら僕の責任や。君、何か知つているんと違ふ？」

「知りません」

ユキは言つた。

「先生」

と、春夫は千佳子に呼びかけた。

「僕一寸心あたりもあるよつて、聞いてみますさかい、彼氏と風呂へでも入つていておくれやす。変なことあつたら僕の責任やもん」

「そう、ぢやあ、この鍵あづけておくわ。手錠と足枷とはづしてあげてね。あんじよう頼んだわ。うち、寒うなつた」

千佳子はライターより譲次のそばへ心がはやるのか、アトリエを出て行つてしまつた。

「齊田さん。君、どこかへかくしているのと違ふか？」

春夫はユキの傍へよると、裸の体を抱くようにした。

「あつ！」

と、逃げようとしたが、足の鎖が邪魔をして、転んでしまつた。そのまま這うように春夫の手をのがれようとした。

しかし春夫は馬のりに上から押さへつけると、もう一度ユキの

口に狼ぐつわをはめ直した。

「さあ、どこぞにかくしてあるか、体中しらべてやるわ」
そう言いながら、ユキの体を撫で廻した。

「ここか、ここと違ふか？」

脇の下を撫で、乳房の上をなで、赤い乳首をもてあそんだ。
手錠のはまつた手で胸をかばつてみたが、春夫はさつきの細で手を頭の上へ引張り上げて、手すりに結びつける位わけのないことだつた。

「さあ、どうや、どこにかくした？ これで探そうか」

春夫は木炭のデッサンを消す羽をもつて來た。

羽は脇腹をさかさに撫であげるかと思ふと、足の裏をスーッとこする。

「ううつ、ううつ」

狼ぐつわを洩れた声が、冥府の国の生きものの声のようにひびいた。

どうしてそんな理不盡なことをされるのか、憤りよりもただ苦しかつた。何も考えられなかつた。ただ

「ううつ！ タツタツタツタツ——！」

と蛙のようにのどをならした。そして、その自分の声に引きづられるように、冥府の国の常暗の世界へ落ちこんでいつてしまつたのだつた。

(未完)

続々と展開するアブと淫蕩の世界！
次号を乞御期待！

續 臀部マニヤ

白い祭壇

A子は身をのけぞらせ乍ら、瞬間歯を喰いしはるようだったが、すぐ間をおいて、見よ、壁に附え切れず、しーつとかすかな音をさせて……。すぐ真白いパンティの下部が濡れ始め……

鞭岡 麻冬

序

風俗車紙の発表をひそかに待ち、書店に出ると同時に買つて帰り、自宅の机に腰落着けて、最初の一頁を開く時程、心躍り身内が燃え上る程興奮させられる事はない。十二月号の目次を開いて思わず「あつ」と声を出した。それはついこの間送つた私の拙い原稿が目次のトップの方に載つていたからである。私は半ば私の原稿の事を忘れて



いたし、別に期待もしていなかったものであるが、こんなにして活字にされ、全読者に公開されている事を知つて急に血が逆流するのを覚えた。これは私にとつて重大なことだからである。私は発表されるのを願ひながら、半面それを怖れていた。これは私の作り話でなく、現在までの私の生活のありのままなのだ。私はもう真直に顔をあげて私の職場に行けないような不安な気持ちに襲われている。そして、その内実は、一層、いまわしい悪魔が頭をもたげて、私の体面を重んずる心をあざけり、うす気味悪い程微笑をつづけている。私はこの宿命の悪魔にそそのかされて、敢えて破廉恥な告白を続けたらと思つてゐる。

第一章 冬の教室

「せんせ、許して」

英語2番教室の片隅に立たせられている三年イ組のA子は、消えるような声で私に呼びかけた。窓に近い教師机に向つて、私はこの

声を背中に聞いたまま、相変らず採点を續けていた。

「わたくし、先生……もう許して我慢出来な
いんです」

A子は切なさそうにあえぎ乍ら訴える。私はやおら採点用のペンを置いて椅子に腰かけたまま、ぐるりと振りかへつた。午後三時の終鈴が鳴りわたり、一時間半程も経過したこのO女子高校の放課後は、期末考査も近く生徒の下校も早いのでひっそりと静かである。

十二月初旬の淡い太陽が人氣のない校庭に



明るく照り、ブラタナスの葉の落ちつくした蔭が淋しく立ち並んでいる。窓ガラス越しのこの風景は何かむき出しの裸体を思わせ、私の欲情を妙にそそる。こんな時刻に、私のクラスの教室で一人の若い教師が教え子を居残りさせている事など誰も知らないであろう。何故かと云うとこの私立学校では放課後と共に教師達は夫々早目に帰宅するし、残つた教師も、この私の教室から遠い職員室で、何やら自分の仕事に熱中していて、他人の事など気にかけるような風習があるからだ。

私はゆつくりA子を見た。A子は十七才の

おとなしい生徒である。その顔を緊張させてややうつむき加減に、必死に私を見つめている。彼女はどこかベティデヴスに似た感じで少し病身らしく色の白いのが特長である。そのつづらな眼を見ているうちに私は心の中で会心の微笑を浮かべながら、

「なんだまだ罰則の二時間は来ないんだよ。今日の君の行爲の代償としては軽い筈だ」と静かに言つてやつた。彼女は今日五時間目私の英語の試験に隣のH子のをカンニングしたのである。彼女はここ二三日母の病氣であまり勉強出来なかつたらしいが、常々私はカンニングをやかましく云つていたので、公然と見つかるカンニングをやつた事は許せない事だつた。

「いいえ、わたくし。時間を……気にしてらんじやないのです。わたしさつきから……御不淨に行きたくて……」

あとの方は消え入るよう
に言つて、頬を赤くしながら下うつむく、心もち彼女の制服の胸がふるえているようである。私は心の中でいよく時機到来したな、



と興奮の鼓動の高まるのを覺えた、彼女をトイレに行かせないまま放課後からずつと罰則の立番をさせているのだつたし、多の日の寒さが窓ガラス越しにしみて来て、暖房のない教室では、殊に女生徒には二時間の緊張は無理であつた。しかし、私は可憐でおとなしいA子のカンニングを見つけた時から天啓のよう、このアイデアが頭にひらめいていたのだつた。A子をこつそり責めてやろう。彼女のスカートの下の神秘的美しい臀部を一度はゆつくり觀賞したい。あの円くふくよかな二つの円球を天日の下にさらして、くちづけしてやりたい。この悪魔の囁きが、私をして殊更きびしく罪をあげき立て、罰則の立番を命じさせたのだつた。私は彼女の立つている傍まで近づつて、

「滅点しないで罪のつくないをする爲には人一倍の忍耐が必要な筈だ、我慢なさい」
こう言い終らないうちに、彼女は真直に立つている形のいい脚を小刻みに、交互に少しづつ踏み代え乍ら、

「でも、もう我慢出来ないのです。すぐ帰つて来ますから行かせて下さい。お願いします」

とつづらな目がうるんで来る。私はこころで、もう許してしまおうかと、口まで出かけた言葉を飲み込んでしまった。やはり私の悪魔の方が勝つたのだ。

「だめ、だめ、あと二十五分は絶対に駄目」と冷淡に言い放つた。しかしすぐ調子を代え、

「このままちや、君も我慢出来まいから、よし、その場にしっかりと固定してあげよう」

私は彼女を教室の隅の身長計りの台に連れて行き、両手を上にあげさせて、手首を夫々身長台の頑丈な横棒に結びつけた。彼女はさつきから、自分の生理的要求をずい分我慢していたのに、今また膝を動かされたり、両手を上に挙げさせられたので殆んど泣声になり「ああ、わたし、もうどうしたらいいかしら……」

と大粒の涙をぼろ／＼流して泣き出した。私は少しづつ興奮する胸を押え乍ら「ちや、先生が今日の罰のしめくくりをつけてあげよう。いいね、この事は、先生と君だけの問題なんだ、今日の事が済んだら黙ってるんだ」

と言つて、黒板指示用の細い竹の鞭を持つて来ると

「五回の鞭打ち／＼」

ときつぱり言つた。彼女はびつくりしたらしいがそれで許されるならばと思つたのか、少し泣きやんで目をつぶつた。私は彼女の顔に廻つて、中位の力で、彼女の腰から下、臀部のやや上部を、びしつと、と打つた。

「ひと／＼」

低い私の声が教室に響いて消える。私は別に鞭打ちの快感を味うつもりではなかつたが何となく、胸に熱いなまつぱがこみあげて来て、次第にこの雰囲気の中に興奮してくるの



だつた。

「ふたあつ／＼」

彼女は

「いっ／＼」

と言つて身をよじらせた。それは痛さの爲ばかりでなく、我慢している生理的欲求の爲である事は、その表情と身ぶりから分る。私は益々サディスティクになり、表面は冷静をよそおい乍ら今は自制心を少しづつ失つて行き、急に彼女に近づいて、スカートを思い切り上にまくり上げた。

「あつ、厭／＼ いや、先生、いけません」

と身をもたえるが、あまり激しくもたえる

と、ついオシツコをもらしそうなのか、かえつて身を固くしている。

「スカートの上からだ、罰の效き目がうすいんだ」

とわざとらしく言つたが、本当は、私はもう悪魔に魂を売り渡しているのだつた。スカートの下のむき出しの腰部。真白いパンティに包まれている、むつちりとふくれた尻。何と云う美しい処女の臀部であらうか。私はこのもりあがりくびれたまるい肉量が、この上なくすばらしい芸術品に見え。その清素な情まじさにすつかり理性を失つてしまつた。

「四つ／＼」

少し激しく鞭を、思い切つて彼女の臀部の真上に振つた。

「ああ／＼」

とA子は身をのけぞらせ乍ら、瞬間、歯を喰いしるようだつたが、すぐ間をおいて、見よ、ついに耐え切れず、し／＼ととかすかな音をさせて、もらし始めた。すぐに真白いパンティの下部が濡れはじめ、それからそのびつしより濡れた液体は、太ももを伝つて下



に流れ、それでもまだオシッコはとまらず、ついに、パンティの股に喰い込んだ部分から、ポト／＼と台や床に落ち出した。私は難を持つたまま、この天守の秘密の情景に見とれていた。

「駄目ノ、先生、いけないわノ、わたしもう死にたい」

とA子は、半ば失神したように、両手を上に持たれたまま、がつくりと腰を落してしまつた。あたりは、しんかんとして何の物音もないし、この小さい教室に、今彼女の処女の尻の香りがふくいくとただよつてくる。私はこの何とも言えない匂いと、ふつかりと熱い湯気に包まれた彼女の下半身を、あくことも知らずむさばるように吸めていた。私はこのように神祕で赤裸々な美しい女の尻を見た事がないようだった。この女の尻のために一生遍歴を続けるのだと思うと、甘い悲しみが胸に溢れてくるのだつた。

「もういい。許してあげるから、さ、元氣を出すんだ」

と急に教師面にかえて、彼女の手の縛を解いてやつた。

「早くパンツを脱ぎなさい。それからこの濡れた床を拭いて。誰も見てやしないし、もう

罰も済んだんだ」

とうながす。彼女はどたりとその場にぐず折れて泣きじやくつたが、すっかり済んだ事に対して、もうがつかり観念したのか、恥しそうにスカートの裾を下ろして、向うを向きパンティを脱いで、まるでカバンにしまつた。それから氣を取り直したように、濡れた床を拭いて後始末をしようと、うつむいたまま帰ろうとした。私は彼女の肩に手を置いて、「今日の事は絶対に秘密だよ。いいね、私は誰にも喋らないから、君さえ口外しなきや誰にも分りつこないんだ。心配しないで帰りがえ。ああ、それから、今晚お家の人に断つて英語を習いに来るんだ。いいね、御両親には前から頼まれていたし、今日の試験も出来が悪かつたし。いいね」

念を押して、ドアの外に出してやつた。そして、はつと息をついた。今頃はA子が今日の恥しい出来事を胸に秘めて、ノーゾロのまま、初冬のペーガメントを人混みにもまれて家路についている姿を思い浮べ、私はニヤリと心に悪魔の微笑をもらすのだつた。誰がこの美しい女学生がノーパンティのまま歩いているのを知っているだろうかと……。

第二章 惡魔の部屋

スタンドを灯すと、六疊の部屋は急に暖かく華やかになる。暮れるのが早い多の夜は五時には、既にひしめき合つた屋根屋根の下に灯がともり、ネオンが七色に暗い夜空に輝く。この私の部屋には坐り机が一つに火鉢。洋服ダンスと書棚とそれだけだが、ここは私、綾岡麻多の全宇宙であり、私の支配する世界である。さつき階下で下宿の夕食を済ませ、一風呂浴びて来た後で、この宇宙に腰落着けくつろいだ一服を吸っている。一日の堅苦しき生活を終えてここに帰つてくると、初めて自分を取り戻したようにほつとする。壁には小さい額にマチスの絵が掛けられている。これだけ見れば、何の変哲もない独身者の佐しい下宿住いである。私はごろりと火鉢の横に寝ころんで目をとちた。今日、教室で賣めたA子の思いがけない程むつちりした尻を頭に浮べ心に切ないうずきが湧き上つて来た。A子は何とひかえ目な可憐な女だろう。しかもその腰部は何と又、人知れず美事に熟している事であろうか。私は今日、彼女を白いパンティの上から眺め少し責めてみた。可憐な程のふるえを見せたその臀部。私が思わず、

パンティをむしり取つて両手にその円い感触を清潔したい衝動にかられたあの瞬間、彼女がもらしてしまつた処女の香り高い放尿。私の頭には、むつとする女の性の匂が七色の虹にかかつてたゆたつてゐる。私は何と云う悪魔にとりつかれた男であらう。臀部、女のあの半円をつなぎ合せた肉の円体、あの脂肪厚きうすねりの物質。私の生命はその場所に於てしか燃焼しないのだ。私の心はドンランな禿鷹のように、数々の女の尻の経験をむさぼり思い起し、それが糧となつて私の血を一層赤く生き生きと増つてゐる。私のまぶたには女の美しくも惱ましい数々の臀部が浮んで来る。しかも最近、ものしたF子やG子やT子のお尻、彼女らの肢体と表情。そして今日初めて機会をつかんで一つの関係をつけたA子の臀部。私はそれらの尻を次のようににして思い浮べる。彼女等を裸にしてうつ伏せに並べる。大きいボール紙、勿論真黒いものを尻の形に切り抜く。それに一人づつの尻をすっぽりと入れて、上から、むき出しの尻だけ觀賞するのだ。ハート型に立体的に浮き出た真

白い二つの半円は、どのように美しいであらうか。そしてそれは、時折びくびくとうごめく。二つの半円をつなぐ線の線の下部には、おへそのように一つのシンボルが刻まれている。それは一つの宇宙の焦点であり、貴重な集約点である。その小さい引締つた××夫々に形を持つて追つて来る。一つは×××××は階円に。それらの××色素の沈着が多いために真白い肌の中で妙にエロツぽい。これらの尻を三つ四つ明るい電燈の下に、我がものとすることは、どんなにすばらしい事であらうか。私は様々な責め道具を持ちあふることなく責めてみるであらうし、又阿の手で愛撫し、熱烈な崇拜のくちづけを惜しまない、であらう。こんな幻想に浸つてゐる時、階下で女園の開く音がした。時計を見ると六時五十分だ。

第三章 尻の中の小鳥

A子は案外元氣な顔で部屋に入つて来た。
「やあ、よく来たね」
彼女は、一寸まぶしそりにはにかんだが、

すぐ親しみのある笑顔でニツと笑つた。

「どう、お母さんは何とおつしやつた？」

「ええ、もう病氣もいんです。よく御礼を云つてしつかり勉強しておいでつて」

彼女は晝間の事は何にもなかつたような顔なので私はからかい気味に

「今日はひどい事させてごめんよ、でも誰にも分りやしなかつたからね」

と笑つてみせると、急に赤くなつて

「いや、先生今日の事言つちやいや。忘れてしまふといひのに。本当にひどいわ、私はんとは死んでやろうと思つたんです。でも私が悪かつたんだから」

とやはりおとなしいA子は下うつむいてしまつた。しかし彼女は何か、私と一歩近付いた感情になつてゐる事は見逃せなかつた、彼女は私の獲物なのである。ベティデヴィスのような大きい目と何となしに大人っぽい身。そして色の白い見ためは病身らしいシルエツトの中に、あんなにも美事に発達している肢体。特に惱ましいあの臀部。私はもう一度あの狂ほしい熱が胸にたぎるのを覚えた。しか



し冷静な顔で「ぢや、初めようか。テキスト持つて来てるね。最初は二頁づつ」と言つて机を真中にして、彼女に英語の和訳と文法をしばらくやつた。三十分か四十分で区切りがついたので、あとはこの次にして学習はやめた。私がピースに火をつけている間は、A子はテキストやノートをじま



た。電燈の下に坐つている制服姿のA子は、何となく成熟した大人を感じさせるが、やはり十七才の乙女である。何とはなしにそわそわ部屋の中を見廻したり、私の書棚の本を物珍らしそうに眺めたりしている。「これ見てごらん」私は何気なく机の抽出から一冊のうすいアルバムを出して彼女の前にやつた。彼女は私

の記念写真とも思つたのか、気軽に取り上げて開いてみた。そして思わず「まあ」と叫んだま目を閉ぢてしまつた。これこそ、私の数多いコレクションの中の初歩的なもので、中にはヌード写真や、尻のクローズアップの写真や、二三枚の縛られた女の写真である。これはそう刺激の強いものでもないのだが彼女は初めて見せられたらしく真赤になりながら驚いてしまつたらしかつた。

「いいから、見てごらん。別に厭なものぢやないんだ。これも美の探究の一つだよ。君は今日の晝すぎから先生と特別の秘密で結ばれてんだよ、このアルバムだつて先生の秘密だけ君に見せるんだ」

彼女は、アルバムを置こうとしたけど、私の言葉を聞いて、又腰をおちつけ肩で息をしている。このいぢらしい不安定のA子の姿はほれん／＼とするようだつた。私は半ば成功した事に安心し

「ぢや、茶菓子でも買つてくるから待つてい

獵奇マニアの手記

尾行日記

今頃彼女の日本人ばなれのした豊かなヒップに部長の赤黒い腕がかかる。恵美子は嬌聲をあげる。部長は、みだらな息を吐きながら……俺はジツと立止つていられない……

相良三郎

浜田稔画



×月××日 晴

今朝起きて鏡を見ると、臉が腫れている。睡眠不足のせいだ。油気のない髪が額にたれて、ひどく索寞たるものだ。

「パリジアン」の玲子を尾行し始めて、今日で四日目になる。案の定、彼女は大きなカマトだ。

社の歸えりにパリジアンによる。玲子は何時よりも一吋ほど短かめのショート・スカートに、明るいドル

マンのセーターを着ている。ビカ／＼するメツキまがいのイヤリングは、ひどく嫌味だ。

「あら、あんた、今日も一人なの？」

俺の顔を見ると、彼女は大げさな表情でそう云った。

「まったく、あんたは何時も一人で、ムツツリしてるのねえ……」

返事もせずに居ると、玲子はブイと向うの

ボックスに行つてしまつた。」

純喫茶と称するこのチャチなパリジアンに一人で来る客は、大抵玲子をハリに來るのだ。俺が一人で來るくせに、玲子に世辞らしいことも云わないのが、大方彼女の氣に入らないのだろう。

そうだ、俺は一人だ。しかし、世間の奴等は、なんだつてあんなに喋つたり、つながつたりして歩くのだ。男と男。女と男、女と女。俺にはあんな無意味な社交や恋愛よりもひそやかな孤独をたのしむ。孤独な男には、又それにふさわしい遊びがあるからだ。

「玲子ちゃん、今夜僕につき合ねえか？」
「駄目なのよ。だつてあたし、お店がすんだら、真すぐにお家に帰えらなくつちや……。
ううん、ほんとなのよ。うちの父さんつたらそりやあ嚴格なんですもの、」

隣りのボックスで、シヤア／＼としてそんなことを喋っている玲子の横顔を見ながら、俺は一杯のコーヒを飲んで、パリジャンを出た。

相手が知らないと思つたら、女は白々しく、どんな嘘でも平気で吐く。例えば三軒長屋の大王の娘でも、まるでお姫様のような顔をする。それが女と云うものだ。

俺はすぐアパートに帰つて、いつもの支度をしてから再び外出した。古びた羊皮色のトンド、これは死んだ舞臺の形見だ。それから鼠色のソフト。音のしない麻裏草履。畫圖の俺を知る者でも、この夜の外出姿を、まさか俺とは氣がつくまい。俺は、大きなマスクまではめているのだから――。

例のガード下に着いた。この場所から斜め右前方にパリジアン neon のネオンが見える。ひどく見通しがいいのだ。

夜光時計を見ると九時半だ。夜のパリジアンは、映画歸えりの客が目当だから、十時半には灯が消える。このガード下で一時間待つわけだが、俺にとっては、この一時間が、一日のうちで尤も期待に満ちた時間だと云うわけだ。何しろ想像は自由だからね。それに頭上をひっきりなしに通る電車の騒音が、まるでジャズのように、俺の期待をかき立ててくれる。

パトロールの警官が、うさん臭さそうに俺を見て通る。だが、さすがに声はかけない。うつかり見逃す処だつた。まだ十時と云うのに、もう玲子が出て來たのだ。急ぎ足で数奇屋橋の方に曲る。俺はゆつくり尾行を開始した。ビリヤード・グリーンズのオーバーが夜

日にも歸かで、同行は案だ。

案の定、橋のたもとで背の低い男と一緒に。この男は新顔だ。しかし、セミ・テランの肩つきにどうも見覚えがあると思つた。あ、よい、パリジアンで顔を合はす、三人だ。服装は趣味なほどのニュースタイルで、金釧れも至極いいらしいが、何んとなくゴチない言葉付のくせに、ツバキを飛ばして喋るイミテーション紳士。ふん、これが玲子の四人目の男か……。

玲子は今夜もしきりにあの癖を出す。右手は男と腕を組んでいる。ハンドバッグをさげた左手で、忙しく靴下をひき上げる。それを半町毎くらいには繰りかえすのだ。あの分じやコルセットはしていいまい。ガーダーにしても、よほど草臥れたゴムに違いない。御苦労なことだ。なにしろ、オーバーの裾からグイと手をつつこんで引き上げるのだ。夜目にもこれはちよいとしたポーズだ。

紳士と彼女は銀座へ出るつもりと見える。しかし、尾張町の角へ出る二三軒手前の装身具店前で、二人はビタリと止つた。囁き合つてからドアを押して消える。

俺は近よつて、ズイとショウウィンドを覗きこんだ。大膽のようだが、中でルビーやダイヤモンド

イヤに眼がくらんでいる女には、気づかれる心配はない。ウインドの黒ビロードのケースの中には、五カラットもあるようなダイヤが燦然と光を放っている。俺は見惚れた。それは人間などよせつけもしないように、高雅だ。だが、こんな宝石が、あの淫猥の女たちの肌には飾られるとは、なんと云うことだろうか？

彼等が出て来た。俺は反射的にソフットのつばを下げて、ウインドに額をつける。俺の背中をこするように、彼等は通り過ぎる。ゾク／＼するような快感が、俺の背筋を走る。玲子が笑顔を立てている。どうせ、一万円程度の屑ダイヤの指輪でも買わせただろうが、あの動物的な笑聲はどうだ。

今は全身をビタリとチビの三国人にもたせかけて、彼女の後姿が雄弁に取引の応諾を物語っている。その彼等の五六間後から、俺の麻裏草履がヒタ／＼と後を尾つけるのだ。

男が手をあげた。タクシーが止る。俺も殆ど同時に小型を止める。

「どちらへ？」

「あの車を追つてくれ」

「……………」

運転手はチラと俺の様子をうかがつて躊躇

する。そんな時、俺は独言のように呟いてやるのだ。

「あの車に、女房が男と乗ってるんだ」

これは効果がある。

「ようがすー！」

運転手は街の正義派だ。車は勢いよくスタートする。

だが、俺は時々、本当に女房を、俺の女の後をつけているような気がする。尾行している時、その女は少くとも俺の情婦だ。俺の目をかすめ

て、よその男と浮気する不貞の女を、俺は尾行している。

パリシア

ンの玲子

は、変屈男

の俺には、

手一つ握ら

れたことも

ない、と云

うだろう



が、何と云つても駄目だ。俺が尾行している時、その女は俺の女だ。だから、今夜も玲子は、俺に対して不貞を働いている。あの女は、とんでもない淫奔女だ。

前の車が止つた。俺はわざとそれを追越してから車を止めた。上野駅に近いホテルの前だ。もつれ合つてドアに吸いこまれる。

俺はすぐ近くの都電の停留所に立つて、煙草に火をつけた。うまい。尾行中はその煙草さえ忘れていた。俺は深く煙草をすいこみな

がら、しかし、注意深く前方を見守っているのだ。

灯がついた。二階の右から四ツ目の窓だ。

チヲと玲子の影が窓を横切る。やつぱり、あの窓だ。チビの男が玲子を抱く。あいつら、まるでサカリのついた犬か猫のようだ。まだオーバーを脱いでもいやしない。

俺は、俺が乗る終電の時間まで、そのホテルの前をウロ／＼と歩き廻った。あの窓の灯は、何時まで経つても消えない。恐らく、煌々たる電燈の下で、彼等はみだらな愛慾図をくりひろげているのに違いないのだ。俺は窓の灯を見上げながら、体中の骨がビシ／＼と音を立てて鳴るような気がした。

これが俺の嫉妬なのだ。アパートの冷めた床の中に帰つてからも、俺の妄想はつづく。あいつ等の、一番醜い姿態を空想することで、俺はわずかに救われる。そして、俺は今夜も一人、*Exhausted* した。

×月×日 曇のち水雨

俺の、目下の女は三田恵美子だ。もちろん俺の一方的なロヂックによるのだが……。

彼女は二十三歳。社の、しかも同じ経理部のタイピストだ。背丈が約五尺三寸はある。

その上ハイヒールだが、臀部の動きが素晴らしい。殊に、彼女が階段を上る後から、偶然に、ついてゆく時の眺めは、又とない盛観だ。

女の後姿は、鼻につくほど見飽きている筈の俺でさえ、そのリズムミカルな動きには眼を奪われる。

今日は土曜日だ。十二時半には社を出る。ビルを半廻りしてから、スプリング・コートを買返しにして着る。俺のコートは両面着られる仕立になっている。表が紺、裏が青灰色。しかし社では紺ばかり着用して、かりそめにも裏を見せない。青灰色はもつぱら俺の尾行用だ。ハンチングも同色。目立たないのが取得だ。

一時ジャスト。三田恵美子が舗道に現われる。同僚の女が二人。しかし、これは駅近くで別れる。別れると急に急ぎ足になる。これは待合せに違いない。

俺はコートの衿を立てて、切符売場に並んだ恵美子から、三人おいたうしろに立つた。まともに顔を見られたら最後だが、女が男と合おうとでも云う時なら、決して後をふりかえることはない。だが、このちよつとしたスリルはたのしい。

「澁谷……」

オヤ？ と思つたが、そのまま彼女の後を追う。例の五尺三寸の上背が駅の階段を上る。やはり見事なものだ。

大事をとつて、隣りの電車に乗る。行先が知れているのだから、楽なものだ。恵美子は馴れきつたように、駅前の広場をつき切つた。あきらかに、澁谷は彼女のホームグラウンドらしい。俺はだん／＼胸苦しくなつてくる。恵美子が入つたのは、小綺麗なフルーツ・パラーだ。やつぱり待合せだ。こんな店に何の意味もなく一人で入る筈がない。俺は五六軒手前の街燈にもたれながら、店に入る男客を見張つた。

恵美子の男はどんな奴だ。どんな男が、あの素晴らしい肉体を自由にするのだ。寒風に吹かれて立ちつくしながら、嫉妬に俺の唇はカサ／＼に乾いた。今や、女は俺を裏切ろうとしているのだ。

出て来た。二人だ！ 男は彼女より先に待つていたらしい。ギョツと、俺は体が縮まつた。あの風色の、霜ふりのオーバーは誰だ！ やはりそうだ。間違はない。部長だ。社の経理部長に違いない。俺はあいつ等のあとを尾けながら、声を立てずに笑つた。タイピスト三田恵美子の男は、経理部長だ。まつた

く巧く出来てやる。

それにしても、あいつ等は白々しい顔で立ち廻っていたものだ。この俺でさえ、気がつかなかった。恐らく、部内でも誰一人知るまい。だが、もう俺が知ってしまったのだ。あいつは人目を恐れるように、横丁へ、横丁へとそれながら歩く。しかしもう俺の眼から逃れられやしない。

あいつ等は、小じまりした旅館の門をくぐった。馴れきった態度だ。いきつけない。楽山荘とある。白晝だから恐れ入ったものだ。

俺はこの楽山荘を中心に、グル／＼と歩き廻った。ジツと立止つてはいられないのだ。今頃、三田恵美子は、あの好色な部長に抱かれて……いや、二人は一緒に風呂にでも入っているのかもしれない。彼女の、あの日本人ばなれのした豊かなヒップに、部長の赤黒い腕がかかる。恵美子は嬌声をあげる。部長は煙草臭い息を吐きながら――。

ふん。女の正体なんて、みんなこんなものだ。美しいドレスをまとい、ビュリタンのような口をきいていても、女は所詮娼婦だ。場末の安女郎と、ちつとも変りやしない。どんな女だつて一皮ひんむけば、嘘と媚態で固

めた生地が暴露される。俺はこの目で、どれだけそんな女のあましまさを、見て来たことか――。

俺はこうして、女の偽装をひんむくことに、たまらない戦慄を感じる。これが、悪魔的な快感と云うものだ。

運悪く氷雨が降つて来た。足の先からこごえてくる。しかし、氷雨に濡れながら連れ込み宿をハルのは、俺の仮想するコキユの図にはうつつけだ。

あいつ等が出て来た。旅館に入つてから、三時間と十分だ。部長が彼女のハンドバッグをぶら下げている。社でのソリかえつた部長を思うと、正に噴飯ものだ。恵美子の唇は赤々と塗り直されている。だが、彼女はたしかに美しい。

密会の後の尾行は少しく困難だ。その罪の意識のゆえに、彼等は常に臆病で細心になるからだ。俺はグツと距離をあげる。だが、あいつ等は館屋に入った。今度は食欲を満たすと云うわけだ。

×月××日 曇

三田恵美子を尾行し始めて一週間目。今日も土曜日だ。

彼女の男との関係を知つてみると、そのあ

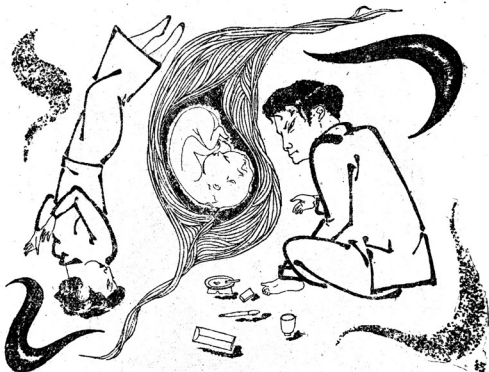
まりの白々しさに、俺は自分の眼を疑いたくさえる。女とは、なんと云う狡猾な動物なのだ。

十二時過ぎ尾行開始。恵美子はどうも、朝からソワ／＼している。何処となく変つている。それが一層俺の尾行欲をそそつた。

十二時半、彼女は大膽にも社の近くの喫茶店で部長に逢つた。だが約五分でまず部長が一人で喫茶店を出た。社の方へ戻るらしい。俺は靴を磨かせていた。やがて恵美子が出て来る。セカ／＼と駅に急ぐ。今日は部長の同伴は止めたらしい。

駅の構内に入つて、大きな柱を廻ろうとして、俺はギョツとすくんだ。思いがけずつい鼻の先に恵美子が立っている。この時計の下で待合させていたのだ。止を得ず、すぐ横を通り過ぎたが、彼女は気がつかない。相手の男は、俺がBと呼んでいる例のニヤケ男だ。つまり彼女の第二の男と云うことになる。

この間の火曜日の夜のように、今日はこのBと遊ぶのかと思つたら、これもホームであつさり別れる。別れぎわに、恵美子は卑からなにか封筒に入つたものを受取つて、ハンドバッグに押込んだ。金……俺はそのバッグのボタンと云う金具の管まで開えるほど



近くに居たのだ。

一人電車に乗った彼女、隅田川に近いある駅で降った。俺には彼女の行先は見当もつかない。この土曜日を、一人で大人しく過すようなあいつでもあるまい。とすれば、俺の知らない第三の男が現われるのだろうか？ あいつは、河端を急ぐ。××橋を渡った。何が気になるのか、チヨイ／＼ふりかえる。尾行がひどく困難だ。俺はマスクの上に、眼鏡まで出して掛け、老人のように前こごみになる。あいつは辺りを見廻してから、フッと姿を消した。俺もさすがに驚いた。病院だ。しかも、産婦人科の……。

あの女狐は、性病まで持っていたのか——。

俺は何気なく病院の前を通り過ぎた。××産婦人科医院と金文字で書かれたスリ硝子の中に、すべてはかくされてしまった。

寒風の中で、俺は待った。一時間、二時間——。おかしい。あいつはまだ出て来ない。治療なら、こんなに長くかかる筈がないのだ。

三時間経つて、俺はやつと事態を了解した。治療ではない。この時、恐らく、惠美子は病院のベッドの上に横になつていたので。

多量の血を失つて……。人工妊娠中絶。掻爬。俺はこれに思い当ると、再び声もなく笑つた。あいつが何時にもなく、部長達とあつさり別れたのは、このためだったのだ。おそらく、部長にもBにも、彼等自身の子供だと思ひこませて……。そしてあいつは、その双方から手術代をとつたのだ。

不幸な胎児が、Bの子か部長の子か、俺は知らない。恐らく、彼女自身でさえ判らないだろう。だが、俺がこうして風に吹かれながら橋にもたれている時、あいつは手術台の上で、血を流しているのだ。不貞の代償としての血を——。

俺は身震いした。俺の網膜にはつきり見え

るのだ。血を流す、真赤な彼女の洞窟。ヘガールで拡張されたそれ……。九号、十三号、とそれは容赦なく拡張される。胎盤鉗子の光が肉塊の一部をグイとつかむ。医者の手が真赤に染まる。キューレットが無慈悲に子宮内膜を搔爬する。五尺三寸の、白い女体がうめき声をあげる。

苦しいだろう？　ざまあみやがれ！　その不貞の血を流せ！　どうだ、俺はお前の淫染の後始末まで見届けてやつたぞ！

四時間後、病院から出て来た恵美子の様子を見て、俺は、俺の想像が全部適中したことを知った。あいつは急に二つ三つも老けたような、精気のない歩き方をする。何時も人を小馬鹿にしたような腰つきが、今日は如何にも頼りなげだ。

アパートに帰つてからも、俺は興奮していた。三田恵美子の妊娠中絶は、さすがの俺にもショックングだ。

手術の状況を想像するほど、俺の全身の血が騒いでくる。俺は夜更けて、机に向つた。例の怪文書を書く。もちろん、三田恵美子の私行を暴露する内容だ。一通はB宛。もう一通は部長夫人宛。そして最後の一通は三田恵美子自身宛だ。

半紙に毛筆の左手書き。これが俺だとは判りつこない。

深夜の悪魔のはくそ笑み。しかし、俺に云わせれば、復讐の、ほんの御しるしまでだ。

×月××日 晴

俺の嫌いな快晴だ。

三日休んだ恵美子が出勤する。やはり美しい。彼女の醜い私行をすべて蔽つて、輝くばかり美しい。

俺は女のこの美しさを憎悪し、又、それに憑かれる。

俺はこの朝、あいつ宛の尾行記を、彼女のタイプライターの、カバーの下に入れておいた。

この怪文書を読んで、どんな顔をするかあいつの仰天ぶりが見たかつたからだ。B宛及び部長令夫人宛の文書は既に発送済みだ。

俺は煙草をふかしながら、三間ばかり先の彼女の様子を、それとなく見守つた。封筒を発見して、あいつは首をかしげている。ギタリと、顔色が変つた。

ざまあみろ！　手が震えている。ふん、全女性に対する俺の憎悪を受取ればいいのだ。部長の処に相談に行つて騒げばいい。ふん

その部長の家庭も目下大騒動の筈だ。Bとのつき合いもこれでザエンドだろう。

偽瞞にみちた女、狼狽するがいい。だが、俺はもうこの三田恵美子に興味はない。

今日から俺の女は、同じアパートの、十四号室の腰本静江だ。二十八歳、そして彼女は人妻だ。唇のすぐ下にホクロがある。

同じアパートだから、尾行は非常にむづかしい。だがその困難さが、きつと俺の喜びを倍加してくれるだろう。(おわり)

愛 読 者 通 信

女の中で女の姿のまま生活する男。そう云う人を私は長い間、捜し求めて来ました。

そして生涯伴侶の生活を夢見て、歳三十の声を聞いた淋しい男です。

私のこの切ない願いに応えてくれる人を御誌による以外、発見する事は不可能の様です。私とは全く逆の立場で、私の様な男を捜して居られる方がありましたら、私は万歳を叫んで、その幸福に感謝致します。

(K・T生)

連載・あぶ・すとお里

まにや地獄

視姦の部屋

姦は非痛な聲で叫ぶと、ガバと身を伏せて泣き出した。圓い背がゆれて、腰から尻へかけて、重い肉のかたまりがこつちへ突出され、煽情的だつた……彼は眼を穴から突出すようにしながらあらわな臀部を想像して生つばを何度も咥込んだ……

日夏由起夫

水澤深雪畫

一、

東京の郊外、×××公園のほとりになつた、新らしい旅館「グリーン館」は小じんまりとした旅館だつたが、その小じんまりとした



所と、親切で安い点が、来る客に好感を与えるらしく、評判がよかった。

この主人は、身のたけ五尺位しかない小男で、しかも片方の足が悪いらしく、ビツコを引いていた。それでも、顔が普通ならば、そんな醜惡な印象はあたえないのだが、顔色が、氣味の悪いほど、蒼く、むくんでいて、分厚い唇が、たえずぬれているし、病氣か何かのせいか、眉毛がほとんどなくて、金つば眼が、ギョロギョロ光っている容貌だつたから、ちゃんとした前垂姿の主人らしい恰好で「いらつしやいまし、……ようこそのお出で」

と玄関へ飛んで出て、入ってきたアベツクは、一瞬ぎよつとするのが常だった。まるで穴から出てきた、もくらのような気味の悪い感じだった。

主人は、もみ手をしながら、
「お休みで、いらつしやいますか？ どうぞ……どうぞこちらへ」



「おかえりになるまで、きれいに致しておきますから、お出し下さいませ」
と申出た。

まだある。……これは、当の客以外には誰も知らない事だが、こういう所へくる女客のなかには汚れたり、ぬれたりした下着をつけ

と、腰を低くして挨拶して、部屋へ案内する間に、ギョロッと、鋭い眼の奥でその客ごとに女の方を、なめ廻すように観察するのだが、こういう所へ入ってくる女は、たいいてい、上り気味だから、それには、気がつかなかった。

しかし変つてゐるのは、主人が、客を部屋に案内する事で、中年の女中もいるが、これは少し低能らしく、めつたに客の前へは出なかつた。その外に風呂番のじいやが一人。

この主人の前歴は、誰も分つていない。妻君も子供もなく、独身だった。……その寂しさが、商売熱心にするのか、お客には、欲徳はなれた親切さで接した。……二人の布団なんかも、主人みずからが、敷き、敷布なども洗濯したきれいなものを使い、その他、女の靴下や、ハンカチなども、よこれているのを見つけると、

てそのまま、くる女があつた。途中で思わな
い事があつたり、なにか事故でも起きての事
であろう。また、意外な事のなりゆきで、こ
こへきてしまった場合など、家を出るときは
よそゆきでない下着をつけて出た、という
場合もある。——内心では困りながら、出先
のこととて、どうする訳にも行かず、そのま
ま、お風呂に入る。……するとその主人は、
びよこびよこ、脱衣場へ入ってきて、そつと
それを見つけ、そして、その女が上つて、部
屋へかえろうとする鼻先に、

「……お嬢さん。……大変失礼ですが、ちょ
つと、お耳を」

と、寄つて行つて、のびりながら、髪を
くつつけんばかりにして、何か親切そうにさ
さやく。

「ア！」

と云うなり、さつと真赤になつて、とがめ
るような眼つきになるのを、

「なアに、私は、もう、こんな商売をやつて
おりますから、なれつこになつております。
ちつとも、お恥しいとお考へになる必要はあ
りませんです。本当に、さし出がましいよう
ですが、是非そうないませ。……ほんのサー
ビスでございます。……ネ、そうないませ」

勿論、無礼は、無礼だが、女客の方でも、
こんな下着で、男の床のなかに入るより……
ここで一そ、恥をかいてしまえば、という気
になつて、

「じや、……そうして頂こうかしら」

と、ためらいながら云う事が多い。

「へへへ。是非、そうないませ。この私
には、もう一向に。……それより、お部屋に
いらつしやる、いい方に、恥かしいところをお
見せにならない方が……」

そういう場合、この主人の、醜惡な容子は
かえつて、女にとつて救いとなるのだつた。

彼は飛ぶようにして、帳場へかえると、真新
らしい、レースつきのパンティをもつてくる。

「いかがで、ごさいましよう。……これでし
たら、お恥かしくは、ないで、ごさいましよ
う？ 新らしい品でございますから……」

「まア、……何だか悪いわね。……お代をは
らいます。おいくら……」

「いえ、飛んでも、ごさいません。……私の
心からのサービスでございますから、そんな
御心配は。……どうぞ、御遠慮なく、おはき
かえになつて。……そちらのは、女中に乗て
させますから」

女は、もじもじしながら、脱衣所ではきか

えると、「すみません……」と、にげるよう
にして、部屋へ行つてしまふ。みだれかごの
なかに、散つた白いつばきの花のような、一
にぎりの、うすい布が、のこされている。そ
れは所々に、しみのようなものが、ついたあ
ともあり、……あふらと、汗で、じつとりと
しめつたようになつてゐる事もあつた。彼は
それを、そつと、貴いものでも、とりあげる
ように、同掌でとると、じつと、掌で、その
柔かい布の感覚を味わつて見たり、ひろげて
仔細にそれに見入つたり、それをそのまま、
顔の方へもつて行つて、ハンケチをあてるよ
うに、それを顔へもみ込んだり、その「番よ
ごれた部分を口のなかへ入れ、まるで、ガム
でも噛むように、それを吸うのであつた。

二、

そういう時の彼の眼は、異様な輝きを帯び
て、蒼白い頬にもかすかに血の色がさし、別
人のように見えるのであつた。

場所柄、土曜日の午後から、日曜日にかけ
てが、一番客の入る時であつた。そういう時
は、五つしかない部屋が、みんな、御休艱客
でふさがつた。

面白いもので、都内のホテルと、こういう郊外の旅館とは、同じアベックでも、客種がちがうのである。都内の方は、いかにも、ホテルなれのした、事務的な、二人ずれが多いのだが、こういう場所では、そうではなかった。

男だけ、先へ玄関へ入つて、女が中に入つてこない場合なども多かった。すると、一度入つた男が、また出て行つて、何かしきりに説いている。しばらくしてから、女が男の背にかくれるようにして、シオシオ入つてくる。

もう真赤になつていて、消え入りたような様子である。スカートの、チャックが半分位下へおろして、お尻の部分がしわくちやになつてゐるのを、目ざとく見つけた主人が、「へえ、いらつしやいませ。どうぞ、どうぞ……」

と、そういう客は一番奥の、静かな部屋へ案内する。そういう時だ。彼の目が、あやしく光り出すのは、……

「ここでしたら……特別室で、ございますから……」

主人は、そつと、男客にささやいて、ニヤリと笑うのだが、その本当の意味は、勿論客に分る筈はなかった。

特別室！ 正にそうなのだ。彼は、部屋を出ると、大急ぎで、女中を呼び、布団を、お

客が風呂へ入つてゐるうちに、いつもの位置に敷くように命じた。

そして、自分は帳場へかえると、裏がゴム製になつてゐるハダシ足袋をはき、それから帳場のうしろの廊下を、音をたてないようにびよこすか、歩いて行つた。

そのうすくらしい廊下は、いくまがりもして、三疊ばかりの、窓のないまっくらな部屋に通じていた。その部屋の扉を彼は、しずかにあけた。カビ臭い匂いが鼻をつく。

その一方の壁の中頃あたりに、二つ節穴のような穴があいていて、そこから、光が、この真ツ暗な部屋全体に散つて、反対側の壁に逆の投影をつくり出してゐた。

彼は足をガタガタさせ、つばをのみ込みながら、その壁の穴のところまで、忍んで行つて、そこへ、びつたりと顔をつけた。——すると、今、男女が入つた。その特別室の、布団を引いたあたりをふくめてちようど、四疊半位の部分が、彼の眼にハッキリと入つてくるのだつた。しかも穴は、小さいながら、二

つである。立体感も十分で、彼は、何の気兼ねもなく、わきで見てゐると同じ位明らさきに二人が、これからしようとすることを知られる訳だつた。彼は、その壁にびたりと吸いつ

くと、身じろきもしないで、ただ、鼻息を少し荒くしながら、じつと、そこに、うすくまつた。そういう彼はまるで、ケモノのようだつた。

穴から、のぞく座敷の様子は、一種特別な華やかさをもつてゐる。わざと、なまめかしく作つた京鹿の子の掛布団の色彩が、眼にしみるようだつた。……その掛布団が、パツとはねのけられたとき、彼は、思わずグツと生つばを吞込んだ。

三、

「ああ！ いやー！」

女は突然、掛布団をはねのけて、布団の上におき直つた。シミイズ一つの肩の肉が、ムツチリと盛上つて、服をきてゐる時より、成熟した感じのする、二十歳前後の娘だつた。髪は無雑作に、うしろで水玉のリボンで、束ねてあつた。服は、枕元にキチンとたたまれている。

「どうしていやなの？」

「だつて、ただ……つかれたから、休んで行だけつて、おつしやつたのに……」

「ふうん。……じゃ、いいや。僕を愛してるなんて云つたのは、ウツだつたんだね。よし

りする。

更に、部屋のすみに置いてある紙くす入れに手をつつ込むと、そのなかから、モモ色のキレー紙の丸めたのをいくつか出して、たねんに、それをひろげて見る。まるで、ごみためをあさる餓鬼のようだった。彼の口からは、よだれが落ち、蒼白く、静脈のういた額には、玉の汗がふき出している。これが、彼の快楽なのだ。二人のすてたものが、彼の御馳走なのだ。

四、

勿論、こういう、いかにもアベックらしいアベックばかりではなかった。時にはひどくかわった二人ずれもあった。

そういう客がくると彼は必ず、特別室へ通した。他の室を希望するような客があつても「只今は、他の室は、全部ふさがつていますから、御辛抱ねがいたいんで、……そのかわり、ここで、御辛抱くだされば、大勉強致しておきますですから……」

と強引にその室へ通し、すぐ、ハダシ足袋にはきかえて、裏の部屋にいそくのである。特別室は、窓が大きくとつてあつて、明る



すぎるほど、明るく、夜も、百ワットの電氣がつくので、それを、きらう客があつたが、しかし、大部分の客は、その部屋が、なぜ、そんなに明るくしてあるのか、全く氣にも留めないようだった。床の間の奥に、おかめとひよつとこの、ひなびた面が、二つかかつていて、その眼の部分が、くりぬいてあつたが、そういう床の間の飾りを俗っぽいと思う客はあつても、不思議がるものは居なかつた。ニコニコ笑つて、二人の痴戯を見守つているおかめの面の奥に、どんな顔がかくされているか、……それを知るものはなかつたのだ。

宴会にでも出たあとらしい、盛裝の令嬢が人目をしのぶように、車で、いきなり、乗りつけた事があつた。金糸、銀糸でぬいどりの入つてゐる波に、千鳥が飛びたわむれてゐるすそ襦袢の、ふりそでは、見るものを圧倒するように、まばゆく、その、長いそでを振つて、「雪夫さん、早く……」

と、自動車に金をはらつてゐる通れを呼ぶ令嬢の姿は、氣品があつて、一点のけがれも知らないように美しかった。

通れの男も、モーニング姿だった。

令嬢の美容院で、ゆつたらしい髪には白い細い花が、半円を描いて、かざられてあつて

それが、令嬢のあかるい容貌を一層華やかにしてゐた。頬が、いくら赤いのは、シャンペンにでも酔つたのだらうか。それともお友達との結婚式に、刺戟でもされたのか。

二人は平気で、手をつないで、主人に案内された。勿論、特別室だった。主人は、唇が興奮にかわくのを感じた。

すぐ、裏部屋へ行つて、ガクガクふるえながら、のぞいた彼は、むうと、ひそかにうなづいた。……彼がそのとき二つの穴から、のぞいた光景は何とも云えないきらびやかな、そして、刺戟的なものであつた。彼の今迄ののぞき生活にも、こんな光景は、今だかつてなかつた。

「雪夫さん……雪夫さん」

軀の奥から、しぼり出すような声につれて長くたれた振袖がゆれる。

髪がふるえ、造花がゆれる。令嬢は、下を見下ろしてゐたが、その黒くぬれた眼が、何か叫ぶのと一緒で、こちらにそがれた。だが、もう何も見えないうるんだ焦点の定まらない眼だった。とろんと、垂れそへになつてまた、きつと、白く、つり上つたりする。きれいにカールした髪のもみ上げが乱れて、頬に垂れてゐた。

盛裝したまま、帯もついてないのだつた。その美しさのまま、男に見せたかつたのだらう。いや、自分も、そのまま見下したかつたのだ。

上半身は、その表情をのぞいたら、どこからどこまで、美しい、お済ましの盛裝した令嬢だった。それが帯から下はあらもなく乱れ、女のいのちの美しさ哀しさを惜みなく脱ぎ捨てた。半人半獣のギリシヤ彫刻のようであつた。そうだ、令嬢は、こうして、その真実の姿を、その恋人に、くまなく示したのだ。いや、もう一人の男にも！……

令嬢は盛裝したまま、愛することが出来る姿をとつてゐた。しかし、彼女の表情を見ると、その姿態は、彼女の勝気な心理をも同時に満足させてゐるにちがひなかつた。

——その令嬢は、しばらくして、花の刺繍の入つてゐる、香水のしみたハンカチを、紙くずかごのなかへのこして行つた。おしげもなく……

彼は、その貴重な、土産品を、自分の床のなかで、その夜、飽むことなく愛玩した。

そして、ひる間の、令嬢の艶麗な姿を思い浮かべ、夜を汚すのだつた。彼は布団のなかで、素裸でねてゐた。その素裸の彼をとりま

いて、掛布団のあいだに、小さく、柔らかい布きれが、一杯に、……胸からまた、足の先までつまっていた。それは、ここへきた何人もの女客が、彼の甘言につられて残して行つた、汚れた下着だった。ピンクの。……白の。……汚れたもの。……レースのついたおしやれの。……茶色くなったもの。……黒いスカン織の。……月経帶兼用のもの。……絹の。……ナイロンの。……木綿の女学生用の。……それらは、皆、直接、女のいのちを吸いた女が一番やわらかい場所を、そつと、保護したものであった。その役目のために、どれもこれも、汚れ、しみがつき、甘い匂いを一杯にしみ込ましていた。……それがこんなに、集まると、全体に、甘すつばいような、アңызの花のような匂いを部屋中に香り高くはなつていた。それを、身にすりつけ、もみまわ汗でけがしながら、彼は、うわ言を云うのだった。枕元にはこれが人もこのしたまるめた紙くずが山のように散つていた。それは夜のお花晶にさいている花のようだった。……

五

しかし、彼は、この秘密ののぞき穴から、

見ているうちに、どうしても、それだけでは満足出来ない事にぶつかったのだ。それまで下着を吸い、敷布の残り香に顔をおしつける事で、満されていたものが、そのとき一時にバク発したのであった。

その夜の客は、怒り肩の服をきた、GI刈りのあんちゃん風の男と一緒に入ってきた、若い娘だった。

髪は、ショウトカットにして、前髪をちじれさせていた。びんくの柔らかいワンピースにつつまれた軀は、若さに張切つて、そんなに美貌とは云えなかつたが、円い眼や、小さい鼻が可愛ゆく、年頃の娘だけがもつ美しさが内部から輝やくようだった。

彼は、この一組を、ちらつと見ると、すぐに特別室へ通した。男は、シンフィーズを注文し、それを飲みはじめた。娘は、主人が顔を出すと、勝負そうな、ツンとすました顔をしていたが、少し泣いたらしく眼が、赤くなつていた。

「へえ、では、ごゆつくり……」

主人は、舌なめずりしながら、そう云うとあとを女中にまかせて、すぐ、裏の秘密部屋へ急いだ。

いつもの穴からのぞくと、床の間を背にし

た男は、後姿だけ見え、娘は、卓の向うに、少し、ひざを崩して座つていた。ナイロンの靴下が、人魚の足のように光つて、なまめかしかった。

「お話つて何ですの。……早くおつしやつて……」

娘は、きつと顔をあげると、男をきつい眼でにらみながら、朱い唇をひらいた。

「まア、……いいじやねえか。ねえちゃんものみなよ……」

「いいえ、早く、おつしやつて下さい。私、家へかえらなくつちやならないんです」

「家は、どこだい……」

男は、からかうような、とぼけた調子だった。

「どこでも、いいじやありませんか。——お話だけ早く……」

「やかましいやい！」

男は、急に大声をあげた。その途端に、娘は、さつと恐怖の色を示すが、彼のところからハツキリ見えた。

「ねえちゃん。……分つてるだろ。……ねえちゃんに俺とは、もう。……な、おとなしくしてねえと、恥かしい目に会ふぜ」

「あなたが、したんじやありませんの……」



娘の抗議は、弱かった。

「××シネマで、この娘は、俺に——を許しましたって、大勢のひとに云つてやろうか。お巡りさんによ、この娘は、俺に平気で——を許しましたって……」

「人に云つたら、あなたが、つかまるんだわ」

「そうよ。だけど、ねえちゃんだつて、皆んなの笑いもんにされるぜ。この娘が、見知らない男に、そんな恥かしいこと、させたのかなアつて、……え？ 新聞に写真とられてよウ。……男たちの、いい話の種にされるぜ」

「止して！ 止して！」

娘は、悲痛な声で叫ぶと、ガバと疊の上へ

身を伏せて、泣き出した。円い背がゆすれて、腰から尻へかけての重い肉のかたまりがこつちへ突出され、煽情的だつた。

彼は、穴から眼を突出すようにしながら、その娘のあらわな臀部を想像して、生つばを何度も呑込んだ。

「もう一度、さつき見てえにして、貰いたいつて云うのかい？ よし、よし……」

「いや、もう、いやッ。……さつきは、魔がさしたのよ。もう、許して」

「許してやるよ。俺は、そんな、しつこい男じゃねえよ。ただ、たまらねえのさ。……もう一度、じつくりと、それを楽しみたいのさ……」

「お願い。……はなしで」

うつぶした娘の上から、男の手がかかった。

娘は、その手をきつとはねのけたが、

「じゃ、みんなに云いふらしていいんだな。……さつきのこと。……相当、なにしましたよなんて、云いふらして、いいんだな」

「ああ……云わないで、どんな事でもしますから」それを云われると、ガツクリ力がぬけて、男の手が、かかるのを許すもろさだつた。

「ああ、いや。……ねえ、イヤ」

娘は、その手をよけるようにしきりに、軀

をよじつたが、それでも、もうはねのけはしなかつた。

スカートが、根本までめくれ、靴下のとまつている元の、まつ白い、あぶら身のももが電燈にてらされてみえた。大きなお尻を、危うくつつんでいるズロースものぞけた。

その与太者は、先へ一人で玄関に出てくると、彼を呼んだ。彼は、今みた強姦に近い光景に血ばしつた眼をして現れ、

「おかえりですか」と、手をついた。

「うん、娘は、つかれているから、少し休んで行くそうだ」

「えつへへ……お楽しみに、おつかれになつたんでしよう」

「たのむぜ。俺は先へかえるから、カン定はあの娘から、もらつてくれ」

いつもの主人なら、ここで抗議する所だったが、胸にある考えをもつた彼は、ただ、へエと云つた。

男がかえると、彼はビヨビヨ、特別室の前へしので行き、カギ穴から、なかの様子をのぞいてから、ノブへ手をかけた。

男が、かえつてしまつたの知らない娘は便所から、男がかえつてきたとも思つてゐらしく、振返りもしないで、布団の上へうつ

ぶせになつていた。

スカートは、朝顔の花のように開き、ワンピースの胸あきは、ひらけるだけ、はだかつて、ブラジャーの下から、お乳がぶつくり、顔を出していた。「お嬢さん……えへッ」

彼は口から、よだれを出しながら、たおれている娘の背へ手をかけた。

「あッ……だれッ！ あなた、だれッ」

娘は一瞬気がついて、ガバと身をおこした。

「まア、お嬢さん、そんなびっくり、なさらないで、……私は、この旅館の主人ですが」

彼は、笑いながら、みだれた娘の姿をなめまわすようにした。

「用事があつたら、あのひとに云つて下さい。——失礼じやないの！」

「お連れさんは、もうお歸りになりましたよ」「えッ？」

「お勘定をあなたから頂くようにと云つて」信じられないと云つた表情が、くずれると

すぐ泣き出しそうな顔になり、

「ひどいわ！ ひどいわ！ そんな、どこまで、私をなぶろうとするのかしら！ ひとでなし！ チキシヨウだわ、あのひと、ああ」

「お勘定は？」
「私、お金もつてないのよ。あのひとにとら

れて……」

「お知り合いじやなかつたんですか」

とぼけてきた。

「映画館で知り合つたんです。あのひと、親切に……」

「親切に、可愛がつてくれたんですね。いひひッ……みんなききましたよ。あの穴から」

「えつ？」

「今、みんなみてたんですよ。随分、あばれただすねえ。……」

「何をなさるの！ 離して！」

「宿賃をはらえますか？……へへへッ。……みんな見てましたよ」

せまつてくる醜惡な顔に、娘は、心底から総毛立つた。その表情がまた、彼にはたまらなかつた。

口からよだれを垂しながら、彼はジリジリと迫つて行つた。

「ああ、お母さん！」

「お母さん、おつばいですかい。フフフフ……」

「ああ！」とお腹から、しぼり出すような声をあげて、この娘は、今日のいたずらの、ひどすぎる、むくいを受けねばならなかつた。

奇態同性愛譚

寫眞は、兩腿の間に一杯化粧品を並べ、隅起したワアルスに牡丹刷毛を當てている美しいものであつた。おかしいと言えはおかしきもあるが、世の神経科醫などはただ一言「内分泌の異常だ」と誤覺化したりする。



ケの無い男色探訪男

「あーら、こちらが鉄先生ですの？……前ツからあこがれてましたのよ」

真ッ白すくめの服裝をした、年は十八九か、紅顔可憐なボーイがそう低く囁きながら私の隣りに腰をおろして肩へしがみついて来た。

私は苦笑して、すこし身をよけざるを得なかつた。その二階の窓のカーテンを透して、色々なネオンが一杯に明滅している。ここが、M氏のホモ小説にルドンとして描かれている店である。

高橋 鐵

浜田 稔 画

その夜、私は斯道の通人たちに案内されて、その客になつたのだが、柔かなカーテンで仕切られたほうぼうのボックスでは、そういう「男ボーイ」と学生服、背広、和服さまざまな装の男同士が寄り添い、手を握りかわし、眼を輝かせ、或いは顔と顔をつけていた。

私を紹介した大家は、

「おいおい、よせよ。高橋君はただそれを研究してる学者なんだから……」

と、ほくそ笑んでいただけだつた。

事実、私のものには二千にも及ぶホモ党（乃至はそれに類している人々）が集まつて来ている。手記と相談状を寄せる。全国から上京して来る。その親達や細君もやつて来る。それで私

もう五六回、犠牲的に「集い」の会を開いた。身の上相談に答えさせられたことはもう算えきれない。その境地から抜け出させた治療例もおそらく四五十に及ぶだろう。

だから私は「われら、女を拒む！」と同性愛の哀歎に身をゆだねている人々の気持は理解しきついている筈である。それだけでなく、少くとも私に一身の秘密をぶちまけ、自分を切りきざんで欲しいと申し越されるそれらの人々の高い知性や美しい情感には腰々心うたれることが少くない。

が、もう一軒、下町の「Y」という男色酒場へ案内されたとき、その「女將」「マダム」と呼ばれている女形出身のS丈が、シン／＼と更けて行く「女將」の自室で酌をしてくれながら、色々ぼく呟いたことがある。

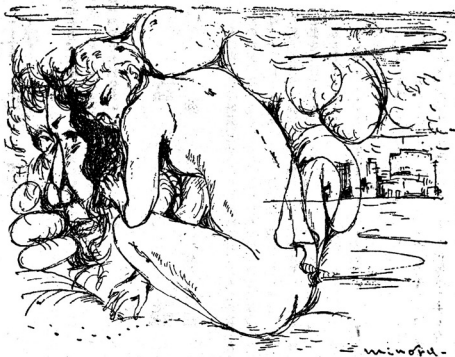
「先生はあんまりあたしたちの気持をわかつて下さるから、あたし、お仲間だと思つてましたの。でも、こうしてると、判りましたわ。先生にはそのケはありませんのね」

島田の（霊の）はつれ毛をたをやかな二の腕まで出して掻き上げながら、身体をあだツぼく「く」の字にうねらせている姿は、さすがに女体美のしみこんでいる男であつた。

こうした次第で、私には「はものケ」がないらしい。

勿論、学問的にいうと、誰にでも同性愛のケ（傾向のこと？）は幾分か潜んでいるが、ただ、あまりに微量であるか、或いは強くて抑えているためか、表面に浮かんで来ない人が多いだけである。

ましてや、女のような男は、（美学的には面白いが）——私



だけでなく、現代のホモ党からみて、既に過去の遺物として、対象外であることが多い。

室町時代の「雅児ノ草紙」の昔から徳川時代の『若衆』趣味の頃まで、同性愛と云えば、対象はおよそ「女にしても見まおしい」相手だつたのに、現代では、女性的男性にうつづをぬかす等というホモ党は少い。

大概は、筋骨隆々たる肉体（クレッチマーの云う「筋骨質」）に恍惚となる。

女体のように、乳房やお臀が豊満だと、同性愛者は異口同音に「ぶよ／＼していいやです」と云う。

しかも、昔のホモの方式は、殆んど皆、肛交（*Anal sex*）で、その補授として接吻と弄根をおこなつたのに、今では、大多数が、ペデラステイなど嫌で、吸茎と相互弄根とを望んでいる。殆どフェラチオはこの世界の大流行だと云えよう。

どうしてそう變つたかは、なかなか複雑な証明で結論づけなくてはならないから、他日に譲るが、兎に角、ホモは不思議である。そして、フロイド教授も「同性愛の謎がとければ、男女間の異性愛の秘密くらい、簡単に説明されよう」と云つたとおり、複雑な心理作用である。

それだけにホモは深刻で奇々怪々な秘願をこめた場合が少なくない。

私は、ここに「奇態同性愛」と云う。同性愛だけでも「正常」ではないと思われているのに、その上、又、奇態とは？——まず、次の幾いらかの事例を見ていただこう。

「男根化粧」の秘案

二年余り前の秋だつた。毎日殺到して来る相談の手紙の中に、細い活字のように綺麗にしたためられた一通を見出した。読んで行くと、第一、冒頭から變つていて、ズーッと要をつくした文である。原文のまま読んで頂こう。

私は同性愛に生きる青年ですが、私の申し上げたいことはそれよりもつと變つた私の異常さです。

何の魅力のかけらすら覚えなない異性ですが、その必需品たる化粧品に対して強烈な性慾を感じるのです。

たま／＼何かの用事で化粧品を売る店に行きますと、美しく飾られている数々の化粧品が私の全神経を奪つてしまいます。私は十五歳の時に自慰を覚えてしまいました。今でも一週二度や三度はこれによつて性慾を処理しています。しかし、その都度私は局部を化粧する事を忘れません。化粧水を塗りクリームをつけ、そして真白に白粉をつけるのですが、それによつてオルガスムに達するのです。化粧品を見る度にあれで化粧したらと思い、異常な興奮を覚えるのです。私は何と云う異常者でしょうか。（申し遅れましたが、私はX大二年、満二十二歳の青年です）

現在或る少年と関係を持つておりますが、彼に気狂染みた魅力を感じたのも、暮のある夜、新橋から省線に乗るつもりでお



りましたが、あまり難いので一寸あるキャバレーに入りました。その店にボーイをしていたのが彼でした。色は抜ける程白く、形の良い赤い唇から真白な歯がチラ／＼として全くの美少年です。私は夢中になつて彼の姿を逃がすまいとして必死でした。

洗面所に入ると、鏡の前に立つて熱心にコンパクトで顔を直し、口紅を引いている彼を見出しました。私は夢中で彼に言葉をかけてしまいましたが、彼は驚きもせず、コンパクトと口紅を胸のポケットに入れて私の方に寄つて来ました。其の夜、十二時が廻る迄、彼を店で待ち、其の夜、私のアパートに泊めました。同じ様な男がいる、私がそう思つたのは、彼も又私と同じ異常者で手携カバンの中には殆んど化粧品が入り、それより驚いたことは、彼の局部迄があまりに綺麗に化粧されている事でした。彼は變る時には、再び白粉をつけて口紅も今度はそれと目立つ位濃く塗ります……。

それ以来一ヶ月に二三度、私のアパートに参りますが、こんな歡樂が人世の何処にあるのか不思議です。

私達は一体どうした

ら良いのでしょうか。彼はこれが最高の愛情だと、別に苦痛とも思っていないらしいのです。

私達はもう普通の男性に立返る事は出来ないでしょうか。年令にもよりますが、二人共人並以上、精力強豪と言えるかも知れません。

今の中に何とかこの道から転向が出来ないでしょうか。

彼と逢う日以外には何か悪魔に迷わされている様な暗い日が襲ひ掛つてくるのです。そして彼を見ると、私は暗々とした人間になるのです。

何卒、力強い御回答をお願いします。(KB)

多忙に追われて、この手紙に答えられなかつたところが、もう一通、これと似た相談を受けとつてしまつた。

そのほうは、まだ空想にとどまつていて、夢の対象を得て居られないが、一体どういう風に男根化粧をするのか詳しく書いてあるので、その点で、私どもの精神分析療法上、手掛りが得られたのである。——これも原文のまま、ここに写してみよう。(辞句のうち二、三学術語に改めねばならないが)

小生、年令二十二歳、公務員。

小生も御多分に洩れず同性に魅力を感じる一人です。好みの型としては色白で美少年、特に裕足などの白い少年、謂わば女性的なものを好みます。キャバレー等のボーイで女性的にお化粧している美しい少年を見ると、堪らなく昂奮致します。

それで居乍ら芝居の女形等にはあまり魅力を感じません。

小生の慾望はそれら少年達を己れの手で性的に昂奮させてその満足する美しい顔を見度い。勿論自分の性器も少年の手にまかせ、いいかえれば相互オナニーを行うことにあります。(小生包茎なるもエレクトすると龜頭が出る故、支障なし) 肛淫は思つただけでも沢山です。否々ソツとします。

それからもう一つの悩みは化粧品に堪らない性的なものを抱いていることです。小生は十四歳の時からオナニーを覚えて未だに継続していますが(全然罪悪感等抱くことなく、平氣。月三回位)その時は必ずベニス化粧するのです。そうしないと快感がありません。

真白に白粉を塗つた上に淡く頬紅をたたき、グラシスは口紅で赤く塗ると、もうそれだけで龜頭は……開いた様に、××は最高潮に達し性感は百%近いのです。乳液やローションを下腹部から内股に万ばんなく塗り込み、その上に水白粉か練白粉(真白になる位に厚化粧しないと満足出来ず)で白くします。

真白な大理石の円柱の様なPの上に大きなルビーの様なグラシスが波打つと、小生は總てを超越した芸術品の美しさに恍惚となり、思わず噴流するまで憊だししく操作するのです。

もし小生が好む型の美少年を得たなら、その美しさを増々美しくするために、小生の腕の限り、少年の顔を、そして腹部を内股を性器をと美しく塗り上げ、その出来上つた美少年の身を力限りに抱きしめて相互に愛撫し度い。これが唯一の理想であり望みなのです。

(現在化粧品は十数種、蔵しています。白粉と紅が主です)

小生も自分で云うのは変ですが、肌は白く、同僚からも「女のように綺麗だ」と云われます。その爲に女性的で、必ず薄化粧をして居りますが(夜間だけです)顔には目立つ程白粉はつけません。

先生、小生の様な人が外にもあるでしょうか。

惱ましい春ともなれば美しい少年と共に楽しめるだけ楽しんで、同性心中でもしたい気持ちで一ぱいです。

同封の写真は自分ひとりの秘密の楽しみを(家中留守のとき)自分のカメラにセルフタイマーで撮ったものですが御参考までに。(下略)——TS生

写真は、両腿の間に一杯化粧品を並べ、陽起したファルスに牡丹刷毛を当てている美しいものであった。『おかしい』と云えばおかしくもあるが、世の神経科医などは、こういう真剣な訴えをきいても、ただ一言に、「内分泌の異常だ」などと云つてホルモン注射で金をつとめて誤魔化したりする人が少くない。私は多数の「患者」からそれらの医家のことをきいている。

併し、ホルモン注射などでは殆んど絶対に癒るものではないと断言出来る。

キンゼイ氏からも惠贈された氏の研究ポート「同性愛」中で、同性愛者の内分泌機能は別にさほど変つていないことを明らかにされている。

又、精神科医でありながら、変つた性癖を訴えられると、自

分自身が判らなくなつて、「君は救いようのないヘンタイだ」と一喝したり、「そのうち自然に癒りますよ」等とゴマカしたり、或いは、ムヤミに電気ショック療法や麻酔療法をやつたりする者が少くないようである。危険きわまりなし!

此の二人の男根化粧願望も、全然、過去の体験や追想、自己分析が書かれていないので、どうした心因のために異性愛が湧かないか調べるべきでない。

けれども、いずれにせよ。このお二人は、我々分析者から見れば、強い男根崇拜と自己恋慕があり、そのために、異性よりは自分に近似した同性(しかも若く、紅顔なりし日の自分の幻に似た少年)を求めるのである。

ただ、その反面に於て、自分を女性のように錯想しているところがあると思われる。——「異性同一化型」の同性愛と云えよう。

そのため、自分が最も愛している男根を、女性の顔や身体のように化粧して、その型態美に酔う。それも、自分一人だけでは、客観視も出来ず、心細いので、そういう第二の自分をひきずり込む心理になる。

簡単に云えば、こう診断出来るのである。

そして、其後、第一のKB君だか第二のTS君だかは三度私を訪ねてくれたそうだが、いつも折悪しく不在でお会い出来ず二人共住所氏名が仮称なので、面接分析の機を得ないままになつてゐる。

切腹同性愛

数年前のこと、いつもの日課で、午前中一杯は、来信の書状の山に目をとおしているならわしだったが、分厚い一通の封を切ると、血みどろに彩色された絵が二枚出て来た。白虎隊の少年らしいのが腹掻き切つてハラワタがはみ出している。

読んで行くと、仮名の発信者はそういう風に切腹したい悲願をもっていることをメンメンと綴っている、一人の同性愛に悩む青年である。

元来、ハラギリという行爲は外国には殆んど無いため、その心理の解剖は、歐米には勿論、日本の学術書にもたしかな報告など一つも見当らない。日本特産なのに。

そこで私は数ヶ月後だったが、この例を「切腹願望」と名ずけて昭和廿六年二月号の雑誌「人間探究」へ分析解答したのであった。

ところが、反響が意外に大きく、学者だけでなく、その発信者の他三人の手記が寄せられたものである。

その一二例をあげると、—KG君は三歳の時、父に捨てられた養腹の子で、「太平記」四十巻を読破し、自刃者三千余人の凄惨な場景を分類したりしている。

彼は、古本屋で極彩色の「白虎隊自刃え図」を見た瞬間、「胸は高鳴り、頬がかつかとはまりました」という。

そして、普段はただ自分が素ッ裸になつて鏡像をみたり、同



切腹マニヤの絵(A) // 男児の本懐 // と書いてある

性の全裸やその写真を眺めるだけでも興奮するが、男の腹部、(自分のも含めて)を見、そこにグサツと刃が突きささり鮮血に染まっているのを眼に浮かべると、エレクトロシ、オルガスムにさえ達するのである。こういう事もあつた。原文のまま引用してみよう。



切腹マニヤの絵 (B) / 快絶と記されている

「やがて昭和二十年（小生二十一歳）私達を不幸のどん底におとし入れた太平洋戦争も終りを告げました。その終戦直後、悲憤した青年達十四人が代々木原に於て割腹自刃した事が新聞に報道されました。私は早速すべてをすてて、永い間空想して来た事が今こそ目のあたり見られるという異常な期待に胸を躍ら

せながら現場をさして出掛けたのでした。けれども広大な原野の何処とも知れず、又、人に聞くのも後めたく恐しく思われ、空しく一日を歩き続けただけでした。

思うに、当時その割腹したあとの光景を見たとしたら、私のその後はどんなに変つていたでしょう。或は悲壯な光景に感激して自らもその場を去らず、割腹していたかも知れず、その反対に血みどろな死体の凄さに恐れをなして、かつての美しい夢も破れ、飄然として正常に返りその後の人生を楽しく生きて来たかも知れません。何れにしても私の異常性慾にもけりがついたのでしうに残念な事でした。

私はその後まもなく郷里に帰りましたが、異常はつのるばかりでした。二十一年（小生二十二歳）戦争犯罪人で追求された軍人が、近くのある寺院の本堂で割腹して果てました。それを知ると私はまた「新たな期待に胸をどきどきさせながら、その寺へいそぎました。附近の民家で聞く勇氣もなく、境内を行き来する内に、私は山門からすこし離れた所に、まだ新しい血溜りがあるのを発見したのです。しかもそれは点々として路上に繞っています。私は轟く胸を抑えて、これはついすこし前に死体を選んだのに違いないとさとり、寺町から人通りの多い町中へとたどつて行きました。

何よりも他人に怪しまれない様になければならぬので私は二重に気を配りながら、次第に小さく、見分け難くなつて来る血のあとを追って行きます。思えば何という悲しい姿だったでしょう。行先を突止めてその後どうすると言うあてもな

く、二三度あとを見失つて後戻りしたりして、電車通りから小さな横町へとおよそ半里ほど行くうちに、突然血のあとが途絶えてしましました。その辺を行つたり来たりした上、あたりの家々をそれとなくうかがいましたが、どうしても分りません。ああ私の願ひは再びかなえられませんでした。

K G 君は、こうして、夜毎ひとりで鏡の前に裸となり自刃の姿をうつしては精をほとばしらす。

時には、戦破れた美少年たちが漸く血路をひらいて隠れ家に辿り着き、血ぬられた身体を全裸になつて抱き合い口づけ合い刺し違えたまま折重つて死ぬような小説や絵を書いて性感の極に達するという。

前の「男根化粧」とも似通つたホモである。

他の人々からの手記を綜合してみると、(K G 君も肯定しているが)彼らは、やはり己が男根と兎刃とを一つもののように同一視していると云える。

そして、女性には、特に濕潤した女性器がいやなのである。

私らが分析して行くと、女性器と、いうものは無気味な体孔に相違ない。「女性器は内臓生理として観るべきだ」という説があるとおろ、大陰唇や陰阜以外は、小陰唇でも膣でも陰核でも、ハラワタをツクリだと云える。

切腹同性愛の人々は、おそらく幼い日に、ふと女性器にさわるか見た異様な記憶が、心の底に残っている筈である。そして

それをいといながら、否、いとう爲に、女性全部を避け、その代りに、自分や同性の腹部を美しく思うのである。

腹部。身体中でお腹だけは、男も女も、或る程度似通つた唯一の肉体個所である。顔も髪も、肩も胸も手足も髀も、男と女は全然違ふのに。

それで、女の妖気ある股間を避けて、男の腹部を女の肉体と空想し、そこへ自分の男根に似た刀(ペニス象徵)を突き刺して、男だけで、強烈な性交の幻想を描く。

これが、ハラキリ願望の秘められた意味である。縛り縛られるホモ、口淫しあう男の69、一人の女性を姦しあうホモ、……私は次々にその実例と解剖を続けて行こう。

(この回終り)

高橋鑑先生の「異常同性愛と異常戀愛」は當分の間連載されます。豊富な材料と多年の研究のもとに熱情を傾けた氏の力作です。御期待を願います。

尙本誌二月号は驚異的な秘画秘稿を満載してお眼見得します。ムンムン蒸れるような凄まじいアブと官能の悦楽号はきつと御満足頂けることとしよう!!



の線がクツキリと現われること以外に、私は洋装の女の下着だけに激しい昂奮を覚えるからです。腰巻や長襦袢などは何の興味もそりません。美しい脚をつつんでいるナイロンのストッキング、踵からずうと上へ、太腿に走っている靴下の中心線。肉色もあれば茶色もある。それに各種のガーターの色が加わって私は恍惚としてしまふ。シユミイズのレース飾りの千変万化。パンティ、ブルーマ、ズロース、ブラジャ。私は、婦人の下着類が並んでいる陳列窓の前に立ちつくし、外国のカタログや洋裁の本などの絵に見惚れて人知れず昂奮します。

しかし、けつきよく行きつくところはヒップです。街を歩いていても、すばらしい豊かな婦人のヒップを見かけると、急ぎの用事も忘れてその人の後を追って行く私です。まっわりつくように揺れ動いているロングスカートにつつまれている地上最大の至宝。心の中心では、眼の前のスカートを××××××、白い半円が。

こうした私の臀部崇拜は、とどのつまりは

洗腸のエクスタシーにまで高めたのでした。恥かしさのあまり必死に藻掻いて逃げようとする美しい女を無理に抑えつけ、スカートを×××、コルセットをはずし、パンティを、××××、あの羞恥の焦点であるアヌスを煌々たる電燈の下にさらけ出します。すると、好色な洗腸器の嘴管が、たつぷりとワセリンを塗られて××××××××××でいく。ああ、それを思うと、私は、いまにも気が狂いそうな気持ちになります。私だけがこうなのであるうか？ いやいや、世の中には必ず私と同じスリルを感じる人が何人かいるに違いない。この空想が現実になつたのは次のような次第でした。

ちょうど私が二十四のときでした。私はスケートで左の足の骨を折つて赤坂の外科病院に入院していました。スケートに夢中になつたというのも、もちろん女のお尻の鑑賞のためです。さて、その病院というのは、かねてから私の知り合いで、もう退院するころになると、若い医者や看護婦たちと友だちになつてしまひ、のこのこ診療室などへ出かけて行

つて雑談をするようになっていました。午後には、たいてい暇になるので、私たちは、診療室の椅子やベッドに腰をかけて何時までもお喋りをしました。話は、いつか雑談になるのがオチで、いつも他愛なく笑いこけるのでした。

しかし、その日は天気の良い六月初旬の午後でした。白い診療室には、私の知り合いの院長と若い医者の矢島さん、それに私との三人いました。私たちが、とりとめのない無駄話をしていきますと、たまたまそこへ病院といわれている綺麗な看護婦の内山さんが入つて来ました。彼女は、だまつて部屋の隅にある流しで色々な器具を洗ひだしました。

内山看護婦は、すらりとした背の高い、みごとに発達した胸と腰をもつた美人でした。こちらに背を向け、すこし前かがみになつて流しに向つてゐる姿。私の眼は、すぐに彼女のお尻に向けられます。白衣の下になつてはいるものの、私の眼には、すこし後に突き出しているヴォリユウムのある素晴らしいお尻がはつきりと映ります。私は、吸いつくようにその

腰のあたりを見つめていました。そのとき、ふと院長が彼女に声をかけました。

「内山さん、おなかはどうだいもう痛くない？」

声に彼女は美しい顔を少し赤らめて振り返り、間の悪そうな表情をして答えました。

「ええ、お蔭様で……あの薬でなおりましたわ」

「治つたわけじゃないよ。痛みが止まつただけさ。通じがあつた？ ない。じや、また痛くなつてくるぞ。通じがあつたほうがいいんだがなあ」

「大丈夫だわ」

彼女は、につこりして向うへ向き直つてまた洗いました。ときに、彼女が洗つてい手許でチューチューという音がするので、何だろうと思つて見ると三〇〇リリスリン洗腸器ではありませんか。私は、はつとしました。しかし、そのとき矢島医師がこう訊ねました。

「今日、誰か洗腸したんですか？」

「ええ、あの外来の痔病の奥さん」

「そうなんだ」と院長がうなずきました。

「女も五十近くにもなると平氣だからね。洗腸の癖がついてゐるんだ。すぐに洗腸してくれつて自分から言う。してやると、氣持よきように眼を細くしている、なあ内山さん」

「まさか」

内山君は、一段と顔を赤くしました。私は、すっかり昂奮して咽喉がひつついてしましました。そのときでした、いきなり院長は椅子から立ち上つて内山さんの後へ行き、いま洗つたばかりの洗腸器を手にとると、横側にあつた薬品棚からスリンの大壺を取りだし、まずジューと半分ほど吸いこませ、あと半分はお湯を入れて混ぜはじめました。

内山さんは、びつくりして院長の手許を眺めていました。すぐに院長が落着いた声で申しました。

「君も、今ついでに洗腸しておこう。そうすれば晩までには治つてしまふ」

さつと、内山さんは顔をこわばらせました。

「いやよ、あたし」

と言いなから、無理に笑ひを作つてしました。しかし、院長は、独りで決めてしまつた態度です。

「きみ、手伝つてくれたまえ」

と当然なことのよう矢島医師に言う、と、しずかに内山さんの腕をつかまえて診察用のベッドのそばに連れて来ました。

「院長先生、いやですわ。洗腸しなくても大丈夫ですわ」

彼女は、まだ作り笑ひをしながら、それでも泣きだすような表情を交えて尻ごみをしました。

「しなくちやいかん」

院長は、低いが力ずよい声で命令するよう言う、よいしよと力を出して彼女をベッドの上に仰向けに斜めに押したおし、慣れた手付で、ひよいと両脚のをせさせ、両膝を立てて開かせようとしてしました。

「あッ、だめ」

内山さんは、白衣が開いた下に現われたスカートが膝にすり落ちるのを懸命に膝のほうへ上げるのでした。私の眼は釘づけになつて



敗走會津城

|| 日本落城秘史 ||

(第四話)

岩堀光
由岐葵画



井伊威久子は道具類のなくなつた、離れ書院の座敷の真中に、放心したように小半刻も坐りつづけていた。

庭に面して障子が開け離つてある。

ふと、まだ葉も青く実も青い柿の木の花繁みの中に、ぼつんと色ずきはじめた、一個の実のあるのが眼にとまる。

あれは虫喰いだらう。季も待たず、色だけ鮮やかに赤みをましてくるのは、害虫に侵された証拠だ。やがて吹きつけてくる初秋の風に振り落されて、無残に、腐れ朽ちてゆくのだらう。

そんなことを威久子は思った。

と、彼女は、兄の牛之進を送りだした後の放心からやつと開放され、まるで、じつとして害虫に狙われるのを恐れたかのように立上る。長い袖たもとを、赤い細紐でたぐる。庭に降りる。土蔵の壁に横に寝させかけてあつた長ばしごを、ひきずるようにかついできて、書院の屋根に立てかける。夕べの陽に、ひときわ青々と芽えた庭の中で、そんな彼女の二の腕や足首からふくらはぎにかけての肌が、ちらちらと白く覗いて見えた。

昨夜から、西軍の砲弾が、武家屋敷ばかりか城下の民家をも焼いていた。中には問者の放火もあるといううわさだ。はしごをかけ、汲めるものに水を汲み置いても、威久子と小者の宗平と二人切りでは、火を防ぎきれぬと判つていたが、いちおうの心構えである。後は、恥を残さずに、いざという時は死ぬ覚悟がつけば、彼女の生きるつとめも無事に果了したというものだ……彼女は旗本の娘としてそう分別している。

井伊威久子には両親がない。譜代旗本の兄牛之進と二人つ切りである。会津に来たのは、彰義隊に加わつて敗れた兄に従つたまでだ。二月の寒い盛りであつた。それ以来ずつと、城下の質屋江戸屋七兵衛の離れをかりて住んでいた。

当地には兄の他にも、彰義隊、新選組、古屋隊、伝習隊、徹兵隊、根本武陽の海兵隊などの殘徒が多く集つた。徳川家の頽勢を挽回する希望が、当会津若松の藩公松平容保の双肩にかかつていると見込んで、その西軍への抗戦に参加するためだつた。

威久子は、東西何れの軍に正義があるのかしらない。ただ、兄たちの希望は空しく、東軍が完敗直前にあることだけを、今、知つている。

威久子は防火の用意が済むと、縁側に腰かけた。汗ばんだ美しい顔を手拭で押える。小者の宗平が、半纏に肩をいれながら姿をみせた。なんとなくふ遠慮な眼だと威久子は感じる。広い家に二人切りになつた思ひすこしかもしれない。

江戸屋は早朝、家財を土蔵に下りこんで、家族を連れ、妻の里に避難した。ずつと戦闘に参加していた兄も、一刻ほど前、最後の別れを告げにきた。

「お嬢さま、お疲れになつたでしょう。」

と宗平がいつて、縁近くよつてきた。

「座敷におはいりになつてはいるほうがよろしうございますよ。そろそろ、西軍の連中が町に入りこんだといううわさですから。」

「まあ、こわい。」

威久子はいつて、身を引くように縁に上つた。

「さつきから、庭で働いておいでになるお姿をみながら、宗平はき

がきじやございませんでしたよ。大江戸でも佐久間町小町と有名なあなたさま、狼通にみられては危のうございますからね。」

「すみません、心配させて。」

「宗平めは、お嬢さまのお身だけが心配でこうして会津までお供してきておりますんですからね。こんなことを申しあげますのも、老婆心からですが、西軍にはいろいろうわさかとんでいます。」

「うわさつて？」

「近郊の町家や農家の女たちが、多勢、犠牲になつてゐるつてことですよ。」

「まあ。」

「なにしろ。野暮な長州や薩州、土佐の田舎侍、それに、無頼の徒や百姓の志願兵からできている軍勢ですから、することなすこと眼もあてられぬ残虐なことばかりだといひますよ。女たちを一つなわにつないで、馬の尾に結びつけ、宿舎に連れて行くつてことですよ。一人が転ぶと皆が転ぶ、それを面白がつて手を叩いて喜んでゐるとか。はだかにした女を。」

「宗平、もう、わかりました」

思はず威久子の声がきびしくなつた。

「あッ、相済みません。」

宗平は、今更、自分の行過ぎに気づいたように恐れ入つたが、腹はどうか……。

西軍の残虐に関するデマは威久子も色々に聞いていた。たとへば、西軍は捕虜の男は、全部、耳に紐をとをしてつなぎあわせ、逃亡をふせぐとか、首に綱をかけて、牛馬の代りに駆使するとか。また、女共は全部裸にして、背や腹に所属の隊の番號を描き、晝夜を問わず、隊兵の欲情のはけ道具に使用するとか……。

威久子は常識で考へて、人間が人間をそんなに残酷にあつかえるものではない、と思ひながら、たなごころに穴をあけられ、船はたに結えつけられた元寇の女たちの例などあげられると、敗戦におびえる心は、つい、うわさをそのまま事実置きかえて了う。

また、威久子は、現実には、西軍を江戸で迎えていた。

その時は、決して残虐さを眼にしなかつたが、商家の品物をただで持帰つたり、四、五人して、ひとりの町人をなぐりつけたりする兵士の姿はみた。

また、無理に、娘を妾奉公にだすよう依頼されて、夜逃げした町家もしてゐる。

強姦事件も日々耳にしたが、それがわかり

打首にされた兵士のことときいた。

綜合して、勝者の横暴さはあつたが、想像よりは穏やかであつた。

ただ、こんどの場合には、場所が、江戸というそれまでの政治の中心地ではなく、奥羽の田舎である。それに、実戦の真中であつて、平和的な占領軍である。

西軍の人士の心にも、東軍の者が感じるように、相手に対して、憎悪が一杯に満ちてゐるであらうし、感情は昂ぶりきつてゐる。

宗平の言葉は誇張とばかりいきれない不安を彼女は感じた。

井伊威久子は、今度の戦争に対しては、自分が東軍の者だという以外なにもしらない。上野の戦争の時は、故郷の江戸を守るためという目的があつたが、会津の者が、土地を守るために戦つてゐるほど、はつきりした敵を西軍に感じているわけではない。

徳川家のためというにしては、すでに、政權は天皇家に移つてゐる。將軍は天皇に臣礼をとつてゐる。いつのまにか、天下さまが、將軍から天皇に移つてゐる。それをもう一度將軍の手にとりかえすための戦いかという、兄弟の進にきいたところでは、そうでは

ないのである。

兄は、真実の天皇家のお味方は会津さま、つまり松平容保公を盟主とする奥羽二十余藩の通盟軍だといふ。天皇軍を名乗る西軍は、薩長土の軍隊が、天皇家の側臣を恐迫して、勝手に王師を名乗っているのだといふ。

「われわれ東軍は、そうした西軍の手から天皇家を解放するのが目的なのだ。」

と牛之進はいうのだった。

「でも、西軍の大總督は有栖川宮さまではございせんか。それに錦旗も。」

「それが世間の眼をごまかすための権臣たちの手なのだ。先帝を毒殺したといううわさの岩倉ら側臣に囲まれた今の少年天皇の眼に真相がわかるか。」

そういはれると、なるほどと威久子は思う。以外に、戦争の正義など判断できはしない。ただ、男たちの権威への慾望にまきこまれ、結局は、身の運命に従うよりない女の哀れだけを心ひそかに嘆くだけであつた。

敵にしろ味方にしろ、正義などありはしないのが、戦争というものかもしれない、と、日々激しく変化する時代に生まれた威久子は思つた。

当会津公松平容保さまにしてからが、つい

先年までは、京都にあつて、天皇家守護の重責にあつた。いや、その職を免じられて後も天皇から密書がきていた。それには、今、西軍總督のひとりとして会津を攻めつけられる仁和寺宮さまが、容保さまを天皇の第一の忠臣といわれたとかいてある。昨日の味方は今日の敵の言葉通りである。

兄が、西軍は王師でないというのも、その天皇の密書から判断すると、そう思えぬこともない。密書の中で天皇がいわれている。

『わたしは誠忠の士と思う者はその方のように役目を退けさせられる。みなわたしの不徳と思ひ天地神や祖宗に対してはずかしい。その方が暴論のために追わたのをどうしようもなかつたように、いま、ますますわたしのまわりには暴論、煽意の徒が多く、これではどうなることかと思ひ、その方にひそかに手紙をだすしだい……』

もちろん威久子が天皇の密書をみてきた訳ではなく、兄が御家老の西郷さまからきいてきた話のまたぎきのだが、そうだとすれば容保さまが、自軍を勤王軍とお信じになるのは、無理からぬことなのだ。

だが、会津軍は、今、賊軍である。威久子は賊徒の女だ。なぜなら、負けたから。

戦争の正義のあり場所など知らない威久子だが、はつきりわかっていることは、戦争にない正義が、その結果、つまり、勝敗にはあるということだ。

勝つたほうが正しく、負けた方が悪だ。

鳥羽伏見の戦争に敗れた会津藩を賊として攻撃しようとする西軍に対して、容保さまは謝罪の書を天皇にだされた。西軍の總督である宮さまに対しても、二十数通、謝罪の手紙をおかきになつたと威久子はきいている。だが、征討軍は編成されたのだ。うわさによると、手紙が、宮さまのお手に渡つたのはただの一通だということである。

みんな取巻きの参謀たちにぎりつぶされた。

もはや容保さまは抗戦を決意する以外に、方法がなかつた。

会津軍は兵士の年令によつて隊を分けた。

十六歳から十七歳を白虎隊、十八歳から三十五歳を朱雀隊、これが主戦力であり、威久子の兄もこの隊に所属した。三六歳から四九歳を青龍隊、それ以上が文武隊である。総勢約五千三百人……。

西軍が会津の通盟軍を破つて、若松に攻入つたのは、慶応四年八月上旬、二十一日には

嵐雲の天空を蔽うに似て、城下を闇んだ。

昨日二十二日、客保さまが味方の兵を二の丸にお集めになつてみると、二百余人だつたという。それが今日、兄の言葉では百人にへつていた。もちろん士分だけのことなのだが……。

少年隊の白虎隊ばかりか、十三、四歳の子供まで、闘ひ倒れ、あるいは自刃した。

翌日二十四日、井伊威久子は、朝から、武士の家族たち、主に女や幼男が、次々に自殺したうわさをきいた。

威久子は、中野こう子たち、女らが、男裝して、戦闘に加わつたときいた。娘子軍はしかしだちまち破れた。はじめ、西軍は女子軍としると、生けどりにしようとして、かなりな被害をうけたという。だが、戦争の勝敗に

は、もとより影響がない。

松平容保さまは降服、開城された。威久子は、書院を離れて、土蔵にひそみ隠れた。

宗平がひそかに、食物を運んでくれた。

威久子は兄の生死をしりたかつたのだ。

威久子が眼覚めたのは、この日頃、神経が弱々しく敏感になつていたからだ。宗平の吐息は、まだ、顔から一尺はなれていた。彼女は横に転げた。短剣を抜いた。

「おとなしくして下さいお嬢さま。」

宗平がいつた。残暑があつても、夜は冷えこんできたこのごろなのに、ふんどし一つだつた。その白布が、役にたため状態を、宗平のからだか示して、威久子は眼をそらした。

「無礼者、去りや。」彼女はいいつた。

宗平がふんと鼻をならした。

「おとなしく抱かれて下さいよ。」

「主人に対して……。」

「いばらないで下さい。いや、いばつてもいいですから、宗平をなくさめて下さい。おいやですか？ かなたを捨てて下さい。いやなのですか？ じゃ、あつしはこれから、外へ飛びでて、お嬢さまのことを、西軍に密告しますよ。すぐ多勢がきますよ。お嬢さまはあつしひとり抱かれて下さりや、いばつてうれしいつてきつときげびなさるようにしてごらんにいれますがね。西軍の狼にかかると嬉しいどころか痛いばかり、それも、一四二四じやすみませんぜ。町家や百姓の娘ばかりか女房まで、ひつさらわれたり、押しいつて死ぬような眼にあわされたり、今、ご城下はたいへんなんですぜ。」

嘘でないことは威久子もしつていた。

西軍は、武家ばかりか農家、町家に押入つては、家財を分捕つた。公然と、分捕の品や土蔵の前に標札をたてた。

薩州××隊分捕――

長州××隊分捕――

盗品を、また味方の他隊に盗まれぬためだつた。反抗する老幼男女を殺した。

愛宕町の呉服屋森田の土蔵は、薩州隊と肥



葵



前隊が分捕を争ひ、薩州隊が不利になつたので、焼き弾を投げて家を焼いてしまつたというわさも、威久子は昨日きいた。

また田中屋某という紺屋が商売用の大がまを長州二番隊かに分捕られ、下渡しを願ひでると、六阿の代金を要求されたということも、当人の口からきいた。

物盗りばかりでなく、強姦も公然となされてゐるかに見える。陣所や下宿には、毎日人妻や妻たちが連れ去られた。夜も晝も、威久子は、悲鳴を耳にした。

彼女は土蔵の天井に隠れ場をもつていた。かりに、この土蔵が発見され品物が張札されても、ひそんでいれば安全だつた。

「城下ばかりか、今では山の中まで隠匿物資と隠匿女を探しておおらわの欲の化物通ですよ。どうせ、お嬢さんはさむらいの女にはもうなれないんですよ。宗平の女になつて下さつたつて身分のちがいはないんですよ。おとなしく、あうむいて眠つていて下さりやいいんです。死んだつもりで。いやですか。宗平が密告すれば、敵の娘、大方の東軍の女は、捕虜になつて、收容されているのにいままで隠れているなんて、憎さも憎しつて奴ですよ。その佐久間町小娘のご器量だ。そ

うでなくたつて、無事にすみませんよ。勇敢に戦つた娘子軍の死体さへ、人別をたしかめるとか、なんとかの名目で、わざわざ、男ばかりをぬがせてみてたのしみにしたという連中、根が田舎や山奥の百姓たち、江戸の肌をみずにはいけませんよ。」

「ええい、けがらわしい。」

宗平の冗説を切り拂うように短剣で、威久子は、眼前の宙を二度三度斬つた。

兄の生死を確かめるまでは死ねない、それが未練だつたらうか。兄は死んだらうが、死んだというわさはない。誰彼の名はあつたが、兄の名はない、消息をしりたい威久子だつた。

宗平はやつと去つたが、明日はあぶない。彼が密告するか、彼自身が、もつと彼女の油断をみすかすかだ。逃げようと思つたが、城下を逃れる方途はなかつた。

いざという時の覚悟はきめておこうと思つた。紅色の長襦袢は脱ぐにも、それに代るものがない。白絹の薄地の単衣をつけて、黒の帯をした。黒の帯はなかつたのだが、幸ひ、鹿の子散らしの帯の裏地が黒しゆだつた。しめてみると、黒のふちに紅が細く見ええし

結びめは裏がたれて、かえつてなまめいてみえた。けれど、若い自分の死装束としては許されるだらうと威久子は思つた。江戸屋の荷物を探せばもつと適当なものがあろうけれど、他人さまのものを……。

蕎麦えを了つて、前の長もちの上にのせた短刀をとうとう手をのびしかけた時だつた。ばあんと耳のコマクの破れるような震動を感じた。音をきいたと思えるのは後であつた。

威久子はよろめいた。右の横面が燃えた。前につんのめつた。背中を突きとばされたのだ。足を拂われた。お尻の下のを抱かれた。四つ這ひになつた。足首をひつばられた。

「いやッ」

はじめて威久子は、自分の声をきいた。すがが乱れたのだ。同時に、彼女は、黒いへんてこな洋服上衣に白い帯をまきつけた数人の男たちを認めた。

夜明けまでは大丈夫宗平の密告もあるまいとみたのがゆだんだつた。彼女が男たちに反抗しながら、やつと、くたくたにつかれて、しばられたからだを、庭にひきだされたのが夜明け前、あたりがはの明るい頃だつた。

島田の髪が崩れて、前びんの毛が汗になつ

たひたいにこびりつき、その先が眼をついた。外の風が汗をひかせた。

庭で威久子は敵が十七人いるのを数えた。落着きたいと思つて、数を勘定したのだ。

「どうしましようこいつを。」

長らしい男にひとりがきいた。

「そうだな、隊長へ届けるのは、後でもよろう。」

長らしい太つて背の低い男が答へた。

「われわれだけでたのしみましようか。」

「そうするよ、もちろん。」

「やつぱり峰山さんは、いいわれらの大將ですな。」

「うはッは、おだてるな、おだてるな。」

嬉しそうに笑う顔。前歯が二本かけていた。

「それにしても、あの密告者のいうたとおりええ女子だな、こいつ。」

「殺して下さい。」

威久子はいった。

「理不盡なまねをなさると舌をかみます。」

「そりや、いかん。」

長が答えた。つかつかと、威久子の顔前にあゆみよつた。

「どれ。」

なにがそんなに……と威久子は思う。とすぐ思いを奪うように、感覚が体内を突き抜ける。うっとうめいた後から、思わず、はつとするようなめくるめいた感覚が声になりそうになった。

「それ、それ、姓名をいえ、いえば許すぞ、それ、早う、つづけていえ！」

「井ッ！」

といいかけて、威久子は、ぎりつと歯をかみあわした。自分を狂わす自分の感覚と、男共の喊声と、声に突きでる声と、名をいえとせめつけるものとの間に、不思議な一致のあるのを、威久子ははじめて直感した。

「モオ殿の妹御、さあ、姓と名をいえ！」

威久子は歯をならした。死んでも、今の場合、彼女は、いえなかつた。屈辱からではなかつた。羞恥だつた。奇妙な。

井伊威久子が、隊長の部屋にともなはれたのは、その日のおひる近くだつた。彼女はもうしばらくなかつた。逃げ走ることとはとてもできない。あるくことがやつとだつた。

「女子、えろう、贅物がぬれとるの。」

隊長がいった。

「大川にとびこんで逃げようしました。」

太った背の低い長がいった。

「ふーん。」

隊長は、そんな理由などいわんでもいいというように鼻でうなづいた。

威久子は、江戸屋の壁で何度も失心した。その度に、防火用に浚んでおいた水をあびせかけられたのだ。十七人が彼女のなかに同居するまで、はしごの結びめをとかれはしなかつたからだ。

隊長の部屋は、まるで、大名の殿様のお部屋のように、豪華を極めていた。

夕刻から酒宴がはじまつた。威久子は、ぬれた衣袂をぬがされて、給仕にだされた。

「酒肴だ、酒肴だ。」

と隊長はいった。

威久子はじぶんと同じような恰好の女が、はかに六人いるのをみた。みんながぬれた衣袂ゆえに、そんな恰好をしているのではあるまいに。

西軍の占領行爲に対しては、多くの文書が悉に流された。正式の記事、つまり、政府用の文書は、表側のきろくであつた。うらがわは、辰のまぼろし、浅辰見聞漫筆、耳目集など、題され、御用史家に取上げられずにめ

でたくも残つた。

ただ、会津藩某だけは、西軍に、淺羽日記と題したおもてがわの文書を送り、必死を覚悟で意見した。

『足下西軍のなす所を見よ。民の財貨を奪ひ無辜の民を殺し、婦女を姦し、殘虐極まれり……なにをもつて王師という……』

といった風に。なにをもつて云々というのは少しひどい。王の師団だから、おとなしやかでなければならんという規則がある訳ではななく、なにももつて人間のツラ……というところだろうが。

会津若松城が正式に開城したのは明治元年九月二十四日だつた。客保は罪を後年になつて許された。

降伏婦女は五百七十五名いた。その処置は西軍参謀に任せられた。

井伊威久子の消息は不明だ。ただ、会津では旗本の娘がはしごにゆえられ、リンカンされたりわさが、有名な話になつてゐる。

×

×

×

獵 奇 マ ニ ヤ の 手 記

強

姦

願

望

グイと男が一膝よつて來たのです。黒い顔が急に大きく追つて、奥さん……

肩が大きな石を乗せられたように重くなつて、恐怖と亢奮に眼がくらむばかりでした。……

瀬 木 慧 子
古 正 英 生 畫

未亡人なんて、縁の遠いことのように思つていた私でした。それがこの春、夫の急死によつて私の名前になつたのです。

子供もありませんから、夫の急死後はしばらく、私はぼんやりしていました。書き忘れましたが、私は二十九歳で、結婚生活五年目でした。毛の濃いタチで、よく夫に笑われたのですが、不思議に色は白い方です。体重は十三貫八百匁前後あります。

夫の死後、百ヶ日までは、ただなんとなく寂しいと



思うだけで、とりたてて悩んだことはございませんでした。

その頃、お友達の薩子さんに誘われて、映画見物に行つたのです。二本立てで、一つはギャング物の、非常に愚劣な映画でしたから、私は始めの間、お友達とウンザリした顔を見せ合つては、閉口しながら観て居りました。

そのうちに、敵役のギャングの一人が、美しい夫人を凌辱するシーンが展開されたのです。人気がない洋館の間で、美貌の夫人はソファに押えつけられる。悲鳴、残忍な男のせせら笑い、情欲に歪んだその息ずまるような表情……。

私は苦しくなつて、叫声をあげそうになりました。事実、あとになつて薩子さんに聞いたところによりますと、私は「あっ！ あっ！」と、短い声をあげていたのでそうです。自分では少しも覚えて居りません。とにかく、体中の血が、湯気をあげて、沸騰するような感じでした。

スクリーンでは、窓ぎわの花瓶の花がポタリと落ちて、夫人の汚辱を暗示します。パーマは乱れ、裾をはだけた、あられもない姿で泣き伏す夫人——。それを冷めたく

見ながら、バンドをしめる男——。(××と云う、男性的な風貌で売出した新進スターです)その悪魔的な表情が大亨しになると、私は予想もしなかつた、最後の淫靡に襲われたのです。両手は夢中で、自分の乳房を、アザが残るほどつかんでいました。

私はその時、席を立つことが出来ず、泣きたいような気持でした。やつと御不淨に行きますと、下着が汗で、ベツトリと濡れてしまつて居るのです。他人に見られる筈のない御不淨ですけれど、私は一人で真赤になつてしまいました。女の哀しさに突き当つたとても云うのでしょうか、なんだか、無性に哀しい顔が上げられないような気持が残つて、あとを引くようでした。

私は薩子さんと街に出ました。

「どうしたの？　なんだかヘンよ」

と、薩子さんは顔をのぞきこむし、あんまりふさいでいても怪しまれると思つて、私はワザと蓮つ葉に、

「なんだか、久し振りに映画観たら、頭が痛くなつたわ。あんまりヘンな映画だつたから……」

と、云うと、薩子さんは、ジッと私の顔をのぞきこんで、なんだか生真面目な表情で、

「あの、シーンでしょう？　××が暴行するところ——」

私はギクリとして、顔色が変つたのが、自分でも判りました。薩子さんの言葉が、ズバリと的中しているので、どうしていいか判らず、シドロ、モドロになつて居ました。

「やつぱりそうなのね、女つてヘンなものねえ——」

「……………」
「どうしてそんな顔するの？　なにも、あなたが不しだらなんじやないわ。白状しようか、私だつてそうなのよ。さつきのような、強姦のシーンなど見ると……私、暴行されてる女が羨しくつて、憎らしくさえなるわ」

それを聞くと、ジーンとしびれて、胸が溢れるようでした。この時の気持は、やはり感動と呼んでもいいのではないのでしょうか……。

私は充奮して、思わずいろ／＼なことを口走つたのです。それから、薩子さんの赤裸々な体験を聞いて、私達二人は、長い間夢中で喋りつづきました。とても感動的な生命力が流動するような時間だつたと思う

のです。

隆子さんは私と同じ歳で、女学生時代からの友人です。しかし、彼女は私とは違つて、家庭的に恵まれず、洋裁師としての仕事をもち、その細腕で母親や弟妹を養つて来たのです。そんな事情で結婚も断念しなければならぬオールド・ミスだつたのです。

私たちは、それほど親しい仲ではありません



せんでしたが、この日は、お腹の底から、秘密をプチまけ合いました。

「オールド・ミスの悲哀つて云うのかしら、なにしろ、お友達はみんな結婚してしまふしなんだか判らないけど、ヒステリーみたいになることがあるの。始めは小説を読んで、凄惨強姦の場面によつたつたのよ。読んでるうちに亢奮して、私、自分が暴行されてるような、錯覚に陥つたのね。誰もいない部

屋で、小説に描写されている通りに、逃げ廻つたり、倒れたり、「助けて！ 誰か来てえ！」つて叫んだり……とにかく、たまらない刺戟だつたわ」
それから、隆子さんは、道を歩く時でも、遅い男性を見ると、「この男が、自分に飛びかかつて、押し倒してくれないだろうか？」と、ひそかに思うようになったのだそうです。

それから、オールド・ミスとは云つても、ボーイ・フレンドの一人や二人はいるのだけれども、ベタ／＼と女のように、御世辞ばかり云うような、若い優男では、肉體関係の時でも、ちつとも快感がない、とも云つた。

それに、どうしてか彼女は、髑のある中年の男性で、ちよつと二世タイプのような、バタ臭い、ガツシリした男性がいいと云う話もしました。そんな男性に襲、かかれ

ら出たばかりで、にっちもさっちも行かぬえから、こんなものを持つて歩いてるんだ」

そんなことを云つて、私の体中を、無礼

な視線でジロ／＼見るではありませんか！

私は氣持が悪くなつて、とにかく一つ

買つて、早く押売を帰えそうと思つたので

すが男は奥の方まで覗くようにして、

「どうも結構な住いだねえ。なんだね、奥

さん処は無人らしいね？」

「ええ、私一人なのよ。無用心で困るわ」

何故そんなことを云つたのか、考えると

浅間しいことばかりです。私はなんだか、

その薄汚い押売男が、あの××が扮した、

ギヤングに似てるような氣持がしたのです

(實際は似ても似つかぬ男なのですけれど)

「へーえ、奥さん一人かい？」

男は改めて、私をジロ／＼見つめまし

た。私はチラとその男の眼の色を見ると、

キエツと全身が引縮るよううで、もう言葉は

出て来ません。グイと、男が一膝よつて来

だのです。黒い顔が急に大きく迫つて見

え、私はなにか小さく叫んだよううです。

「奥さん……………」

肩が大きな石をのせられたように重く、

つて、恐怖と亢奮に眼がくらむばかりでし

た。しかし、そのままふつと肩が軽くなつて、氣がつくと、男はそそくさと玄関を出てゆくところなのです。

「奥さま、誰か来たのですか？」

婆やが廊下から声をかけたので、私にもや

づと事情が判りました。婆やが帰つて来た時

の、勝手口の鈴の音に驚いて、男は逃げてし

まつたのです。私には、その鈴の音は聞えま

せんでした。

私は、云わば婆やのおかげで危難を逃れた

管なのに、どうにも腹が立つて、一日中婆や

に口をききませんでした。

折角のチャンスだつたのに……。もしも、

婆やが帰つて来なかつたら……。その夜も、

私は一人寝の床の中で、転々反側するばかり

でした。

薩子さんと私は、もう肉親以上に打とけ合

つた仲になりました。女が、死ぬほど恥しい

ことを打明け合つた仲ですもの——。

押売男のことを話しましたら、

「惜しかつたわ。そんな男の力つて、きつ

の涙いでしようにねえ」

と云つてから、急に激しく頭をふつて、

「ああ、想像しただけで、口の中がカラカラに乾くみたい。私、なまぬるい男なんてもう沢山！ 血がにじむほど私を突飛すような男、いないかなあ！」

聞いているうちに、私も瞳がひきつるような氣持になつて来るのです。

「女つて、みんなこうなのかしら？」

「オールドミスや、未亡人のうちの、幾%かは、こうなるのかもしれないわ」

と、私たちは顔を見合わせたのです。

それから、薩子さんに聞かれて、私は死

んだ夫との性生活のことも話したのです。

なんでも、みんな話したのですが、彼女は

「まるで、ぬるいお湯につかつてるみたい

なものね。そうね、あなたの旦那様、あんなに大人しい方だつたから……」

彼女にそう云われると、私も亡失の生前

からの不満が、今になつて、ブツ／＼と体

中から吹き出してくるような氣持でした。

私は、そんな自分に顔をそむけながら、

やはり、強い、逞しい男性の力、暴力に憧

れずにはいられないのです。まるで飢えて

いる者が食物のことばかり考えるように、

私もそのことばかり考えずには居られない

のです。



私はとう／＼街に迷い出るようになりました。浅草、上野、新宿などを、美しく装って目的もなくうろつくのです。街には沢山の男がいました。しかし、何事もなく、私は疲れて戻ってくるばかりです。私は工事をしている人夫たちの傍に、ぼんやり突っ立って、その逞しい姿をみつめたり、テキ屋みたいな連中の後から尾いて歩いたりもしました。どう云うものか、私は少し野卑な感じがする、汚れた男が好きでした。浅草公園のロハ台のような処には、そんな男が沢山いました。しかし、彼等は贅沢な私の服装を、不思議そうにジロ／＼眺め

るばかりで、それ以上のことは何も起りません。失禮は積み重なるばかりです。私はこの辺りの娼婦たちを見ると、何時の間にか美しくさえ思ふようになります。夜毎日毎客を送り迎えて肉体を売る女、それを羨しがるとは、きつと私は彼女たち以下の、哀れな存在なのでしょう。しかし、私は時々、一切の名誉や財産を捨てて、一人の夜の女になることを空想します。私が欲しているものが、其処では満たされるのではないかと、思われるからです。

秋の始めのある夜、親類の家を尋ねて、ひどく遅くなりました。泊って行くように云われましたが、私は無理に帰ることにしました。その頃から、私は漠然と、あることを予期していたのかもしれない。

××駅に降りた時には、もう十一時に近かったようです。宅は駅から十分ばかりの処ですが、大通りを行けば割に人通りも多く、安全なのです。でも、駅を出ると、どうしてか、私の足は自然に左側の暗い道に折れました。この道は大迂回となって遠い上に、人家はまばらで、ひどく寂しいのです。

歩き始めますと、さすがに背中が氷るよう
うで、ガタ／＼と震えが出ます。私はハン
ドバッグを胸でヒシと握りしめて、わざと
ノロノロ歩きました。期待で足が宙に浮く
ようでしたけれど、やはり、恐しくもあり
ました。

暫くすると、後からヒタ／＼と足音がし
ます。私の心臓は、まるで早鐘をつくよう
に乱れるのです。それがすぐ背後に迫った
時は、体中の神経が後に集中しているよう
でした。男です。でも、その男は、私の方
をチラと透して眺めながら、トットと行き
過ぎてしまいました。

その次に又足音が後からしましたが、今
度は若いアベックではありませんか。私は
何かねたましい想いで、その二人を見送る
外はありません。

右の二人の姿が消えた闇の中から、又、
足音がコツ／＼と響いて来ました。その黒
い影が、だん／＼近よつて来ます。黒い大
きな男でした。さすがに怖くなつて、私は
顔をそむけて急ぎ足になりました。

其処は片側が田圃で、もう片側は植木屋
の地所らしく、こわれかけた竹垣の向うに
大小の植木がビッシリ植つてゐるのです。

男はやはりチラッと私を見てすれ違いまし
た。恐怖が失望に変わつて、私がぶりかえると
その男の靴音もビタリと止つたのです。男は
不審そうに私を見てから、引返してゐるでは
ありませんか――。

「ちよつと伺いますが、駅に行くのは、この
道ですか？」

低いバスでした。声が出なくて肯きますと
「奥さん、こんなに遅く、何処に行くんで
す？」

この時は、恐怖だけで足がすくんでいまし
た。震えながら逃げようとすると、袖をグイ
とつかまれ、ビシツと裂ける音がしました。

「な、なにをするの！」

「靜かにするんだ！」

押殺した声と一緒に、大きな掌が鼻や口を
ビタリと蔽つて、私はズル／＼と引きずられ
ていたのです。こわれかけた竹垣の上から
投げ下ろすように乱暴に、私は地面に押つけられ

恐しい力がのしかかってくるのです。
その瞬間、星明りで男の顔がすぐ前に見え
ました。まだ若い、工員風の眼の大きな男で

した。なんだ又着物が裂けるような音がし
て、私は気が遠くなるようなくらめきの中に
沈んで行きました。

愛 読 者 通 信

今まで人知れず、やりばのない悪夢に悩
み続けて来た僕をがっちりと受止め、支え
てくれた貴誌、僕の感激、同好の諸兄なら
ではとても味合うことの出来ない嬉しさで
した。以来ずっと愛読致して居りますが、
女性被縛をめぐる男性サディストの心理的
解剖の企画を心から愛するものです。僕は
現在、二十八歳細身で会社員、サディスト
ですがあまり強烈ではありません、縛られ
た女性をあらゆる角度から見詰めてその姿態
美に堪能する程度なのが趣味です、この場
合被縛は被縛の心理にかなつて絶対的な極
至だと思います、女性の方ならば何方でも結
縛なのですが出来得れば年齢的に三十歳前
後、中年の方が望ましいのですが……

群馬県内、又は近郊に僕の意中を解され
る御婦人が居られれば、多少遠くてもいと
わないつもりです。御文通致し度、御交際
の上は絶対紳士的行動を一步も出づるもの
ではありません。どうぞ御通格下さい。

大阪美津子嬢遠方の事故文通のみにても
お願い出来ないでしょうか

群馬県 (Ｔ生)

「女王様が奴隷の顔を洗つてやるんだから……」れん子はニツと白い齒を見せて笑うと、私の眼の前で、海草に石鹸を塗り始めた。そうしていきなり私の胸の上に跨がつて来た。息も出来ぬ壓迫感！ ザラザラした觸感や……

鬼 山 絢 策

れん子が下劣な女だと言うことは百も承知して居ることなのだ。教養も無ければ節操もない。

そりや酒場の女などと言うものは、大体れん子のような型の女が多いのだらうが、なまじ知つたか振りをするのが、どうにも鼻持ちがならない。文学で御座れ、映画で御座れ、スポーツでも何でも通だと思つて居るらしいが、總てが上つたりして居て深味がない。彼女の真に「通」な方面と言つたらY談位なものだらう。

勿論私はれん子に恋などしては居ない。

「恋」と言うものはもつと崇高なものだらう。お互いに愛し合い、尊敬し合つて、精神的にも肉体的にも双方の思好が合致したものが恋愛なのだ。私はれん子などどうなつたつて構やしないと思つて居る癖に、この頃は職場に居ても、映画を見て居ても、れん子の肉体が頭から去らない。

妙子との場合が恋愛と言へるだらう。お互いに心から愛し合つて居たのだから、もしれん子と言う女性が

私の前に現れなかつたら、妙子との間に恋愛が実を結んで結婚する迄に至つて居ただらう。

今考えて見れば、私がれん子を好きになつた動機と言うのは、普通の人が見たら、極く詰らない事だらうのだ。

私は駐留軍の翻譯の仕事をして居るのだが、或る水曜日の午後、駐留軍関係は水曜日の仕事は半日だつた。親しくして居るテッドと言うアメリカ人と始めて池袋のバー「アマゾン」へ行つたのだ。

その時向うのテーブルで客の相手をして居るれん子を見た。人間には誰にも容観に好みがあるだらうが、私の場合は特にそれが強かつた。同じ美人でも純日本型の美人や、細い眼の女には性的アツピールを感じないのだ。丸顔で、眼が大きくて、顔全体の調和から言ふと、どこか不揃いな所のあるような女が好きなのだ。

れん子は私の最も好むタイプの顔の女だつた。黒いドレスを着て腕も肩もムキ出しにして居た。顔は違ふが表情の動きにジエーションセルに似た所があつた。

それでも「一目惚れ」なんて純情さは、私には持合せて居なかつたから「一寸イケル女だな」と思つた位のものだつた。



醒まされたマゾ

私は私の番の女と飲んで居ても、時々れん子の方へ眼が行つた。でもその程度だつたら私はれん子を私のテーブルに呼んでくれと迄は言い出さなかつたらう。

れん子の相手の客と言うのは、かなり酔つて居るらしい、テーブルにうつ伏しになつて居て、れん子が一人で飲んで居た。れん子はその傍にビタリとくつついて腰かけて居た。「おい、もつとお飲みよ。もつと飲もうよう」

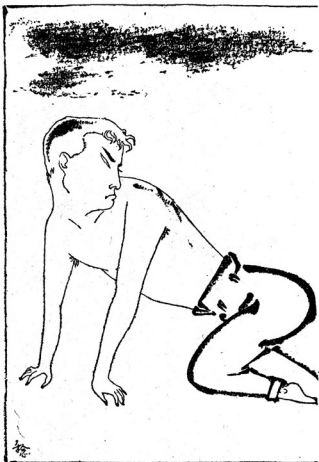
れん子も酔つて居るらしく、男の髪の毛を鷲掴みにしてグイと顔を持ちあげ、男の唇へコップ酒を無理に咄ませよとするのだつた。男は片手でコップを受取つて酒を飲みながら、片手でれん子の黒いスカートを撓つた。

「バカー」

その時れん子の右手が男の頬にビチャリと鳴つた。

「酒がこぼれるじゃないか。」

男がれん子のドレスに酒をこぼしたので、れん子はスカートを撓られたことでなく、酒をこぼされたことを怒つて男の頬を殴つたの



だつた、それが証拠には撓られたスカートをとおろそうともせず。太腿のつけ根迄はだけた脚を、稍ひろげたままで居たからだ。

れん子が客を客とも思わずに殴つたのを見た時、私はれん子が好きになつてしまつたのだつた。

れん子はその酔いどれの客を送り出すと、私達のテーブルへやつて来た。

テッドもれん子を気に入つたらしく、いきなり膝の上に抱きあげて、首や肩に接吻し、そして唇に甘み高いキスを私達の眼の前でした。

テッドは日本語はあまり上手でなく、英語で話しかけたがれん子は例の知ったか振りで「オウ、イニス」とか「ペリーサイス」とか分つたような振りで受け応えて居た。

私はほんの気紛れ心でれん子に「今晚つき合わないか」

と小当りに當つて見た。すると簡単に「OK!」と来て、其の晩に代々木のホテルで私はれん子の肉体を知つた。

ホテルへ着いてから、寝る前に金をくれと言うので私はガツカリした。パン／＼と何等異なる所のない下等な女なのだ。

ベッドブレイもさして上手と言う訳でもなく、始めて行つた客にあまりにも呆気なく許すパン／＼じみた所と、その簡単に目的を達したことに、私はむしろ幻滅を感じて、その頃はまだれん子に夢中になる程好きではなかつた。

何しろそれから一月位も「アマゾン」の扉をおさなかつたのだから……。

「アマゾン」は大きなバーではなかつたが、女の子は粒が揃つて居たから、れん子はナンバーワンと言うのではなかつたが、それで居

て妙に人気のある女だつた。

私が二度目にアマゾンに行つたのは、正月の松もとれた頃だつた。

寒い日だつたがバーの中は、ガスストーブをジャン／＼焚いて汗の出る程の暖かさだつた。女達は皆胸や肩の露わに出たドレスを着て居た。

れん子は奥の方で客の相手をして居たが、私を見ると、ウイシクしてニッと笑つた。

私が煙草に火をつけて居ると、れん子がやつて来てテーブルに腰かけて私を見下した。

「寒いわね」

れん子は両手で私の頬をさわつて見て、

「まあ！冷たい。暖ためてあげましょうか」

れん子は靴を脱ぐと、肉色のガラスの靴下に包まれた格好のいい脚を私の腰の脇の脇において、スカートを捲ると、私の後頭部へ手をかけて、私の顔を太股の間へはさんだ。

「斯うすると暖かいでしょ。」

靴下が股の中途迄で、そこに真紅のガーダーが豊かな太股に喰い込んで居た。

れん子は私の睡えて居た燈草をとつて自分の唇に移すと、私の顔を靴下のない部分で両頬をギュッととはさんだ。

純白のパンティが眼の前に迫つて、惱まし

い体臭が、顔全体に掩いかぶさつて来た。私はふと母の乳房の間に顔を埋めて乳を飲んだ幼ない頃を思い出した。

「今晚どう？」

私は脚の間かられん子を見上げて誘つた。

「ダメよ。今日はダメなの」

「どうして？ あれ？」

「ウ、ン先約があるのよ。フ、フ、フ。」

れん子は脚をひらいて私の膝に腰をおろし頻擦りしながら

「またこの次ね……」

と軽いキスをしてつと立つて行つてしまつた。

かわりに綾子と言う女が傍に坐つた。

「あのひと、亭主持ちかい？」

「御冗談でしょ。一人よ。」

「パトロンのあるんだろ」

「パトロンのなんてないわ、でもあのひとのお客さん全部が、パトロンだとも言えるわね。

ホ、ホ、ホ、」

私は綾子かられん子のひととなりや、周囲の男達の様子を聞いて見た。

「別に恋人つて言う程の人はないようよ。でもあの人一人で家へ帰るなんてこと滅多にないわよ、あの方も好きだし、お金も好き

「だから。大部貯め込んでるつて話よ。」
私は急にれん子が慇懃しくなった。だがその晩はどうすることも出来ずに引き下るより他に手がなかった。

れん子位の美しさの女は、どこにでも転がって居るし、私の好みに合う型の女と言つても、そんなに難かしい注文はないのだから、他のバーに行つても、容易に似た女を見つけられる筈だった。早い話が只肉体だけを求めるためなら、「鳩の街」へ行つても居るだろう。そう思つて居ながら、私は段々れん子の妖しい魅力に惹きつけられて行つた。

それから二度ばかり行つたが、二度ともれん子を誘い出すことが出来なかった。

容易に得られると思つたれん子の肉体が、何か非常に尊いもののように感じられて来た。それに三度目に行つた時、れん子がふと洩らした一言

「あんたのフレンドのテツドつてひと素晴らしいわね。」

「え？ テツドが一人で此処へ来たのかい。」
「ええ、あれからチョイ／＼くるわよ。二度ばかり遊んでやつたわよ。」
私を焦らすつもりか、れん子はそう言つて



（テツドもテツドだ。私にコッソリかくれて抜けがけをやつて居る）
と、自分の恋人を奪られたような嫉妬の炎が燃えたつた。

私の顔色を見ながら笑つた。

（この淫売奴ッ！）

れん子の下劣な根性に軽蔑を感じたが、それで居て反面に益々れん子が慇懃くなるのだつた。

それからの私はムキになつて「マゾン」へ通つた。

自分で熱くなつて居るのが分つて居るのだが、それで居て抑えることが出来なかった。

やつとれん子を連れ出すことが出来た時は、天にも上る気持だった。最初にれん子を誘つた時とは全然別の女性の感じだった。

れん子は最初から愚に齎されたような態度だった。

「ケーさんも行こうと言うし、どつちにしようかなあ」

と向うのテーブルの男の方を見て首をかしげたりした。然しその男も申込んで居ることは事実らしく、れん子はその男の傍へ行つて断つて来た。

「暖かいホテルでなくちやイヤよ。」妾の知つて居る所へ行きましょう。」

と先に立つて遊谷の大きなホテルへ私を案内した。

「いつもの部屋ある？」

女中はれん子と心易いと思えてその「いつもの部屋」へ案内された。二間続きで、ガスストーブがついた豪華な部屋だった。ベッドのスプリングも非常にやわらかだったし、寝具もピンと糊が利いて居た。

「バスへ入らない？」

れん子は私に背を向けてオーバーを脱がせながら言った。

「二人一緒に入れるの。」

「構わないのよ。入れるわよ。」

女中を呼んでバスの用意を頼むと、ストープの栓を捻った。

「断つとくけど、今夜は妾が女王様で、あんたは奴隷よ。妾の言うこと何でもきくのよ。よくつて？」

れん子の眼はあやしく光つて、私を睨めた。「いゝよ。無理して来てくれたんだからね、ハ、ハ、ハ」

その時は軽い気持で返事した。

バスの用意ができたことを女中が電話で知らせて来た。

私は宿で出したタオル地のパジャマに着替

えた。れん子も、店に出る時のイザニングをスリツに着替えて来たが、それを私の眼の前で脱ぎ、シユミーズからパンタイまで脱つてパジャマを裸体の上にひっかけると、直ぐ隣室にあるバスルームへ先に立つた。

「先へ入つていゝわよ。」

バスには今満したばかりのお湯が波打つて居た。恰度いゝ湯加減だった。

首迄浸ると寒さが頭のでつべんから抜けて快い氣持だった。そこへ全裸になつたれん子が、タオルを片手に入つて来た。

肥つては居ないが均勢のとれたいゝ肉体だった。秘密の個所を隠しもしせず、堂々と私の眼の前にひけらかすようにして近づくと、サツと脚をあげて、私の上からバスの中に入つて来た。

「妾バスが大好きなのよ。日本の風呂は汚ないから嫌い。れん子と私と向い合つて、私の足の前にお尻をのせて前の方へ足を投げ出した。彼女の体重がまるで少女のように軽く、フツワリと軟かい尻に集められて、私の足の上でフワ／＼して居る。上から見ると白砂の海底に海草のように漂う一点が見える。私は片足を抜いて、その海草を足指で突つついて見た。

「何すんのさア、足なんかで。あんた奴隷じゃないの。そんな滑稽な真似は許さないわよ。」

彼女の両脚が湯から浮き上つて私の肩へのかつて来た。

「フ、ハ、フ、ハ、」

と笑いながら綺麗な顔を見せて、彼女の足の指が私の頬を突ついた。

パチャリと湯をはねかしてバスから上つたれん子は

「サ、妾の身体を洗いなさい。」

と石鹸を突き出した。バスのふちに頭をのせて、長々と身体をのばした。私はタオルに石鹸を塗つて、れん子の弾力のある腕や、胸から腹、太股から足の先まで洗つてやつた。

私は谷崎潤一郎の「痴人の愛」の譲治とナオミの風呂場のシーンを想い出した。手数をやかせる女の可愛いさと言うものが分るような氣がした。

背中を洗って、三助のやるように肩をトン／＼と叩いて湯をかけてやると、れん子は氣持よさそうにノビをしてバスに浸つた。それから私は自分の身体をザツと洗つた。

「顔を洗つてあげようか」

浴槽の中かられん子と言つた。私が肯くと

「女王様が奴隷の顔を洗つてやるんだからね。そのようにして洗つてやるわ。」

れん子はスツクと立つて湯槽を跨ぎながら「仰向けに寝てごらん。」

私は言われた通りにした。れん子はいきなり私の胸の上に跨がつて来た。

「あんたマゾの気があるんでしょ。」

「ウン……」

私はれん子を見上げて言いた。

私には確かにマゾヒズムな素質があつたに違いない。マゾツホの「毛皮のザキナス」とか潤一郎の作品などを読むと普通のY本を読む時よりも昂奮した。だが、それはいつも私と言う人間が第三者の立場に置かれた時ばかりで、まだ私自身がマゾの当事者として直面したことはなかつた。又その当事者になつて見たいとも思つたことはなかつた。

然し私はれん子にこの前顔を暖めてやろうと言つて太股の間にはさまれた時、亡き母の乳房を想い出し、又それとは別の意味の快感と昂奮を覚えた。考えて見ればこのれん子という女のどこに魅力を感じて来たか？ 最初は何れもものを得ようと言う気持からだと思つて居たが、今斯うしてれん子に重い尻を胸の上にのせられて、私の性向の正体を聞かれ

た時、始めて私の体内に眠つて居たマゾに胸酔する快さが眼を覚まされたのだつた。

「じゃ、そのようにして扱つてやるわよ。」

れん子はニツと白い歯を見せて笑うと、私の眼の前で、海草に石鹼を塗り始めた。

私はこのような洗顔の方法は始めて受けた。

息も出来ぬ圧迫感、ザラ／＼した触感や、ヌメ／＼とした肌ざわり！、それはブラシとスポンジと菰藁（とがら）とを一緒にして、顔中を擦り廻されて居るようだつた。

チャブ／＼と顔へお湯を打つかけられて、タオルで顔を拭かれる迄、私は生れて始めての異様な昂奮を味はつた。

「フ、一緒に洗えちやつた。さつきあんたの洗わなかつた処までね。」

そう言つてれん子は心地快さそうに笑つた。

「どう？ 素晴らしいやつたでしょ。」

「そうでもなかつた」

「嘘おつしやい。妻のうしろで証拠を見せてるじやないの。」

れん子が立上つたので私は、始めて自分の肉体の一部の異状を知り、顔から火の出るような羞恥を感じた。

れん子はバスから上るとタオルのバジャマを羽織つた。

私がバジャマを着ようとする、

「あんたはそのまゝ——」

と裸のままて部屋へ返つた。スチームがムン／＼する程熱くなつて居たし、湯上りだから寒くはなかつた。

「あんた縛られるの好き？」

「ウン」

私は未だ女に縛られた経験はなかつた。が一度知つたマゾの魅力に惹かれて私はうなづいてしまつた。れん子は私のタオルで後手に縛りあげると、今度は私のバンドをスポンから引き抜いて

「これどう？ 好き？」

「嫌だ！」と思つた。が私には鞭の痛さと言うものがどの程度のもか知らなかつた、一寸怖しい気持もした。

「サア、分らない。」

「フ、あんた始めてなのね。じゃ妻が馴らしてあげるわ。」

れん子は右手の鞭を高く振りかぶつて私の剃き盡しの背中に一撃をくれた。

ビシッ！

と氣持のいゝ音が響いて、突き刺さるような痛みが背筋を這つた。

「どう？ 痛い？ それとも氣持がいゝ？」

私の返事のないうちに、

ビシッ！ ビシッ！ ビシッ！

と鞭は繞けざまに振りおろされた。最初の

一撃程は痛くなかつたが、息が詰り、胸の方に

迄痛みが響いて来て、背中が熱鐵をあてられたように熱くなつた。

「ウーム」

と私は思わず唸つた。

「ハ、ハ、まだ初心ねえ、この位のことではたばつちやだめよ。もつと修業しなぐちや。」

続いて鞭の連打は息つく暇もなく打下され

齒を喰ひしばつて堪えるうちに、頭に血が上

つて、意識を失つてしまつた。



.....

ヒヤリと全身に寒さを覚えると同時に、頬を小突かれて居るのに氣がついた。

「意氣地なし！、この位のことでは参つちやうなんてダメねえ妾の情人にはなれないよ。」

れん子はベッドに腰かけ、はだかつた前から太い腿のつけ根迄覗かせて私の頬を足の先で突つついて居た。

「自分の背中見たいだろ。見せてやるわ」

れん子は鏡台の鏡を下向けにして、私の方へ向けた。

背中がビリ／＼とやけどしたように痛む、私はうつ伏せの儘首を捻く向けて鏡を見た。

そこには背中の上の方一帯が薄桃色に染まり、下部の方に向つて、うつすらと幾筋かの痕が見えた。斯うして見ると、思つたより見た眼はひどいものではなかつた。

よく外國映画などで鞭打たれると、血が滲んで、ウネウネと打たれた痕が膨れ上つて居るのを見るが、あんなのと比較すれば、大したことはないと思つた。

「ネ、思つた程じゃないだろ。それだのに大ゲサに氣絶するなんて、だらしないよお前は！」

れん子は私の顔を覗つた。

「寒い！」

私の全身は汗でビッシヨリ濡れて居た。

「拭いてやろうか。又音をあげるんじやないよ。」

れん子はタオルで私の背中を拭いた。タオルが触つた途端に飛上る程痛かつたが我慢した。れん子は手加減もせずに私の身体をゴシ／＼と拭いた。私は又身体がポツ／＼とあつくなつて来た。

「顔を鏡で見て御覽。」

と言われて、私は鏡の中の自分の顔を見た。何ともない。乱れた頭髮が額迄たれ下つて、みじめではあつたが別にどうもなつてないし痛くもなかつた。

「鏡の傍へ行つてよく見て御覽。」

私は痛む身体をやつと起して鏡台に顔を近づけて見た。

別に何ともない。只顔だけはまだれん子が拭いてくれなかつたので、汗でべと／＼に濡れて居た。

よく外國映画などで鞭打たれると、血が滲んで、ウネウネと打たれた痕が膨れ上つて居るのを見るが、あんなのと比較すれば、大したことはないと思つた。

まだ非常に痛い。

私は疲れて居た。非常に疲れて居た。これ以上の肉体労働は、出来得ない状態にあつた。私のこころは燃えて居るのだが、肉体はそれに応じてくれなかつた、僅かに子供のいたづらのような真似ごとをして眠つてしまつた。

朝六時に眼を覺ました。これは私の習慣だつた。勤め先の朝霞逆行くのには六時半に家を出なければならぬからだ。

れん子はよく眠つて居た。その寝顔にはあどけない童心さえ浮んで居て、これが昨夜、夜叉のように荒れ狂つた女とは見えなかつた。

起上ろうとするとまだ背中が痛んだ、れん子が眼を開いた。

「居るの？」

「ウム、朝早いんだよ。僕は」

「昨夜は御免なさいね。まだ痛むでしょ」

「ウン……」

「お薬塗つたげるわ」

れん子とはとび起きて、ハンドバックの中からメンソレを出して来て、私の背中に塗つてくれた。

「もう寝りた？」

「イヤ、また此処へ来てくれるかい」

「いゝわよ。お氣に召したのね。」

私は何枚かの札をテーブルの花瓶の下へはさもうとした。

「いゝのよ。昨夜はお客じやないもの。」

「お客でなけりや何なんだい。」

「アミ。ひも。……スレイプ……ウフ、ハ。」

「まあ取つとけよ。」

私は顔だけ洗つてホテルを出た。

朝の寒さが終身に沁みこんだ。背中が水をかけられたようにスースーする。然しそれは私にとつて苦しいものではなかつた。霜のおりた砂利道をザク／＼と歩きながら、私は悔恨と自嘲に責められた。

もうあんな女と遊ぶまい。あんな下劣な女の玩具になぞなつてどこがいゝんだ、——再び「アマゾン」の扉は開くまいと決心した。

だがその日一日中、背中が痛むとれん子の白い裸身が浮び上つて来た。

讀取をして居ても、難かしい単語に打つかつて、どう訳したらよからうかと考えて居るうちにいつしかれん子の事を考えて居た、テツドのあかい顔も脳裡で囁つて居る。

仕事がかさつぱり捗らぬまゝに一日を過して書類を机の中へしまいかけて居る時、妙子から電話が掛つて来た。妙子は前に私が勤めて居た学校の同じ教員だつた。

今夜会つてくれと言う電話だつたが、私は断つてしまつた。電話をきつてから妙子に済まないと思つたが、もう遅かつた。

そこへテツドがやつて来た。ニヤ／＼笑ながら片眼をつぶつた。

私はテツドと二人で今夜も「アマゾン」へ行かねばならなくなつた。(次号完結)

愛 読 者 通 信

横浜のHN氏に告ぐ私は三十八歳のマゾで、戦後一度も体験しないが軍隊で受けた責めは今だに忘れられず赤痺一つの私を責めてくれる方は地域的に貴方に限るものと思う御文通を願いたい、尙私は年上の方でも好む者でやはり横浜が東京の方で四十歳位から五十歳位の地位のある方つまり重役級の方で十七八貫の男性に私の体を全部はおりに出して其の方々の自由気儘な責めになりたい以上のような方(特に秘密を守る方)御文通下さい。私の住所は読者交歓室へ問合せて下さい。TN生

晴雨秘稿

吊り責めさまざま

その後で吊された女は身體の重量と苦痛のため縛られたまま死んでしまった。死體は腐つて髪の毛丈が梁に残り、肉が剥れて下に落ち、それから蛆が這い出したのを……

(繪と文)

伊藤晴雨

靜かに眼を溟つて、「女が後手に縛られて木の上か梁に吊された」と言う事を思う丈で凄惨な光景が浮んで来るのが、普通神經の所有者であるべき筈だ。

戦後、雨後の筈の様に濫作された、カストリ雑誌の責め場は、外に手が無いものと見えて責め場と言へば縛つて吊すのが十八番の様になつて居る。女の責め場のコレクションをやつて居る私の友人のストラップ・ブックを見ると、吳越同舟、似たりよつたりの吊し責め、

有名、無名の大家、小家の作品が奇羅星の如く糸瓜ぶらり、瓢箪ぶらりとぶら下つて居る有様は、偉觀と云はんか壯觀と申さんか、繪や小説なればこそ斯くも似たり寄つたりの御趣向、十種春の八重垣姫の宙吊りよろしくその美しくしさは、全く汗牛棟束の感があつた。被縛藝術とでも云うのか、専門雑誌が出来て、責の研究が進んで来ると、矢鱈に梁に吊し上げて何日もそのまゝにしておいたと云う様な、架空小説のおこは許されなくなつて来

るであらうと私は考へさせられるのである。私は決して責めを専門した、古老であるなぞという潜越な考へは毛頭持つて居ない。けれども「責の研究」という題目の下に自己の体験と称して、妻を縛つて七日間も天井から吊じて楽しんだ、と云う様な眞実を装つた架空の体験記を讀むと「馬鹿を云ひなさんな」と云つてやりたくなつて来る。

貴しい私の体験を以て、広大な天下の責めの同志の方には嗚呼がましく聞こえるかも知

れないが、特別な方法を以つて吊さない限り、吊り責めは、それが女性である限り十五分位がせきの山では無からうか。
私が昔、理解のあつた妻を吊して試みたの

吊り責めとまごま

は、大正九年の秋と覚えてゐるが、此の時妻は健康であり、気候は秋の央で暖かな日であつた。人体には格別の事はない、平穏な日であつた。



吊り責めの寫眞を撮影する爲に寫眞師を呼んで、適當な位置にカメラを据へ、妻女の胸部へ細引を二重に掛け、繩の餘りを以つて後手に縛り、別な細引をもつて両手首を嚴重に縛り踏合を持つて來て、妻女を其の上に立たせ、自分は別な台を据へて、細引の一端を長廊下の垂木に引つ掛けて通し、繩の一端を廊下の中央の柱に縛つて掛懸と共に女の乗つて居る踏合を取り除いた。

カメラのシャッターを切つたと思つたトタン、縛つた繩はギューと音を立てゝ延び、女の足は豫定したレンズの位置より外に下つて仕つたのである。

これでは肝心の吊しの形をなさないので、今度は繩の延びた長さ丈を測つて、更に繩を縮めて縛り直した。此の経験に依つて、爾後吊り責めを撮影する場合には、必ずモデルの体重より来る繩の延長を考慮に入れる事を考へるのである。

その次にはモデルの吊された姿

勢が、如何にもブツキラ坊である事だった。

これは両手を固く縛られて、二の腕に喰込む縄の痛みが、女の顔を刺激して乳の上に固くかけた縄の爲めに、胸部にも痛みを覚へ幻覺状態となつた事が原因だと思われました。

これに經驗を得て再び、胸部の縄を普通にして居ても痛みを感じる程度に、堅く縛り、苦痛を訴へるのもかまわず、其儘で再び踏台の上に立たせ、前記の如き方法を繰り返して見た。

三分から五分にかゝる頃には、女の唇は紫色を帯びて来て、口許には軽いケイレンが起り、六分以上経過した時、女は足を夢中に前後左右に働かせ、傍に取り除けた踏台を探して居る。夢中に足を働かせて居るのは、我慢をして居乍ら、苦痛の絶頂と思われるので、手早くシャッターを切つて一枚を撮り取り、踏台を女の足許へ持つて行つて立たせ、垂木に掛けた縄を引いて女を下に下ろした。

その時女は半ば失神状態になつて居たのである。もう少し吊されて居たり、氣絶する所だった。「何しろ胸を縄で圧迫されて居る上乳の上を強く押されて居るので、目の前が暗くなつて來た。夢中で踏台へ足をかけ様とした」と云うのであつた。

その寫眞は、全くものにならない程マズイ型で、誰かが描くさしえの様に片足を上げ、片足を下して腰巻をひらくさせ、枝もたわゝに風に揉まれる風情などどこにもなく、至極平凡な棒立ちになつてゐる、馬鹿馬鹿しい様な不器用な形である。

こんな詰らぬ寫眞に骨を折つたのが腹立たしくなつて來た。しかし絶息の一步手前まで行つた事実は事実疑ひの餘地は無い。眞剣な気持ちで吊し責めの寫眞を撮影しようとした事は確実で、これで吊し責めの際女の「胸部に縄をかければ、約十分以内に完全に絶息する」という事だけは判つた。

次には妻の妹を画室の梁に吊るして試みた。この方はトリックを用ひたので撮影の上では、成功したのであつた。

當時妻の妹は、東京美術学校へ通つて着衣のモデルをして居た。少々本人には氣の毒であるが、事実を其儘率直に記す事にすれば、現在NHKに清元でよく出演する、清元櫻比呂はその女で、私の義妹に當るのである。

その頃彼女は十七歳の色白な美しい女であつた。結綿に髪を結はせたのを散し髪にして、折柄のことで新調のスキヤの単衣の上か

ら荒縄で十重二十重に縛り上げ、建築用の鎖を画室の梁から下げて、女の帯の上を細引で縛り、この細引へ鎖の鉤を引つけて引き上げて吊し、これを撮影したが、これは胸を圧迫しなかつたので、約十二分餘も吊すことが出来た。勿論、その間には時々脚立の上へ足を立たせて小休みをさせたりしたが、吊しはなしにしたのは五分くらいに過ぎなかつた。

だが、吊してぐる／＼女体を独樂のように廻して、足をばたばたさせて、これを瞬間に撮したので、こつちは私の妻の形よりやゝ効果的であつた（この写真には広く発表したのでこれをそのまゝ挿絵にしたのが屢々見受けられる。井川洗屋氏の面にある吊し責は、この写真の模写かと思はれるところがある）これは形の上では成功したが実験としては、単なる形骸に過ぎなかつた。

以上の実験によつて、単なる吊し責と雖も婦人の胸部には縄を掛けてはならぬことを知つた。さればこそ、維新前の捕縄の掛け方伝書のなかに、女の乳は避けて、縄を掛けてないのは成程もつともな事と感ぜられた。

一回や二回の実験を以てして、吊し責め全体の体験とは云へないかも知れぬ。併し女を

一晚中業に吊して、翌朝になつて介抱したとか、新婚の妻を毎晩吊し責めにして楽しんだという如きは、架空の体験談として私には信じられない。読んでは面白いかも知れないが實際問題として如何かと思はれる。

次は妊婦の吊し責の体験を語らうと思う。

この妊婦の吊し責めの写真、大正十二年九月一日の大震災の際、友人富嶽謙蔵氏に誤つて一枚貸したものが、当時「文芸市場」の姿態史料に梅原北明に依つて掲載せられ「この写真を見たら伊藤君が驚くだろう」とその写真の傍に、御丁寧にも、こんな断り書きまで書き添えてあつた。この写真が再転写も三転写もされて、あらゆる賣場の雑誌や、当時流行語となつた変態性慾の書物に掲載され、その多くは私に無断で珍品扱いにされ、知人舟藤某の如きは「晴雨は落魄して、帽子も冠らず漂泊し」といった様なことを、その著「蒐集癖」(?)の中に故意に書いてある。

ところが、私は勝負事と帽子は生得以來大嫌いなのだから、帽子を冠らないから御落落と極めてかゝる舟藤某は、私の責めの写真が無断で、その著書の口絵に掲載しながら、私の悪口を書くとは怪しからぬ男で、書物の虫とも云うべき人物としては風上にも置けな

い男であると思つてゐる。

こうしたことに依つて、私が当局から圧迫を受け、変人崎人扱いにされたことは構はぬとして、当時私は画室を新築中でもあつたので、大工の使用する建築用の鎖を臨月の妻(もう二三日で生れ相になつてゐた)を腰巻一つの裸体にして、これの逆吊りの写真(上記のもの)を撮影した。この時、最初第一回は足場を掛けて至極大掛りな撮影を試みたが写真の乾版のマーキを誤つて傷けたので、第二回目は失敗に終つた。

二回目に試みたのが今世上に流布してゐる逆吊り写真である。これは私の責の研究中で一番危険な仕事で思い出しても肌粟の生ずるほど危い藝であつた。この頃のように、繰出す責の研究を看板にしたり、女の責を遊戯にして楽しんでゐる人々とは甚だ失礼ながら気持の上に於ても、相違があるつもりである。以下は、その吊り責の方法と、その体験を語ることにするが、筆者は總てに於て、赤裸々に發表するので何等の誇張も形容詞も用いないつもりだ。

当時私の妻にした女は日雇のモデルであつた。谷中の宮崎幾之助の紹介で、一日八十銭の日給で通つてゐた。姓名は佐原キセ、年は

廿六歳。背の高い、色の黒い女で、顔の輪廓は割合に整つてゐた。故人六代目菊五郎が、この女のお裸体の雪責の写真を見て「いい女だねえ」と言つたことがあつたから、まづい顔ではなかつたらう。

十年間同棲した女房を離縁した直後、若気の淋しさから一寸したことで妻と呼ぶ様になつたこの女が、私の生涯では一番研究の土台となつてくれた。

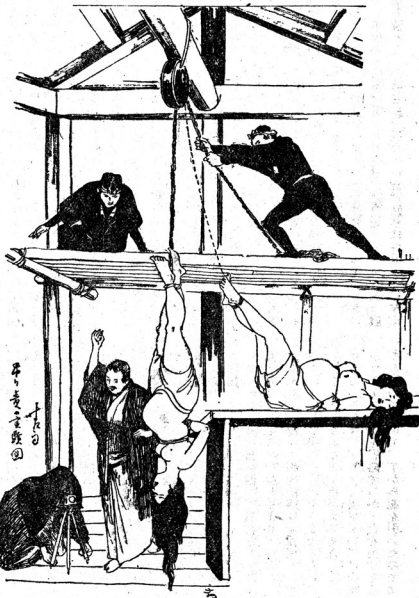
さて、当時孕みの逆吊しをやつて、芳年の一つ家をそのまゝ撮影したいと思いつき、妻に話を持ちかけたが、案ずるより生むが易し(否、生れては実も盡もなくなるが)承知してくれたので、画室を建築中の大工に相談して手伝つて貰うことにし、カメラを据えて撮影に取掛つたのは大正十年六月某日であつたと記憶する。

先づ女の健康状態を調べて異常なしと決めて、次は人夫を三人、酒を吞ませてから責の写真を見せ、淳々と研究の態度を説明して納得をいかせるまでのことは言うまでもない。一切を口外しないこと、近所に見えないようにすること等々、だら／＼書いてゐる際限がないから一切を省略するが、女を吊すとしても縛つて置いて、下から繩を引いたのでは

妊婦が苦痛に堪えないことを慮り、画室の壁面の中段、まだ荒壁である建築中の壁を背景にして、女の身体を寝かす程度の幅員を有する板を並べた足場を作り、中段に人体を横にする段を設けて、これに後ろ手に縛った女を横たえ、女の足を縛って天井から太い麻縄を以てブラ下げた。

カメラの距離から測定して、丁度と思はれる高さを豫定して乾版を入れ（フィルムを用いず、直ちにキヤビネットの原板を用いる事にした）た写真機を置いて、一、二、三の號令（？）で靜かに女の体を吊り下した。女は長い髪を振り乱してブラリと逆に下つた。「ハイッ」という掛声と共に撮影は終つて、その場で現像してみると大失敗も大失敗。前にも一度やり損つたことのある通り、女の体重のため細引は凡そ豫定よりも二尺以上も延び切つて女の乱髪の尖端は乾版の枠の外に飛び出してしまつてゐるのだ。

私は女の責場では、女の髪を一番標準にし



てゐるのは、当時はまだ現代の様に断髪流行でなかつた頃であり、又責の過程として表現し得るものは、女の髪の乱れ工合に在るので、女の頭部が豫定の位置より遙かに下にな

つて、乾版に撮つた女の身体は、大掛りな苦心と努力をフイにして全く上から吊したとは見えぬものになつてゐた。これが第一回目の失敗である。

人体の重量が、二尺以上の垂下を餘儀なくされることを知つたので、二回目は鉄の鎖を用いることにした。滑車の一端を天井の梁に結びつけ、滑車の歯車を手換る鎖を手早くして女の身体を段々に引き上げ、最後に女の体をブラ下げる方法をとつてみた。これは成功して寸分の狂いもなく、豫定の位置にブラ下り、髪を乱して、苦痛を堪えている顔がハッキリと表現された。

一枚二枚と原板をさし換えて、四五枚撮影するうちに、これ以上は堪えられないというキリ／＼一杯のところまで撮影中止。直ちに産婆を呼んで身体検査をしたが、異常なしと言はれて蘇生の思いがし、ガツカリした。と、こう書いてしまえばなんのことはないが、當時その撮影中の心配は全く筆にも、言葉にも話しにも出来ないスリルを味わつた。これから思えばモデルを雇つて、相互理解の下に吊し、實の写真を撮影している現在の人々は全く幸福であり、安易であるといえる。

女の吊り責を試みる人々のために私の貧しい体験談で豫定の行数も盡きんとしてから、吊り責のさまざまに就て記すことにする。

曲亭馬琴作「月水奇談」は中国の譚案であ

るらしく、近江国の倭文という名の殿様が、珍鳥の卵を手に入れて秘蔵していると、これを鼠に引かれてしまつた。それが珍鳥の卵であることを知つてゐるのは、召使いの腰元澁である。鼠に引かれたとは思はず、澁が盗んだと思つた殿様は、澁を櫻の木に吊して、下郎に責めさせる。

澁は責め殺されて幽霊になつて賊を手引して、殿様を殺させる。というテーマは古今著聞集にも出てくる。ある富豪の妾の首を、女房の幽霊が旅の武士に背負して、川を渡つて家へ入つたという話と、同巧異曲であるが、この美女の責場の挿絵は、乱髪が蛇の様に散つて、櫻の梢に吊し責にされた女の肉股を出して吊られている。下で奴妾の下郎が割竹で女を叩いているが、その人物の言葉（草双紙には所々に「をして一寸した人物の言葉」を記して本文の補足にした処が随所にある）書きが頗る振つて催情的である。曰ク「上から見る方はいゝが、下から見るのはたまらぬ、たまらぬ」これでは何のことはない、春情挑発的である。

女子供の教育的なあの謹厳な含蓄な、六ツケ数屋の、忠君愛国の千物の様な馬琴にも、一面こうした洒落ツ気があるのは面白い。女

を吊した樓上から、女の苦しむのを見物する殿様はいゝが、女の股倉を下から見上げて、赤い腰巻と、白い股倉から黒い物を見せられる強身者の仲間には堪らないに違いない。

女の責場はヌードでもいいゝが、コスチュームも亦餘韻があつていゝものではあるまいか。講談の方になると、泰々齊桃葉の「夏柳夜半伏魔」（なつやなぎよわのふせやな、お岩稻荷の実説で、民谷伊右衛門の女房お岩が、伊右衛門の奸計に陥つて、本所吉田町の夜魔宿に売られて、夜魔に出ないと藝中素つ裸にされて、天井の梁に吊されて責められる件がある。速記本の挿絵は水野年方の青年時代で、お岩が醜態であるところから、顔を見せない様に背面から書いて、夜魔宿の女房を美しく描き、責めている男を前方に大きく描いてあると、これは、巧みな構図である。

「お岩を裸にして、天井の梁からブラ下げて親指だけ一寸ばかり板の間に付いて居ります。身体をグル／＼と廻しますと、天井から下つた繩がよれて縮みますので、お岩様の身体は一尺ばかり宙に浮きます。棒をもつてきて叩いて、サア夜魔に出ろ。出られませんが、私は夫のある身で御座居ますから。というので責めあぐんでいる。気絶をしたお岩様に塩

水を脚ませて、呼吸を吹き返えさせ、殺しては濟みませんからその晩はそのまゝにし、翌日又これを吊し責めにする」(略)

こんな文体の速記であつたと記憶してゐる。速記者は酒井昇造である。これを芝居としたのは、本郷座の前身である泰木座で、お岩様に扮したのは明治末期の中村芝鶴で、その他に二三小劇場でやつてゐる。その他の吊し責の芝居として奇抜なのは、この頃でも時々行うことのある俗にいう「天人香」「吉様参る由縁の音づれ」の二場目、小堀邸奥座敷詮議の場で、腰元お杉の逆さ吊しの場。

筋の大略は、旗本小堀佐平治は妾のおみつと共謀して、小堀家の嫡男左門を座敷牢へ押し込めたが、左門に同情した腰元のお杉は、左門を座敷牢から脱けさせる際、平打ちの簀を落したのを知らずにいた。おみつの弟で、ならず者の辨秀は、今日もおみつに金を借りに來合せたので、おみつはこれを幸いと辨秀に責めさせる。腰元お杉は、佐平治の來來の龍左衛門のために松の木に逆吊りにされて、左門の逃げた先を白状しろと責められる。だが口を結んで殺されてしまうが、その逆吊りから引下されて、又散々に打ち叩かれ、自分で庭の石燈籠に頭を打ちつけても死に切れ

ず、辨秀に咽喉を挟られて殺されるまで、長時間逆吊りにされているのは、芝居の舞台でも相当苦しいに相違ない。

初演の際のお杉は五代目菊五郎で「お杉好みのこしらへ」にてと默阿彌の脚本にあつて扮装の指定がないので、よく分らないが当時のことであれば、恐らく鏡山のお初のようなこしらえだろうと思う。この台本の時間を推定すると、お杉が逆さに吊されている時間は、凡そ十分以上も掛ると思はれるが、こんな長時間逆吊しにされている役者があつたらうかと私は來合せた市川荒次郎君に聞いてみたら、今の役者は身体を大切にしているが、昔の役者は芝居を大切にした。そのくらいの事はやりましたよ。との答であつた。

血屋敷のお菊にしても、昔は皆逆吊りで、井戸へ切り落される時は大道具の方でいう滑り込みという装置をして、逆に切り落されるのだそうで、女の逆吊しで見物の度膽を抜いたなどは面白い事ではあるが、敷島物語にしても缺皿にしても責められる女は大低吊し責にされない者は無かつた。そこで警視廳が八ヶ間敷なり、それからというものはお竹で申譯けに二ツ三ツ引つぱたくと、竹でんか心を起してウーンということになつてしまつた。

吾党にとつては至極物足らぬ心地がする。

芝居は別として実際に女を吊し責にして責殺した例は、明治の末期に埼玉縣浦和在の農家に起つた事件で、当時立会いの警部井上某の談によれば、女房の姦通を怒つた労働者が、その女房を縛つて女の髪の毛で天井の梁に吊して、自分は酒を呑みに行つてしまつた。その後で殺された女は、身体の重量と苦痛のため縛られたまゝ死んでしまつた。死体は腐つて髪の毛丈けが梁に残り、肉が剝れて下に落ちた女の死体から蛆が遣い出したのを近所の人が怪しみ、空家から女の死体を発見して大騒ぎになつた。

この様な聞くからに身の毛のよだつ様な凄惨な話を、不幸日時とその加被害者の姓名が判り兼ねるが、浦和地方裁の書類が残つていたら判然すると思はれる。井上警部は現在文京區千駄木林町九十番地に居る私の知人であるから、事実であると信じる。

猶、吊し責の種類に就ては、書くべきことが多いが、豫定の枚数に達したので之を他日に譲ることにした。

(昭和廿八年十一月十日稿)

x

x

x

玲子十二月

松

— 其の五 —



必死に何か云おうとする桃子の口に剛造は邪険に狼髯をかませてしまった。

山根組の若い奴等に、手取り足取り無理矢理に連れて来られた二人は、身動きも出来ぬ程グルグル巻に縛り上げられていたし桃子は此の寢空にシュミーズ一枚だった。

剛造は憎々し気に二人を見降しながら、さも小気味良さそうに笑うのだ。

「おい、二人ともよく聞いておけよ、山根剛造の顔に泥を塗った奴ア、ただじゃあおかねえンだ。俺の恩のかかった女に手を出した若僧も若僧だが、桃子もんでもねえ阿魔だ。一体あの美容院の店を買って貰ったのは、誰のお蔭だと思つてやるンだ、俺の妾になつて何の彼のと金を引きすり出し、隣じやあ、こんな生白い背二才と乳くりあつていやがつたンだな、ふふふッ。これから貴様ら二人の熱をさましてやらア、二人ならんで素つ裸で、仲良く松の木に吊り下げてやるぜ……」

可愛さ余つて憎さが百倍、剛造はめらめらと噴き上つて来る嫉妬の焰に脂切つた五体を焼いていた。頬に浮べる歪んだ笑いは薄気味の悪い復讐の笑いなのだ。

裏庭に連れ出されて、寄つてたかつて一
鉢まとなぬ素つ裸にむかれた二人は、松の
古木に吊り下げられてしまった。

寒風にさらされる肌は鳥膚立つて、キリ
キリと手足に喰ひ入る荒縄の痛みと共に、
それはたえられない責め苦なのだ。ゆらり
ゆらりとゆれながら桃子はもがいた、しか
しもがけばもがくほど手足も足首も千切れ
るように痛みが増すのである。まして、そ

んな羞しい姿を、座敷の縁から剛造や四五
人の若い奴等が好奇の眼でにやにや笑いな
がらながめているかと思うと、もう、めく
らめく思ひだつた。

中空に触れあふ二人の裸身は、寒気に冷
えてゆこうとする肉体の外面とは別に、触
れあう度に剛造たちには判らない激しい火
花を散らしていたかも知れない。

「……す、すみません……要二……さ、ん

あたしの……ために……」

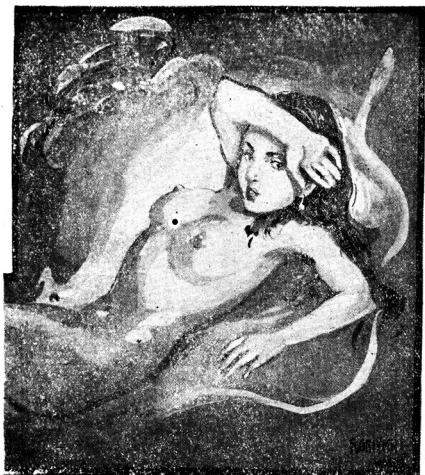
意識が消え去ろうとする灰色の視界の中
にいとしい人の顔をとらえて桃子は呻く様
につぶやいた。

「これが松にツルつてえ図だ。新年早々、
縁起直しにいいやあねえか」

どツと笑う剛造と男達の声を聞きながら
桃子と要二は意識を失いつつあつた。

(繪と文・喜多珍子)





不

具

の

妖

精

香山滋

秋吉 轡画

雨の中の女

「もう、いい加減に白状したらどうだい？ 未知^{みち}」
 「あたしの商売？」

「それもだが、とにかく君は、不思議な娘だ。自分で『できそこないの妖精』だなんて、とぼけどおしでさ。正体をはつきり言いたまえ」

「知りたくて？」

「知りたいとも！」

「言つたら、あんた、あたしのこと小説に書くでしょう？ 嫌やよ、そんなの」

「ぜつたい書かない、と約束しても？」

「駄目よ。あたしの舌は鉄だもの。しやべりたくたつて、舌のほうで動いてくれないの。うっふ」

未知子は、ハムみたいな桃色の舌をべろつと出して見せ、くりくりした眼で、高志の顔を正面からのぞきこんだ。

こうなつたら挺子でも動かない未知子であることを、高志は知り過ぎるほど知っていた。

「かんにんしてね、高志。ほんとうはあたし、あなたにだけは、何も彼もぶちまけてしまつて、衣袋をはがされたモデル人形みたいになりたいのよ。でも、そうしたら、あなたは二度と、あたしなんかに着つては呉なくなるもの」

必死の抵抗が、醜みたくない黒い眼いっばいにひろがりかかる。

「いいんだ、いいんだ」

高志は、あわてて手を振つてみせた。
「あんなに固く、君のことは聞かない、と約束しておきながら、また口に出すなんて、ぼくが悪かつたんだ。なんだ、妖精らしくもない、おこつたりなんかして」

「好きよ、あなたは大好きよ。こんなにも」

いきなり未知子は、高志の首に腕を巻くと、ぼつてりした歯のような唇を、高志の唇にねじりつけた。はじめて、未知子のほうから仕かけてきた接吻だった。



……かつと両膝のさしこむ窓際に、背中をこちら向きに、未知子は、しやがみこんでいた。「あらっ！」羞恥に蒼ざめた面をきつと向けかえ、未知子は、あわてて、露わな太股をスカートで覆いかくした。高志はおどろきかかつて、未知子の右手をつかみあげた。指がねつとりと濡れている……

そのまま押し倒して、ひとつになつてしまいたい男性のたけりを、高志は、身もだえながらこらえおせた。

もうふた月ほども前になるであろうか、或る雨のひどい夜、峯村高志は、浅草公園の裏路を繁華街に向かつて急いでいた。

まあから欲しいと思つて頼んでおいた文獻が手に入つたから、という通知を受けて、知合の医院に出掛けた帰りみちだつた。つい話が長くなつて、別れたのが十時ころ、もう十一時をまわつているにちがひなかつた。

吹きつける雨が袴にしみてひどく寒い。

「そうだ、御無沙汰ついでに行きつけの店へよつて、ヒレ酒でもひつかけてかえるか」

持ち重りのする革靴をかかえなおして、横道を出はづれた高志はおや？ つと眼をみはつて、雨の中に足をとどめた。

道路をへだてた、小じんまりした医院の前を、傘もささずに、行つたり来たりしている少女がある。

みすばらしい、色の褪せた紺オーバーの肩を寒そうにちぢめ、時折り医院の看板を見上げては、どうしようか、と、ためらつてゐる様子だつた。

もしその看板が、「産婦人科、外科」でなかつたら、高志の胸にそれほどの好奇心が湧かなかつたかも知れない。

「冷めたいでしょう？ はいりませんか」

歩み寄つて、高志は、うしろから少女に傘をさしかけてやつた。

「……………」

一瞬、ぎくりとなつた様子で、少女は振りかへつた。

十六、七というところであろうか、何か思いつめているらしい眼の光が、年齢よりもふけたものを感ぜさせたが、唇はまだあどけな

い。「この雨じや、お困りでしょう？ よかつたら入りませんか。近くなら送つてあげてもいいんですよ」

「ありがと」

少女は、案内素直に、高志に身を寄せてきた。

「救かるわ、おちさま」

まさか、医院が医院だから、そのことをあからさまに尋ねるわけにはいかなかつた。

なんということなしに、高志は少女と一つ傘で、ネオンの濡れてみえる方に足を運んだ。

「寒いね、おちさま」

少女は、濡れた髪を撫であげながら、眼の隅で、高志を観察しながら、ぶつんと呟いた。

「どう？ 一杯やろうか」

「ええ、おつきあいしてよ」

冗談のつもりで言つたのを、こうも真つ向から受止められては、いささかたじたじとならざるを得なかつた。

——なんだ、夜の女か——

いつたん、そう心につぶやいたが、それならそれで、いいという氣になれた。

可愛いい牝鹿

「お金持つてるのよ。今夜は、あたしが奢るわ」

どうしても、自分の知つた店でなければいやだ、と強情を張つて少女は、髻めにうす汚れた小屋へ、高志を連れこんだ。

三和士の腰かけの外に、二疊ほどの部屋があつた。

「未知子、おまえ、いいのか？」

何が、どう、いいのかわからないが、軍鶏みたいな鋭い顔の主人が、少女にその声をかけながら、ジロリと高志の顔を覗んだ。

「ふん、あたしのことは自分で責任持つから、余計なおせっかしいないですよ」

濡れたオーバーを脱ぎ捨てて、べたんと坐ると、未知子は、真つ白な花車な指をせわしくうごかして、いきなり上衣のボタンをはずし、心持ち反りかえらせた胸を、高志の眼の前に突き出した。

「こんなとこまで濡れちやつたわ。ふいて、おちさま」

下には何んにも着ていない。型のいい、しまつた乳房が、高志の情感を快くゆすぶつた。

高志がハンカチで拭いてやつたあと、未知子は、はだかつた胸を合わせもせず、コップで酒をぐいぐいやつた。

「いいの、心配しないで。でも、幻滅？ あたしつて、こういう女よ」さすがに、とろつとなつた瞳を据えて、未知子は酒滴に濡れた唇を、手の甲でらんぼうに拭つた。

「おちさまの御商売、何だか、当てて見ましようか？」

「面白い。一発で当つたら、今夜は、君のいうとおりにやつてやるぞ」高志もひどく酔ひが廻つていた。

「お医者さんね？」

「どうして、医者だと解る？」

「ふくらんだ革靴。それに、おちさまのからだ、石炭酸の匂いがす

るもの。傘に入れていただいたとき直ぐわかつたわ」

そういえば、友人の家を出るときに、石炭酸で手を洗つた匂いがまだ消えずに残っているのであらう。

——どうせお座興の会話だ——高志は、笑いながら、つい顔を見てしまつた。

「当つたね。あたしの勘もちよつとしたものだわ」

未知子は、可愛い鼻をくしゅんと鳴らした。

たまらなく可愛いかつた。ぐいつと引寄せて、高志は、未知子の唇におおいかぶさつた。しつかり眼を見開いたまま、未知子は、貝のような舌を吸わせた。

「さあ、切りあげよう。むろん、いいんだらうね？」

「ああ、おちさま！」

一時に酔いがさめ果てたものか、未知子の唇から、さつと血の気がひき、額にこまかな汗の粒がわきあがつた。

「それだけは誤解しないで。あ、あたしは、そ、そんな女じゃないつ」

「いまさそんな逃げをうつなんて、そんな術はないぞ、未知子、未知！」

少女もおもえない力で、高志の腕を振りもぎると、未知子はオーバーをつかみとるや、牝鹿のように雨の中へ飛び出した。

高志はその夜、近くの青緑区域を野良犬みたいにはつつきあるきやつと、未知子にやや似た女を見付けて抱いた。悲しい自慰に過ぎないと、自分で心に嘲けりながら。

忘れるともなく、高志の頭から、未知子の印象が薄れかけてきた七日後の或る朝だった。

「お客さまですよ、先生。御婦人の」

「女の？　どんなひと？」

「可愛らしい娘さん。先生のファンの方かも知れませんか」

「取次の婆や引っこませて、高志は自分で玄関へ出てみた。

「あつ、君か！」

色の褪せた紺オーバーを、寒そうに着た未知子だった。

「まあ、あがらないさい」

「御迷惑じや、なかつたかしら？」

書齋へとおされると、未知子は、べつに悪びれた様子もなく、明るい眼で部屋の中を見廻した。

「怒つていらつしやる？　先生」

「おこることなんかないさ。ぼくこそ、酒の上で、えらい失礼をしだした後悔しているくらいだ。ところで、いつたか、どうしてぼくの



ところが判つた？」

「あんとき、先生のポケットから名刺入れをちよろまかしたのよ、うつふ」

屈託のない未知子の笑いが、高志を、いつきに未知子の胸に飛びこませた。

「あたし、ずいぶん迷つたの。ほんとうはもう、あれつきりお目にかかるまいと決心したんだけど……先生は、ここからお通いになるの？」

「通う、つて？」

「別に病院がおありなのね」

「ああ、そのことか」

高志は、しかたなしに苦笑した。

「君は、ぼくをまだお医者だと思ひこんでいるんだね」

「そうじゃないんですの？」

あからさまな失望の色が、未知子の面を、一瞬くらくかげらせた。

「済まん、済まん。じつはこのあいだ、ぼくは、君がズバリと言ひ当てたとおもつて喜んでゐるのを、失望させたくなかつたんで、つい、嘘をいつてしまつたんだ」

「あたしは、ほんとに真剣だつたのに」

「悪かつた。しかし、どうしてぼくが医者でないことを、そんなに失望するんだね？　なにか相談したいことがある？　あつたら遠慮なく言いたまえ。ぼくの懇意なお医者さんを、いくらでも紹介してあげるから」

「いいのよ。もう、そんなこと」

未知子は、ポケットから、よれよれの袋を取り出して、夕



バコを吸いつけた。

「未知子！」

「はい」

「君、なにか思い悩んでいる秘密があるんじゃない？」

「……………」

「差支えなかつたら、話さないか。ぼくも小説家のはしくれた。真面目に相談に乗ってあげるが——」

未知子の瞳が、キラッと雲母のように光ったが、高志の誘いに乗ってくる気配はすこしも見せない。

「無理に、とは強くないよ。しかし、せつかく、こうして態々ぼくを訪ねておいて……」

「頼らせていただきたいの。でも……やつぱり今は言えない……先生」

「なんだ？」

「もういつべん、会ってくださいる？」

「いいとも、なんべんだつて。そのとき、打ち明けるね」

「若しかしたら……でも、ここでは嫌や」

「じゃ、何処？」

「上野に水族館あるわね、御存じでしょ？」

「うん、不忍池の……」

「あすこでなら、お話出来そうな気がするわ。でも、條件つきよ」

「どんな条件？」

「あたしの商売や身の上のこと、ぜつたい聞かないこと」「約束しよう。なんにもそれには触れずに、君の頼みだけ

きいてあげる」

「いい方、先生つてー」

水族館で会った日は、偶然とはいいながら、あの夜とそっくりの
どしや降りだった。

「よく来てくださったわ。こんな雨じゃ、駄目かとおもつていた
の」

未知子は、自分で切符を買つて持つていた。

客はひとりもない。うすくらい、一番奥の水槽の前で、未知子
は、立ちどまつた。

「イソギンチャクね、まるで生きてる花みたいー」

「どう、決心ついた？」

「だめ。先生のお顔、見たとたんに勇気がくじけてしまつたわ。も
う、あたし、お頼みするの諦めているの」

「なんだ、態々やつてきてあげたのに」

「ごめんなさいね。先生、あたしをお嫌い？」

「馬鹿な、大好きだとお」

「どのくらい？」

「このくらいだ」

高志は、ぶつつけるように接吻した。

「うれしい！ よかつたら、触つてもいいわ。あたしの、せめても
のお礼心」

未知子は、あの真つ白な花車な指で、自分の胸をかきはだける
と、柘榴のつぼみをおもわせる紅い乳首に、高志の指をとつて触れ
させた。未知子の指は、まるでイソギンチャクの触手みたいに、ぬ

めりと濡れていた。

外へ出ると、意外にも雨はきれいにあがつて、美しい虹が空いつ
ばいにかかつていた。

一緒に御飯でも食て別れようと、考えているうち、とつぜん、
未知子が走り出して、電車線路の向うから手を振つてみせた。

「さよなら、先生！」

「おい、待てつ」

あいにく電車が通りかかり、行き過ぎたときには、未知子の姿は
フツと消えたように見えなくなつていた。

「まるで妖精みたいな娘だなあ」

高志は、ふつきれない情感を持てあまして、その夜も、別なこ
ろで別な女と、自慰に近い満足で自分をまぎらわすよりはかに術は
なかつた。

ふてぶしい夢

それからの高志は、もういままでのように、未知子に無関心では
過ごされなくなつた。未知子の香くわしい息を呼吸せずには、一刻
も生きていられない自分を発見してびつくりした。

会えば必ず、何かしら謎を残したまま消えてしまふ未知子。唇を
ゆるし、乳房をゆるしておきながら、それ以上には、なんとしても
心の鎖を解こうとしない未知子。まるで、高志の情感をぎりぎりの
線まで追いこんで、その土壇場で無残にも突つ放してしまふのを面
白がつててもいるとしか思えない未知子。

それにもかかわらず、高志は、不思議に、そんな小娘に翻弄され
ている、などという後味の悪さは、みじんも感じてはいなかつた。

水族館で会ったきり、未知子の消息はふつつり絶えてしまった。もう半月以上にもなる。家へ訪ねてくるだろうという期待は、毎日ぐらかされてしまいつづけた。

日に日に内攻するものが、高志にふてぶてしい夢を見つづけさせた。

或る夜の高志は、未知子の無毛の女陰を指でかきひろげて、くいているように吸ひむさばった。(無毛であることが、妖精らしくおもえたからであらう)

或る夜の高志は、未知子に腹を切らせて、これがあたしの秘密よ、と、血まみれの拇指大の胎児をひきずり出させた。(未知子が腹胎を産んでいるのではなからうか、という想像が、心の隅に浮かびかかっていたためであつたらう)

このままではいたら発狂してしまいそうな不安が、高志を街に追いたたせた。

なんとしても、未知子を探し出すぞ。そして、こんどこそは暴力でも征服してやるぞ——高志は木枯の中に、ひくひく**騒動を繰り出す**させた。

「そうだ、あの飲み屋へ行つてみよう。あの**軍鶏**みたいな主人に聞いたら、わかるはずだ」

胸がふくらむおもしろい期待が、無残にも崩れ去った。その店は跡形もなく取りはらわれて、手相見が、しょんぼり組立台を張つていた。

当てもなく、踵を返して歩き出した高志が、果物店の角を曲ろうとした途端だった。

「先生！」

人なつっこい女の声が、電柱のかけから呼びかけた。

「あつ、未知！」

「あたしを探していたんでしょ？」

半分囁つた林檎を投げ捨て、未知子は、女学生みたいに、高志のオーバーにすがりついた。

そのこだわりのない無邪氣さが、高志のきおいを一瞬に粉碎してしまつた。

「どうして訪ねてこない？ なぜ、ぼくから逃げまわつていたんだ？」

「だつて、怖かつたもの？」

「じゃ、どうして、声をかけた？」

「ほんとうは、先生のお姿見かけたとたん、逃げ出そうと思つたの。でも、逃げられなかつたわ。先生が好きなんだから」

林檎の匂いをのせた甘酸っぱい未知子の息が、高志の鼻粘膜にはのぼると滲み入つた。

「奢ろうか？ よかつたら」

「うん、ここんとこ下漁で、飲めなかつたの」

「まるで君は、妖精みたいな女だな」

「そう？ でも『できそこないの妖精』よ」

「できそこないだから尙可愛いんだ」

こんな可愛い妖精に、どうして、からだだけの慾望を無慚にたたきつけることが出来る。結局、その日も、近まの飲み屋で飲み合つただけで、あつてなく別れた。それでも、今度は必ず家へ訪ねるという言葉を取つただけが、收獲といえは收獲だった。

未知子はそれから、ちよいちよい来るようになった。相変らず、

とほけて、つかまえてどこがなく、それでいて、求めれば、口いっぱい、の接吻をゆるし、いつまでも乳房をもてあそばせて顔ひとつ赤らめなかつた。

悲しい行爲

そうした何回目かのきよう、未知子のほうから積極的に、高志に

接吻したことは、たしかに大きな変化にちがひなかつた。

果して、帰りがけに、未知子は、いつになくやや硬ばつた表情で高志の耳にささやいた。

「あたしね、一週間のあいだ、しつかり考えて、決心を固めてくるわ。きつとよ。あたしつて、悪い娘だつたわ。先生に、へんな態度ばかりお見せして。でもこんどばかりは、あたし、自分のふらついた態度にしみくくりをつけるつもり。会つてくださるわね、こんどの月曜日」



冬にしては、汗ばむほどの日だつた。

未知子は、しかし姿をあらわさなかつた。晝を過ぎて夕方近く、待ちくたびれて散髪屋に出かけ、帰りがけの道で、婆やにばつたり会つた。

「だめじゃないか、家をあけて」

「お留守願ひできましたよ、ほれ、いつもの可愛い娘さんに。あ

いにく何んにもないんで、お菓子でも買おうと思ひまして」夢中だつた。

「未知！」

声はずませて、書齋にとびこんだ高志は、未知子の悲しい行爲を見てしまつて、おもわず隣際に立ちすくんでしまつた。

かつ、と西陽のさしこむ窓際に、背中をこちら向きに、未知子はしやがみこんでいた。

「あらっ！」

羞恥に蒼ざめた面をきつと向けかえ、未知子は、あわてて、露わな太股をスカートで覆いかくした。

「未知！」

高志は、おどろかかつて、未知子の右手をつかみあげた。指が、ねつとりと濡れている。

「馬鹿つ、未知の馬鹿つ。なぜ、そんな真似をするなぜ、ひとりでなんか楽しむんだ？ そんなくらいなら、そんなくらいなら」

握きとめられ、押しつけられるがままに醜態していた情慾が、狂暴なまでに、高志の血を燃えあがらせた。

「離してつ、それだけは堪忍してつ。離さなかつたら、あ、あたしは舌を噛み切つてよつ」

必死の力で、おしかぶさる高志を跳ねかえし、未知子は、裸足のまま、おもてへ飛び出した。

「待てつ、未知つ」

ほとんど出会頭だつた。

まるで、高志の行手をはばむように立ち塞がつた男がある。

あの、軍鶏みたいな、飲み屋の主人だつた。

未知子の正體

一瞬、危険に備える身構えが、高志を本能的にたじろがせたが、男の、憎惡に縁つぽくきらつく眼には、しかし殺意のうごきは見えなかつた。

「まあ上りたまえ……むろん、未知さんのことで話にきたのだから？」

「そうだ」

男は、ぶつきらぼうに答え、へんにきちんと坐つた膝頭の拳を、ふるわせている。

「きみは、未知さんの、いつたい何だ？」

「保護者で、孝蔵つて者だ」

「もつとはつきり言つてもらいたい」

「養い親だ。未知子は、隅田川の川べりに捨てられていたのを、俺と、死んだ隣がひろつて育てあげたんだ」

「用件は？」

「未知子と、手を切つてもらいたい。二度と会わないでもらいたいんだ」

「おかしいことは言わないでくれ。ぼくは、ぜつたいに未知さんと関係なんか……」

「それは、よく解つている」

善意とまではゆかないまでも、孝蔵の眼には、何か真摯な光が、ゆらくかにうかがわれた。

「事情を、納得ゆくまで説明してもらえない限り、ぼくには返答のしようがないね」

「わしらの商売に、色慾は敵だよ」

「高志？」

「拘捕よ。拘捕に色恋は御法度だ。気が散る、手先がぶる。正直いって、俺は、未知に食わせてもらつていようなんだ。それがどうだ。近頃はドズばかり踏んでいやがる。見せかけの飲み屋も、差押えくつて、たまたまにやらん始末だ。お蔭様でつて、皮肉のひとも言いたくならあな」

——そういえば、未知子の指の、なんと真つ白で、しなやかなことだつたらう。ひとつの謎がこれで解けた——

「それだけの理由で、ぼくは未知さんから離れるわけにはいかんね。いくらだつて解決の方法はあろうじやないか」

「おれだつて、それがまづとうな生き方だとは思つちやいねえ。だが、ほかにどうすることも出来ねえんだ……」

「それだけじやあるまい？ 何か匿しているね？ もつと大事なことを。はつきり言つて置くが、ぼくは未知さんを愛している。未知さんだつて、ぼくが嫌いじやないんだ。愛してさえている。それを、何かいま君が匿している重大な秘密が、ぼくたちの仲を邪魔しているにちがいないんだ。はつきり言いたまえ、どんなことでも、ぼくは冷静に聞こうじやないか」

言おうか、言うまいか、幸蔵は、とつさに決し兼ねる様子だつたか、ついに眉をあげて、きつぱり言い放つた。

「可哀想に、未知子は、半陰陽なんだ！」

いきなり後頭部を殴りつけられたような烈しい衝撃に、高志はくらくらつと眩暈を感じた。

「俺は、俺は、奴が不惑で不惑でならねえんだ。遂げられつこねえ。俺に、身を焼きこがして、近頃は飯ものに通らねえ始末だ。俺は

知つてゐる、何もかも未知子の奴から聞いて知つてゐる。未知子は、さしいよは、おめえさんを医者と間違えて、出来るもんなら内所に手術して、まづとうなからだになろうと計画したんだ。だが、おめえさんが好きになつてしまつたときにや、もうそんなことは死んでも話すまいと決心したんだ。後生の頼みとはここだ。おめえから引いてくれないかぎり、未知子の奴は、生涯おめえさんから、なぶられ通して泣かきやならねえんだ」

幸蔵は泣いていた。やがて堪え切れずに、その武骨な手で面を覆い、しんしんと泣きつづけた。まるで、涙を見せることを知らぬ未知子に代つて泣いてやつてゐるもののように。

——そうと知つて、これ以上未知子を追うのは、いたずらに未知子に氣を持たせ、苦しめるばかりだ——

「よくわかりました」

高志は言葉を改め、暗澹としてうつむいた。

その夜——

大東京の空の下、隅田は流れる——そのほとりて、運命の花をひらいた「不具の妖精」は、いま、同じ流れのほとりて、みずからの手で、その花びらを散らしていった。

所轄署の死体收容所に運びこまれた未知子の死体は、その無残にあとたたもないまでに切りえぐられた陰部を、それでもまだ安心出来ぬもののように、しつかりと血まみれの両手で覆いかくして隠さなかつた。

(おわり)



サチズム・ストオリー

處女をいたぶる

……瞬間、彼女の兩腿がはねあがり、本能的に膝を
 にすり合わせた。私は彼女の兩手をネクタイて、ぎ
 ゆつと縛り上げてしまった。もう絶対絶命だ。……

鬼頭浩一郎

(1)

めくるめく光の波につつまれて、少女の若い
 肉体が白銀のくつきり引かれたテニスコー
 トで躍動している。ここA女子学園の校庭を
 繞る木々の緑も梅雨明けのみにと晴れあが
 った青空の下で濡れたようにあおくと照り
 映えて、もうすっかり夏だ。学園の夏期休暇
 もあと数日、——が、校内売店の金網の中か
 らコートを見まもる私の灰色の濁った目の憂
 鬱は休暇中の閉店による損害のためじやな
 い。私は何か一つのものを蛇のようにじいつ
 と覗く執念に憑かれたとき、しぜん暗い陰の
 あるまなざしになるのだ。それを自分でも知

っている。私がいま説く一つのもの、——それはコートで弾む
 あの上級生の日野妙子の、かなり大柄な、そして鮎のようにビ
 チ／＼した水々しい体軀、いや肉体そのものだ。あッ、いま彼
 女はラケットを、バツクのフォームで大きく一振りしてインサイ
 ドにきたボールを鮮やかに敵に打ち返した。コーン、と軽い音
 が虚空に響いて、いやそれよりもその瞬間、彼女の胸の、恐ら
 く薄いブラウスに透いて見えてるに違いない二つの盛り上った
 隆起が挑むように反つて、そして茶の基縫織のスカートを纏つ
 た殆んど思ひのこすことなく発育した逞しいとさへ言える腰部
 が私の方にぐいと振れた。また再びコーン！と、……こんど
 はブラウスの短かい袖の奥で、腋の窩みから胸奥にかけてなだ
 らかな線を描いて白日に燃えるような真白な肌が。——私はつ
 いに眩暈がして、両頬を抱えるようにして目を伏せた。すると
 右頬の呪わしい痣が指先にザラツと鼓動のように触れて私はい



まさらの如く戦慄するのだ。おまけにいくぶん僣慢で、窓枠の金網にやつと首が出るくらい、——私は神の皮肉な傑作たる醜惡限りなき侏儒同然の小男だ。こんな私だから四十になるこの齡まで女房に二度も逃げられた。私は小男のくせに欲情は人一倍はげしく、そのうえサジズムの傾向があることを告白しなければならぬ。二人の女房とも私に対してそつけなく、何の理解も同情ももたなかった私は自分が嫌われていると思うと、余計ムラムラとして、よく夜中に女房の蒲団をまくつて叩き起すなり柱に縛りつけて散々殴りつけたものだ。使つたものは

古道具屋から買つて来た乗馬用の鞭だ。「あうーッ、おうーッ！」その時の女房の苦悶に至んだ蒼白な顔をいまでもまさ／＼と憶いだす。

晝間ちよつと魚屋と話し過ぎたといつては、それをタネに折檻したのだ。貴美という名前で、まだ十九だつたが、おそろしく気の強い女で、私の噂處が惡辯だと知るとつとと実家に逃げ帰つて、それつきり戻つて来なかつた。

二番目の女房は年増だつたから少しは耐えてくれたが、そうだ、雪の降つてゐる晩、私は「お前はまるでお義理のような氣持で俺に抱かれてるじやないか！ 判つてゐるんだぞ！」と極めつけると、いきなりひきずり起こして雨戸を蹴つて庭に荷物みたいに抛りだしたのだ。

降り積つた雪の白さと、豊満な牀に纏つた長襦袢の緋色との妙なコントラスト！ 凄く美しさだつた。

私は彼女を遮二無二庭の柿の木に太い縄で縛りつけた。れいの鞭を手にもつて、さながら惡鬼の形相でビシッ、ビシッ！ と力のつづく限り打ち据えた。鞭は襦袢のうえからしだいに肌に喰ひ込んで行つた。音が違つて来

た。彼女はこの世ならぬ地獄の責苦にもうも出ずにたゞ身を振らせた。私の方が息が切れてしまい、と彼女は全然うごかなかつた。

失神したのだ。私は井戸端から水を汲んで来て彼女の黒髪のうちからザンブリぶつかけた。息を吹きかえた彼女の目は憎惡と怒みで凍りついてゐた。もう私の欲情は絶頂に達した。

私は我慢できずに長襦袢をむしりとつた。脂のりきつたむつちりした円つこい肩にいくえもの鞭の痕がむらさきの蚯蚓を描いていて、とうてい自分の妻とは思えないそのあまりの醜たらしさがとうとう私を逆上させてしまつたらしい。もう全く夢のようだつた。それからほとんどなごとしたのやら眠つきり憶えていないくらいだ。——気がついたときは彼女の妻はなく、縄だけが雪のうえに蛇のようにくね／＼と伸びてゐた。

(2)

それつきり第二の妻は帰つて来なかつたのだ。私は孤独だつた。芸者やパンパンは商売心が見え透いていて、とうてい私を



満足させなかつた。もう素人の女にはこれきり縁がないのか、——が、ことし、もう少し儲けたいと思つて、去年から店を晝間は親戚の者に委せて自分はこのA女子学園に売店を設けるようになったのが幸運だつたと思う。私のみいだした日野妙子こそ私に残された望みのいつさいなのだ。彼女が区役所の下ツば役人の何番目かの娘でかなり貧しいことは私のつけ目だ。「日野さん、ほら御覽。こんないい鉛筆、先生だつて使つてないだろ。卸値に負けるときますよ。」

そうやって私はすでに飛びきり上質な大学ノートなんかも他の客に見えないようにして思いきり安く彼女に渡してやつてあつた。さいしよのうちこそ彼女はやゝ怪訝な顔もしたが、いまでは「久保の小父さん」と、かなりなつてゐる。まだ気持は子供っぽいから、私があんまり彼女の身を制服のうえから砥め廻すような露骨な視線さえ慎しめば警戒されるわけではない。物質に脆いのは、私が益暮につけ届けを忘れたことのない校長や教頭ばかりじゃない。まして相手は無邪気な少女だ。それに私はこんな顔だがもちろん愛想わらいと揉み手くらしいは終始忘れない。だからふだん若い女学生たちになか／＼親しまれてゐる。

じつさい、日野妙子はすでに私の射程距離内にあるようなものだ。——いつだつたか放課時間ちかい頃、私は帰り支度をおえた様子の彼女がそ／＼と便所に入つたのを見すまして、ものかげにじつと身を隠した。もちろん、戸はバタンと閉められたが、——シャーツと、かなり威勢のいい音がした。水洗便所だからよいけい響きがよかつた。胸の動悸を早めた。ガザゴツと紙の音がして、……それから暫く何をしてるのか彼女は出てこなかつた。やつと出て来た彼女がスカートの裾を直して、かなり骨盤の広いむつちりした腰をふり／＼行くのをやり過しておいて、私は同じ便所にそつと入つて見た。私の手はもちろん隅に置かれた白い瀬戸の壺の蓋をあけた。彼女が手間どつたわけがわかつた。目を射るように××××××××××××××××のひとかけら。私はそれを鼻に近づけたとき手がおかしいほど嗅えてひどく亢奮したものだ。すこしも厭らしい臭気がなく、甘ずつばい匂いが鼻をうつつた。私はそれが梔子の花の匂いに似てゐることにちき氣がついた。廊下に置管さえしなかつたら、私はその貴重な綿を紙にくるんで持ち帰る余裕があつたに違いない。

それからついにこないだもこんなことがあつた。——体操で汗をかいた日野妙子が、更衣室にゐるのを私は板壁の隙間から覗きをやつたのだ。彼女はいまや、——私は思



けがべつのいきもののやうに息づいているのがはつきり見えた。乳首がほんのりとさくら色だ。そして、彼女は二つのなだらかな丘の間の谷間をゆつくりと

丹念にタオルで拭うのだ。できることなら私はあのタオルになりたい

と思った。見ていて私は喉が乾いてヒリヒリした。ふくよかな肌

理のこまかい肩に、濡れたような黒い髪がしつとりと垂れて。……

彼女はスリッパの裾をまき上げて、ついに太腿を出した。充分に脂肪がついている。いかにも弾力に富んでいる。私は太陽に射られたやうに瞬間、目がクラクラとした。私は荒い息づかいが部屋の中

の中の人魚に聴えはしまいかと心配だった。彼女はもう立派な女ではないか。その腰の恰好や線は、私が彼女の制服のうえから日頃あれこれと想像してたものとやはり寸分もちがわなかったのだ。

そうだ、こんなことがあつてからだ。夜、孤獨の蒲団に入つても日野妙子のあの白い肌

(3)

校庭の半分がようやく淡い影の中にしづんだ。そして、たそがれの暮色に全体がつつまれる頃、日野妙子が私のとこにやつて来て、「小父さん、……」私は想像するだけですで

に胸が躍つた。まるで疼くやうだ。私は彼女に、婦りに寄れば××製の素晴らしいズツク靴を安く負けてやるから、と言つておいたのだ。彼女の靴の踵がすり切れてることを私はかなり久しいまえから注意していたのだ。府下の各女子学園の対抗テニス試合を数日後にひかえて、今日はおそらく練習のさいごの仕上げだからきつと遅くなるに相違ない。今日こそ私にとつて絶好のチャンスではな

いか。——私は醜態そのものだ。彼女はまさ

に美の極致だ。私はうらぶれた中年、彼女は青春の、見事な開花を想わせる蕾だ。どうして彼女がこんな私に恋するわけがあるう。いや、私だつて彼女に恋なんか絶対にしてはならない。また、しようと思わな

い。私の欲しいのは、日野妙子のあの陶器のようなすべ／＼した肌と、むつちりした肉だけだ。それらに私は汚れた爪を立てて

思う存分かきむしつてやる。私の胸奥を領したものは彼女の完べきな美しさに対する狂わしいばかりの醜い嫉妬ばかりだつた。どうして同じ造化の神が私と彼女のよ

うな阿極端を拵えたのだろう。私は彼女を私の住んでるじめじめした泥沼にまで引きずり下ろしてやる。いや、きつとやつて

見せる。私は臂を決した。私がいつたん思い立つたら、必ず成し遂げるその執念にいつてはすでにまえにも書いた。できることなら、私は二人の要にしてやつたと同じ残虐を日野妙子にも加えてやる。彼女はおそろく苦痛と、そしてさいごには歡喜で嗚咽するにきまつてる。私は泣かせることでは少からず自信があつた。……私はこれから行く已れの行爲の罪深さにさすがに慄えおのいて、一日の決算の算盤もまんぞく



に押けなかつたが、手つだいの店員は邪魔だから先にかえた。いよゝゝあたりが薄暗くなつて、私は電氣をつけた。——と、屏がゴツ／＼と遠慮勝ちにノツクされた。来たな、私はさりげない顔つきになつたが、

「あ、日野さんでしよう？ どうぞ。」声がふるえた。運動したあとで日野妙子の頬はほんのり上氣している。部屋に入るなり、

「小父さん、ズツク靴、お願いできて？」

「あゝ、いいとも。さあ、これだ。なお金なんかいつでもいいだよ。」

彼女はさつそくズツク靴を履きかえた。

「まあ、小父さん、ち

ようどピッタリだわ！嬉しい！これで試合に出れるわ！」

「よかつたね、そりや、小父さんは君の文数くらいちゃんと知つてゐるんだから。ヘッヘッヘッ！」

私は彼女がズツク靴で夢中になつてゐる間に屏にガチャリと鍵を掛けた。これでよし、そう思うと、私は急に下腹に力が入つてわれながらたのもしかつた。私はすでに悪魔の形相凄じく、

「日野さん！」と、彼女の手をきゆつと握つた。なんて柔かなボチャ／＼した手だろう。

「まあ、何するの？」

「彼女がびつくりして振り離そうとした手を私はますます強く握りしめた。手をひつぱつて彼女の軀をぐいと近寄せながら、私はさつさと假面をかなぐり捨てた。

「お嬢さん、おや、慥えてるネ、男がひとりゐる部屋に飛び込んで来て怕がつたつて仕様がなさいさ。もう鍵も掛つてゐるんだから。往生際をよくした方が美しい君にふさわしいといふもんだぜ。」

私が凄んでみせると、彼女は初めてにくしみのこもつた目で私を見つめた。が、その冷たく光る目の底にすでに哀願の色がこもつて

いる。私は落着いて／＼と自分にいいきかせながらタバコに火をつけた。さあ、ゆつくりたのしんでやろう。

「小父さん、離して頂戴！ 遅くなるとお父さんに叱られるわ。お願い！」

彼女もいまいや必死だ。

「さあ、そいつはちよつとできない相談だ。なにしろ、俺は今日という日がくるのを一日千秋の思いで待ち焦がれてゐるんだからな。」

私は彼女の頭を抱えるようにした。まだ稚い埃っぽい匂いが黒髪から漂つた。それが私をよけい亢奮させた。彼女は臍をきつとさせて、

「よしして！ 大きな声、出すわよ！」

「へん、なに言つてゐるんだ。ここは地獄の三丁目だ。呼べど叫べどつてやつだ。判つたかい？」

私が顔をおつかぶせるようにすると、彼女はのぞけかへつた。身悶えた。私は容赦なく抱きすくめた。小鳥のいたまじいさいごのあがき！ 皓い齒が覗いて彼女の顔が驚愕と恐怖でいびつに歪んだ。一瞬、泣いてゐるのか笑つてゐるのか判らないような表情になつた。彼女もいまはもう、自分がどん



な怖しい運命のさ中に叩き込まれたか女の本能で感知したのだ。

「妙子！」私は喘ぎ喘ぎ唇をとう／＼彼女の唇にかぶせた。まるで

電気にでも触れたように彼女の全身が鋭く痙攣する手ごたえがあった。驕慢に咲き乱れた花の一輪をむしり取る実感で私は快感に酔い痴れた。はじめは冷たくしだいに熱くなつてくる濡つた唇の感触。あゝ、彼女はじつと、親念したもののよう

きそうになつた。彼女がじつとしてるのは、たゞ宿直の先生や小使に見つかるのが恐いからだ。そう思うと、私も一種のくしみにで、彼女のブラウスをむしり取つてスリッパをひきちぎつた。

「あ、あー！」

崩れようとする女の脆い溜息が、嘆息が彼女の口からはとばしり出た。ふだん、あの出入商人の親爺が、と軽蔑しきつてゐるこの私に彼女は征服されようとしてゐるのだ。私の脳裏をあらゆる淫虐の空想がつつばしつた。あの更衣室で垣間見た白い陶器の肌が私の鼻の先で息をひそめてゐるのだ。私はいま行われていることがどうていつつの出来事とは思へなかつた。自分の頬を抓つてみないで済んだのは、彼女の肌のむつと噎せかえるような甘い匂いのおかげだ。嗅覚だけは夢でないことの唯一のあかしだ。

ふと見ると、彼女のすつかり蒼ざめた顔からはすでに日頃の驕慢が消えている。無理もない。純真無垢な処女が身体検査のときにでなければ見せようとしないう乳房をすつかり露わにさせられているのだ。羞恥と屈辱と、そしてあきらめて彼女の軀から力がガツクリ脱けていた。チクショ！ さまを見ろ。私

は胸一杯にひろがる嗜虐感で齒がカチ／＼鳴つた。

「さあ、お嬢さん、そろ／＼女の癖を教えてやうか。」私は悲のある頬をニタツとさせて、手を彼女の腕の方にサツと伸した。もはや能面のように無表情だつた彼女の顔に又あらたな恐怖が閃光のように流れた。なにしろこうなると、私は醜い小男だから演出効果は百パーセントというものだ。ふしぎに声までが悪魔なみにしわがれた。外がまだ薄明るいだけにへんにこう夢幻のような色を漂わす電光の仄光の中で私は半身にかまえるなり、

「オイ、日野さん、おめえオツパイを××××××××あるかよ？ ヘツヘツヘツ！ 泣いてもんだぞ。」

私のことばで彼女はぎく／＼として壁際へあとすさつた。私の伸びた、ハイドキながらの茶褐色の魔手に彼女は両手で乳房をおゝい隠すようにした。私は小鼻でせむら噁つた。それから画家がモデルにいつけるようにまるで抑揚のない声で言つた。

「両手をうしろへ廻すんだ。うしろへな。いまさらジタバタすると、あとで先生や生徒にきょうのことを曝らしちゃうよ。そう



獵奇マニア
の手記

便

所

マ

ニ

ヤ

其處は生々しい女の匂いがした。まだ甘酢っぱい匂いが残つて便器は飛沫に濡れているのです。私は思わず指で其處をこすつて齧めて見た。

下には白い花の様に紙が……

島田 政一

私は都内のある製本工場の職工であります。十六の時から何度も職を變つて、その度に嫌になつたり雇主の方が私を嫌つて敵になつたりしたのです。

前に勤めていたのは小さな薬品工場で、葛飾の金町にあつたから、電車に乗らずに行けるのでよかつたが、此処も今年の五月に敵になつたのです。それは私が女工便所を覗いたからです。

便所は第二工場の北側にある手洗場に続いているが、手洗場は男も女も協同で、タタキの手洗場に入ると、真中にカラシが並んでいて、右側が男便所、左側は女便所になつている。私は蒸溜室にいたが、ここの係長は学校出の親切な人だつたのだが、私に、「お前は痔が悪いのか？」

と、云つたから

「悪くねえです」

と、云うと、

「それじゃ、小便の出る道でもふさがつてい
るんだろ。お前のように、若い癖に便所の長
い奴は居ないぞ」

と云つたこともあつたのです。

それは休み時間だけでなく、時間中でも頭
が痛くなると、便所に行きたくなつてくるか
ら、係長に断りに行くからそう云われるので
す。

どう云うものか、便所に入っていると、い
い気持になつて、頭がシビレたのが癒ると、
友達に云うと、

「臭せえ奴だな。そいじゃ、わざ／＼便所に
行くより、アンモニアでも燻に入れて、嗅げ
ばいいだろう」

と教えてくれたから、原料庫に行つて少し
貰つて来て嗅いでみたが、あまりいい気持で
はなかつた。

私が不思議でたまらなかつたのは、手洗場
に行くとき、右側と左側ではまるで匂いが違
う。女便所の方がずっと匂いがきつく、いい
と思つた。それは工場には女工の方が多いの
だから、当然かもしれないが、あまり違ふか

ら可笑しいのです。

第一、同じ人間ではないか、女の便所は何
故あんなにたまらないほどいい匂いをするの
か、考えても判らない。私は右側の男便所に
入るより、女便所の方がよくて、作業中で人
がいない時には、ちよつと女便所をのぞいた
こともあつたのです。それで、一度よく女便
所の中を見たいと考えました。

少し注意して考えると、女便所の外側は板
塀になつていて、その外は隣りの敷地になつ
ているが、便所と塀の間は狭いが、人間は通
れる筈でした。

あそこの汲取口はどうなつてゐるのだろう
か、と思うと、我慢出来ず、終業になつてす
ぐ、用心しながら行つて見ることにしたので
す。少し危いと思つたが、雨が降つてゐる日
だから、よいと思ひました。

小さな町工場のごとで、便所も水洗ではなく
て、汲取口は長さ四尺、巾一尺五寸ぐらいの
厚い板が、はまるようになつてゐるが、上の
方が少しスライでゐました。ジツとしやがんで
其処に眼をあてると、沢山の排泄物が見えて
なんとも云われないほど、いい匂いがブーン
としますのです。男便所より、十倍もよいと思
ひました。

正面はコンクリートの壁が傾斜して、其処
にもドロ／＼に大便が垂れ、落し紙がひつか
かつてゐるし、五ツある便所が、底は一つに
なつて、大きな長方形の肥溜になつてゐるの
です。

ハメ板がはまつてゐるので上は見えないが
物音で、幾人もの女が用を足しているのがよ
く判つて、私はなんとも云えず興奮した気持
になつて、スキ間に眼を当てたまま、×××
×××××しました。

その日はそれで帰つたが、翌日の晝休みに
も又、行つたのです。晝間はみづかり易いと
考えたが、晝休み、女工たちがドン／＼手洗
場に入つて行くのを見ると、たまらなくなつ
たのです。

始めはスキ間に眼を当ててゐたが、そのう
ちにキヤ／＼と便所の中で叫声がして、ドタ
ン、バタ／＼と騒ぐ音がした。その時気がつ
くと、私は知らぬ間に汲取口のハメ板をズラ
してゐたので、驚いて逃げ出した。だが、逃
げる処を人に見られたのです。

すぐ呼び出されて、皆から笑われたり、オ
ドされたりして、誠になつたのです。何故そ
んな馬鹿なことをするか、と云われたから、
「晝休みだから、自分の勝手なことをして遊

んでも、よいと思つた」

と云うと、組合長になぐられました。

係長は、

「可哀そうだが、組合の女子部長が強硬だから…… お前もその癖だけは早く癒せ」

と、云われた。私は覗くだけでも、そんなに悪事だらうか、と思つて、その時から、自分は他人とは大分変つてゐるのだと、考えるようになりました。

私は暫く家にゴロ／＼していたが、誠になつた理由は、友達から家の者に知れ、妹までが私を馬鹿にするが、自分は人と違ふところがあると思ひ、黙つていました。

おふくも怒つて「ヘンタイ」「助平野郎」

「近所に恥しい」「面汚し」と叱つた。だがおふくが、隣りの内儀さんに、

「あいつが生れる時は、犬のように軽い産でもうちつとで、便所の中に産み落してしまふところだつた。そんな産れ方をしたから、女便所のぞきなんぞ、するようになったわけじやあるまいが……」

と、話しているのを聞いたのです。

私はそれを聞いて、俺は便所が好きな管だと判つたわけです。

家の者はみんな「肥汲み人夫にでもなるがいい」と云つたが、私は今の製本工場に行くようになった。

私は二十一にもなつて、臨時雇で日給二百円に足りないが、十八、九でも三百円とる製本工が居ります。それでも仕方がないが、この工場の便所は、女便所と男便所は、まるで西と東に別れて居つて、私は内心でつまらなく考えた。

女便所の匂いさえ嗅ぐことが出来ない。それは便所が、工場主の家の方にあるから、ちよつと男は近づくことがむづかしいのです。

私は仕方なく遠くに立つて、女工たちが便所に入るところを眺めて居りました。そのうち、男便所でも、行かぬよりはよいと思ひ、一日何回も入つて、ジツとしやがみこんで、壁の落書を見たり、下をのぞいたりして遊んだ。糞尿が沢山溜つてゐるのを見るのは、非常に気持がよいのです。

そのうち、晝休みには弁当を持つて便所に入つて、鍵をかけてから、一人でゆつくり弁当を喰ふことになりました。呑気で、外で喰ふよりよほど美味い。下を見ながら喰ふのです。それから、女の便所のことを考えながら、一

人遊びすることもある。

この工場の便所には、落書が大分あるが、私が書く時には、きつと女が大便している絵を書くことになつてゐる。それを前から、後から、横からいろ／＼書くのです。これもとても面白い。それからナイフで板壁に彫ることもあります。

そうしてゐるうち、工場の男便所ではつまらなくなつた。考えついで、葛飾の区役所の近くにある公衆便所へゆき、その次には××の駅の便所に行つたのです。

公衆便所はひどく汚れて、ジメ／＼していたが、窓が小さくて暗いので、下の方は少しも見えないからつまらない氣持がしました。それに、女の匂いが少しもしないから、三十分ほど出て来てしまつた。

其処から歩いて××駅に行つた。小さな駅だから、男便所も、女便所も一緒になつてゐるのです。

私が入ろうとすると、制服を着て靴を持つた女学生が三人入つて行つた。私は嬉しくてドキンとなりました。それからソツと見てみると、三つある大便所に一人ずつ入つてゆくので、私も小便するよ／＼なフリをして中に入つたのです。

督めて見た。それから腹這いになって、手を出来るだけ下にのぼして、真中に白い花のよう落ちていた紙をひろつたのです。

それを顔に当てると、ブーンと凄くいい匂い、新しい女の匂いがします。暫く匂いを嗅いでから、大事に胸ポケットに仕舞つた時、誰か入つて来た気配がしたので、私はギョッととして、反射的に大便所の外に出ると、入口の処に先刻の三人の女たちが、ズラリと並んでいるので、膽つ玉が縮まるほど吃驚した。

「ホラ、やつぱり怪しいわ」
「ヘンねえ」

と云つてから、一番大柄の女学生が一步前に出て、

「ちよつとあなた、なにしてるの？」
と云うのです。

私はドギマギして返事もせずにいると、
「とにかく、ちよつと聞きたいことがあるから、外へ出て頂だい！」

と、むつかしい顔つきで云います。私はどうしたらいいかと思つたが、丁度駅員が一人入つて来たし、騒いで警察につき出されたら困ると思つて、黙つたまま外へ出たのです。

三人の女学生に連れられて行つたのは、すぐ近くの小公園の芝生です。連れられて行つたとは行つても、その気になれば、私はいくらでも逃げるスキはあつたのだが、私は逃げなかつた。そうして、女の後から尾いてゆくの、本当はともよかつたからです。

なにしろ私はこんな女学生なんかと、口をきくのさえ始めてだし、まさか交番に届けやしまいと思つて、しかしビク／＼しながら歩いて行つた。

「あなた、なんの必要があつて、あたし達のあとをつけたの？」
「誰に頼まれて、あんなところで、ウロ／＼してたの？」

人の居ない樹の下に来ると、いきなり三人一緒に、私をとり囲んで口々にそうマクシ立

て始めるのです。三人で一緒に喋るし、云つてゐる意味は分らないし、何と返事していいか困つて、ボンヤリしていると、
「卑怯よ、男のクセに……」
「頼んだ人の名前を云いなさい！」

と、とても怒るのです。

あとから考えると、便所で制服脱いで、これから何処かへ出かけるのだから、つまり不良女学生だつたのです。その現場に私がグズ

／＼しているの、なにか氣を廻して考えたわけでしょう。

それでも、その時はこつちに弱身があるの
で「誰にも頼まないです」「あとをつけたりはせんです」と、コケのような返事ばかりして、汗が全身ビツシヨリになるほどです。

そのうち、女学生たちも少しヘンだと思つたらしく、

「じゃあ、あんなに長い間、なにしてたの？」
「どうしてトイレでウロ／＼してたのさ？」

「返事をしなきゃ、承知しないよ」
と、こつちがコケのように、口ばかりバク／＼しているの、カサにかかつて、オドす

のです。娘の子でも同うは三人だし、口が達者なので、私は返事が間に合わないような具合です。

三人とも私のすぐ傍に立つて、私を見ているし、私は眼に汗が入つてクラ／＼するよう

な氣持になつて、
「俺は、女の便所が好きだから……」
と、云つてしまつた。

女学生たちは顔を見合せて、それから、ふくれた胸をつき出して笑うので、私は又顔が真赤になつて震えたが、あまり嫌な氣持ではなく、かえつてポーッと酔つぱらつたような

加減で立っていました。

「お便所が好きって何故さ？」

「女の便所は、いい匂いがするから……」

「ウフフフ、匂い嗅くだけ？ それからどうするの？」

娘の子たちは、面白がつて、キヤア／＼笑

いながら聞くと、私は正直に返事しなければいけない気持で、ありのまま喋った。

世間から云えば、大ソレた不良女学生かもしれないが、私にはお姫様たちのような気がして、云われる通りに喋ったのです。

それから、ポケットに入れていた、例の下から拾い上げた紙のカタマリを出して見せると、さも汚なそうに指でつまんで、三人で転がつて笑つたりして、一番大柄の娘が、

「いやねえ、私のかもしれんわ。ワア助からん。あんだ、凄いいヘンタイよ」

と、云つたが、こんな器量のいい娘の子にヘンタイと云われて、かえつて私は嬉しい気持がするのです。

「あんだ、汚いと思わんの？」

「汚いどころか、女の糞なら、俺、顔をつつこんでもええ——」

それで又、キヤアと笑っている。私も仕方なく、ニヤ／＼笑つていたら、

「ほんと、あんだ、ほんとに顔をつっこむ？」

と、大柄な娘が云つて、ジツと私を見たので、私はハツとなつた。この女学生は、私にほんとうにそんなことを、させてくれるのだろうか——と、半信半疑でつつ立っていた。

「ほんととね、もし嘘だつたら、承知しないよ」

と云つて、その娘は他の二人とヒソ／＼相談していたが、一人の娘はゲラ／＼笑つて嫌がつていたのに、大柄の娘が、三人の中では大將株らしく、承知させたのです。

三人は私を連れて、小さな池の向うの、木が繁つたところへ行つた。二人が右と左側に見張りをして、大柄な娘が、私の前にうしろ向きになつて、洋服をまくり上げました。

思つたより大きい、白い尻が出たのを見て私は夢を見ているような心持だつた。あとから／＼音を立てるように汗が流れるし、犬のように口を明けるほど、息が苦しいのです。

それでもブーンと、なんとも云えない匂いがして、黄金色のものが草の上に見えた。

うしろ向きでしやがんでいるから、よくは分らないが、その黄金色のものが見えたので私はもつとよく見ようと思つて草の上に腹這

いになつた。だが、その時にはもう、その娘は立ち上つて、スカートを下してしまつた。

次の女学生は始めからゲラ／＼笑つて、ひよつとしやがんでから、「出ないわ、あんな顔してみてるんだもの」と云つて、すぐ立ち上つてしまつたのです。その次の女学生は、小便だけして、やつぱり笑つてスカートを下しました。

娘たちが立ち上つた後には、黄金色の糞がこじんまりと、よい形をして、辺りの草が青く濡れている。それを見ると、私は夢中で腹這いながらそばにりました。

こんな器量のいい女の子たちが、糞や小便をするのを見たのは、生れて始めてです。それから、こんなに美しい、いい匂いのする糞を見たのも、生れて始めてです。私はなんとも云えないワク／＼した気持でいざりよつてその黄金色の中に、鼻からつっこむように、顔を伏せた。

「キヤア——」

と、けたたましい笑声がまわりでしたが、それで一層、私はいい気持になつて、体が、ビク、ビク、ビクと、震えて来たのでした。

(おわり)

×

×

×



續

男色喫茶店

——最新ソドミア社交場案内——

男色喫茶店や酒場が激増している。これは全国的な流行だ。本誌はさきに

(七月創刊號) 都内の男色喫茶店を記事して多くの反響を呼んだが、ここ

に改めて最新の店と地圖を追加發表する。

かびや・かずひこ

本誌創刊号に記載した「男色喫茶店」は、ことのほか好評で読者から、それらの店の所在を明細におしえてほしいとの希望が多数あつたそうである。

それももつともなことで、そうした店の雰囲気のみを紹介して、所在を明確にしないことはその道の人にとつては、隔靴搔痒の感があつたことは合点でき

そこで、U編集長の囑によつて、茲に前に紹介した店の確然たる所在と併せてその後日譚めいたもの、又、前に洩らした店並に新規開店したところなどについて、ルポルタージュしてみようと思う。

もし、これによつて、ホモ党の唯一の慰安と愉快の場たるこれらの店々が、ますます栄えるためのよすがともなれば、望外の俾せである。

I 新橋・銀座界隈

新橋駅前折鶴のことは、前に簡単に記した。駅西口を降りて、田村町・新橋間の都電の通りに出ると、銀座寄りの方の側に店の名を掲げたその店はすぐ目に入る。

店のわきには「新橋の閑所」と記した棒状、ショウ・ウィンドーのある洒落れた店構えの高級汁粉店である。

この「折鶴」の三階は、ついこの間までヌード写真の撮影所として知られていたがそれが廃業して、そのあとに、先月(十月)の二十日から、新しくホモ党の茶房が誕生



した。

その名も「リラ・ボーイ」、リラの花のごとく香わしいシャシ・ボーイが揃っているというのがミソであるが、事実、店名をはずかしめぬ美青年ボーイたちが、瀟洒な身装りで、カウンスターテーブルに、客へのサービスこれつとめている。

次いでは、この附近、第一ホテル傍の「クロス・ロード」がホモ党の間に知られていた。クラブ式になつていて、主としてその道の外人客を顧客としていたが、最近はどうしたわけか、宗旨をかえて、女ボーイもおきはじめてので、ホモ党にとつては、幻滅を感じさせるかも知れない。

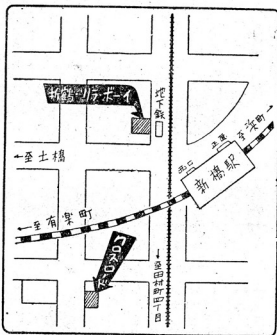
だが、以前の余韻はのこつてゐる。残んの色香を漂わせているともうべきだろうか。

では、クロス・ロードの客はどこへ行つたかという、南八丁堀の「五番館」へ散つたよう

である。

五番館は、東京駅八重洲口から広い通りをまっすぐに、都電の通りを二つ横切り、昭和通りを突切り、又、も一つ都電の軌道を横断

折鶴・クロスロード



チの小さな焰にも、遙かなる昔のギリシャの男色黄金時代を思い浮べ、思いを馳せては、陶然とするのである。

次にムーヴィー銀座の通りにある「アストリア」も、この道の人の間に名が高い。それは、陶々園という高級陶器店の地階にある。

尤も、この店には、男ボーイのみでなく、女ボーイも十人ほどいて、普通客すなわち、ホモでない客の入れをも歓迎している。ホモ党の客六、普通客四くらいの場合でもあらうか。

銀座四丁目の「フランスウィック」については、この前にも書いた。銀四交差点から三原橋の方に向つて、行くこと約一丁、ショウ・ウインドウのある呉服屋の横を右に折れると、すぐ左側にその有名な喫茶店はある。

して、左側エリワン・ボマード本舗の隣にある。

店のボーイは五、六人、客は外人七、日本人三というところであらう。

碧き目のエトランゼたちは、美しくもうら若き同性が、あえかなる白き指もて擦るマツ

だが、ホモ党のナジミ客は、二階に通す



のだ。階上はサロン風になつていてこの道の人の快談に適するように設備されている。

この店は、

三島由紀夫の

「禁色」によつて、一般に知

れわたりすぎ

たきらいがな

いでもない。

そしてまた、

縁なき衆生の

間にまで、あまりに知れわたり

すぎることは、この店はよろこ

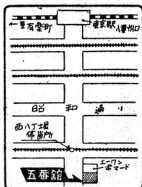
ばぬらしい。

Ⅱ 新宿

新宿の「夜曲」と「イブセン」のことは、前に手短かに紹介しておいた。

前者は、東京中では最古の男色茶房である。都電新宿終点で降りて、降りた側のベージュに渡ると、証券会社とパチンコ屋とを角にして横丁がある。そこを

五番館



入つて、すぐ右に折れる露路に入れば、黒く塗つた「夜曲」の店が目に入る。

店内はカウンターが比較的大きくとつてあるだけに、ちよつと手狭まだが、それだけおちつける感じだ。

ボーイは四人、いずれも二

十一、二のビチビチした若い

子ばかりである。中でも正ち

やんは、池部良を若くしたよ

うな感じのナイス・ボーイだ。

マスターは、以前劇界で女

形をつとめていたという経歴

の人だけに、きわめて人あたりの

柔かな、四十がらみの好紳士。同

性愛においても、能動受動と限界

されぬ円転自在の人である。

この店へは、「禁色」の修一の

モデルになつた「勇ちやん」が、

ときどき姿を見せる「勇ちやん」

も、今は三島とは疎遠になつてい

るらしい。

マスターが面倒のいいせいか、

色々の人がこの店へ現れる。或夜

私がこゝでマスターと話をしてい

たときに、高島田の若い子が「今

晩は」と入つて来た。女藝だが、声音はま

さしく男である。このあたりの男娼かなと

私は最初そう思った。が、よく見ると、そ

うした商売人でないみずみずしさが、顔や

身体付きに現れている。

マスターはその女装の青年に向つて、そ

んなに股を開いては無格好になるとか、帯

の結び方がどうの着物の着方がどうの、更

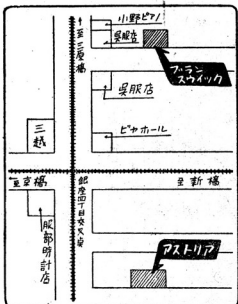
に進んでは閨房の事まで、宛も嫁にゆく娘

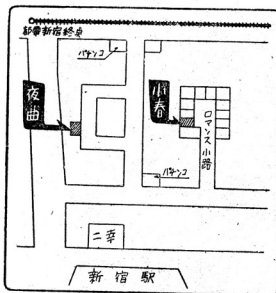
に訓える母親のような柔さしきで、注意を

あたえている。私はその細心な気の遣いよ

うに、すつかり感心してしまつた。

ブランドスウィック・アストリア





間もなく、女装の青年は髪々とした足どりで店を出ていったが、その後でマスターに問うたところ、その青年はこの店へよく来る客で、本職は京橋の方の喫茶店（男色茶房ではない普通の店）のボーイなのだ、或る外人に愛されていて、その夜（土曜日）はその外人の許へ泊りにゆくにために女装し、途中わ

夜曲・小春

わざわざ夜曲へ立寄ったわけだそう。男色茶房の客と店の人との間は、このように、きわめてファミリーな関係に結び付いているのである。

次いで、この附近、通称ロマンス小路の中に、「小春」という酒の店がある。

屋合式の店だが、居心地よく、酔人は勿論男だ。飲み屋だけに、客は青年よりは年配者の方が多い。

更に駅の方へ進んでいくと、繁華の裏手、マーケット街の中に、最近開業したふくべがある。

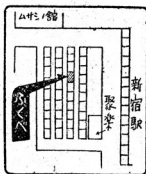
店の名の通り酒の店で、一マダムといつても男だが一はちよつとオツに気取つた中年の人。まだ開店して日も浅いから、海のものとも山のものとも分らぬが、とにかく繁栄を祈つておこ

「夜曲」に次いで、新宿の男色茶房としてその名の高い「イブセン」は、伊勢丹横新宿大映の真裏にある。店の前に名を記した立

看板がおいてあるから、すぐ分る。道路から直ぐの階段をトンと上ればボーイがドアを開けてくれる。

ふくべ

ボーイは四、五人、ベデ



ラスト好みのシャ・ボーイが揃っている。マスターは三十、二、三、

西部劇にでも出て来そうなエキゾチックな風貌の、人のよさそうな人だ。

筆のついでに、この附近、三福の裏通りにあるどん底に触れておこう。

この店は、別に男色茶房を表看板に掲げているわけではないが、ソドミアの話題の中によく出て来る店であつて、それだけホモ覚に好愛されていると見ていいだろう。

丸太で組んだ山小屋風の店構えは、ゴリキイの戯曲「どん底」の舞台に因んだものだろう。

ここは気の合つた若い青年たち、学生たちが、大いに飲み、大いに語り、大いに歌



う店である。すなわち、同性愛の昇華した友情発露の店、友情を温めあう店と見ていいわけだ。ホモ覚に好愛されるのも、洵に宜なりというべきである。

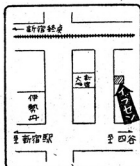
「どん底」はいま他に新しく建築中で、完成次第そつちへ引移るとかきいている。

■ 神田・上野

神田でのソドミア喫茶店といえは、誰でも「シルバー・ドラゴン」の名を言う。

それは、今川橋の埋立地の跡にある。都電を今川橋で降りて室町に向つて右側、洋菓子屋を角にした小さな道を入ると一丁余、理髪店の前に「銀龍」と看板を掲げた店がそれだ。

店内は、階下にはカウンターのほかに、テーブルが二三おかれてあつて喫茶店風。階上は広間で、ダンスなど踊れるように



なつてゐる。マスターは白い龍の模様のアロハを着た三十がらみの小デツブリした人で、男色についての見解も、なかなかシツカリしている。さきごろ新聞で報ぜられていたデスマークの男色覚について、しきりに賞讃していた。

イブセン

ボーイが三人ほど、他に「ママさん」と呼ばれる女装の男性がいるが、これはマスターのオクサンではなく、

故事洗濯など一切をやる人だ。

マスターは、「私のおこはもう亡くなつてゐるから……」と言つてゐるところを見ると、ウールニングであつて、目下独り身であるらしい。

神田には、他に、学生の同性愛者だけが集るクラブ式の店があるとかきいてゐるが、私はまだその所在を知らない。

次に、上野も、私の知つてゐるのは「湯島」一軒きりで、まことに寥々たるものである。湯島は、上野広小路「鈴木」から電車の軌

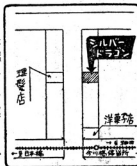
道を越したちようど真向いのクスリ・化粧品店の横を入つたドン詰りにある。

マダム？の由利さんは、自ら常時女装をしてゐるだけに、男姿のウールニングを極度に嫌つてゐる。ウールニングのオーソドックス（正統派）は女装でなければならぬと確信してゐるのだ。

この店は最近なかなか繁栄してゐるとかきいてゐるが、彼女の経営手腕の凡ならざる所以であらう。

IV 浅草

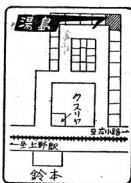
。浅草におけるソドミアのための店は、場所柄すべて酒の店である。



ご承知のごとく浅草には劇場が多く、それらの劇場に出演する芸能人には、男色者がすくなくない。又、芸能人といわずとも、いわゆる「小屋者」と称せられる劇関係の人々には、衆道的好愛者がなかなか多いのだ。それら男色者男色好愛者たちが、ソドミア専門の酒の店



に集つて歡を交すわけである。
浅草を描いた谷崎潤一郎の「飯人」にも、又高見順の「いかな



る星の下に」にも、そうした情景の場面があつたことを記憶している。

そうした劇関係のソドミアのみでなく、一般の斯道の人、こうした店に集ることは云うまでもない。

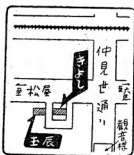
さて、そうした店の一つに「きよし」がある。それは、仲見世から松屋の横へ抜ける通称今半横丁に出て、家数十軒ほどすると、左側に、飲み屋の集まつた細い露路があるが、その中程にこの店がノレンを張っている。

通称「新田実の店」といわれていて、元松竹映画の二枚目俳優新田実が経営していたものらしいが、現在は店名の現すごとく、小林清という人が営んでいる。

因に、新田実がソドミアであるかどうか知らぬが、当時のやはり蒲田映画の二枚目細川敏夫は有名なホモ覺だつた。私の知つている上野の男娼は、嘗て細川と長らく同棲していた。俳優其他の芸能人には、ホモが少くないという証左の一つとして挙げておこう。

話がそれだが、「きよし」はお好み焼とビールを看板とする江戸前の店である。他土地の男色喫茶店のバタ臭さと対蹠的で、いかにも浅草的といえよう。

きよし・玉辰



この店の若い子(男)の中には、或る高名な小説家のペットがいるとかきいてる。

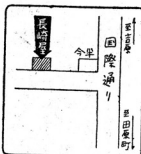
又、同じくこの小路の中に、「玉辰」がある。ここはおでん屋で、マスター夫婦は愛しあつた同士の同性である。次ぎに田原町から国際通りに向つて行くこ

と約二丁、左側今半の横を曲つたマーカークトの中に「長崎屋」がある。おでん・小料理の店である。店名の由来は、

マスターが長崎出身からでもあろうか。

とすると次に挙げる

「博多屋」とともに、九州は、昔ながらに男色者の多く出る土地であることが考えられる。



さて、その博多屋は、昭和座前の横丁を入つたところにあるおでん・小料理の店。浅草的な、気のおけない店ではある。

以上挙げたほかにも、東京都内には、男色者のためのこうした店が、まだ幾つか、所在すると思うが、いまのところ私の眼はそこまで届いていない。

もし、このような小篇でもソドミアの幸福のためのよすがとなるならば、いづれ機を見て茲に洩らした店々について続々篇を記してみようと思う。

嗜虐マニアの手記

病める耽溺

身動き一つ許されぬ被虐に甘んじて、その至應なしに関かされる春本のみだらな描寫——。洋子の白い胸が喘いて、喘いて、震られながら下半身が空しく何かを求めているたうつ……

多田亮人

本誌十二月号所載の藤岡氏「臀部マニア」は共感を以て読了した。小生実はサヂズムと臀部愛好癖を併せ持った、一官更なので。小生まだ大学卒業後日浅いが、二歳年長の女性と同棲している。仮に彼女の名を洋子としておこう。彼女は高名な某デザイナーの助手で、職業婦人としては一流の技術と収入を得ている。個性の強い美貌の持主なのだ。最も自慢なのは、洋子の全身の均整がとれた美しさで、日本人には珍しく、ほゞ七頭身に近い、見事なスタイルである。一般通日本人は五頭身、長身だが何時も二時半のハイヒールを愛用している。

そのためか、見事に発達した臀部の美しさと云つたら、ちよつと他に比べる女性はないのではあるまいか。前口上はこの程度にして、こんなに美に恵まれた洋子が、これと云つて取得の



ない小生と、円満に暮しているのは、彼女のマジヒズムと、小生のサヂズムが唯一無二の原因なのである。誠に絶妙な天の配剤と云うべきかも知れない。

小生は洋子の臀部の美しさを、眺めているだけでは納らなくて、積極的に愛撫せずには居られない。その一つに電球を利用する。

まず、彼女をベッドに寝かせて、飽きるほど眺めた揚句、電球で臀部を撫でる。勿論コード付きでスイッチを入れて……。つまり、電氣スタンドのシェードをとり、逆手に持つて行えばいい。一度電球を割つてコリてからは、ガーゼを二重にして電球を包んで用いる。電球は相当熱を及びているから、静かに臀部の上を撫でることによつて、彼女は不思議な恍惚感にひたるらしい。

始めは静かに寝ているが、やがてクネ／＼と下半身を動かすようになる。

これは電球でなく、アイロンでも出来る。しかし、アイロンの場合は調節を好くやらねば、すぐ熱くなりすぎ火傷させるので、その方に氣持を奪われて、たのしみが少い。やは

り、電球のデリケートな感じ、薄い硝子への危機感がよいのではないか。

こんな具合に、臀部に熱を与える方法は、案外のようにだが、女性を喜ばせる。洋子はこれを非常に好む。又、その反対の場合もいいのだ。つまり、臀部に電球によるマッサージを施して、彼女が陶醉している時、不意に臀部の上に、つめたい短刀の拔身、鈍、メスなどを乗せる。

氷でもいいが、こんな兇器類(?)の方が、心理的に私も彼女も満足が多いのだ。多など本当に飛び上るほどつめたく感じるらしい。夢心地になつている洋子は悲鳴をあげて、反射的にふりかえつて臀部の上を見る。白い光芒を放つて、つめたく光つている拔身……。

小生ははくそ笑まずには居られない。洋子は「いやッ、いやッ、早くとつて！」と、甲高い声をあげながら囁ぐ。とてもいゝですよ。

臀部愛好と云つても、小生はサヂスチックに出来ているから、自然愛好ぶりもそんな傾向を及びてくる。よく利用するのは洗濯板。

それからこれは本誌に既に発表された方がいるが、ソロバン。

ダンダラの、不思議な模様模様を見せる豊かな臀部の表情は、倒錯の血をどれほど慰めてくれることか……。

ソロバンで磨擦すると、本当に電流が生じららしい。小生が少しでも手を休めると、洋子は自分から臀部を運動させるほどいゝと云ふ。又、必ずしも小生は手で動かさずとも彼女の臀部に、玉を下にしてソロバンを乗せ小生はその上に腰をかける。腰部の運動でソロバンはきしみながら動く。この場合は小生の重さで彼女の方は苦痛甚だしく、よほど腰を浮かすように、加減してやらねと傷を作る。

しかし、この場合、ボーズ上から小生の心理的満足は甚だ大で、やめられない。洋子も歡欣しながら喜ぶ。小生毛のソロバンは、このため、彼女の臀部の汗と脂を吸いこんで、なんとも云えぬ艶を帯びて、光つていゝのですよ。こんな風にして、小生等の前戯は臀部から始められるのだが、本戯と云えども、一筋縄では満足出来ない。



最も洋子も喜び、小生も好むのは、兇器を用いる方法である。小生は銘入りの白鞘で、刃渡り九寸五分の業物を秘蔵している。これを使用する。

「駄目ッ、何をするの、よして！」

囁叫する洋子に短刀を握しながら、そろ／＼追いつめる時、ヤニヤツタな快感。

「いゝ加減で、観念したらどうだ、ええ？」

ネゴ味をきかせながら、彼女の足元にグサリと短刀を投げつける。これがいゝ加減では面白くないから、事実彼女の足から五寸と離れずつき立つように投げる。

だから、彼女も小生も至極真剣、多でも脂汗がにじむほど緊張している。又、ベッドの上の場合など、崩折れた洋子の衣服の裾を、ベッドに短刀で纏いつける

こともある。この時は、洋子は声をあげながら身もだえして、逃れようとあせると、デシンのナイトガウンなど、ビシッと、凄愴な音を立て、裂ける。絹を裂くような、と云う形

容詞があるが、実際なんとも云えず、神経を刺戟する音だと思っている。これでまず／＼昂奮が盛り上ってくるのだ。
「ね、お願い、それだけは止して！ さわらないで頂だい！」



「ふん、まだ云うことを聞かねえのか、オイ、おめえ、これが眼に入らねえのか？ この短刀がよ。四の五のぬかすなら、このドスで、お前のその可愛い鼻をそくなら、大きなオッパイを突くなり、俺の思いのまゝだからな、

え、どうだい？」
つめたい抜身で、盛上った乳房を、ビタビタと叩いてやる。それをはらいのけることも出来ず、洋子の、恐怖と哀願に満ちた瞳が、はり裂けそうに小生を見上げている。

美しい。まったく美しい。おそらく、女性が最も美しく見えるのは、こんな時ではないだろうか？

例の説教強姦妻木松吉が「女が一番美しく見える時を、世間の人は知るまい。暴漢に侵入されて貞操の危機に瀕された人妻が、恐怖にふるえながら、鬱巻の乱れをなおす時の表情の美しさ、これが一番だ」と、云つたということだ。さすが彼氏は常習犯だけあって、うまいことを云いやがる。小生全然彼氏と同感である。しかも洋子はまれに見る美貌だから、その素晴らしさと云つたらない。左手に短刀を持ち、右手で彼女の腕をねじり上げる。悲鳴をあげるまでねじる。小生女の悲鳴が大好きだから、この時は徐々に力を入れて、この絶叫と表情をジツクリたのしむ。近所に聞えることなんぞ、小生の知つたことではない。

なにしろ全身でのたうつのだから、成熟し切った女体の官能美、いや被虐美の迫真力はさすがにサチズムの鬼たる小生を堪能させてくれる。外の女では、こうはゆくものではない。

次で縛りに移るわけだが、この縛りにも小生には大いに注文がある。やたらに縄を使つて、ガンデガラメなど絶対願ひ下げである。月並だし面白味がない。

小生がやるのは髪の毛の縛りだ。これは子供の絵本で、ガリバー旅行記の、ガリバーが小人の國の海岸に、人事不省で打揚げられている挿絵を見て、ヒントを得た小生独特のものだ。つまり、彼が気がついた時には、小人たちに縛られている。彼の貴い髪はいくつにも分けられて、土面に打こんだ沢山の杭に、嚴重に縛りつけられている。

小生はこれを洋子に応用する。この部屋は和室にベッドが置いてあるから便利だ。疊の上に彼女をひきずりおろす。彼女の亜麻色の美しい髪を自由にするのはたのしい。十、乃至十二に分けて縛る。杭の代りになるのは四

寸ほどの長さの、太い鉄の針である。ついでに告白すると、この鉄の針と云うのは、実は疊屋が使う道具の一つ。小生疊屋に頼んで入手したもの。

この太い鉄針を彼女の頭の辺りの疊に恰好よく、ズブリ／＼と十本ほど突き立てる。この針は頭が丸い輪になつているから、これに髪の毛を通して結べば、絶対にほどけると云うことがない。根気よく髪の毛を分けては、一本／＼結びつける。

誰方でも、まあ一度やつてごらんない。洋子の白い顔を中心に、髪の毛はひつばられて、放射状にピンと張る。顔は真上を向いたまゝ、ソヨとも動かすことが出来ないのです。両手も左右にひらけて固定する。自由なのは足だけ——。下半身は動いた方がいゝからね。

その足も動かすとは縛られた髪にひいて痛いらしく、洋子は死んだように天井を見ている。さしづめ、疊に磔られた美女と云うところ……。

これで大抵のサチ家なら、羽毛でくすぐすり責めと云うところだが、小生には又々変つた

趣味がある。羽毛なんて陳腐だからね。小生が行うのはもつと文学的、心理的だと云いたい。磔られた洋子の傍に腰を下して、おもむろに読聞。と云つても、音吐朋々、彼女に読んで聞かすわけです。その本なるものは、和漢洋を問わず、常に我々の肺腑をつく奉本の名著。コッテリと脂の乗つた、喋々喋々の漏物を、気分たつぷりに読み上げる。

この読書の効果も、また小生を堪能させずにはおかない。洋子はデリケートな、そして人一倍成熟した豊満な肉体の持主である。彼女の全身を流れるマゾの血は、今までにさんざん漏れられ、揉まれ、その悦虐の快感は、ほんとに極点に達しようとしている。

身動き一つ許されぬ被虐に甘んじて、その上に否応なしに聞かされる奉本のみだらな挿写——。洋子の白い胸が喘いで、喘いで、磔られながら下半身が空しく何かを求めている。

「あゝッ！」と呻いて、やがて洋子は、その美しい女体を自ら……。

こうして私達の秘執戯は無限に盡きない。



レスボス通信

——女性だけの秘密な愛のサロン——

私は姉達が、自分の部屋でおこなっていた行爲を覗見してしまいました。布圍もしかずただこたつの中で抱き合ひながら、……何かしていたのです……

園村 恵子

水澤 深雪 畫



今年は随分、秋が短こうございましたかね。ひさしぶりに、何日か、それこそ、目のさめるような秋ばれの日が続いたと思ひましたら、それも束の間、今日あたりは、もう、すっかり初冬の気配となつてしまいました。ひさしぶりに、おこたを入れて、その上で紅茶でも飲んでおりますと、何がなし、人肌恋しくなつて参ります。可愛い子呼んで、何もしないで、ただじつと、眼と眼を見合つていたいような……そんな氣がしますもの、この陽氣のせいなのでしょう。

さて、今月のお便りは、先ず、最初に、珍らしいお便りを紹介致しましょう。

この欄に通信をはじめてから、男のかたのお便りも、今まで、相当ありましたが、そのほとんどに、御返事は、さしあげませんでした。氣がすすまなかつたからです。おゆるし下さいませ。

これから御紹介するお手紙も、その男の方からの手紙の一つですが、書いていらつしやる事が、私の心にのこりました。……やつぱり御返事はさしあげませんでした、私に長いお手紙を下さつたおれに、それについて書

いてみたいと思うのです。

私ひとりて秘めておくのが惜しい気がするのでも……。でも、その方は、絶体に発表したいでくれと、お断りになつていらつしやるので内容だけ、私が、敷衍しながら、記すことにしますわ。

お名前をかりにKといたしますと、K様は男のかたなのに、レスボス行爲に、とても興味をもつてると告白していらつしやいます。恋人がいらつしやつて、その方とお附合しているのに、普通の男女としての交際には、そんなに関心をひかれていらつしやらないのです。そして、女と女、すなわちレスボスの事を考えると、楽しく、興奮なさるのでつて。

そして、私の通信をよんで、「どんなに興奮しました事か、御想像下さい。お恥かしい事ながら久方ぶりに夢中で、自己満足してしまいました。最近得た事のないような最高度の陶醉を味わひ晴々した気持ちになりましたと書いていらつしやいます。私、どうしましたよう。恥かしいような面映いような、ヘンな気持ちですわ。私の通信が、男のかたを興奮させたなんて、きくと。……

さて、K様がどうしてレスボスにそんなに

興味をおもちになるようになったのか、それは、K様がお姉様の行動によつて、性を目覚めさせられた事にあるのです。K様が、中学二年の頃、そのお姉様は、女学校四年(十八)でいらつしやつたのですけど、その頃同級生のM子さんと、又、下級生R子さんなどを相手にレスボスをなさつていらつしやいました。

「私は、あるとき、姉達が、自分の部屋でおこなつていた秘密行爲を覗見してしまいました。布団は敷かず(ひる間ですから)ただコタツのなかで、抱き合いながら、何か夢中になつていたのですが、私は、それをみて非常におどろき、不思議さに打たれました。その後、その行爲の意味も分るようになり、姉が女学校を卒業するまで、度々、姉達の行爲を見、私自身も、夢中にさせられたのです」

北国の都会の女学生がおこたのなかで、夢中でレスボスにふけつてゐるそれを、からかみのすき間から、のぞき見して、興奮する中学生の姿——なにか、美しい秘画でも思ひおこさせるようなシーンですわね。

「私は、その行爲を一度もいやらしいとか、不自然だとか考えた事はありませんでした。

むしろ美しい清らかな行爲と思ひ、最後の疲れ切つた時の姿態などは、誠に美しく思ひ、その肉体をもつてゐる姉達をうらやましく思つた位でした」

こうして、お姉様達の行爲を見ることによつて、性を見せめさせられたK様は、それを偶像化し、……Obedienceの時でも、先ず頭にうかべるものはレスボスの姿態となつてしまつたのです。……まして、K様にObedienceを教えたのが、そのお姉様のお友達M子さんであつてみれば。……

「この人は、姉とのときでも、積極的に可愛がる方でしたが、(姉はいつも完全に受身でした)姉に対すると同じように、私にしてくれたのでした。全く肉身の弟に対するようなやさしさで、いいえ、それ以上にして、私を愛撫してくれ、始めての悦びを与えてくれたのです……」

レスボスの愛を行うのと同じようにして、年下のつばみのような男の子の肉体を可愛がるM子さん。——その気持分るような気がします。M子さんは、レスボスでは、何かあきたらなかつたのです。もつと、強い、もつと男らしいものが欲しかつたのです。でも、本当の男性は、飾く、そして、その積極的な性

格の故にも、女の子みたいな男の子が欲しかったのですわ。——それにはK様が、丁度よかつたのです。レスボスから、異性の愛へとうつつて行く娘の、一つの姿が、このM子さんに見られるような気がします。

恵子だつて、若い、きれいな男の子の、ぱらのつばのような肉体なら、そんなにいやじやありませんわ。……

「併し、M子は、決して、最後の関係は欲求しませんでしたし、私も決してそれを望みませんでした。只それだけで、お互いに充分満足だつたのです」

「その後、私は、大学を卒業して、社会に出男女関係も多少経験したのですが、何となくけがらわしい気持がして興味がなく、M子から受けたような最高頂の悦びを得た事は一度もありません」

そして、レスボス通信をよんで、私を知り私をM子さんのような方ではないかと思つて私に、恥かしい告白をなさる決心をしたとおつしやつていられるのです。

「優しい御手ずからの御指導を受けることが出来なくても、せめて恵子様個人としてのお便りでも下されば、それによつて、私が自己満足する事は……」

恥かしくて書けませんわ。

専門家のかたは、こういう男のひとをどうお思ひになるでしょう？ 私には分りませんが、何だか、お気の毒で、出来るなら、おなぐさめして上げたいような氣も致します。

男のかたなのに、男と女の間には、興味をもたず、レスボスにのみ、興奮なさるといふお方。……

むずかしいわ。とても大変ね。——だつて女は、たとえ、レスボスをしていたとしてもそれを異性のかたの前であけすけにしたり、見せたりは、決してしないでしようから。

高嶺の花を望むような事なのではないでしようか。

そう云えば、私、こんな男のかたのお話しもききました。

ある男のかたと仲良しになつたひとが、私に話してくれた事なんですけど、……その男のかた、四十いくつで、ある会社の課長さんなんですけど、そのひと、とても変つていゝんです。どうかわつていゝかと云うと、つまり、普通の愛の仕方では、全然満足なさらないんです。そして、「君、ひとりで、楽しむこと、あるんだろ？ 娘のときなんか、へんな面みて、ひとりで、たのしんだんだ

ろ？……そんな、きれいな顔して、おすまししていても、おね床のなかでは、ひとりで、うれしがつたんだろ？」

なんて、しつこくきいて、それを、自分の前ですて見せて、つてせがむんです。それで、そのお友達、とうとう、決心してひとりで、楽しむのを、お見せしたんです。……そうしたら、それを見ながら、自分です。……

本当におかしい話でしょう？ そんなの、つまらないし、勿体ないみたいな感じるけど、その男のかたにとつては、その方が良いらしく、それからとつと、そればかり要求なさるといふ事です。

私、このかたも、前のK様と同じような心理のかたなのかと思うのです。……青年のころに、女性のレスボスやOnanieについて、色んな空想をなさつて、それが、四十いくつにもなつても残つて、見たいと思ひになるんじゃないかしら。……

男のかたの心理つて、分りませんが、或はこんな男のかたが、案外多いのかも知れませんわね。

おやおや、レスボス通信なのに、男のかたのお話ばかりしてしまつたわ。恵子、案外

男の方が好きなのかも知れない……なアんで。——冗談はさておいて、このK様をおなぐさめしてあげる方はいないかしら。東北の方ですけど、文通だけでもしてあげようという方ありましたら、お取つき致します。

二

秘画と云えば、恵子、この間、あるところで、大変なもの、見せて頂いてしまいましたの。

「いいものを見せてあげましょうか」

とおつしやつて、一尺に七寸角くらいの桐の箱をもつていらつしやつたときは、こつと品ぐらゐに思つて

「ええ、見せて頂戴」

なんて、顔をあからめずに云つてましたの。

ふたをとると、なかがいくつにも仕切つてあつて、黄色い布に、何かが、つつまれてあつたんですけど、それでも、まだ気がつきませんでした。

きれをとつて、「ホラ」と、一つ一つを見せられてはじめて、

「まア」

つて、真赤になつちやつた仕末。うかつな

恵子でした。

みんな、色も見事なべつこうでたんねんに作つてあつて、いくつか、そろつてワンセットになつていました。

「まア、いやですわ。……こんなモンですの？ 何だか怖いみたい」

てれかくしに、そんな意味の分らない事云いながら、手にとつて見ましたけど、あんまり、うまく、似せてつくつてあるので、ユーモラスな感じがしました。

それが、うごきの少しもない、かたい物質である爲か、おそろしさは、なく、ヘンにそそられました。だつて、わざとしわなんて作つてあるんですもの。……べつこうの美しい縮模様がついて、まるで見事な美術品のようでしたわ。

「どう？……」

言葉もなく、ただ、



手でふれて見ているだけの恵子に、そつと、からかい気味に、そんなことをきくのでした。

大型が一つ。これは、根に、ひもがついてました。

それから、指につけられる小型が二つ。（それがちゃんと型だけは一人前なんですよ）それから私達には用のない、男のかたが、つけるものが三つ。

それから、パチンコの玉位の銀製の玉で、振るとかすかに音がするものが二つ。……これは、話にはきいていましたけど、案外に重いものでした。

これだけは、ちよつと、こわくて、いやでした。こんなのいけないと思います。ちよつとも良くないと思いますし、もし、良くないのなら、なつたで、一層こまると思うのです。

惠子、小型のが好きでした。なんだからそのまま頂いてかえりたいようで、勿論高価なものでしょうから、頂くわけには行かないと思いつながら、離しがたく思いました。

すると、そのかたは、私の心の動きを見定めたように

「ついでに、こういうものも見せて上げましょうね」

とおっしゃつて、巻物のように表装された肉筆の絵を、二つほど、ひらいて見せて下さいました。

表装は古めかしいのですが、髪型などの絵の感じは、昭和初期頃の感じなのです。紙に日本画の材料で、たんねんに描いてあります。一つの軸に、六懸ほど。……も色と白

い色の絵具が、目にしみるようでした。日本画家の筆でしょうか。

でも、そのときの惠子は、そんな事を考える予備もなく、そのすばらしさに、

「はアッ……」

と云つて、ハンカチを口に当ててしまいま



した。

何だか目がちらちらして、……そんな見たの決して、はじめてじゃなかったのですけど、その絵が、表情と云い、姿の描きかたと云い、いかにも本当らしく、強い力をもつて

いることと、それから、セツトの品をみせられたあとだったので、それで一辺に血が騒いでしまつて、……

もつと平気な顔で、何か云わなくては恥かしいなと思いつながら、……どうしても口を利くことが出来ず、涙が出てくるように感じながら、ただ、ぼーつとして、ひろげられた絵に見入っていました。

もう一つの巻物の方は、レスボスでした。レスボスと云つても、きつと、男のかた目当てに描いたレスボスなのでしょう。いかにも、男のかたの官能をそそるように、あらわに、みだりがましく描いてあるのです。……

困つてしまいました。こんな所で見ると、はいやで、お家で、そつと見たいように。……

すると、そのかたは、惠子の肩に、そつと手をかけて、

「試してみたくない？ 惠子さん……これ」

その品をとると、そつと、私に、感觸を味わせようとなさるのです。

「いやですわ。こんな所で。……」

と、とつさに云つたのですけど、肩を引か

れると思わず、ひさをくずしてしまひました。

そのかたは、今まで、親しいお附合いをしたのですが、氣持にへだてがあつて、そんなこと一度もない仲だつたのです。

それが、思ひないものを見せられたことから、ふと、冗談みたいに……

そんなことで、そんなになつたのが、とても恥かしくて、しばらくしても顔もあげられない氣持でした。

「好き」とか「きらい」とか云う事からではなく、ただ、珍らしい品をみせられて、その好奇心から、というのでは、あまりに、軀だけの事のように、恥かしかつたのです。

でも……本当にそうだつたのですから仕方ありません。……あまりに、それらが美しく可愛ゆく出来てたので、どんなかしらつて想像してしまつて……つい、負けちやつたのです。

恵子位のとしになると、そんな氣持も時におこるのでしょうか。……

その夜、家の床のなかで、そのときのことを考へて、恥かしいような、哀しような氣になるのですが。――

ほかの、もつと近代的な製品は見たことも

あり、恵子も、もつていますが、あんな川柳にあるようなのは、はじめてでした。

江戸の末期位につくられたものじゃないかと云うのでした。それじや、或は、ろうたけた、大奥の御女中さんなんか、ふれた事もあつたかも知れません。そう考へると、何だか、血が通うような、なつかしい、懐古的な氣持になります。

べつこうと云うのは、かたくて、とても細工のしにくいものだそうですけど、そういう材料を使つて一生懸命つくつている職人の方の姿を思ひうかべると、微笑ましいような、すまないような。――

もつと重いかと思ひましたが、案外軽くて……でも、あんなものに馴れたらいけないわね。

三

最後にお便りを二つ。

○まだ、御返事をさしあげてないかたがいます。とても氣になつてゐるのですけど、恵子は、アルバイトのお仕事もいそがしくて、そのひまには、お馴染になつた方にお手紙を書かなくちやなりませんので、つい、おくれしてしまいます。おこつていらつしやるのでし

ようけど、必ず御返事しますから、許して頂戴。

いつも氣にかかつてゐるんです。でも、恵子とつても氣まぐれ屋さんのよ。だから、カンニンして頂戴。あんまりたくさんさんのひから、お手紙頂くので、つい我儘が出て、お返事書いたり、書かなかつたりしてしまふのです。許してね。

○それから、今度、この雑誌の秘蔵版つて云うのが出るそうですけど、それに恵子はレズボスのテクニクのことを書きました。たのまれて広告する訳じやありませんけど、恵子を愛して下さる方、恵子の通信に興味をもつて下さる方は、その文章もよんで下さるとうれしうございます。

愛読者通信

川村加代様十一月号誌上の女の方御紹介下さい。文通から始めたいと存じます。尙小生、二十四歳の大学生です。写真、枕草紙のコレクション多少あります。

同好の志と文通致したいと思ひます。成るべく年上の方（男女共）を希望致します。

（前橋市国領町一八三養心寮 大河内春雄）

女 装 ま に あ の 手 記

現 代 怪 猫 傳

口紅を耳まで塗り、眼の周りに朱を入れ髪を亂して……見たな
あ……と、私はベツトから逃がれようとする金模の髪を掴んで
引戻しカー杯を飛ばしました……

相 磯 秀 雄

八 木 静 男 畫



皆様方は昔から日本に伝わっている化猫の講談をお読みになつた経験がございませんでしようか？ 又、それ等の講談や神史の類を脚色した化猫の映画を、御覧になつたことはございませんでしようか？ 妖異で、華美で非現実的で、そして甚だしく倒錯的な雰囲気に満ち満ちたあの化猫の物語を……

それ等の物語には必ずお家騒動が附物で、忠臣蔵入り乱れ、陰謀と術策が綱の目の様に張り巡らされている時、年経た猫が何時の間にやらお姫様を喰ひ殺し、自らその美しいお姫様になりすまし、夜な夜な人をとり殺す、と云う。あの例えようもなくロマンチックなお話を、皆様方は一体どの様に感じてゐたのでしょうか？ 私はこれから、私自身がその化猫になつた経験をお話しようとするのです。いいえ、化猫ではございません。化猫が化けた姫君になつたのでございます。男の私が？ ええそうです。舞合ではございません。現実なんです。化けたものに化けるなどと云つていると、話が混み合つて参りますから、先を急ぎましょう。

化猫になり度い。そして、化猫が化けたお姫様の様に美しくなり度い。そういう願望が私の心に芽生えはじめたのは、もう遠い昔。

少年の頃からでございました。

私は大阪に生まれました。父は薬種問屋をやつて居りました。インテリでかなり難しい本ばかり集めている父の蔵書の中に奇妙なコレクションがございました。講談本です。二百冊に余る大小とりどりの講談本が。金文字の人名録や文学全集や部厚い薬学書の積まれた書庫の中に、いとも貴重そうに整頓されているのです。そして、いつの間にか、幼い私の魂が魅せられてしまつたのが、その講談本であつたのです。

ありとあらゆる講談本を片端から私は読みはじめました。そのうちに、私は講談本の持つてゐる一種病的な雰囲気にすっかり夢中になつてしまひ、段々怪奇な物語を追い求める様になりました。私の最も趣向に適つたものが怪猫の講談です。怪猫さえ出て来て美しい姫君に化けてくれれば、もうあとは主人公がどうなつても、話の結末がどうについても、私には一向構わない事でした。

『鍋島怪猫伝』 『有馬怪猫伝』 『佐賀の夜櫻』 『白蛇物語』 いろいろありました。その他、狐や狸や蜘蛛も美しい女に化けたりしますが、怪奇な美しさは化猫の比ではありません。『白蛇物語』を読んだ晩、昂奮して明け

方まで眠れなかつた事を、今だに覚えて居ります。

奥深い御殿にすやすやと優しい寝息をたてて寝ていた姫君が、枕元に鼠が現れると、むくむくと起き上り、恐怖に動けなくなつたその鼠を、細く清らかなる腕でむすむと掴まえ、忽ちもありもとやをたてて食いはじめる。

——その件りを、私は何度もしつ返し読んだのですが、眼をつぶつてゐると、その情景が頭に浮び、しびれる様な恍惚感にひたされるのでした。遂に私は暗闇の中で寢床の上に起き上り、自分がその化猫になつたつもりで何度もしつ返しの細く清らかなる腕を伸ばして鼠を捕える動作を繰返しはじめました。自分は今美しい姫君になつてゐる、而もその姫君は化猫が化けているのだ——そう思うだけで、何故私はあの様に一晩中妖しい陶醉にひたつていられたのでしょうか？

『姿は優しきお花御殿のお豊の方なれど、口は耳まで裂け、竹を削いだ様な二つの耳が乱れた髪の間から現れ……』 その様な説明も今なお私の胸に熱く燒きついてゐる一節でございます。美しい桐櫓を踏みしだき、髪ふり乱したお豊の方の顔に、ピンと立つた猫の耳が生えている挿絵も共々に……

年経た猫の化けた姫君の美しさ——それは姫君そのものの美しさではなく、重たい黒髪と金糸縷の衣裳の中に、妖異な怪獣が女性の神秘を匂わせて棲まっている倒錯した美しさでございます。神通力と云う超絶的な魔力を使つて、人間にはそれと知られず、なよ／＼と手馴やかな女性の呼吸をしている化猫が、一度度身振ひして化身の術を解けば、嵐を呼んで空中に舞い上る凄まじさは、私にとつては、この世ならぬ感動的な光景でございます。

化姫様になりたいその私の願望は、人間界に於ける仮装された女性——即ち男性の女装に興味を向けはじめたのでございます。

弁天小僧菊之助、女勘助、九紋龍の長次等の講談界の英雄や、或はとりかへばや物語の兄と妹が夫々男と女をとりかえて生活する平安朝の物語、江戸時代の女形、常に女装していたサルダナバラスというギリシャの王。私はこれ等の男性の女装に、猫が姫君に化けるのと相似した陶醉を感じました。猫がどんなに巧みに姫君に化けたとしても、鼠を見れば動物本能をどうする術もなく、鋭く正体を暴わす様に、男性がどんなに美しく女性に扮したところで、男であることには変りはない。

ません。けれども、その邊には包み終えない男の性を、巧緻な扮装と華麗な衣装の下に隠し、飽くまでも女性らしい身ぶりや表情に生きようとする悲しい仮面が、どんなに私の夢をふくれさせたのでございましょうか。

女装をしてみたい。私の現実の願ひに变化して参りました。けれどもその願ひをすぐさま実行に移せる環境には私は居りませんでした。私はまだ年若く、秘かなる己が願ひを自由に実現出来る身分ではございませんでした。

二十歳の春でございました。

女装をしたい——その願ひは、一刻も早く両親の眼の届かない所へ行くことでございましたので、私は就職先を外地に求め、台湾の或る製糖会社に就職いたしました。

私の任地は台北の近郊の小さい田舎町でございました。

徴兵検査までの短い期間——太平洋戦争は既に破局に瀕して居りましたが、年来の希望を果すのはこの時とばかり、私は給料のすべてをはたいて、女になる爲の諸道具を買ひ集め始めました。

私は独身ながら、幸いにも小さな社宅を一軒あてがわれましたので、総べは都合よく

参りました。私はなるべく友人を制限し、一室には嚴重に鍵を掛けて、夜だけその部屋に入るようにしました。その部屋には、鏡台、化粧品、女の衣裳、髪——私が女になる爲の必要品が次第に調えられて参りました。それと同時に、私の化粧の技術や着付の仕方まで上手になつたのでございます。

永い間憧れていた女装の悦び——自分の肉体をモデルとした魔性の夢——それがとうとう実現したのでございます。私は若く、美しく、決して本物の女性に劣らない化生の妖女を、己が鏡の中に発見したのでございます。

半月型にほかされた形の良い眉、附睫毛の翳も深く、大きくうつとりと開かれた双つの眼、惱ましくぬめ／＼と光る牡丹花の様な唇、重たくふつさりと肩に垂れた髪——これが私の顔でございましょうか？　これが男の顔でございましょうか？　少し抜き気味にした襟から胸へかけた線は、ふつ／＼と盛り上がり、薄桃色の半襟の下には、やわらかく温い双の乳房が微かに息づいている様でございませう。胸をくびれる程きつく緊め上げた厚帯の下には、肉付きのよい腰がむつくりとした曲線をみせて居ります。動く度に少しづつこぼれる長襦袢の緋の色、清潔な白足袋これが私



の姿なのでしょう？　これが男なのでしょう？　私は生れながらに女性であつたのではないのでしょうか？

私は永い旅路を終えた旅人が休息するよう
に、心のすべてを解き放つて、鏡の前に蹲まつ

て居りました。そうしていると、胸の底からつき上げてくる様な喜悅と、全身の感覚がすべて麻痺してしまふ様な戦慄が湧き上つて来て一切の外界が悉く甘く匂わしい色彩に變りはじめてゆくのでございます。うつとりと体が

溶けてしまふような陶酔感の中に、私は己が吐息の深さを自ら味わうのでございます。

私はこうして女装の満足を得ましたので、部屋の中で演技に、化猫の幻想を伴つて科しも取り入れるようになりました。けれども

この試みは實際にやつてみると、大した喜びを生みませんでした。口紅を耳まで塗り、眼の周りを青い絵具で隈どり、髪振り乱すといった扮装は、私のナルシスムスにびつたりとはしませんでした。私は、化猫が美しい女に化ける事と、妖異な怪獣の正体を露わして人を喰ひ殺す事とを、全く同一の連関性の下に考へて居りましたが、これは實際に當つては必ずしもそうで無い事を知りました。美しい女に化ける喜びが深ければ深い程、私は醜い顔に己れを愛する事は出来ませんでした。マゾヒズムもサジスムスも相手がなくてはなりませんし、相手が無ければ空想をしてでも対象を必要とします。私はそういう対象を一切必要としませんでした。私はただ自己陶酔の夢にのみ生き、他の愛情を求めようとはしませんでした。私の恋人は鏡の中に居る第二

の私なのでございました。私の中にあるマゾ性もサド性も、私に化煙の夢を完成させてくれたあの人が現れるまでは、何も知らないで眠つて居たのでした。

さて、その様な私の秘められた性癖は会社の人達に少しも気ずかれはしませんでした。私は友達交き合いが些かあつさりすぎて、癖にはありませんが、むしろ当りは柔かく品行は極めて方正でしたので、評判はなかなか良い方でもございました。私は同僚達から何も知らないお坊つちちゃんとして取扱われ、彼等の眼みの爲に、台北の遊廓にしばしば無理強いに連れてゆかれたものでした。けれども、私は女には指も触れず、いつも一人こつそりと遊廓を逃げ出して参りました。それは私が女を愛せないからではなく、唯、そうした不潔な女と交渉を持ちたくなかつた丈なのです。私は男性として人並に結婚しようと考えて居りました。

或る時、会社で宴会のあつた時、私は女装して余興の席にのぞみました。自分の美しさを人に見て貰いたいと思つたからです。けれども、そのほのかな願ひは、私に求愛するある男の爲に忽ち掻き乱されてしまいました。私は女装をこそ悦びとしてはおりますが、男

に愛され度いという願ひは少しも無いのでございます。己が美しさを見て貰い度い——それは愛され度い願ひの無意識な現れであるかも知れません。けれども、男の仮装した女——『怪猫の化けた女』——その姿らぬ私のモチーフは決して私を『愛される女』には変性させておりませんでした。『誘惑の発作』は決して『求愛の要求』には通なつていなかったのでもございます。男性から求愛された私は『女性的な男性』、『妖艶な秘密』を持つた男性として見られている訳です。とするならば、私の『化身の術』は既に破れ去り、私は白々しい醜態を彼の前に横たえた事になるのではないのでしょうか？ 正体を見破られた怪猫が、何でも何時まで叶わぬ化身を装っている必要がございましょう。若し私が己が魔術を誇りたいならば、私は夜こつそり宿舎を抜け出して町に出で、行き交う日本人や台湾人の私の女装美に対する何も知らない嘆賞の眼をこそ娛しむべきであつたのです。魔術の悦びは、術者にとつてはその秘匿性の中にこそ存在するのでございます。種明しはしてはいけないのでございます。私は二度と再び人にそれと知らして女装は行まいと考えました。随分理窟つばい文章になつてしまいました。

て、申訳ございません。

私の短い悦楽の夢は、やがて軍隊に入隊すること破られました。苦心して買い集めた女の諸道具を私は人知れず処分して、台北の部隊に入隊いたしました。

そして十ヶ月——日本は敗戦となりました。只一人奮門を出た私の行先はもと居た製糖会社でございます。

私は重い梱包を担いで、南国の太陽の直射する台北の市街を暗い落莫とした気持で歩いて居りました。外地での敗戦、暗澹たる前途の希望——私の足は機械的に駅へ向つて動いておりましたが、押しひしがれた私の心は、一刻も早く知己に会いたい人恋しさとは別に絶望的に己が身を破壊に叩き込みたい衝動にも駆られておりました。そうした私であつたからこそ、私は易々とあしたの方向へそれてしまつたのでしょうか？

私は駅の近所の汚いマーケットでビーフン（米粉）という米粉で作つたうどんを食べました。それが運命であつたのでしょうか、私が化煙になる経験を得た……

駅の前には汚らしい苦力や、贅飾つた台湾婦人がおびただしく群れて居りました。丁度上りの列車が到着して、どつと人波が広場

に溢れ、客待ちの人力車が一齊に寄り集まり、声高に呼びかけて居りました。

花模様のチョンサー（長珍）を着た若い台湾娘が、人力を呼びよせ、蹴込みに片足を掛ける足の線を、乾いた心の中にも「美しいなあ」と眺めながら「おや？」と私は思わず軽い声をあげました。

「金桃！」

そうです。吳氏金桃に間違いでございませぬ。日本が戦争に敗け、台湾が殖民地から解放されたからでしょうか、いつの間にかあんな立派な服装になつて……

「金桃！ おおい金桃！」

走り去ろうとする人力車を呼びとめて、私は思わずビーフン屋の店から駆け出して居りました。

「あら、相識さん！」

金桃は止まつた人力車の上からにこやかに笑みかけました。女にしては凛々しい眉、鈴を張つた様な眼、丹花の唇――まぎれもない金桃でございませう。

「やつぱり金桃だなあ、なつかしいねえ」

私は息を弾ませながら、たつた今までの重苦しい気持をどこかへ吹きとばしてしまいました。

金桃は私が勤務していた製糖所に、私と机を並べていた女子事務員でございました。

金桃は日本婦人と台湾人との混血でございませう。彼女が台湾娘にしては珍らしく日本人の女学校を出、聰明な教養を身につけていたのは、日本人を母親に持つていた事と、或る一時期の吳家は富裕だつたせいもございませう。その頃、吳家は砂糖の貿易で手広い商売をして居たのだそうですが、金桃の父親が博賭に耽り、家産を傾け、金桃が私達の砂糖会社に入つた頃は、既に二進も三進もゆかなくなり、吳はローモア（和名雷魚）もちんの類、不頼漢の意）の仲間に入り、零細な生活を営んでいた模様でございました。吳は服装こそ汚ならしい恰好をして居りましたが、人品や態度には何処か犯し難い凛としたところがあつて、この人がローモアの仲間に入つて賭博に身を持ち崩している人だとは一寸考えられませんでした。

金桃は私より二歳年上で、新入社の私が彼女と机を並べた時から、いろいろ身のまわりの事に気を配つてくれました。彼女は日本人を母親としている所爲か、台湾人に特有のあの卑屈で陰険な態度は少しも見られず、むしろ己が気品と聰明に誇りを持つて位でございませう。

ございました。私と彼女とはよく話が合い、いつか互いに恋情に似たものを感じ合つておりました。けれども、もうその頃私の女裝癖は最高潮に達しており、私にはそれ以上金桃と近づくことを憚つておりました。金桃が私の女裝症を理解してくれるかどうか分らなかつたからでございませう。

間もなく私は軍隊に入り、金桃が会社を辞めたとか、辞めさせられたとかいう噂を聞きました。

「相識さん、これから会社へお歸りになるの？」

「うん、そうするしかないじゃないか」

「日本人は皆内地へ還されるんですつてね」

「そうだろうね、ここはもう中国だから」

「もうお会い出来なくなるわ。どう？ これから私の家へいらつしやいませんか？ どうせ今日すぐ会社へ行かなくてもいいんでしょ？」

「うん、それはそうだけれど……」

私はためらい乍らも、良い生活をしているらしい金桃の家を覗いておくのも悪くはないと考えました。昔と違い、私達は敗戦国民であり、彼女達はこの台湾の主人となつたので

す。

車が走り出すと、私はとんでもない奇遇を
している様な気がすると同時に、何か素晴らしい
ことに遭遇しそうな期待に胸を躍ませなが
ら、前の車の金桃が時折にこやかに振り返
るのを覗き込んでおりました。

余計な説明は書かないことに致しましよ
う。私は一刻も早く、化姫となつて金桃と戯
れることを書き度いのでございます。

金桃の邸は立派でした。応接間、食堂、サ
ンルーム。そして一番懐し気な雰囲気におま
れているのが、大きな鏡を壁に嵌めこんだ金
桃のベッドルームでした。女中が二人、父親
は不在でございました。金桃自身は一度結婚
をしたが、離婚し現在は独身であること等、
いろいろのことを私は金桃の酌いでくれる葡
萄酒に酔を発散させながら、聞くともなく聞
いて居りました。私は何ヶ月も飲まなかつた
酒の味が美味く、そしてそれ以上に、殺伐な
環境に倦んだ私には、金桃の化粧した顔、華
かな衣裳、快い香水の香り、あらゆる女性的
な雰囲気、じわ／＼と五感の隅々にまで沁
みわたつてくる様な云い難い刺激であつた
のでございます。

「何でもそ
んなに見
ていらつ
しやる
の？」

「いや、

何でもな
いさ。た

だ貴女の
衣裳がと

ても綺麗
だからさ

その様

な会話を

ら、私の

女性美に

讚がはじ

まり、金

桃が俯つ

ての私の

女裝姿を

思い出し

もう一度

女裝した

私を見た



いと云つたとしても、不思議は無いでございましょう。その時私は何の煩らいもなく、自分の女裝愛好症とあのロマンチックな化姫への夢を告白する気になりました。それは、もはや二度とは逢わないであろう異国の女性に己が汚辱と淫蕩を怒いままに懺悔する刹那的な快感でございました。懺悔の快感は赦しを得るまでの戦慄にあります。そして、赦しとは関手が己が罪に同意し、積極的に己が罪に参加することではないでしょうか？ 私は告白の不安の底で、金桃が私の汚辱と淫蕩に参加してくれる事を、ほのかに期待して居たのでございます。

金桃は気品の高い教養ある女性でございす。彼女はにこやかに笑いながら云いました。「面白い趣味ね、相磯さんは……。でも、私の趣味も変つているかも知れないわ。今夜お泊りになっていらつしやいよ。私、女裝のお手伝いをしてあげるわ。その代り、私の云うこともきいてくれないと嫌よ……」

赦しは夜まで持ち越される事になりました。金桃は私の爲に跡跡の台北市内をあちこち歩いて、洋髪の髪を一つ買つて来てくれました。

夜——南国の夜は黄昏を持ちません。日が

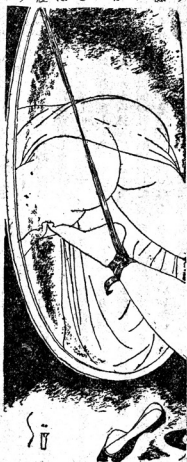
入るとすぐ潮の様な涼しい音が、聞かれます。

入浴した私達は金桃の寢室に入り

ました。

私は入念に髪を剃り、脛毛を除き、すべ／＼とした肌を整え、金桃の下着を身につけました。金桃に手伝つて貰つて化粧しながら、私は何ヶ月ぶりに、あの甘く懺ましい恍惚を味わいました。私は以前よりも肥り、ふつ／＼とした頬は、日焼けこそしておれ、なめらかに白粉の微粒子を吸いこんでゆきました。化粧が終わると、私は晝間金桃の着ていた華かな長着をきて貰いました。する／＼と肌を擦るあの上質の絹の感触は、異国風的情緒を伴つて、私を未だ知らない官能の饗宴に誘いました。

さて、私の女裝が出来上りますと、金桃は妖しく光る眼付で私を見つめながら云いました。



「きれいなお姫様が出来上つたわ。まあ、どこから見ても女だわ。あなたも女みたいな気持でしよう？」

「ええ、そうよ。私女の扮装している間は女と同じ気持ね。でも、男に愛されたいとは思っていないの。……あの、貴女の好みつてどんなの、さつき云つてらしたでしょ？」

「私のね……」

そう云つて金桃が持ち出して来たのは、数本の革紐と調教用の鞭でございました。

「私はこれで縛つて貰つて貰いたの……」

「えい！」

私はびつくりしてまじ／＼と金桃の顔を眺めました。マゾヒスムス！ この凄々しい気品の高い容貌のどこにマゾヒスムスが潜んで

いるのでしょうか？

「びつくりなさった私サジズムも持つているのよ。でも、私化猫の話を伺つたでしよ。それで、貴方と共同演出で面白いくことを考えたのよ」

——その彼女の演出をお話申し上げますよう

……

「タマや、お前今までどこへ行つていたの？ 私淋しかつたわ……まあ、お前驚えているの？ もつとこつちへいらしやい」

「お姉様、私も淋しかつたわ。ねえ、お姉様あたくしもうどんな事があつてもお姉様から離れませんわ。ねえ、もつときつく抱いて」

ベッドに腰を掛けて、金桃と私はこんな話を交します。二人は女同志の同性愛の様に、唇を寄せ、互に胸と胸をさぐり合います。ベッドがきしむ程、二人はもつれ合い、戯れ合います。

「タマや、お前は私を愛している？」

「愛してるわ、食べてしまいたい度い程……」

そのうち金桃は私の秘密を探り当てます。

「まあ！ タマお前は……」

「まあ、お姉様なあに……」

そう甘つたるく云いながら、私は口紅を耳まで塗り、眼の周りにも朱を入れ、眉毛を太く描き直し、髪を乱しはじめます。

「……見たなあ……」

私はベッドから逃げようとする金桃の髪を掴んで引き戻します。

「うふふふ、見たからには生かしてはおけぬ。喰い殺すぞう」

そう叫んで、今度は金桃をベッドから突き落します。金桃は台語で何か叫びながら、床を這つて逃げようとしています。その肩に、些か残酷な気がしましたが、金桃の註文がありますので、力一杯革の鞭を飛ばしました。

「むうつ……」と金桃は呻いて、床にひれ伏しました。

「大丈夫？」私は思わず彼女の上にかがみ込んで声をかけました。

「いいのよ。もつと打つて！」彼女は答えました。

「そう……」そう云つて顔を上げた時、眼の前の鏡の中に、私は異様な姿態をした自分の姿を発見しました。姿は美しい女の姿です。そして、その女が髪を振り乱し、あらぬ姿で美しいいけにえの前にかがみ込んでいたのでございます。鏡を見た瞬間の私の顔は決して醜くはありませんでした。急いでした扮装の爲、女の顔が消えきらず、一種の妖しい雰囲

気を醸し出しておりました。私はどきりと胸の鳴るのを覚え、あの忘れられない一節を思い出しました。『姿は優しきお花御殿のお豊の方なれど、口は耳まで裂け、竹を削いだ様な二つの耳が、乱れた髪の間から現れ……それは今の私ではないでしょうか？ 怪猫が正体を暴露した瞬間の感動的な光景——私が永い間試みて得られなかつたあの一節の表現……それは、こうして美しいいけにえを眼の前にして初めて完成されたのでございませう。』

私は夢中で眼の前にさし伸べられている金桃の白いうなじに噛みつきました。私は歯を当てたまま、狂暴に光る私自身の眼を、いつまでも鏡の中に見据えておりました。私のお芝居的な演技は、この時からまるで別物になりました。私は己が美しい姿態の中に一匹の怪獣が棲まい初めた事を、はつきりと意識いたしました。

私は狂つた様に金桃の上唇を刺ぎとり、革紐で上体を縛り上げました。

「金桃！ お前は私の正体を見たね。お前は私の刑罰を受けて、それから私に噛み殺されるんだよ。いいかい、本当に噛み殺してあげるからね。それなら、私は又きれいな娘に化

けるのさ。さあ、こつちをお向き―」

びしりと鞭は飛びます。金桃は台湾話で哀願します。日本語はわざと使わないのです。

「何を云つても私には分らないよ。私は化猫だからね」

びしりつ！ のけぞる金桃を革紐の余つた部分でぐいと手繰りよめます。私は舞台や映画でやる様に、あの奇妙な手付を使つて彼女を散々に踊らせます。髪を掴んで引きずり廻します。そして到頭彼女の上に折り重なつて、醜い齒莖を露わして、咽喉管にむしやぶります。永い間、そうして折り重なつた後、私はそろり／＼と彼女から離れます。

「さあ、死んだぞ、死んだぞ。これから骨までしやぶつてやるんだ」

金桃は咽喉管をのけぞらして、ぐつたりしております。その咽喉には、まるで流れ出た血の様に、私の口紅の跡が鮮かに浮き出ておりました。

無抵抗に投げ出された金桃の姿態が、再び私の情慾をかき立てます。もう一度、私は金桃の体を所嫌わず噛みつきまします。鞭で撲りつけます。金桃は呻き声を洩らします。

「お前は死んでいるんだよ。死んだ者が声を出すのかいそれなら、今度こそ声の出なくな

るまで磨めてあげるからね」

ぜい／＼息喘ぎながら私の打撃は続きます。びしり／＼と肌に喰ひ込む鞭の音に、私はあらゆる理性を喪失し、長惨の裾を踏みしだいて彼女に迫りました。

夢醒の様な一夜が過ぎ、翌日、二人がぐつたりとした体を起したのは、もう午頃でございました。そして、もう二度と二人は離れない氣持に結ばれて居りました。

それなのに……私は何故今こうして日本に居りつき、金桃を慕つていなくてはならないのでしょうか？ 私は何故冷酷にも金桃から離れてしまつたのでしょうか？

激情の一夜を過した後、私はなお三週間程引き留められるままに金桃の邸に居りました。父親の呉は三日後に上海から歸つて参りましたが、私達の生活に関心を持つた余裕がない位忙しく外出を重ねておりました。私達は殆ど毎夜、憑かれた様に秘密の悦楽に耽つておりました。

しかし翌年の三月、邦人引揚船に乗つて私は台湾を離れねばならなくなつてしまいました。

時の流れは、二人の歡樂の夢を無夢にも引きさいてしまつたのです。

私は日夜おしよせる寂寥に耐えかねて、一年程前、台北の金桃に手紙を書きました。何の返事もありませんでした。

私の手許には、秘かに持ち歸つたダイヤの指輪がございますが、別れる時金桃が呉れた唯一の片身でございします。

(おわり)

愛 読 者 通 信

拜啓 私には風俗草紙の愛読者で事業家で五十歳の男子です。私は女が私の顔に誇がり涙を掛け、お尻を舐めたり小便や大便を顔や頭や口えかけてもらつたり、また女が馬乗りになり、鞭で打つたり足で蹴つてもらつたりするのを、無上の楽しみとして居るのです。どなたか適当な方、マゾヒストの方、お手紙下さい。(千葉県 C生)

★ 僕は貴誌の愛読者の一人です。幼くして兄を亡くし、女姉妹の中に育つた爲、外見は過まじき男性に見えても心の中心は一種の女性的ひらめきがあります。その爲か年上の二十代三十代の同性に心をひかれます。僕は満十八歳、身長五尺四寸、体重十五貫五百、容貌は個性的で優れています。御交際願ける方、御連絡下さい。(東京 TYS生)

木暮陽子

★十月 號★

あなぐら 喜多 玲子畫
 悶える女三態 中川 彩子畫
 賣められる肌 特寫々眞
 ぐるてすく藍鼓 正岡 容

さち・まぞ・傑作集

奴隷 祭 三宅 一郎譯
 双生児の犬 比企 狂一郎

賣め 特集

女はこう縛られたら 伊藤 晴雨
 新らしいスタイルの賣 喜多 玲子
 賣めにおける各種の小道具 細谷 満佐子

同性愛讀物集

馬をみる夫人 日夏由紀夫
 亞んだ女 鳥羽 瑛子
 そとみあ放浪記 澄川 徹夫

まぞ・ふえちすとの手記

腎部狂崇症 油井 啓二
 甘美なる糞尿 菅 芳一郎

★十一月 號★

美くしい運物 北原 理畫
 關ふられるやわ肌 本誌特寫々眞
 縄と刺青 喜多 玲子畫

あぶ小説特集

女裝 男 日夏由紀夫
 夢 覺 松井 蘭子
 奴隷 祭 三宅 一郎譯
 閉された女體 鳥羽 瑛子

特集 變態人性記

秘密な淫蕩 赤澤 澄子
 執念日記 草葉 容子
 畜類人間 宮内 二三夫
 他四篇

裸になりたがる淑女

浪花節と血 武野 蘭子
 秘密交歡サロンの 正岡 容

秘密交歡サロンの

讀者交歡室
 レスボス通信 園村 恵子
 そとみあ通信 藤井 晃

★十二月 號★

力盡きた女 中川 彩子畫
 犠牲六態 喜多 玲子畫
 凌辱の構圖 本誌特寫々眞

異常性愛の醫學

縛る快感・縛られる快感 高橋 鐵
 汚物狂戀症の性慾 坂ノ上 雪夫
 男色は治癒出来るか 鹿火屋 一彦
 どんな男がマゾヒストか 西島 實

變質者さんげ

腎部マニヤ 櫻岡 麻冬
 刺刀男 伊庭 英夫
 獸の園 島田 悠次
 そとみあ大座談會 司會 鹿火屋 一彦

本馬實め研究記

變態性慾者はこんな 島崎 哲
 殺人をする 三谷 幸介
 落語糞尿譚 正岡 容

落語糞尿譚

傑作小説特集

創作小説 佐々木 恭
 偵情指撥師 日夏由紀夫

★その他華麗悦虐讀物満載！ 御入手洩れの方は直接本社へ！

日本特集出版社

各號千共 定價百圓

東京都千代田區神田神保町二ノ三四 振替東京二四二五一番

マゾ使徒行傳

— 苦痛がよろこびを満載する —

全裸の男が手枷足枷をはめた四肢を獣の様に四つ這ひにまげて、その背中に豪傑な顔付の巨大な臂の女をのせて、部屋の中を闊いまわる。つまり女の馬になつた格好の代物である……。

坂ノ上言夫

大橋彌生画

こで三人のセンベさん（男色の好きな男といふ意味の方官）に輪姦された。さすがにボウ

で、つれていかれて、そ

りぬ一小島にボウト

無人の孤島、沖小島と

ある。市の岸壁から海上三キロの沖合にある

機を偶然に持つたので

さうなるべき不幸な契

この受動鶏姦者は、

来男色で有名な鹿兒島

である。いひおく

はもろん説明の必要

させたがるのか、これ

いふ意味である。何を

「させぐい」とあだ名

された美少年がゐた。

少年時代のことであ

ツとなつて、氣付けの清心丹をのまされたといふので、また「清心丹」といふ別なあだ名でもよばれたが、しかし、その少年は、生來傾向的にマゾの素質があつたらしく、とにかくそれをきつかけにして、それからひる自ら進んで「させたがつた。」もつぱらの評判で、遂に「させぐい」の高名を馳するにいたつたわけだが、かうしたものと、かうしたことに對する骨髄的な厭耻の意識をなくするものらしい。平然として、このあだ名に嘲笑し、縦然ともせ



ずどんな機微にわたる質問にも、卒直に（しかし、私かに）答へた。「痛いだらう」ときいたことがある。「痛いす、だけどういふア……」と嘲笑する。あきれたものだ。

長じて彼は大学にいったが、卒業せずに夭折した。しかし、死ぬまでこれをつらぬいたらしいマゾの使徒だつた。のちには、男色者が見つからぬと、自分で肛門手淫を行つたさうであるが、しまいには括約筋がゆるんで、ちつとも痛苦を感じなくなつたといふ。

太體が、女きようだだけの女性的な環境に育つて、パッシヴな素質が、偶発の事件でマゾにめざめ、遂に完全なそれへと成長したのであらう。フロイドは、特に女性におけるマゾに着目して「原始的な性欲におけるマゾ即ち苦痛を享樂することからのみ出るマゾヒズムは、女性的本質の表現である」といつてゐる位で、マゾは元來が女のものなのだ。だから、男のマゾヒストは、多分に女性的な環境の中で育つて行く。



クラフト・エビングによると、マゾヒズムの行爲は、しばしば性交と直接に結びついてあらはれ、もっぱら豫備的（前戯的）に利用されるが、もちろん、或るものにおいては、性交不能の代償としても遂行される。だから、被虐の快感は、性交の直前にか、乃至は、それと共にをるといふのが典型だといふ。（即ち、サヂでは、その前後を問ふことがないのに對して、これがマゾの特色だと彼は指摘するのである。しかしもちろん特例はある）

マゾヒズムに関する実例はかなりに多い。それほどマゾヒストといふものは多いのである。ところで、「マゾヒズムが普通の性生活以外から来るか、或は主としてそれにのみあはれるか」またかう

した倒錯症をもつものにおいては、いかに妄想の實現に努力するか、そしてその際、精力がそれに影響されるかどうかは、各例によつて多少の相違を免れない。それは、この異常性欲者の肉體的な精神的な強さに関係があるのである」とクラフト・エビングがいふ。けれども、とにかく「全例にわたつて重要であり、共通してゐるところのものは性欲の方面が、つねに服従の觀念圈内にあり、異性の暴行に服さうとするにある」のだといふ。その暴虐の行爲の段階はいろいろあつて最もおそるべき奇怪な行爲から、極めて單純なむしろユウモラスなものまでである。が、とにかく、服従意識の肉體的な條件として受苦が契機となり、その刺激が屈従の精神を盛り上らせる。まさに、サヂとは對蹠的なコンディションである。この場合、苦痛の象徴、機相を目に見ることが刺激となつていはゆるサヂの攻撃心理が興奮させられるわけだ。

マゾを條件づけるこの服従意識の心理機制などといふウルサイ問題についてはこゝではふれないことにしよう。元來女性に本質化した罪障感、乃至後天的な事態にもづくそれからの無意識的或は反省的な懲罰要求がこれを傾向づけたのだナンテいふムツカシイ問題は、精神分析の學者に学ぶこととして、ここではなぜマゾの行爲段階に差等があるかといふことの肉體的な説明をチョッピリ物の本にとすると、……

元來、性欲感覚には特別な感覚器官といふものがない。組織学的には、皮膚と粘膜との移行型であると思われる構造をもつた一定の領域があつて、そこでの触覚、疼痛、温覚神経などの綜合感覚が、性の感覚だと一応理解されてゐる。したがつて、皮膚と同類の病変がその性的な体部にも起つて、そのために感覚の過敏や麻痺が起り

ために性的感覚に尤進とか減退とか、或はまた、いはゆる変態がおこるわけだが……

ところで、外来の刺激に対する先天的な感情の反応には一の傾向があつて、氣質を決定してゐるやうに、同じく性的な感情にも性的な反応の傾向がある。この傾向にしたがつて前いつたやうな性体域の異常性がからみつくこと、こゝに多様な変態行動の段階の構図をえがくこととなるのである。

さうした多様な行動の段階において、マゾヒズムも、多様な、いろいろな実例をのこしてゐるのだが、最も普通に広汎にわたつて存在するそれは、多分に、その「心情」において成立するものである。つまり精神的な被虐において主としてあらはれる。その最も典型的な形が、いはゆるバギズム、即ち「異性の小姓」となつてサヴァニイすることに喜悅を見出すといふそれである。

よく知られてゐるマゾの繪に「ドミナ」と題するそれがある。全裸の男が手枷足枷をはめた四肢を獸のやうに四つ這ひにまげて、その背中に、柔らかな顔付の、巨大な臀の女をのせて部屋中を備ひまわる。つまり女の馬になつた格好の代物である。哲学史の上に、バ

リシアの源頭を標としてかゝやく哲人アリストテレスが、やはりこんな格好で女を背中に、四つ這ひで庭園を備ひまわつた話はある。つまりにも有名だ。まるつきり稚戯の感がある——しかし、さうした屈辱と服従の中に、痛怪な愉樂を痛感する、全く因果なことだ。かくして、ビストル伯夫人の前に、マゾッホは奴隷のやうに踞伏するのである。

クラフト・ユビングが報告する一例では、三十六歳になるという一教師であるが、この空想的なマゾヒストは、すでに子供のとき、素質的なマゾの傾向をあらはしたが、長じて思春期以後になると、女の意志の下に服従し、それも思ひ切り暴逆な方法による虐待を欲した。頭を食卓にしてみらひたいと空想したりそんな色々の妄想を描いた。女性の椅子になりたいと熱望してやまなかつた男もある。

こきつかはれ、いちめられ、いためつけられる異性に夢想し或は奉仕して、自己を奴隷の非難に置く、それで清悦するといふこのバギズムのごときは、しかし、まだまだマゾの初程だと考へていゝのだが、中世のいはゆる騎士道には、多分にこの傾向的な、素質的な匂ひがある。

十五世紀以後に、特にさかんになつた反基

督の惡魔主義における密儀宗教で行はれた、「ミサ」の諸方式は、どれもこれもひどくサジ的な淫虐の趣好を盛つたものだつたが、この場合、ミサをうける側の信者においては、あきらかにマゾだつた。ひどいマゾの妄者たちだつた。結局それは、惡魔神を対象とするもつとも徹底したバギズムだが、たとえそれは宗教上の式法にすぎないとしても、しかし、非常に淫猥なむしろ性的な變態だつた。ニイマンが語るところによれば、たとえばグプウル司祭のそれなどは、大休次のごときものだつたらしい。この司祭は特殊な方法で糞便を調劑した。彼は祭壇に使ふ机の上に、糞便でつくつた聖體を山のやうに並べ、その前に信徒の女たちがずらりと立ちならぶのを待つて、その糞でつくつた聖體をそれぞれの性器の中におしこむ。次に、彼自身が一人一人のその性器に接吻するのであるが……

やがて、司祭がクレドといふ信徒信經の祈りをささげる間、女たちは全裸か、着物をあごの下までまくりあげて、左右に分れて整列すると、司祭と助祭が、その左右に並んだ女たちの腰の下三寸の丘の門を指でいぢくりまわす。彼らにいはせると、この性器の猥戯は、一の淨めの式なんださうだ。もちろん、



この黒ミサでは、司祭の手？ によつて、處女でも人妻でも憚りなく犯される。ルウアンの爵家モンテスパン夫人、アミアンの名流ダールジャンソン家やランスの貴族サ・ボン家の令嬢たちは、このギブウルによつて犯され、ワギナは、アマリリスの花莖のやうに縦にさ

けたともいはれる。

このミサに「腹上のミサ」といふのがあつて、セヌス河畔の古聖所とよばれる或る教会で特にこれが行はれた。

ミサがはじまると、まづ序詠がとなへられ次いでキリエレイシヨンの齊唱といふのが一

齊に唱和される。すると、三人の女が白大理石像のやうに一条まとはぬ素つ裸の姿で、それぞれ兩手を聖器係の屈強な修道士につかまへられて祭壇にひかれてくる。三人の女はそのまゝそれぞれの位置に仰向けに寝かされるのだが、しかし、その頭と足の下にだけ蓋が置かれるので、女は二つの台の上で、一のブリッヂ（橋）になる。ちやうど、石膏像を仰向けに横においたみたいだ。それが、そのまゝ司祭たちの祝ひのためにテエブルに使はれるのである。その腹の上に、パンとブドウ酒が並べられるのだつた。まづその際、花の香にむせるやうなこの肉テエブルの上で、司祭たちは器用に五本の指をはたらかせて、乳首から性器のあいだを、生きた肉のテエブルが闊えて媚聲を放つまで、いぢくりまわし、うつとり絶え入るやうな女の叫びがはじまるのを待つて、はじめてそのパンとブドウ酒がキリストの血となり肉となつたものとして頷け手へられるのだつた。かうした、腹上のミサは、十七世紀の中ごろは最も歓迎された式典だつたさうであるが、前は裸体の女の臀が祭壇とされた。女たちはさうしたミサのエクスタジアをもとめて、われ勝ちにこの肉の祭壇たらんことを熱望して司祭の住居におしかけ

たものだといふ。立派なマソだ。悪魔神へのバギズだ。

◇

潤一郎の作品に「羅洞先生」といふのがあ
る。「富美子の足」といふのがある。「悪魔」
があり、「痴人の愛」がある。彼はそれらで
数々のマソを描いたが、「富美子の足」や「羅
洞先生」では、隠居や先生が美しい女の素足
にふんづけられながら、至快の境地に陶醉す
る。——「死んでも恨みはない……」と、情
人の虐待と圧迫と暴行と支配に（精神的な、
肉体的な）苦痛を交流する快感に淫好を興奮
する。それが汚物狂樂のフェチズムに結び
つく、鼻をかんだハンカチをしやぶり、咯
痰をのみ、尿に隨喜し、脱糞をなめる。或は
足の裏を舐め、肛門に接吻する、といふこと
にもなるので、Zといふ五十二歳の位地の
低い男が、舐めさせるサヂを妄想して、その
女に私はあなたに「私の足の指や表をなめて
いたとき、きまつて淫情がはげしくなる
のです云々」といふ手紙をかいて貰つて、満
悦していたマソもあるが、しかし、マソで最
も多い形式は、受動的な鞭打である。これに
ついて、エビングは次のやうに説明してゐ
る。

まづ第一に、マソヒストが受動的に鞭でう
たれることに對するはげしい欲望は、生れつ
きのものである。だから、さうした鞭打によ
つて起る反射作用について、まだ一度も経験
しない前から、すでにそれは一種の憧れとし
て、意識をかすめ、夢に現はれる。第二に、
マソヒストと受動的に鞭うたれることは、切
つても切れない必然的なもので、マソヒスト
がしばしば実現する多くの非行中のたゞ一つ
のものである。そして、この種の非行や鞭打
のほかにもいろいろ受身になる淫好はあるが
その場合きまつて倒錯症を呈する。

第三に、マソヒストは、かならず鞭でうた
れることを望むけれども、それをうけても、
かならずしも催淫的作用をしないことがあ
る。これは重大な特徴である、云々と。そし
て、いろいろのチエスをあげるのだが、こゝ
ではたゞそのうちの特異なものおもしろいも
の二三を順序もなく語るに止めやう。

乙といふ二
十九歳の男で
ある。早熟で
五歳にしてす
で性にめざめ
鞭うたれると

たちまち淫好を感じた。しかもその際、別に
異性を念頭におくことはなかつた。異性でな
くともよかつた。思ひ出しては、自ら、自ら
を鞭うた。かうして、のちにはそれだけの
ことで射精したという。そして、マソ的な観
念の圏内において空想することによつてのみ
満足に交接ができた。

二十八歳の男性、彼は社会的に相当高い位
地にゐた立派な人だったが、しばしば妓樓に
上つた。その際、前もつて当の妓女へ手紙を
送る。

「愛らしいグレンセントヘン、私は明夜八時
から九時までの間におたづねします。皮の
むちで打たれるために……」

その通りに、彼は持参の革のひもで、全裸
になつた手と足をしばらせ、足の裏、ふくら
はき、臀部など、射撃するまでその鞭で妓女
に打たせるのだつた。女のからだなどには一
指もふれない。それで満足して帰つて行く。



また、二十一の處女で鞭とか梶棒とかの言葉を書いただけで強い性感を味はつたといふ例もあるが、頭腦明晰な一法学博士が、十一歳の時、学校で一人の子が友だちの臀を打つてるところを目撃して、新奇なよろこびと感動にふるえて、家へ帰ると、妹やその友だちを集めて鞭打を主とする遊びをもつぱらにしたが、長じて、この空想は消へたけれども、三十二歳の時、ふとした機会に少年時代のそれが心にめざめて、こわくなり、さまざまな強迫観念に襲はれ出して、遂に自殺してしまつたといふ理性的なマゾヒストもある。

前に一寸ふれた、女性の椅子になりたいという要求をおこして、女性にふまれ、または耳を激打されることをもつて至上の境地としたといふ乙といふ五十歳の官吏においては、女性と正常な交接をしようといふ念は、むしろ一の恐怖でしかなかった。女性に仕えやうといふ要求のみが心を占めて、自分の背に跨つておしつけてもらひたいと望んだ。十分な享樂をうるためには美しい女性の鞭うつ下に苦しんだら、どんなに男らしいだらうナンテ考へたのださうだ。

カトリックでは、あらゆる欲望、特に体慾を禁ずるための苦行の一方法、一粒糖とし

て鞭打をう

け、自ら鞭打した。鞭打宗

といふ宗派さへ成立してあ

る。しかし、

この苦行はひ

そめるマゾを

却つて異常に

充進させる。

性交の代償に

さへなりうる

可能性があ

る。さうな

と、戒行の意

味がなくなる。

立派な性行爲だ。

尼院長マリ

ア・マグダレエナ・パッジイは、縛られて、

露出した臀部を杖でうたれながら、性感の絶

頂に悶えて、肉交の幻想のうちに「あゝ、あ

ゝいゝ、いゝ」と嗚咽したといふ。さうして

彼女は、そこに神の（或は人間の）愛の至境

を泣いたのである。それがいふまでもなく淫

樂極楽の境涯であらう。宗教的な苦行の一形

式としての鞭打の痛苦は、まづ大抵はかくの

如きものとしてマゾ的な性快感の中へと転落



していつたのである。

◇

次に、二十二歳になる一青年についての報告がある。これは鞭打ナンテなまぬるつこいものではなく、肉体が傷害されねばならなかつた。

彼は七歳にしてすでに自慰を知つた。その頃、彼は下女が彼の兩脚をおさえつけて、皆にベニスを見せたり、頭から熱湯や冷水を浴びせる状態を空想して興奮しながら手淫した

のだといふ。或はペニスを切つてしまふところとか、女たちが男を刺したり、そのペニスをえぐつたりすることを空想して自慰を行ふ。

別な男で中年の常識人で結婚して父となり、普通の性生活をやりながら、その数年間において、女性に刃で刺されたり切られたり殺されることを空想することによつて差好的になつた。このやうな傷害受害を空想でなく地で行つて、徹底した結果遂に死んでいつた例として、ごそんじの小口末吉の妻ヨネの場合がある。これは世界でも外にはないらしいマゾのひどい特例だが、これには色情亢進が伴つたらしい。元来、女は痛覺に鈍いといはれ、そして疼痛とは、知覺神經の興奮だと定義されてゐるが、高橋氏はヨネの場合、「末梢神經が麻痺して、中樞（大脳）の興奮すなはち性交にむすびついた自己破壊の無意識願望のみが、たかまつて、ために苦痛が却つて性快感を助けることになる」のだと説明してゐる。

エビングにいはせると、サヂズムにおけるいはゆる差乘の兇殺は、マゾヒズムではそれに相當するほどのものはないといふ。「その極端な結果から見ると、眞性に殺されたがる

といふのは、マゾヒストにも見うけられるけれども、さうした欲望は、一般にいつて、生命保存の衝動目的に矛盾するから、實際の進行は困難だ」したがつて、マゾヒズムは観念的な園内でのみ、もつぱら特に極端な殺戮の如きものがおこる所以であらう。大体、マゾは、そのすべてが非常に空想と密着してゐる。以上述べたケネスが、ほとんどみんな空想とむすびついてゐるが、だから、エビングは、空想的マゾヒズムといふ成語において、「それでは精神的倒錯症は全く観念と空想の領域にのみ止まる」といつてゐる。

こんな例がある。それは四十五歳の男で、三ヶ月毎に鼓樓におもむき（三ヶ月といふのは、おそらく経済的な関係からだらう）娼婦に十フラン拂つて次のやうに命令する。——その娼婦は男をまつ裸にして、手足をしぼらなくてはならぬ。それから兩眼をかくしして、窓をしめ、長椅子の上にすわらせて、そして、そのまゝはおつておくのだ。三十分のちに娼婦が出てきて縛を解く。かうして、男は眞目のうちに十分うちひしがれて、満悦し金を拂つて歸つて行くのだつた。全く無力の状態において、女性の暴逆に屈服するさうした氣持で十分なのだ。（これは嚴密には表家

的なマゾといふのださうだが……）

「攻撃欲、破壊欲が外の性對象へ向けられればサヂズムとなり、内なる自己へ向けられればマゾヒズムとなる」「そして攻撃的なサヂ性格者が外界への望みを喪失した途端に、烈しいマゾヒストになることが少くない」と高橋氏がいふ通り、それは一般にしられてゐるが、かくして、だから、マゾはとくに自虐への傾向をもつてゐる。エリスの報告によるA・Wといふ五十歳のインテリ男は、灼熱した針金を自分の身体に突きさしたり自分で自分の乳ヘビンを何本も刺しこんだり、或るときはペニスにまでピンを突刺してやつとオルガズムに達してゐたのだといふ。クラフト・エビングが語るその男は、自分で自分の左腕の皮膚を鉄で切りとつてゐた——しかも公園のドマン中である。パトロウルの警官に捕まつてしまつたが、その告白によると、むやみにたゞ、女の皮肉を切取つてたべたい欲求を感じ、鉄を用意して女を追つかけたが果さず、たうとう自分の皮肉を女のそのやうに空想しながら切取つてたべてゐたのだ。切片を齒にかみしめた途端に射撃したといふ。これはあきらかなサヂ・マゾヒズムだつた。

美事な復讐



「何が入っているんです。このコーヒー。ただのコーヒーじゃないですね。いやな味と匂いがしたものだ」私はニヤリと笑いました。「フン、何だと思つて？ 私の尿よ、オシッコよ……」

松岡 妙子

何という鮮やかな復讐だつたでしょう。男

心の執心のササマジサを、というよりある龍崎栄一の執拗で、計画的な復讐のたくらみを私は見抜いてはいなかったのです。私が甘かつたのでしょうか、イ、エ、やつぱり本当は、私の心の底では、ひそかに龍崎の（彼をいつも私は栄坊と呼んでいましたが）復讐を期待していたのかも知れません。私はそれを自覚していなかったのかも知れません。

私は毎日、生活の大部分をアトリエの中で送っていました。カンパスや頼縁の一ぱいに並んだ、スマートなアトリエの中で、私は油

絵を描くことに没頭していました。強烈な色彩と、ネバ／＼する油絵の具の手ごたえ、それは私の体質にピッタリしていたのです。私が絵を描いているとき、栄坊はいつも傍らのソファに腰をおろして、私の筆使いの様を眺めていました。いえ、本当は絵などはどうでもよかったのです。

栄坊が私にどんな野心を持っているか、それは分っていました。何といつても四十歳にもうすぐ手の届くという大年増、本当に成熟しきつた私の肉体の魅力、日本人の女にしては大柄な五尺四寸の上背、そして十五貫を

超えるすばらしいヴォリューム、しかもこの年齢の女にも似合わない均整のとれた美事な姿態、その上長年の愛慾生活の中で磨きあげた溢れる様なコケツトリイが香水の様に発散しています。私はまるで匂える大輪の牡丹の花なのでした。お風呂に入つた時など、大鏡に写る全身像を見て、私自身がどんなに惱ましい溜息をもらしたことでしよう。思わず阿ユで胸のふくらみを抱きしめることさえあるのです。

絵を描いていることに疲れて、何気なく腕を伸ばしたり、大きく体をのけぞつたり（そんな時私の体の前面の線がタツキリと浮び上るのです、或いは椅子の上へ片足をのせて立て膝になつたりする、そんな様々な動作でも、まだ二十八歳の、私より一廻りも年下の栄坊には、タマライ魔力だつたに違いありません。それを知っている私は、夏など、わざ／＼彼の前で

「あゝ、暑い、暑い。」

そんなことを云つて、スーツをぬぎ、スリッパだけになつて、直白な、牛乳石の様な胸元や大理石の様なムキ出しの両腕を見せる時、栄坊は何とも云えない、おしつまつた様なウ

メキ声を立てます。その目は熟つぽくギラ／＼輝いて、私のナマの肌に食ひいる様です。若い男の、たぎる様な精力がビリ／＼と私にも感じられて、

「ウフフ。」

私は驕慢な笑みをもらして栄坊を見やるのでした。

「苦しい……でしよ。つらいでしよ。」

そんな風にからかいかけると、栄坊は直赤になつて腰を浮かせながら

「そんなことはないけど……」

そうは口では云つてもブル／＼ふるえている指先が、無意識に、私につかみかゝる形になつてゐるのです。思わずフラ／＼と立ち上つてくる時など

「何よ、バカ。」

ビシリと私の平手打ちにあつて、栄坊は「アッ」と云いながら腰をベッタリと落としてしまつたりします。その前を、私は大きく豊かな腰をゆさ／＼ゆする様にして行き来します。時には直向かいの椅子に腰をおろして、両脚を萬々と組み合せ、ストッキングを脱いで見せたりします。スカートの奥の暗い部分に栄坊の視線は吸ひこまれます。私の体のすみ／＼までさ／＼りこんでくる栄坊の灼きつく

様な視線、それを私はまるでアメ玉をしやぶる様に楽しんでいました。二十八歳の一人前の男とは云つても、私にとってはこの上ない慰み物だつたのです。

彼は、しかしスキをうかがつていたので、そうしてとうとう、その野心のほんの一部分を達することができたのです。

丁度秋の展覧会のシーズンでした。上野の美術館が開かれてゐる〇社展覧会には、私の友人

達も沢山出品してました。私も行つて見ようかとは思つていましたが、でも展覧会へ私を誘ひ出したのは栄坊の方でした。

「ねえ、オバさん、（栄坊は私をそう呼んで



いました）一諸に行かない、オバさんのお仲間なら、僕何でも云う事聞いてあげるけど。」私は彼の可愛いと申し出を承諾して展覧会にゆきました。美術館の中は、早朝のせいか閑散でした。私はたくましくシェパードの様な感じの栄坊を従がえたまゝ見て廻りました。

私の他所行きの感装は人目をひきました。栄坊も、こんな女王の様な私の後についてゐることを、きつと誇りに思つていたのでしよう。会場をだん／＼見て廻つていつて何室かの奥まつた二室に来た時、幸か不幸か室内には一人も観客がいませんでした。私達二人だけがやゝ暗いその広い部屋に入つたわけです。何枚か見ていつた時、一寸後ずさ

りした栄坊が。いきなり後から私の肩を強く抱いて自分の胸の中にひきこみました。不意をくらつて私は彼の腕の中に倒れかゝりました。その私の首すじへ彼は烈しく接吻しました。あゝ、どんなにその瞬間を彼は待ちのぞんでいたことでしょう。本当にその口づけは私には饒きゴテの様に烈しく感じられました。彼は私の頬へ自分の頬を押しつけ、あたりかまわず詰め廻し、何時か私の口唇の上にその口唇を重ねていました。肩へかけた腕は大きく私の胸に廻わり、豊かな小丘の様な二つの乳房の上からきつく押さえつけ、全身を私の体におしつけていました。温い体温が伝わりました。そんな格好のまゝ何秒か、或るいは何分かと立ちました。やがて人の足音が聞えてきました、やつと栄坊は私をはなしました。ふりかえると、栄坊はボーッと放心した様に立っています。今接吻したばかりの口は心もち開いたきりにしていました。その陶醉の表情は美しいと思いました。

栄坊の、この分を越えた非礼を、私はその場でしてあげませんでした。何事もなかつた様にして、私は展覧会を見廻りました。アトリエに帰つてきてから、私は栄坊におだやかな顔で笑いかけました。

「どう、今日のキッス良かった？」

「ウン、良かった。」

「あんな生意氣な直似をして、私が黙つていと思つて？」

「ウム、僕は後でどんなお仕置きをされてもいゝと思つてやつたの。」

「そう、じゃ、これから罰を与えるわ。」

私は彼を後ろ向きに立たせ、両手を後ろに廻させて堅くしぼり、その端を柱につなぎました。そうしておいてから私は勝手元に行つて、コーヒを立てました。勿論本物のコーヒです。でも私はそこへ別の、ある秘密のものを調合したのです。私はコーヒをもつてアトリエに帰りました。

「これをお飲み。」

栄坊は不思議そうに見ながら、一口私のつきつけたコーヒを飲みました。飲んでから彼は異様な顔をして、口をしかめました。

「どう、どんな味がした？」

私は皮肉に聞きました。

「何が入っているんです、このコーヒ、たゞのコーヒじゃありませんね。いやな味と匂いがしたものだ。」

私はニヤリと笑いました。

「フン、何だと思つて私の尿よ、オシッコの

よ。それとね、メンスの時のアレも、分つたの？」

栄坊は驚愕の表情をあり／＼と示しました。私はコーヒー茶碗を又彼の口唇へ押しつけました。コーヒーは赤黒く飲んでいました。

「さあ、キッスした口で、これを飲むのよ、罰だから。」

勝ち誇つた調子で私はいゝました。栄坊は顔をそむける様にしましたが、やがて心をきめると、ガブ／＼と息もつかずに飲みました。飲み干してしまつた時、私は又、栄坊の目の前でコーヒー茶碗に新しい液体を注ぎこみました。私の下半身で爽やかな音がしました。そんな格好を、栄坊はしばらくたまゝ、食い入る様に見つめていました。

「さあお飲み。」

栄坊はたゞ気違ひの様に飲みました。むせてコボすと、私はそれを彼の顔に浴びせかけました。

そんなことがあつてから、又相変らずの日が過ぎました。栄坊の態度には以前にも増した切ない熱情が感じられました。けれど、あの展覧会の時の様な行動はとりませんでし。もつとも私の方でも、あの時の様なスキ



は見せなかつたのです。

ところが、とうとう私は復讐されてしまいました。それも美事な計画的復讐を……

もはや春先でした。ジットリと汗ばむ時候で、たゞさへ汗つかきの私は、薄地のワンピースに黒いベルトをしめ、アトリエにこもつて絵筆を振るつていました。栄坊は傍らのソファに腰をおろして、私の絵を描く所を見て

いました。ワンピースから透けて見える私の体の線に、栄坊はもえる目つきでした。短いワンピースのスリーブの下から、私の腋毛もチラ／＼見えて、それが彼に私の秘密な部分をも想像させるのでしよう、栄坊の中に妖しい情慾を燃え盛らせることになったのです。それまではアトリエに居る時、私はいつもストラップスは穿いているのですが、その

日ワンピースを着ていたのが大きなスキだつたのです。絵を描いているうちに私は仕事に夢中になつていました。こゝにも油断があつたのです。もつとも

隣りの部屋には子供達が勉強しているので、もしものことがあつても、声を立てればすぐ子供達がかけこんでくるといふことが、私の油断している一番大きな理由でもあつたのです。ところが実はこの事が、全く逆の結果をもたらそうとは、私は気付く筈ありませんでした。

栄坊はいつの間にか立ち上つて、私の後ろに廻つていたのでした。「アッ！」と思つた時、私の体は後ろから抱き上げられ、そのまゝソファへ押しつけられました。それもソファの後ろ側から押しつけられたので、私の体はソファの背のモタレのところに腰を当てがわれ、そのまゝ逆さに上体はまるで逆立ちする様にソファの中に倒され、顔はやわらかいシートの中へめりこみました。そしてあゝ何ということでしょう、両脚はむなしく宙へ跳ね上つてしまつたのです。驚いたのと、息がつまつたのとで、私は声も出せませんでした。栄坊は左手で私をギューギューと押さえつけ、右手はすばやく私の臍物に觸れました。ワンピースの裾は大きくベルトの所から頭の方へまくりかえされ、スリッパもまぐられ、そうして私の下半身はあられもなく空中へさらけ出されてしまつたのです。

「何すんの、バカー」

私は苦しい息づかいの中で云ひました。

「およしなさい。子供達を呼びますよ。それでもいいの？」

ところが栄坊は少しも驚いた様子もなく、封つてニヤリと不敵に笑うと、

「ええ、お呼びなさい。こんなあれもない妻を子供達に見せてもいいんですか、それともゆつくりと見せてやりましょうか。」

私は心の中でアツと叫びました。何という悪賢い企らみ、すべてを計算に入れていたのです。陥入られた、と私は思いました。

その間にも栄坊の手はのびて、とうとう最後のパンティも両脚からたくみに抜きとられそうになると私の下半身はもう、一条もまとはいてはいないのです。アトリエには百ワットの電球が何個もまぶしく輝いています。その強烈な光りの中で、私の何もまともでない下半身はまるで大理石の彫像……そうギリシャのニムフの様な美事な姿態を輝かせていたのです。勿論、あの秘密の襦みも、それを掩う黒い部分も、すべては栄坊のギラ／＼する目の前にさらけ出されているのです。

栄坊は「ウツ。」とうめいた様でした。

「仕方がない。私はそう思いました。栄坊が

あんなにも私をネラッていたんだもの、その情熱に対しても許してやるのが当然なんだわ……とそんな気がしました。いえそれよりも

実は栄坊にいつかそうされることを、自分から待ち望んでいたのではないだろうか、と私はそう気がついたのでした。

栄坊のしなやかな指は、私の秘密の部分にはじめはおそろおそろ、しかし段々と、大膽に舐れてきました。それは明らかに女体というものを知りつくしているシグサでした。逆立ちの様なそんな不自然な姿にされて、いいえ、むしろそんな格好だったからこそ、私は今迄夫によつても味つたことのない全く違った喜びの中へ、息をはずませておぼれこんでゆきました。私はうめきました。

まぶしい、目も眩むばかりの電燈の光りの下で、私達の秘事は続いたのです。

栄坊はやがて渡れたのか、細いヒモで私の両手をかたくしばると、あらためて長々とソファの上に私の体を寝かせました。そこでワンピースも、スリッパも、あらためてぬがされました。もはや私のすばらしい裸身は、いささかも隠れる所もなく、電燈の下に光っていました。四十女の成熟しきつた肉体、二つの小丘の様な乳房、ゆるやかなスロープの様な

な腹部、それらを栄坊は、少しはなれた位置から思もつかずに眺めていました。しかしやがて、私同様にもそのシェパードの様な裸体を見せ立ちました。栄坊はありとあらゆる慰みを私の体に浴びせました。私の隠れた部分まで舐めまわしました。私も又縛られたまゝの不自由な手で栄坊を喜ばせてやりました。

それはこの世ともない楽園でした。二人はすべてを忘れて陶醉の中にいました。そして間もなく烈しいクライマックスが来て、私はまるで失神した様にソファに横になつていました。しかしその時、栄坊は何時の間にか勝手に元へ行つて、コーヒを立てゝもつてきていたのです。あのいつか私が栄坊に罰として飲ませたのと同じコーヒを。

「さあ飲め」今度は全く逆の立場で、栄坊は勝ち誇つて云いました。

私は思もつかずその異様な匂いのコーヒをのみました。私がコーヒを飲みほした時、栄坊は私の目の前で、嘗も高く新らしいのを注ぎこみました。

その匂いの強い液を、栄坊は私の顔に浴びせ、乳房に浴びせ、そして私の口の中へ注ぎこみました。私は、仙人の秘薬を飲む様な気持ちで、それを飲み干してゆきました。



現 場 寫 眞

(あるカメラ・マニヤの手記)

もう霧が降りようと云うのに、その二人が全裸で、蛇のようにからみ合っていたのである。私の足元一丈の處に展開された男女交歡の圖は、變態的な視覺で奇妙に生々しく……

大 竹 謙 吾

小 田 明 男 畫

今時、こんな人間の住いがあるかと、幸福なる常識人は嘆息を洩らすだろう。

北多摩郡の外れにある、引揚者の寮である。その以前は、某軍需工場の、徴用工の寮

だった。三棟並んでいて、その一間は六疊相当の広さだが、今だに疊と云うものがない。アンベラと、唐米袋のアイノコのような、いやに足さわりの悪い敷物が疊代用になつてい

る。
一年前までは天井板もなかった。グロテスクな梁や屋根の裏側がまる見えで、風の強い日にはホコリや塵やが舞い下りる。悶鬱りはおろか、その向うの部屋の夫婦喧嘩までつつ抜けに聞えてくる。
この寮には、しかしハチキレそうに引揚者がつまつてゐる。主に満洲引揚者だが、身よりがないままに、此処にもぐり込んでから数年経つた今だに、この寮から身動き出来ない甲斐性なし達の集團だ。薄汚くて、申合せたように子供ばかり多い。
私もこの寮の住人の一人だ。勤め先でも知

人の間でも、変人を通っている。女房はもつと端的に「カメラ気狂い」と云う。二人の幼い子供たちにも、

「あんたたちが、こんな破れズボンをはいてるのも、みんな父さんのカメラのせいよ」と、さも憎々しそうに云う。

だが、私はこの種の女房の愚痴には、一切ノットコメントである。無駄だからだ。

カメラは満洲時代から始めたのだが、今では新聞社のカメラマンにも負けないような、カメラを持つている。それは、確かに私の生活には不似合な贅沢品だ。

だが、私は世俗的な生活をたのしむよりはカメラのフラインダーをのぞくを可しとする。人間は騒々しく欺瞞にみちているが、レンズは冷静で正直だ。その赤裸々な非情さが私には小気味がいい。

とにかく、一年前のことだ。寮に天井が出来た。寮の監理者である東京都に要求して、やつと獲得したのである。寮の子供たちは、始めて天井のある部屋に住むことになって、騒々しく走り廻った。

私ももの珍しく天井を見上げたが、恐ろしく粗雑な、フシ穴だらけの、その天井板に一驚した。見上げている裡に、眼に埃が飛びこ

んでくるのである。私は眼をこすりながら、フツツ妙なことを思いついた。

それは、云わば「魔の瞬間」とでも云うべき、墮落の第一歩だった。

それから二、三日経つたある夜、私は妻子が寝静まるのを待った。子供たちは元より、晝間子供の世話と、貧乏世帯のやりくりに疲れた女房は、横になるなり、亭主の私の存在など忘れたように、ねむりこけて仕舞う。ヘンな話だが、もと／＼不感症気味だった女房は、二番目の子供を難産してから、肉体の交りに無感動と云うよりは、嫌悪さえ示すようになっていたのだ。

妻子の寝息をうかがいながら、私は一間半の押入れに入つた。布団を出した跡だから、押入れの上段はガラシと空いている。手をのばして、上の天井板二枚をそつとズラした。夕方方のうちに、私はそんな工作をほどこしていたのである。

私の頭の上には、洞穴のような感じで、暗黒な穴がボカリと明いている。その屋根裏のヒンヤリした空洞が、私の激しい好奇心をそそつた。首を入れると、思つたより明るく、眼の前に大きな棟木が走っている。そして大小無数とも思えるような沢山の梁が突き出て

いた。

私はトランクを踏合にして、簡単に屋根裏に這い上つた。それから、泥棒猫のように足音をしのんで、棟木や梁の上を歩き廻つた。私は懐中電燈を用意していたが、それは殆ど不用だった。粗雑な普請だから、スキ間だらけで、下の部屋の電燈の明りが、縋のような細い光線になつて、天井裏に射しこんでいるのだ。大抵の部屋はもう眠りに入つたらしい。静まりかえつていたが、電燈はつけつ放しだった。

寮の電燈は定額で、毎月定まつた料金が割当てられる。使おうと使うまいと、拂うものは拂わなければならぬ。だから寮の連中は貧乏人根性で、夜も大抵電燈をつけつ放しにする。それも夜だけは百ワットもの大きな電球につけ代えるのが、公然の秘密になつていた。細い内職仕事が多いからである。

私は足音をしのばせて、梁から梁を伝ひ歩いた。天井裏は鼠たちのほしほしまた跳梁に任されていたから、少々物音に驚くような神経は、寮の連中にはない。しかし、私は極度に気を配つた。

光線が洩れてくる隙間に眼をあてる。みんな同じような、狭い、汚れた部屋だが、其処



にはさ
ま／＼
な生活
がくり
ひろげ
られて
いた。
何時も
ボロに
くるま
つてい
る四十
後家が
厚い札
束を数
えてい
たり、
日頃ひ
どく上
品ぶつ
ている
タイビ
ストず
とめの
老嬢が

あられない恰好で鏡の前に立つていたりする。其処にはさま／＼の人間の本性が、むき出しにさらけ出されているのだ。

天井裏からの窃視が、どんなに異常な興味をそそるものか、まず実地に実行したものでなければ、想像がつくまい。それは私の獵奇癖を充分に満足させてくれる、絶好の散歩道だったのである。

しかし、私がもの好きに天井裏に這い上つたのは、なにも他人の生活を窃視しようとする、浅ましい好奇心からばかりではない。

私は「カメラ気狂い」と云われるほどのカメラ道楽が昂じて、今や普通の構図では満足出来なくなっている。生優しい対象では、レンズを向ける意欲さえ燃えない。これは生活のすべてを犠牲にして、カメラ道楽だけに情熱をそそいでいる私にとつては、なんともわびしいことだった。

ところで、私がフツと思いついたのは、天井裏からの撮影だった。被写物をその真上からとらえることによつて、その角度の相違から、或は面白いものが出来上がるのではないかと。それが、私が天井裏に這い上つて、蜘蛛の巣や埃まみれになつてうごめいている。

第一の理由だったのだ。

だから、私は首からケースに入つたカメラをぶらさげてる。光線が問題だったが、とにかく試験的にやつてみるつもりだった。いわけ、カメラに対する、ただれた私の情熱が、こんな奇怪な行動をとらせただけである。

四ツ五ツ部屋を覗きこんだが、いずれも狭い部屋一杯に汚れた布団が敷きつめられて、親子が泥のように眠りこけているばかりで、一こうに私の撮影意欲をそそる構図は見当らなかつた。少しばかり失望を覚えながら、私が寮の西のはずれまで来た時のことである。

大きなフシ穴を見つけ出して、私はヤモリのように平になつて下を覗きこんだ。

「アッ」と云う叫び声を、私は漸く押し殺した。意外な光景を其処に見たのである。その真下は、貧弱な四十男の層屋と、映画館の仲売りをしている、ちよつと濫皮のむけた女房の二人暮しの部屋だった。

もう霜が下りようと云う、陽気なのに、その二人が全裸で、蛇のようにからみ合っていたのである。私の足元一丈の処に展開されたその男女交歡の図は、変態的な視覚で、奇妙に生々しく、百ワットの電燈の下にくくりひろげられていた。

私は息を止まるような思いで、ハリついたよ

うにフシ穴にへばりついていて、口の中がカチカチに乾いてくる。さすがの私も、こんな光景を実際に見たのは、生れて始めてのことだつた。夜分天井裏に這い上るからには、当然予期してもいい事柄だつたのだが、まったく私は気がつかなくつた。冷淡な私たち夫婦の關係が、私を鈍感にしたのかも知れない。

ともあれ、彼等二人の大膽な性愛のポーズに、何時か私は夢中になつて、タイカをひきずり出してゐた。暗いから全開にしてフシ穴に、レンズを当てる。今度は懐中電燈をつけて、ファインダーをのぞきこんだ。男まさりの肩屋の女房の、白い背の激しいうねりまで、手にとるように写つてゐる。私の女房などには及びもつかぬラーゲなのだ。

暫くジツとのぞきこんだ。私の呼吸も、下の二人と同じように乱れてくる。その嵐のような激情が最高潮に達した時、私はおのきながら、シャッターを切つた。ジー・カチッ。と云うそのかすかな音が、右拇指の股から情天に伝わつた時、私は思いがけない快感に襲われて、カメラを握りしめたまま、暫くその暗に天井裏につつ伏してゐた。

私はその時の不思議な快感を追いつづけ、カメラ地獄に堕ちた。それは泥沼と云うより

な生優しいものではない。厭世者たる有難ガスが充満した、背徳、偷落の世界。私はその亡者である。盲獣にとりつかれて、永劫浮ばれぬ呪われた狂者だ。

始めての冒険の夜、私は自分の部屋に這い戻ると、暗室代用の押入れにもぐりこんで、息もつかず、現象、腕付にかかつた。煙草をのむ閑さえ惜しかつた。問題はフラッシュなしだから、光度の不足だつたが、私の愛器のレンズを信頼していた。

見ろ、現象液の中に浮び上つてくる、男女の愛欲図——。そこからはすさまじい汗と、精液の匂いさえ立ち上つてくるではないか……。さすがに鮮明ではなかつたが、それがかえつて、ドス黒い中年の男女の情欲を物語る、むくつた追求力があつた。

私はことごとく満足して、この私の手になる、エロ写真第一号を眺めた。傍に寝てゐる女房も子供も、忘れ果てた。どうやらマンネリ的傾向にあつた私のカメラ道楽が、この異様な刺激によつて、もの狂おしい開花を見たのである。

夜になると、私の天井裏のカメラ探訪がつけられる。さすがにそうくお眺向きのフシ穴ばかりはない。そんな部屋の上には、人



道のフシ穴を作る。深夜の二時、三時に這い上つて、さまざまの道具を用い、工作するのである。壁間に発見されぬように、きちんとハメこめるような保護色の栓を作つておく。多少の物音がしても、生活に疲れた寮の住人たちは、大抵前後不覚に熟睡していた。

私はライカを首にかけ、シャツモモ引、足袋と云う身軽ないでたちで、今は自分の部屋のように勝手知つた屋根裏を這いずり歩く。住人たちの、如何にも人間臭に満ちた、ケチな秘密が、其処からは余すところなく透視されるのだ。

二号室の、六十すぎの入道頭のイカケ屋と、その養女である管の十六、七のお下げ髪の少女が、実は隣関係にあることも、私はレンズを透して知つた。

背いデコボコした入道頭と、黒くつややかなお下げ髪とのコントラストが痛いほど私の眼には刺戟的だつた、養父の体重に押しつぶされそうな少女は、何時もぼんやりと無感動な横顔を見せている。狭いその部屋の、つい鼻の先には、養母、つまりイカケ

屋の古女房が寝ている。

時には、まだその婆さんが起きて、火鉢の傍でボロつづりをしている眼前で、晩酌で真赤になつたイカケ屋が、ミツツと云うその少女にのしかかることもあつた。老眼鏡をかけ



た婆さんは、一向に動じる様子もなく針を運んでいる。

三者三様のこの冷静な構図は、一人私を狂喜させ、得難いカメラの収獲の一つとなつた。私は出来上つたこの前代見聞の写真をア

ルバムに貼布する時「静かなる憤怒」と云う題をつけたが、或いはこれは私の思い過ぎだつたかもしれない――。

あのしなびた養母にも、エクボのある少女にも、道徳や感情のカケラもありそうにはない。そんなものは、何の価値もないからだ。彼女たちの生活にあるものは、あの大入道のイカケ屋の、逞しい生活力だけなのである。

この私の秘密の作品集の一つに「私刑」と題がつけられた写真がある。これも奇妙な病癖を露呈している。

その夜、私は、私の部屋の向い側、つまり一間巾の廊下を挟んだ、西側の部屋々々の上を徘徊した。その十一号室は共稼ぎの、この寮としては、割合にまともな、もの静かな夫婦者が住んでいる。

部屋の上まで来た時、私は押しつぶされたような、うめき声を聞いたような気がした。しかし、そんな声にはもう馴れつこになつていたし、平凡な夫婦のいとなみを想像しながら、私は例のように、静かに床の上に腹這いになつた。スキ間にレンズをあてる。そして懐中電燈をつけて、フアインダーをのぞく。どう云うものか、私は直接肉眼で見るとより

、レンズを通して見ることに、快感を覚えるからである。

忠実な私の愛器は、又してもとんでもない想像をとらえていた。長々と、男の裸体が横たわっている。だが、よく見ると、その両手両足には、黒々と光るなにかが巻きついてゐるのだ。よく臍をこらすと、驚いたことにはそれは鉄の手錠だった。そして、誰か、その上に馬乗りになって、男の口の中に手錠のようなものを押込んでゐる。

真上からだから、それが誰か、ちよつと私には判り難かつた。そのパーマの髪を見ると確かに女らしかつたが、着てゐるのは男物の背広だったからだった。私は奇異の感にうたれて、一心にフラインダーを覗きこんだ。そこには何とも云えぬ、不思議な世界が現出されつつあつた。

電気器具店につとめてゐると云う、十一号室の主人は、両手、両足に鉄の手錠、足錠をはめられた上に、猿くつわまで囁まされた。不自由な格好で、ゴソ／＼と虫のように部屋中を歩き廻つた。足錠をはめられて歩くのだから、本当の一寸きざみで、それが大の男だから、まったくそれは珍妙な観物だった。

中心がとれず、ちよつとつまづいて倒れた

りすると、男装の細君の腰が鳴るのだ。その腰の音が、ちようど、トーカーを観るように、私の耳に飛びこんでくる。普段は大人しやかなこの細君の腰がつり上つて、ホームスパジの背広との不思議な調和が、私をめまぐるしい混乱に陥し入れる。

それからの、この男女の交合図のすざまじさを、何にたとえたいいだらう。私は夢中で、次々にシヤツタを切つた。もの狂おしいこの二人に、少々物音でさとられる心配はなかつた。しかも、その嵐の中でも、男の手カセ、足カセは、はめられたままである。誰か、こんなラードを想像し得るだらうか——。私は冷めたい天井裏で、一人体をおのかせるばかりだった。

こうして、私の深夜の探訪はつづけられた。さすがに妻は気がついてたらしいが、例によつて、私のノーマントにあつて、輕蔑し切つたように私を見るばかりだった。その妻の、肉体的な冷淡さが、ますます私を深夜の散歩にかり立てるのだ。

私はまるで中毒症状を呈していた。それだけ、私の生活に快感をもたらしにくれるのだ。止められない。それどころか、ますますこの悪癖は進行するばかりだった。

レンズを通して見る、男女の交合図。私には其処に、云い知れぬ歡喜があるからだ。

× ×

愛 讀 者 編 信

前略何気なく書店で手にとつた貴誌十一月号に、北原環画の「美くしい獲物」の逼しい男をみて欣喜しました。

私も真に愛してくれる同性に飢えてゐる一人です。私は体重十七貫三百、身長五尺七寸二十九才の独身男です。自分では童顔と思つて居ります。タバコはすいません。

文通だけでなく、実質的にもおつきあいして下さる四十才以上の、ヒゲ面のがつちりした方、東京が埼玉にお出でしたら、御紹介願います。お互いに信じ合い、固く相擁し、一心にとける。そんな未来を夢想し心持ちにしています。口絵美しい獲物の中の男とまで行かなくても、服装外見は私もこだわれぬサラリーマンですから、一向構いません。

期待が得られた時は、今まで捧げようにも行方になかつた愛情を注いであげられましよう。

(埼玉 X生)

讀者交歓室

そとみあ

通信



藤井 晃

★

私は貴誌の創刊号からの愛読者の一人です。「そとみあ通信」に幾度か筆を執ろうとしては思いとまり、やつとの思いでこうして筆をとらせて頂きました。と申しますのも外聞を恐れる故でございます。

さて、私はきわめて厳しい嫉の家庭に育てられたものでございしますが、六歳の脊でございましたか、私の家の親戚に当る二十六七歳ほどのMという青年が同居するようになったのでございます。何でも彼は某市の会社勤めているらしく

通勤の関係上、某市に近い私の家に頻みこんでたものでしょう。

私の父は果庁勤めをする物堅い役人ですとはめつたに口をきく機会がありませんでしたが、その年の夏の或る日、その父は出勤し、母も買物か何かで外出していた留守の時です。私はMに対して、前から好感に似たものをもっていたのですが、其の日Mは私にお菓子を呉れ、いつものように横になつて色々童話など聞かせてくれていたのですが、いつの間にか私は話をききながらその場に転寝してしまいました。

ふと、私は何やら顔面に圧力を感じて眼を覚しますと、私の目の前にMの肉体の一部が現れているのです。それは実に巨大に感ぜられました。私は驚いて逃げようとする、Mはおそろしく興奮した顔で私にフェラチオを強いたのでございます。

この事があつてから、機会あるごとにこのような関係が極く内密につづけられました。最初の内は彼の巨大なものに驚きと怖しさで対していたのに、度重なるにつれて、その特異な臭気と外形とが

何か私をひきつけ。憧憬に似た興奮を覚えさせるようになったのです。

ところがこんなことがいつまで誰にも知れずにおるわけはございません。或日ふとしたことから母に露見し、私はひどく叱責を受け、その結果何とも解らぬままにこんなことは悪いことだと思ふようになり、それから放尿するときさえも強い罪悪感にとらわれて、自分の性器にふれると汚らわしく感じられ、何ともいえない恐怖感に襲われるようになったのです。

そのことあつて以来、Mも自然いづらくなり、とうとう私の家から去つて行きました。Mの去つた後、私の心の中には一抹のさびしさが残つていたように思います。

一寸申添えておきますが、私は幼少から色白で、体質は弱い方でした。学業成績はよく、特に音楽が得意でした。私には二人の姉がありまして、私は内気なため他家の男の児と遊ぶようなことなくいつも姉たちと遊んでいたため、言語や動作までが女性的でした。

そのようにして育つた私は、中学でも

専門学校でも、学友などからまるで女性あつかいにされ、上級生からラブレターみたいなものを手渡されたことも度々でございました。変声期でも、そのころ音楽部で声楽訓練をうけていたせいか、他生徒は殆ど男性特有の低いバスに変わっているのに、私だけは変声らしい変声もせず、現在にいたつております。

経済専門学校卒業後某市の某会社就職しましたが、特に主だった重役通から可愛がられ、性的ないたづらをしかけられたことも度々でしたが、その都度前に経験した極端な恐怖感に襲われて、自棄や自己嫌悪に一方ならず苦しめられました。「僕は前がお好きだ、少女歌劇の男装女優のような君のおもかげが、どうしても忘れられない。金はいくらでも出すから僕と一晩つきあつてくれ」などとしつこく誘われるとますます嫌な気持ちになり、自然会社に出勤す



ることさえぶりがちとなり、ついに意を決して退職しその後は家事の手伝いをするようにになりました。

ところが父の死後、母子二人のことを何くれとなく世話してくれていた親切な近所の中年の男の方と釣りに行つた際、その方から思いがけなく愛情を訴えられ

肉体関係をもつようになつてからというものの、いままではあのようになつてしまふ怖ろしいものだつたソドミーが、今度はそれえの激しい熱望と変り、以来その方と関係をつづけてまいりました。

彼はガツツリした、胸毛の濃い、すばらしい体格で、野性的な方でした。私にはきわめてこまやかな愛情を示してくれました。ところが、一年ほどの関係の後の或る日、ふだんから大酒家だつた彼は、突然脳溢血で亡くなつたのでございます。そのとき、私は彼の後を追つて死のうかと幾度思ひわづらつた

か知れませんが、

彼亡き後の私の生活は、どんなにか淋しいものになってしまいました。よく乗物の中等で、彼に似たタイプの同性の中年の方など見掛けるたびに、あの方のことが思い出されてなりません。

先生、この方にかわり得るような方をご紹介頂くわけにはいきませんでしょうか。同志の方のお便りをお待ち申しております。私は現在二十九歳、色は白い方で中肉中背、女性的です。三十五歳—四十七歳位の体格のガッチリしたベデラスト傾向の方を希望いたします。

(山口県 T・X生)

答 いままでの通信になかった内容を含んだもので、少々長いのですが、殆んど省略せずに載せました。

いままでの通信に現れたものは、友達なり年長者なりから同性愛行爲を教えられたことが芽生えとなつて、以来同性愛の魅力に靈感されるというのが大半でありましたが、あなただの場合は、幼時知己の青年からフェラチオを強いられ、以来同じ行爲をつづけている内に、ファルスに対する憧憬のようなものを抱

くにいたつたが、それが母に露見して叱責されてからというもの、男色行爲へのレジスタンス、嫌悪が長い期間続き、其後ふと知つた中年の男性によつて勃然として同性愛が燃えはじめたというケースで、その点が他と相違しているのです。

では、なぜそうした嫌悪感、延いては抵抗が起つたかというに——文面によれば、あなたはきわめて厳しい嫉妬の家庭に生育せられた由ですが、その「厳しい嫉妬」なるものは、おそらく東洋的な儒教主義の教育方針だつたのだからと想像されます。

そのような両親ですから、母親があなたとM青年との行爲を知つたとき、テンから、汚ない物をどうとかしてとか汚ない事をしてとか云つて叱責したものでしょう。性的器官だけを特殊視し卑視しする儒教主義的教育の最も悪い点です。

しかし幼いあなたには、母親の言葉は絶対で、その叱責によつて、性器というものはキタナイモノ、ケガラワシイモノと思ひこみ、そのケガラワシイ性器をもつて男色行爲を嫌悪し、恐怖感を抱くようになってしまつた。その観念が成長して後までも影響していたと解釈されます。

だが、M青年との行爲によつて、あなたの胸の内には、完熟したファルスに対する憧憬がすでに強く植えつけられてしまつていたのです。

幼時期においては、男児でも女児でも、大人のものへのナイド(憧憬)は誰しもつことなので、幼時から女性的なあなたにはそれが他人より強かつたかも知れません。

だから、中学時代——専門学校時代——会社員時代の危い期間中に、友人から、或は会社の重役連から、いくたびか同性愛行爲を誘われたとき、いつも首をタテにふらなかつたのは、行爲へのレジスタンスや、自己嫌悪からには相違ないが、胸底には烈々たるファルス・ナイドが秘められていたことは否めません。

したがって、その空白——男色行爲の空白の期間に、あなたの体内におけるビューリタニズムとファルスナイドとのはげしい闘いの期間であつたともいえます。そしてビューリタニズムが常に勝を制していたのです。それが他の多くのソドミアの場合と異なる点なのです。

では、その後知合つた中年の男性から、愛情を打明けられたとき、すぐに肉體関係を結



んだのはどういふわけか――

他うに、それは、

一、あなたのビュリタニズムを支配していたところの父親が死亡しての後であつたこと。

二、彼が性格・風貌共にあなたの胸中に秘められた理想の男性であつたこと。

の二つが大きな原因であつたのではないでしようか。

あなたのビュリタニズムは、「怖い父親」の「厳しい躰」に支配されてのそれであつたわけで――勿論、本質的にも、あなたは他の人よりはビュリタンではあるが――、それが父親の死後、「彼」から誘われて、グラグラと崩れ果てたと見ていいでしょう。

彼は風貌もウーニング好みのタイプではあるし、性格も親切でやさしく、父親亡き後のあなた方母子の面倒を見ていた。そうした親切・やさしさに、女性的なあなたが「ほだされた」点もあるでしょう。

とにかく、あなたは心身共にウーニングです。孤独なあなたの前に、一日も早く、よきベデラストの愛人が現れることを祈ります。

★

はじめて皆様の仲間入りをさせていただきます。僕は年四十歳、身体健康な会社員ですが、長年の間皆様の同じ思いに悩んでおります。すでに子供も高校に通学しているのにもおります。

どういふわけか、女性に興味がなく、どんな美人と一緒にいても、興奮などせず、むしろいやな気がするくらいです。妻との間も一般とかわりなく過しておりますが、時々途中でいやになります。

若い時から遊ぶ機会はよくありました。若く、女と遊ぶという気持が起らず、友人たちだけを楽しませておりました。又、社用で時々上京いたしますが、他の社員とは別行動にて、もっぱら同性を求めて遊びます。これは幼少時代からの習癖であつて、永久に治らないと思います。

同志の皆様、なにとぞ意見の交換なりお会いしてお互いの意志を通じたいと思つております。九月号「そとみあ通信」に載せられた下関の長崎様、高知の正文様、名古屋の山内界様、御連絡の程お待ちいたしております。

(大分 T・H氏)

答 察するところ、あなたはベデラスト傾向の方のように思われます。それは文面からも推察せられ、又、長崎氏、正文氏、山内氏等大体ウールニング傾向の人と交際を認んでいられる点からもそう推理できるのです。が、如何?

アンドレ・ジイドの云う「ソドミット」です。ジイドの分類呼称では、ベデラストとは若い少年に熱中する男性の謂であり、成人の男性に同性愛を感じる人のことはソドミット(ソドミストとは云わない)と称んでいます。又、女の役割をひきうけ、相手に所有されることを欲する男、すなはち一般呼称のウールニングのことは、アンヴェルティとジイドは呼んでいます。そしてジイド自身は、その中のソドミットであることを自ら告白しております。

ジイドの所謂ソドミットには、同性愛者が少くありません。すなはち、同性を好愛するのと同時に、異性にも性愛を感じるものです。が、あなたの場合は、ほとんど同性愛一本槍のように思われます。

そのあなたが夫婦生活をしているというこ

とは、他性愛者の結婚の大半がそうであるように、親たちのすすめて断りきれず妻を娶ったとか、或は自らの同性愛を隠すための結婚ではなかつたのでしょうか?

では、なぜそうした夫婦の間に子供が生まれるか——それに矛盾を感じる読者も少なくないでしょう。

それについて、私は一つの例を挙げましょう。或るユダヤ人の同性愛者が、早婚の風習のために一女と結婚したが、妻との同衾は暗闇の中でのみ行い、しかも妻女を男性として空想しながら抱いたということです。ユダヤ教正統派の教義は、女との性的交渉は暗闇の中でのみ許します。かの民族の間では、女性に罪惡の根源であると考えられていたことから、そのようなタブーが起つたわけですが、そのユダヤ人は、その戒律を厳重に守りながら、妻の肉体の上に夢想の男色を行つていたのです。そして彼は二十四歳のとき三人の子の父となつていられ、ついに偽蘭の夫婦生活にそれ以上たえられなくなつて、医者に治療を願ひ出たということです。(精神分析学者F・ウィッテルス調査の実例に拠る)

まことに、同性愛者の結婚こそ、大きな悲劇であると云わねばなりません。

これは大きく見れば、男色を罪惡視し妻を視する社会の罪でもありますが、また同性愛者自身の罪でもあることは言うまでもありません。

いわゆる結婚適齢期になる同性愛者は、かかる外見をつくるつてこのようなエゴイステイックな偽蘭的な結婚を断固としりぞけるか、或はどうしても結婚せねばならぬ場合は同性愛癖を矯正して後にすることこそ望ましいと思います。

あなた(T・H氏)の場合も、すでに結婚後長年を経過してはおりますが、同じことが云えると思います。多くを云いません。妻女の倅せをも考慮せられて、善処されることです。

度々云うように、私は、同性愛を正しいものと主張し、同性愛者の幸福のために努力することに於いては、人後におちないつもりです。だが、私は甘言巧言は弄しません。同性愛者を甘やかすことがあつてはならないと心に掛けています。

小つばけな「道徳」などということからではなく、大きく人間愛の上から批判して、よきをよしとし、惡きを惡しと云うことこそ、同性愛の眞の幸福を招来するものだと考え、

その上からも云っているのだということ
を、心にとめてください。

★

ソドミアにとつて、相手を得られない
苦しみ悩みは言語に絶します。せつかく
相手を待ても、その

相手がノーマルなた
め、二、三の交渉で
裏切られてゆくこと
もあります。

かつての初夏の頃
に、一度だけ映画館
でソドミアの一青年
から、はじめて手技
せられ、雀躍して一
夜を過しましたが、
上京の途中とかで互
いに名を告げずに別
れてしまい、今になつて、懐かしくなり
後悔しています。

東京大阪などで、ソドミアの集まる所
のあるのが、羨しくなりません。小
生年配のこととて、このまま相手も得ら
れず年を過して行くのかと思えば断腸の



思いです。

同志の方は非お便り下さい。

(高知 T生)

★

小生は当年廿七歳
の独身の青年です。

十七、八歳位から廿
五歳までの美少年型
の同性に特に愛情を
感じるものです。東
京方面には、こうい
う同志のグループの
会合の機関があり、
それぞそ楽しく遊ん
でいられる由です
が、関西方面（大阪
京都・神戸）にはな
いものでしょうか？

(神戸 M・N生)

★

私は年令十九歳にて、以前或る男性とつ
きあい、肉体関係までもちましたが、今

では相手の人もなく、毎夜市内の繁華街
をさまよひもとめています。まだ一人
もお会いできません。

京都市内の人で、是非私を愛して下さい
る遇しき男性の方、お便り下さいませ。

(京都 Y・S)

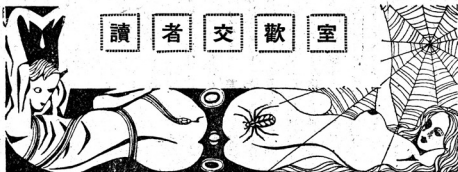
答 本誌十月号にも記しましたように、

最近、関西の方で、同地の同性愛者の集合場
所を問合わして来る通信が多くなりましたの
で、いずれ近いうちに、自分で現地に赴いて
調査し、確実な報告をしようと思つていま
すが、茲にはとりあえず人に聞いたところを紹
介しますと――

大阪では、中之島公園・天王寺公園、また
新世界界隈・道頓堀・九條・方面等の映画館
次に京都では、円山公園、映画館では京極の
八千代館、それから神戸では、湊川公園・東
遊園地、神戸劇場等々が、ノンプロの男性者
の代表的な溜り場になつていているということ
です。

云うならば、東京における日比谷公園公会
堂附近のごときものでしょう。

讀者交歡室



さちすど

★十二月号がやつと手に入り、小包を開く時の嬉しさ、思わず手が震へましたわ。

頁を繰る毎に「アッ」とか「ウィム」とか出るのは溜息ばかりでした。今後の御健やかな成長をお祈り致してをりますわ。

さてこゝに、勝手なお願ひを致させて頂きます。口絵は毎号申し分なく感嘆させられますが小説の方にもう少し、サディズムの方面を多く載せて頂きたいのですが。この点十月号は或程度満足させていただきました。

他はなにかもの足りなく思ひましたわ。余りソドミーの話が多すぎた様に思ひましたけど。男同志の同性愛には私関心が持てませんの。同好の方いかとお思ひですかしら。

今の所妾は、御誌の購読は秘密ですの。同性のマゾの方を慫

しいと思つてをりますが、まだ適当な方が居られませんか、私も未だ経験がございませんが、今は想像の産物でも又、実際に経験いたしました囁には是非投稿させて頂きたいと思つております。

(岡山・令)

★拾壹月号交歓室 静岡のT C 生氏の御意見を拜見して、大磯妙子嬢に対する非常に同情的な御言葉に対し、なにか不自然なものを感じました。

こう謂つた一見フェミニストらしい訴へ、特に残酷な事を好まない点を強調するあたり、実は似而非なるサジストであり、只ムッチリした白い肌をした女性に触れて見たいと云う慾望の変形的な表現ではないでせうか恥かしさと屈辱と快感……そんなものが身心を一度にかけ廻り……悲しい事だけれど私の氣持のどこかで、マゾの篝火にこの脉が燃えつくす迄燃かされて見

たいとさへ思つていると大磯嬢は書いて居る。過去に於て己の不具をのしられ乍ら、異性に責められる場面を想像し、悦唐を一人じめにしていた事でせうそこに突然、想像から離れた虐待を受けて、然もその不具な点を不遠慮に暴露されて相手の心をえぐり乍ら責められたからこそ、跡にホノボノとした悦唐の思ひが残つた事と思ひます。

小見山氏の演出のすばらしさには感心の他ありません。相手に伺ひを立てゝから責めるなど演出家としては全くゼロでありそこには何の迫力もありませんマゾ、サヂの方の内には、性器や膣、乳房等が奇型の方が責めたり、責められたりする場合も大いに有り得る事です。私もこう云つた人を裸にしたら、五体揃つた人に対する以上に興奮がより強く、責めの上に拍車を加へるでせう。

読者通信には興奮の終局に就いて少しも書かれてありませんが、相手がグッタリする迄責めたあとに、連綿的に興奮を与へて見たい。苦しみの終局に於ける興奮は何物にも代へ難いものだと言ふ事を知つてゐます。

こんな考へをお持ちの方の通信をお待ちして居ります。勿論男女を問ひません。

(東京 H S 生)

★御誌の熱烈な読者です。サヂストです。私は女性を鞭打つたりする事より、美しい女性に羞恥を起させ、苦しみもたえる事に、激しい亢奮を感じます。殊に洗腸に対して特別のフェティステックな憧憬を感じます

美しくいとお嬢さんが恥かしがつて嫌がるのに、無理に洗腸する光景を想像すると氣も狂うばかりです。同じ趣味を持つて居られる方も多いと思ひます。女性で医療として洗腸を受ける時、

又は洗腸器を見ただけで、性的に興奮する人を知つて居ります。その様な同好の人々と、御付合や文通がしたくて仕方ありません。何も、法的に許されない様なものでなくとも、洗腸器が雑誌の、画や文章にちよつとのる丈で、どんなに今迄と違つた生彩を放つか、想像出来ます。是非御一考下さい。

(久利須照雄)

★私達の慾望をかなへて下さる風俗草紙に、いつも感謝して居ります。

十五才の時白虎隊の美少年の切腹を見てから、二十七才の今日迄少年の腹切りに非常な興味を持つて居ります。

又、義太夫をかゝらず聞いて居ります。何故かつて時代ものには腹切りが多いからです。一度本誌に、白虎隊の物語りなり画なり載せて下さい。

私の好みは二十三才以下の男

の方で、瘦せていない人でしたらどなたでも(童顔の方が特にこのまじいのです)マゾ、サヂの傾向のある方なら明日にでも飛んで行きたいと思ひます。

(浜松 R M 生)

★パスを待つ間のつれづれに、ふと立寄つた書店で、御誌十月号をはじめて拜見いたしました小生少年の頃より縛られた女性に興味を持ち、皿屋敷のお菊明烏の浦里に何とも云へぬ興味を感じたものでした。

近年にも女子高校生と親しくなり、彼女により緊縛の快楽を充分に味あはせてもらひました。いろ／＼の姿で、こちらの要求通りの姿態で、彼女も縛られる事に快感を感じていた様ですが本春急病で他界し、今では貴誌により、彼女の面影を偲んでいるばかりです。

玲子十二ヶ月の菊の美代子の素直な後姿が、どうも彼女

を思ひ出させてなりませんでした。(島根 S・S 生)

まぞひすと

★初めて御誌に接しまして女装愛好家が多い事を知り、ほんとうに嬉しく感じました。

私は幼少より色が白く、身体は女の様で、誰からも男には勿体ないと言われていましたし、私自身も男である事が嫌でたまりませんでした。

今では毎夜家人にかくれて化粧をして、女の衣類を身につけて、苦しい自分を慰めております。どうか御同情下さい。

私の願ひは男性的な女の人と交際したいと思ひます。ほんとうに妻のつもりでどんな事でもいたします。

私身長五尺一寸体重四十三キロ容貌は女装した時は、女かと人を見まがう程です。御希望ある女性の方御連絡下さい。

(Y生)

★私もマゾ党の一人です。それもマゾフェニスト

です。汚物狂崇の趣味ある方、御便り下さい。お互の研究の爲に、御便り下さった方に私の経験談などお話し致します。仲々相手の方が得られないだけに苦しいマゾです。サド女性より思ひきり汚がされ



(Y氏近影)

にのううち、グッタリとした傷だらけの肉体を抱き、愛撫してくれる、そんな方があったら良いのになあとつく／＼思ひます

現在私はたと切なく一人惱んで居る次第です。喫茶店のボーイかモデルになりたいと思つて居るのですが駄目でしょうね。私を愛し虐んでくれる主人の出現をひたすら待ちわびて居ります。

二十六才、五尺三寸、十四貫色浅黒く美男子ではありませんがソドミアに愛される型です。思ひきり愛撫し、全裸の私を縛り、打ち、なぶり吊りに責めて下さる方を望んで居ります。一生私を世話して下さいの方が居りましたら是非一緒に生活してみ

(徳島、凡々生)

★御発展お喜び申し上げます。私は九月号からの読者ですが強烈なるソドミアであり、サヂとマゾを持つている私です。

★HOMOSEXUALTAT★
TECHNIK

鹿火屋一彦著 袖珍判装本

同性愛技法に
就いての一考察

定価 二百円 送料 二十円

ソドミア性愛秘典

ソドミアの性愛技法について未発表のものを続々発表の秘典ノ

東京都千代田区神田神保町2の34
日本特集出版社代理部

本社特選傑作責寫眞集

(好観々)

縛られたお姫様

写真 キヤビネ判印刷紙焼付 五枚一組 五百円

股間縛りの魅惑

写真 キヤビネ判印刷紙焼付 三枚一組 五百円

連縛の非處女

写真 キヤビネ判印刷紙焼付 五枚一組 五百円

泣く悦虐秘圖

写真 キヤビネ判印刷紙焼付 三枚一組 五百円

岩風呂の被虐

写真 キヤビネ判印刷紙焼付 三枚一組 五百円

制の服女學生

写真 キヤビネ判印刷紙焼付 三枚一組 五百円

危機一髪處女責

写真 キヤビネ判印刷紙焼付 三枚一組 五百円

是非同好の方に見て頂きたく吉報を一日千秋の思ひで御待ち申して居ります。(愛読者より)

★毎号の素晴らしい出来栄は私のアブノーマルな性態を十分満足させて呉れます。

私は当年二十三才のさらいいまんです。姉弟二人ですが、ちよつとした病氣をして死んでしまつたのです。それ以来、会社から帰つても何の楽しみもありません。それ以来姉を恋うる氣持から、だん／＼マゾになつて来たものと思ひます。

始めは姉の赤い着物をきて、自分でいろ／＼な事をして満足して居ましたが最近では、もうそれでは満足できなくなつて了ひました。女の人の責め苦でないと駄目なのです。二十一才から、二十九才位迄の御婦人の責め苦が一番嬉しいのです。この拙文がお目に止まつたら是非お手紙下さい。そしてこのあわれ

な私をおすくい下さい。

(SK生)

そ ぞ み あ

★私は御誌のお蔭で本当に生甲斐をみつめました。結婚しながらもソドミイに悩んでゐた一人です。が、今は一日も早く結婚を解消して、双方とも自由になるのが私としても良いばかりでなく妻も幸福が得られるからです。

私を熱愛して同様して下さる方、六大都市在住の勿論独身生活の安定したアパート又は部屋を持つてゐる二十七才より五〇才位までの、やさしい人を好みます。私は色雪の如く白く、肥満型、毛深い方です。身長一、七〇〇二十一貫、家系は士族です。よき相手を御まち申して居ります。(京都 SH生)

★空虚な心の徒然に、某書店で求めて以来、日夜同性を恋うる

心で胸をかきむしる思ひです。最近両親を失ひ、淋しさに某ダンスホールのピアノストとして働くようになりましたが、そ

こでふとした機会に某外人と親交を結ぶようになりました。

バンドの交替で休憩している時、男裝の麗人等とてはやされ際どいはずらまでされそうになつた時、彼はボックスの影から優しい救いの手を伸してくれました。

或る日その彼から強烈な同性同志の愛情を教へられ、それ以来その愛情のとりこにされてしまつたのです。間もなく彼は韓国の戦野に転属して了ひました。こうして裁ち切られたものゝ、日夜同性を恋うる心は、切なさ、に死にたくなる程です。二十七才の内気な青年で、身長五尺三寸十四貫八百、女性的です。

この通信を利用して、場所、日時をお知らせ下されば何時で

も喜んでお訪ね致します。門司か下関駅が便利なのですが、文通でも結構です。

(下関 T.T生)

★本書を初めて手にし、男色に対する理解あることに意外と喜びを得たものです。

本年二十一才身長一米六八体重五四キロ一見してやせ形の、スウツとした体格です。但し一見してそれとわかる様な女性的な外見は持つて居りません。まあ色白の方です。容貌は十人並以上と自負しています。目はパツチリした方で鼻は低くなく、口唇は或程度肉感的で顔の輪かくは一見、佐田啓二型です。この様な型を好まれる三十才前後の男性的な方と御交際願ひたいと思ひます。(又は三十以上)

私の望む方は十人並以上の容貌で身長一米七〇、体重のある方で筋肉質で多毛性の方、三船敏郎にインテリジェンスをそな

えた方を希みます。私は受動的ですので能動的な方を希みます。同様傾向の方、文通を願つてやみません。(鹿児島 K生)

★十一月号通信欄「大阪北浜様にお答致します。小生商用出張の爲、淀川の裸体運動を中絶致しましたが、最近又開始致して居ります。折角ながら家庭の事情で住所をお知らせ出来ませんので文通は致し兼ねますが、極寒期を除いて、前掲場所にお越し下されば大抵実施しています。特に河原は(赤川附近)霰があり、人目にふれないで快遊出来る処がありますが友なきを悲しんで居ります。一月、二月以外はやりまます。土曜日は特に実施して居ります。貴兄との快遊を楽しみにして居ります。

(大阪 T生)

★街の本屋で第一号を手にして以来、この本に対して深い愛情を覚えて居ります。

志摩雪夫氏の主人公、洋ちゃんはその後どうなのでしょう。ランポンを飛び出て大阪に出たまゝ妻がみえませんね、愛されて愛する者の心！かつては洋ちゃんだった私自身も今では……ソドミア同志の方御交際を待つて居ります。身長一七〇〇、体重五五キロ、容貌十人並やせ型で、被、能、同方の傾向があります。御文通下さい。

(徳島 K生)

★私は八月号よりの愛読者です。当年二十六才だけれど二十二、三才にしか見えません。身長一米六十、十三貫で性質は朗らかで、会社では人気者の一人です。色白く肌めこまかで容貌は中の上です。私はどちらかと云うと年とつた老人くさい人が希望です。四十五才から六十才まででしたら無條件です。若い方には興味が起きます。むしろ異性の方がましなくらいです。四十

五才くらいから上人の人だったら火がもてるくらい愛します。

五十二、三才くらいで肥つて髯のこい重役タイプの人など素晴らしいと思ひます。

私の職業が商業デザイナーで月に四、五万円は取つて居りますから、御附合出来る人は重役級か、商人級くらいが良いと思います。もしおうたがひの点があれば私の部屋を見ればどういう生活ぶりが判ります。

一日も早く御交際出来る日が来るのをまつて居ります。

(太郎より)

編集部より

増頁に伴つて本欄も六頁と致しました。当分これだけの頁を維持致しますからドシドシ御投書下さい。書信の廻送等毎日係が整理に忙殺されてをります。多少早い時と遅い時があるかも知れませんが、御容謝下さい。

この頁を「同好者紹介」「趣味の事交歓」が出来来る迄に親密にしたいと考えてをります。御利用下さい。

尚、おびたよい御投稿もすべて眼を通してをりますが、唯今検討中のものを左に四五本記してをきます。いっぺんに記し切れませんので他の方は次号に記載致します。

『嘘ぶエブロン』 宇智端女作
『逆と真』 葉山和夫作

『被虐少年期』 長塚弘二作

『サド医師』 匿名投稿

『被虐の果て』 水影映次作

『罪の意識』 田浦義房作

宇智氏葉山氏水影氏のモチ

ーフが面白く文体はもう一息という所で検討中。力作をお寄せ下さい。長塚氏は多少し客観性を。田浦氏は真実感がありますので検討中です。『サド医師』は物語の組立に難がありました

(編集部 氏家記)

サ
チ
ズ
ム
ス
ト
オ
リ
イ

姦

楽

病

院

「助けて！ 靖さん！」「ヒロ子さん！」
激しく靖の下半身がもがいた。そして、否應なしにメスに觸れた股間から、練の足を
たつて、眞赤な血がしたたりおちる。白いタイルの床を染めるのだ……



佐々木恭

小田明男 畫

東京都内には遠いのだが、殆ど埼玉県
よりの××区××町。だから都内と云つても
麦の青芽も見れば、土の匂いもする。
ただ、附近に小規模ながらゴルフ場がある
ので、時々新型自動車が疾走することもある
が、その他は静かな二、三流の住宅地だ。
某大会社のテニスコートを前に、二階建
の、古めかしい病院がある。瀬古田病院がそ
れだ。外科、整形外科、皮膚科、泌尿科があ
つて、場所柄にも似合わず、結構流行ってい
るらしく見えた。殊に瀬古田院長の、盲腸手

術は評判がよく、わざわざ都心から来院する患者さえあつた。

しかし、瀬古田博士の本領は、どうやら整形外科にあるらしかった。これは博士の書齋に入つた人なら、誰でも納得がいくことだ。壁にかけられた写真は、すべて原爆によるケロイドや、火傷のあとがむざんにひきつづいた、無気味な顔面である。尤も、これと並んで整形手術後の写真もかけられてはいるけれど、素人にとっては、少々運氣味悪いに違いない。

書棚に並べられた都厚な専門書も、どうやら整形外科関係のものが多く、見受けられる



ようだった。

博士は、往診の外には殆ど外出をしない。

病弱の貞子夫人との間には子供もない淋しい生活だつたから、夜は殆どこの書齋にひきこもっているようである。まだ四十代の少壯院長としては、ひどく色彩に乏しい生活のように見える。

ソツクの音がして、ドアが明いた。ソファにもたれていた博士は、ゆつくりとふりかえつた。

「それでは、これから帰らせて頂きます」

見なれた白衣を脱いで、まるで別人のように初々しく見える野崎ヒロ子が、ひどく真剣

な表情で立っていた。

「ああどうぞ、休暇は二日間だったね」

瀬古田博士はそう云つて、ジッと眼を細めるようにしてヒロ子をみつめた。なにか、院長が声をかけそうな気配に思えて、ヒロ子はしばらくためらつたが、そのまま頭を下げてホッとするようにドアを出た。

病床の夫人、二人の同僚、それから雑役の老人にまで声をかけて、そつとヒロ子は病院の裏門を出た。もう暗くなつた夜の道に消えて行つたのだ。

その翌日の午後のことだ。瀬古田病院の、二階の病室には、多には珍しい日ざしが、ボカ／＼と暖かつた。院長の回診の時間である。

皮膚科や泌尿科は、専門の医師が、午前中だけ来院して、外来の患者を診察する。この二階の病室の入院患者は、殆どが、瀬古田博士の手になる外科、整形外科の手術後の患者ばかりだつた。

院長は、男の患者にも女の患者にも、ひどく評判がよかつた。その英国紳士型とでも云うのも、もの静かで典雅な身ごなしが、誰にも好まれるはずにはないのだ。まつたく、腰盤や繻帯をかかえた。二人の看護婦を従え

て、回診する白衣の院長の姿は、ひどく立派で信頼感を抱かせた。

「どうです、気分は？」

足に大きな副木をして、繻帯に埋まつた患者に、博士は気軽に声をかけた。二、三日前交通事故で担ぎ込まれた男である。

「はあ、苦痛は大分納まつたんですが、夜、ちつとも眠れませんです」

「いけないなあ、眠るのが薬ですよ」

「それが……、こんなことは云いたくないんですけれどね、お向いの部屋で、昨夜は夜通し話声をして、それが気になつて……」

「向側の部屋……、あそこは婿の部屋だが——」

博士は呟いてから、

「可笑しいですね、気のせいじゃありませんか？」

「いいえ、確かに聞えたんです。極くかすかですけど、聴け方まで、女と男の声が——」

「女？」

博士の眼鏡がキラリと光つて、鋭く言葉を挟んだ。それから、殆ど同時に後の、二人の看護婦を振りかへつた。

白衣の二人も、サツと顔色が変わっている。

たしろいように博士の視線を受けてから、

憎悪のこもつた眼が、さぐるように二人の看護婦の間に交わされた。

だが、瀬古田博士は、平靜な語調で云つた。

「どうも、それは申訳ありません。早速取調べます。あの部屋は、医大に通つている。家内の甥が使つてゐるんですが、どうも、家内があまり猫を可愛がりすぎるものですから……、どうも、恐縮です」

院長は何事もなかつたように回診をすませたが、看護婦の青木と堤の態度は、ひどく平靜を缺いてゐるように見えた。

その夜の十時すぎ、病床の貞子夫人は、枕の上でジツと耳をすませた。足音が廊下を通る。二人だ。それは廊下を折れて、右手の夫の書齋に消える。

夫人は吐息をついて眼をとじた。足音の主は二人の看護婦だ。それも、今夜に限つたことではない。

永年の脊髄カリエスで病床にある貞子夫人は、だからずい分老けて見える。やつれた表情は、病苦ばかりとは思へぬ苦澁の色が見える。夫人は熱心なクリスチャンであつたけれど、なにか変質的にも見えるほどの、暗いカ

ゲがあつた。

夫人はよろよろと立ち上つた。鶴のように瘦せ、ギブスをはめた胴だけが、ツンとつばつてゐる。壁ずたいに病夫人は廊下に出た。

瀬古田博士の書齋の窓には、厚いカーテンが引かれてあつたが、内部には鼓々と灯がついている。

「かくしても駄目だ。君たちのうち、どちらか一人が、昨夜、婿の部屋に忍びこんだのに違いないんだ」

「……………」

「おい、素直に白状したらどうだい？」

ガウンにくるまつた瀬古田博士の前に、まだ白衣のままの、青木信子と堤松枝がうなだれてゐる。

「ふん、まつたくらい度胸だ。看護婦のくせに、あんな若造の部屋に忍びこんで……。青木おまえか?！」

「いいえ、違いますー」

「ふむ、じゃあ堤か?」

「私じゃありませんー」

「ほう、不思議なことがあるものだ」

博士は安楽椅子にうずまつたまま、ゾツとするような、皮肉な微笑を見せた。

「昨夜は、野崎ヒロ子は休眼で帰っている。この病院で、足腰立たぬ家内や患者のほかに、女と云えば君たち二人以外にはない筈だね」

「靖様がそんなことをなさる筈はありませんわ！」

二つ歳上の松枝はキツパリ否定して、色を失った唇を震わせながら、憎々しそうに信子を見返えつた。

「もしそれが事実だとしたら、きつと女の方から押かけて行つたのです。恥知らずわ！」

「まあ！ 私じゃないわ！」

感情家の信子はもう、オロ／＼と声を途切らせた。夢中で白衣のスカートをにぎりしめながら、院長の前であることも忘れたように松枝にヒタと向き合つて叫んだ。

「失礼なこと、云わないでよ！」

「なにさ！ あんた、何時でも靖様に、ベタ／＼して、みつともないつたらありやしない！」

「ふん、それは自分のことじゃないのさ！」

「なんだつて！」

声と同時に、大柄な松枝の上体が傾いて、ビシツと、信子の頬が鳴つた。

「淫売女！」

一度崩れるように床に膝をついた信子の丸い体が、

弾んだ襦

のように

松枝に飛

びついて

ゆく。悲

鳴をあけ

ながら、

猛烈な音

をたてて

からみ合

つた女た

ちが軋が

つた。

「猫かぶ

りやがつ

て……」

「畜生！」

女とは

思えぬよ

うな悪罵

を吐き散

らしなが

ら、二人はつかみ合った。肉体のぶつかり合う鈍い音。髪をつかまれた信子が、「ヒイ



ッ」と嘆きながらのけぞる。

椅子に坐つたまま、博士はすぐ眼の前で、二匹の雌獣のようにからみ合う看護婦たちを見下した。毛筋一本動かぬほど静かだつたが、博士の眼鏡は冷めたく灯をうけて、キラ／＼光っている。

パーマの髪も裾も乱してつかみ合っている二人の看護婦の狂態の原因が、若い医大生、婿にあることは明白だ。松枝も信子も、本能的な嫉妬に我を忘れていどみ合っている。わば二人の女の、婿への激しい愛情の告白とも見られた。彼女たちは、神聖なるべき婿を犯したものとして、相手を憎悪せずにはいないのだ。

「おい、君たち、よくも僕を侮辱してくれたね」

グイと肩をつかまれた松枝と信子は、囁きながら、ハッと瞳を見張つた。

何時の間に眼をを外した瀬古田博士が、近々と二人をのぞきこんでいる。その眼が、まるで別人のように残忍に光っているのだ。

「二人とも、あんな若造に血道をあげやがつて、俺の病院内で、勝手な真似をしやがる」グイと松枝の腕がねじ上げられた。何時の間にか博士は黒いゴム紐を握っている。例の

血圧を計る時や静脈注射の時に用いる、太いゴムの管だ。

うわすつた声をあげながら身もだえた時には、松枝の両腕は後手にキリ／＼と縛り上げられている。そして、腰が抜けたように床を這っている信子の手にも、またたく間に同じ黒いゴムが、喰ひこんでいるのだ。

「婿なんぞに……、許さん。俺は絶対に許さんぞ！」

博士は呟きながら、めまぐるしく部屋中を駆け廻つた。壁にかかつた鞭をとりあげる。

博士の唯一の趣味である。乗馬用の細い鞭だ。素ふりをつくれた。髪が垂れて、瞳は怪しく血走っている。何時もの、典雅な英国紳士型の面影は何処にもない。

それは、まるでハイド氏に変貌したジキル博士だ。良識と信望に溢れていた彼が、今は嫉妬に我を忘れて歯咬みしている。彼はなんと思つてか、隣りの手術室に通じるドアを明けた。

「さあ、いやでも白状させてやるぞ、ゆけ！ ゆかんか！」

鞭が鳴つた。縛られた看護婦たちは、齒の根も合わぬように震えながら、転がった。気丈な松枝も、さすがにヒイッと悲鳴の尾を

ひく。博士はまるで手や馬を追うように、鞭をふり上げた。手術室に追いこもうと云うのだ。

その鋭い鞭に容赦なく追い立てられて、松枝と信子は否応なしに手術室に駆けこんだ。冷めたいタイルの床。手術台と、銀色に光るさま／＼の手術器具。それが夜の灯の下に静まりかえっている。

「さあ宵太、おまえから始めるか——。乗るんだ。この手術台に乗るんだ！」

松枝を手術台の鉄の足にくくりつけると、博士は信子の背に向つて、鞭を鳴らした。

「ヒイッ！」

「痛いかな？ 痛い想いをしたくなかつたら、素直に手術台に上るんだ」

信子は紫色になつた唇をふるわせながら、夢中で手術台の上に這いつ上つた。

大手術の時に、自分が患者にしたように、彼女の両手両足はひろげられて、別々にキツチリとバンドで緊縛される。もう一寸と助けやしない。これから何が始まるのか、想像も出来なかつた。ただ怖い。恐しい。若い信子は、手術台の上で、絶望的に眼を閉じた。その眼が、ビク、ビクと痙攣する。

彼女が、以前にこの同じ手術室で、麻酔を

嘆がされて、博士に犯された時のことを、思ひ出してゐた。それ以来、同僚の松枝とかわがわるに、幾度この手術室に誘ひこまれたことだろう……。こんな屈辱を忍びながら、彼女たちは、靖の存在があるばかりに、甘んじてこの病院で働いてたのだ。

「白状しろ！ 昨夜、靖の部屋に忍びこんだのは誰だ！」

「あ、あたしじゃ、ありません！」

「嘘を吐け！ おい、これが見えないのか？ メスだ。鉄も骨を切るメソギリもある。今に鎌でも泥を吐かせてやるからな」

博士の右手に、キラリとメスが光った。信子の瞳は、恐怖に飛出している。

メスが、ピタリと、咽喉もとに当てられた。

「ギヤアッ！」

「ウフフフ」

不気味な瀬古田博士の笑声。メスが一気に引下げられる。首の下から膝下まで。だが、切られたのは白衣と、その下の幾枝かの下着だった。それが縦横に裂かれ、水々しい裸身が白々と現われる。

信子は、一条纏わぬ姿で、冷めたい手術台の上に白々と横たわっているのだ。

「どうだ。まだ強情をはるのか、今のうちに

白状したらどうだ？」

「ああッ！」

魂消えるような悲鳴が響いた。そして、博士の嘲笑。重い手術台が、ゴト、ゴトとゆれる。

その足もとにくくりつけられて、タイルの床の上にいる松枝の恐怖も、決して当の信子に劣りはしない。彼女は頭上でどんな責めが行われているのか、少しも見えやしない。しかし、重い鉄の手術台が震動する響きを、気が遠くなるような恐怖で、背筋に聞いている。今、信子に対して行われている責めは、いずれ彼女の上にも加えられるのに違いない。

「おまえたち二人とも、よくも俺を欺したな……」

「ヒエーッ!!」

「フフフフ、痛いのか？ 痛からうな」

注射針を握りしめて、博士は陰鬱に嘲る。手術室は博士の居城だ。誰をも介入させぬ、

隔絶された世界なのだ。

陰鬱な外科医のこの二重人格を、患者は誰も知らない。

瀬古田病院の二階は、六室ばかりあつて、

それそれ三、四名定員の病室になつてゐる。

だが、その一番東よりの、非常階段に近い一室は、医大生である靖の部屋になつてゐる。貞子夫人の溺愛する甥で、驚くほどの美男子だった。

その靖の部屋の前に止つた人影がある。靜かにノックした。部屋の中は、妙に靜まりかえつてゐる。

もう一度、今度はいら立しそうにノックを続けた。

「……誰方ですか？」

靖の声がして、暫くゴソ／＼と物音がしてから、やつとドアが明いた。

「あッ、伯母さん！」

バジャマ姿の靖は、あつ氣にとられたように声をあげた。

「どうしたんです。こんなに遅く……。第一

伯母さん、起きてもいいんですか？」

貞子夫人はハア／＼と、荒い息を喘がせながら、倒れるように椅子につかまつた。それから、何か不意と氣になつたように、辺りを見廻して、

「降さん、誰方が、お客様だったの？」

「い、いいえ、そんなことはありません。僕もう寝てたんですもの……」

派手な格子縞のバジヤマが、ふるいつきた
いほどよく似合う彼は、慌てて打消しながら、
「オド／＼と落着かぬ様子で、夫人の顔色
をうかがった。

「一体、どうしたんです。
伯母さん。無理なさつち
や御体に障りますよ」

「ありがとうよ、靖さ
ん。私を心配してくれる
のは、あなただけだよ」

夫人は華奢な靖の手を
握りしめたが、すぐヒス
テリックに体を震わせ
て絶望的に顔を蔽った。

「あーあ、嫌だ／＼。瀬
古田と来たら、まるで鬼
よりも冷酷な男だから……」

私には、もう一年以
上も、一言も口をきかな
いんだよ。そのくせ、ま
るであてつけのように、看護婦たちを自分の
部屋に引きずりこんで……私は、自分の家
に、オチ／＼寝てもらえない。あの人は恐
しい人非人なの。まるで血の通わない氷のよ
うな男よ」



「伯母さん……」

「靖さん、助けておくれ。私は、本当にあな
ただけが頼りだ。あなたがなければ、私は
「大丈夫ですよ、伯母さん。僕がついてます
から……」

夫人の背を撫でたが、影の深いその横顔は、
女のように優しい美しさに溢れている。

「靖さん、本当に、私は
あなただけが頼りなんだ
よ」

真子夫人は、可愛くて
たまらぬと云つた表情
で、ジツと甥を見つめて
ホロリと涙をこぼした
が、やつとその手につか
まつて、ソロリと立ち上
つた。

「伯母さん、僕、御部屋
まで送つて行きますよ」
だが、突然夫人の体は
硬直して、ワナ／＼の震
える指が、机の上を這つ
た。

「靖さん！こ、これはなんです。い、いつ
たい、誰のものです！」

黒い机の上には不似合に、赤い口紅と、
銀色のコンパクトが置かれてあつた。サツと
靖は蒼ざめた。

靖はちよつと持て余したような表情で、病

どうに自殺していたかもしれない。瀬古田も
看護婦たちも鬼だからね——」

「伯母さん、昂奮なさると、御体に障ります
よ」

靖はちよつと持て余したような表情で、病

「こんな、若い女の特物なんぞ……、なんだか、可笑しい」と、思つてたら——。靖さん、あなたは私にかくれて……」

「伯母さん！」

靖は夫人を止めようとしたが、恐しい力でもり切られた。夫人の眼は病的につり上つてゐる。ゼイ／＼と息を切らして、謔言のように呟きながら、病夫人は寝台の上をのぞきこんだ。それから今度は部屋の隅の大きな洋服箆箆にヒタと眼をすえた。

「伯母さん！」

「お離しッ！」

病人の力とは思えなかつた。ギツ、きしんと、大きな一枚戸が開く——。

「あッ！」

夫人は恐しいものでも見たように、よろよろと後ずさりした。箆箆の中に女がいた。しかも、休暇で家に帰つた筈の、あの野崎ヒロ子……。

薄い寝着一枚の彼女は、蒼白になつて飛出すと、サッと靖の背にかくれた。

「靖さん、あなたは、なんと云う人です！」

こんな、こんな看護婦なんぞ引きずりこんで……」

「伯母さん！」

「では、家に帰つたように見せかけて、昨夜から、この女はお前の部屋にいたのだね。二人でしめし合せて、外の非常階段から忍びこんだのだ。まるで泥棒猫のように——。鍵をかけた部屋に、昨夜からかくれているなんて——」

「伯母さん、僕たちは、本当に愛し合つてゐるんです！」

「けがらわしい！ ふん、看護婦なんぞと乳くり合つて——、許しません、私はそんな不仕だらは、絶対に許しません！」

ヒロ子は、あまりにすぎまじい夫人の様子に、ガタ／＼と震えながら靖にすがりついた。若い二人の寝着姿は、こんな時でも、華かになまめかしい。

その二人を呪うように、貞子夫人は執拗に叫びつづけた。

「靖！ お前もけだものね！ 瀬古田と同じけだものだら！」

手術室のドアが明いた。

瀬古田博士はギョッと振返つた。合鍵を手にした貞子夫人が、まるで亡霊のように立つてゐる。夫人が手術室に現われるのは、かつてないことだつた。

「オホホホホホ」

ガウンの前をはだけた博士と、その足元に死んだように横たわつてゐる二人の看護婦を見ると、夫人はさも可笑しそうに、甲高い笑声をひびかせた。

「フフフ、なんて御苦勞様なことでしょう。あなたは、靖の女を、一体誰だと思つてゐるの？」

「伯母さん、堪忍して下さい！」

後から飛込んで来た靖が、必死に制止しようとするのも耳に入らないらしく、夫人は博士に向つて、こともなげに云つた。

「この女たちじやありませんわ。野崎ヒロ子です！」

「……………」

「靖の部屋に行つてごらんさい。昨夜からあの女がいるのです」

野崎ヒロ子の名は、博士ばかりでなく、松枝と信子をも愕然とさせた。綿のように疲れ切つた体を起して、彼女たちは信じられぬものように靖を凝視した。

冷めたい手術室に、無気味な沈黙が流れる。それを破つたのは博士だ。彼は松枝と信子に、グイと顔をしゃくつて命じた。

「オイ、野崎ヒロ子を、此処に連れて来い！」

「伯父さん！」

弱々しく呟いた靖の前に、博士は冷然と立ちはだかった。

「靖、お前も大した度胸だな。野崎は、まだ俺も手をつけぬ生娘だった。お前に攫われようとは思わなかったよ」

ゾツとするように陰剣な声言だった。

松枝と信子に双方から腕をつかまれて、手術室にひきずり込まれたヒロ子は、あつと声をあげた。

素裸にされた靖が柱にくくりつけられていた。紙のように蒼ざめていた。足は縛られていなかったが、その股の間には数本のメスが体スレ／＼に柱につきささっている。無気味に光る冷めたい両刃のメス。恐らく、一分でも体を動かせば、それは靖の肉体に鋭く刃を立てるだろう……。

すぐ傍の椅子では、直子夫人がゲラ／＼としまりのない笑声をくりかえしている。殆ど狂人のそれだ。あんなに溺愛した甥の、苦悶の姿を眺めながら、夫人は乾いた声をあげて笑っている。

「野崎！ まだ小娘だと思つていたのに、もう男とくつついたのか。オイ、昨夜、靖の部屋でなにをした？ 皆の前で云つて見ろ！」

ビシッ！と音がして、薄い髪膚が裂ける。ピンク色の肌がむき出しになった。

のけぞつて逃れようとするヒロ子を、松枝と信子が、憎々しうに押さえつける。複雑な愛憎の心理！ 彼女たちは靖を奮わせた嫉妬を、今度は協同してヒロ子一人に集中しているのだ。

「助けて！ 靖さん！」

「ヒロ子さん！」

激しく靖の下半身がもがいた。そして、否応なしにメスに触れた股間から、裸の足をつたつて、真赤な血がしたたりおちる。それは間だんなく、白タイトルの床を染めるのだ。

直子夫人が、又、けたたましい笑声をあげる。嫉妬だった。すべての人間が、嫉妬で支配される。

「ヒ、ヒッ！」

「フフフ、苦しいか？ 今に、もつ／＼と音を上げさせてやる」

瀬古田博士は憑かれたように喋りながら、ガラスにトリリとした液体をそそぎこんだ。

「どうだ野崎、これはお前もよく知つていた下剤だ。十分後、いや、七八分後にはどんなことになるか、お前はよく知つていた筈だね？」

「や、やめて！」

だが、その顔がグイと上に向けられる。ガラスが、喰いしばつた歯にカチ／＼と当る。「口をあけるのよ！」

松枝の手が意地悪く脇の下をくすぐつて、アツと声を出すと同時に、下剤がタラ／＼とそそぎこまれるのだ。

瀬古田博士は、嬉しそうにニヤリと笑つた。「さあ、惚れた男の前で、どんなザマを見せるつもりだ。野崎、昨夜のことを、洗いざらい喋れば便所に行かせてやるからな、そんな声も耳に入らぬように、ヒロ子の体がうねる。額にはもうベツトリと脂汗だった。

「ウ、ウウウ」

両手を握りしめて、彼女は虫のようにうごめく。

靖の股間からは血が流れつづいた。

御誌通信欄により多数のソドミア愛好者のある事実を知り、悲しみの薄れる思い。小生当年三十五歳、三児の父親、その男が他の男性を慕い苦しむ姿を御推察下さい。五十一六十歳の濃厚なる紳士を見れば血のたぎる思いです。大阪辺りに適当な方居られませんか。

風俗草紙賞設定！

二十萬圓懸賞原稿大募集！

……特異風俗誌の檜舞臺に野心的アブ作家の登場を期待する！

賞金

一席 文藝賞・研究論文賞

(風俗草紙賞)

各 五萬圓 二名

二席 同各 貳萬圓 二名

三席 〃 壹萬圓 三名

佳作 〃 五千圓 六名

本誌は戦後の特異な風俗誌として發刊以來絶讃を博して参りましたが、今回『風俗草紙賞』を設定、本誌の内容にふさわしい新しい分野の開拓に情熱を燃やす方々の、新鮮な力作、傑作を広く募集致します。次の規定を御

参照の上、何卒奮つて願下さるよう願致します。

規定

一、内容は本誌にふさわしい、アブノーマルな題材であれば如何なる形式にても可。但し応募者各位の便宜の爲、第一部、文芸賞

一、必ず未発表作品たること
一、締切、昭和二十九年二月十日
一、発表、本誌五月号誌上
一、入選作品の版權は本社が保有する
一、原稿返戻は乞御容謝
一、送り先、東京都千代田区神田神保町二の三四 日本特集出版社編集部、懸賞原稿係宛 封筒に、必ず各部懸賞原稿と朱書の事

第二部、研究論文賞と区別す。

第二部、研究論文賞と区別す。

第一部 文藝賞
(小説、手記、告白、体験レポート、院物等すべてを含む)

第一部 日夏由紀夫

第二部 研究論文賞

(アブノーマル性風俗、心理の研究、批評、エッセイ等を含む)

龍膽寺雄

一、枚数は四百字詰五十枚迄

第二部 高橋 鐵



讀切連載
變態外國小説

(第一回)

血みどろの薔薇

ウウツ、大理石のようなジャンヌの肌は矢つぎ早なる
齒型で埋まつた。它食の萬力のような温しい指がピン
ク色の乳首かあい乳首をねじりむしつた。みるみる
豆粒のようなその乳首は紫色に腫れ上つた……

マリウス・ボワザン

松戸淳譯

中川彩子画

マリウス・ボワザンは、妙な趣味をもっている。艶笑文学
の古今東西に亘る補足趣味が豊かな男だ。文名はごく一部の
好事家の間にしか知られていない。大震災頃に一寸日本にも
来た事があり、僕も横浜のグランドホテルのロビーで二三度

会つた事がある。白黒露西亞の素晴らしい美人を妻にして、
かなり濃厚なサディスティックな日夜を過ごし、ホテルの通中
の間に、評判だつた。このボワザンが、例えば、フンドレ
ーの「処女」とか、モーパッサンの「ボールの恋人」とか



アルツイバーシエフの「サーニン」「最後の一線」とかを補足すると、たちまち、珠玉の春宮図的文学が現われてくる。

しかし、かれの場合は、可能な限りすべてをサディステイックな技法によつて誇張するのである。

また、例のジョン・クリーランド著「二娼婦の告白」を手がける場合などでも判るように、エピソードをビクアアップして作者の意図を拡大して読者によく見せてくれるのであ

る。筆者は今後、数回に亘つて、ボワザンのこの種のホッピー（道楽）を訳出して行こうと思う。

この「血みどろの薔薇」は、「二娼婦の告白」中の一挿話を発端として補足を試みた作品で、原文はフランス語であること勿論だが、法外もなく原作の意図をモディファイしている。だから、すべて「くずし」であり、「摘要」であり、いわば、よくある「壊之補」「肉蒲団」の粉飾現代版のなぐい

と思つて読んでいただければいいわけである。ただちがうのは、文章に気品があるのと、象徴的手法が冴えている事で、世のつねの淫書とは風格が全く異っている点だ。

××

ミディネットが二人。いずれも、年若く、美しいパリジエンヌである。この温泉にきている。

金髪でばら色の肌をした、肉すきのいい方がアンヌで、茶褐色の捲毛を肩にたらし、しなやかさそのもの、と、いいたい、すんなりとした方がジャンヌである。

ミディネットといえ、パリーやリオンのような大きな都会の銀行会

社商店につとめている、当世風の職業婦人
 畫（ミデイ）になると、セーヌの土手や公
 園のベンチを、花やかな衣裳や男どもの胸
 にこたえる濃厚な香水や化粧品、の香りで
 時ならぬ、あえかな雰囲気（アトモスフィア）に化してしまふ
 ……つまり畫（ミデイ）み娘なのである。

オーベルの谷底に、すばらしい温泉が発
 見されてこのかた、都会の資本家どもが、
 急ごしらえのホテルをジャン／＼たてはじ
 めた。

岩石の多いカチ／＼な景色だが、一日中
 よく日のおたる谷間で、もう、三棟ほど、
 白壁の清潔な温泉旅館ができていた。

細流に沿つた窪地の一部に水浴場があり
 大理石の水盤から、乳色の鉱泉がたぎりお
 ちてくる。

水盤の上には芽ぶき屋根があり、顔色の
 すくなくない皮膚病やリユーマチ患者が、じ
 つとつかつてゐる。

オーベルの温泉村に程近く、養護施設
 がある。旧教のある教団が建てた封建城主
 の砦のように、陰気な銃丸のついた、赤煉
 瓦の建物が幾棟か、ならんでいる。

主として、天刑病の患者達を收容して、

程度の軽い被收容者は農耕や道路工事や收容
 に使ひ、手広く花園を經營し、軽い患者を近
 くの村や町へ花売りに出している。

顔のひつつれた、全身の皮膚が松の皮のよ
 うに固くなつた托鉢婆の花売りが、谷の
 ホテルを上得意とするようになったのも、当
 然である。

ある朝のことであつた。

アンヌとジャンヌは、ぶどう畑の小径を散
 歩した。湯上りの肌は白ゆりの花弁のよう
 にしつとりとはずんでいた。

まばらに陽を透かしている蔭が、心地よい
 涼しさで、美しい肌はそれを貪るように吸つ
 ていた。

道はやがて坂になり、坂は丘となり、丈の
 低い緑の草で一面敷きつめられていた。

「いいわねえ」アンヌは、うつとりと、う
 つるな眼で、かあいい女友達をかえりみた。

「いつまでも、こうしていたいわね。都会な
 んか、もう、かえりたくないわ……」

しかし、二人は若かつた。美しい自然だけ
 に満足するには、まだ、なにか不足してい
 た。と、いうより、あまりに過剰な何ものか
 が身内にあふれていた。

二人が処女か、どうかは、誰も知らない。
 しかし、処女にしては、あまりに媚態が
 深すぎる。手や足や胸のたわみが、誘惑的
 だ。二人は、丘の上に立つて、何か、大自
 然に抱かれる歡喜の物足らなさを味わつて
 いるようだつた。

と、このとき、ぼだい嶺のしげみが、さ
 やさやと囁つた。朝風に、刺戟的な緑葉の
 匂いがさつと洗れてきた。

二人ははつとして、うしろをふりかえつ
 た。

いつも、ホテルの台所にくる、花売りが
 食だつた、これから、花を売りに、下へお
 りて行くのだらう。あの病氣とは見えない
 逞しい大男で、ひどいやぶにらみで、その
 上、どもりなのだ。

「花を買つてくれ」というのだらうが、「ア
 ナア：ナカカ：カ」というようなわけで、
 てんでわからない。まるで動物がほえてい
 るみたいな吃音だけが、その、えみわれた
 厚い唇の間からもれてくるのだ。

大分、顔がうれてるとみえて、このへ
 んでは「かつたい病院のジョーク乞食」と呼
 んで、からかいものにする。

お人好らしいが、その、黄色くにこつた眼でみられると、ちよつと手が出せない。

ごく単純な若者——と、いつても二十五六くらいだ——で、どんなになぶりにされても、ねばつこいよだれを口角に泡立てるだけで、怒つたことがない。

わり合いに難症とみえて、その蟹の足みたいにこつこつな指かくの字なりに剛直しているだけで、あとは、熊のようにがつちりとした田舎者の肉体である。

乞食だろうと、白痴だろうと、男であることにはかわりはない。口がきけないからただにやにやと笑っているだけだ。愛さきうがある。だが、ひどく不潔で、鼻をつく臭気の発散するぼろに包まれていることを忘れたら、べつに……。

「ヒヒヒヒッ……」ジーク乞食は、もう二人のそばに近ずいていた。鼻にかかる音でヒヒヒと笑いながら、ミモザの花束をへしながつた太い指でつかんでいる。ぼろ靴が歩くたびにパタリパタリと口をあける。

「こんなところで……困つたわね」

アンヌが眉をひそめた。ジャンヌも足もとがふるえてきた。

「でも……どう？……買つてやつたら……かあいそうでもうもの」アンヌが、ふつくらとえくぼのそろつた手の甲に陽ざしをさけながらささやいた。

「そうね……」ジャンヌは、桃色の爪のかあいい二本の指でスカートをつまみ、ごろた石をとびこえながらうなずいた。

アンヌは、このとき、ふと、息ずまるような、殺到するむら氣に思わず身ふるいした。が、随性は強烈にかの女を押しやつた。

「ふふふ……」あどけない臍が微笑んだ。

「面白いことがあるわ……」美しい友にささやいた。

彼女は半クローヌの金貨をつまんで、

「お花ちようだい」といつた。ジーク乞食はおどろとした顔つきで、まごついた。おつりがいいのだ。そんなことは、アンヌだつて、ちゃんと知っていた。ジークは、両股を抜けて立つたまま、

「ウウウウ……」と、うなりながら、ぼろの中から手を出して、耳のうしろをかいている。「わかつてるわ……いいのよ。それじゃ、い

つしよにホテルへいらつしやい。こまかいお金みつけてあげるから」

と、いいながら、アンヌは、あでやかにほはえんで、ジャンヌをうながし、坂を下りて行つた。

「アンヌ……こんな汚ない人と、いつしよに歩くのいやよ……」桃色のバラソルをくるくると背の上でまわしながら、ジャンヌは苦情をいつた。

「ジャンヌ……私、実験してみたいのよ……こんなぼろ屑みたいな奴にも、男性がかくれているかどうか……ね、ためしてみない？……神さまのいたずらを、ためしてやらない？」

アンヌは、びつくりしたように大きく眼を見ひらいて、じつと、みつめるジャンヌの眼をやさしく、やわらかい手の平でおおつてやりながら「そんなに見やいやよ。せつつかの勇氣が消えちまうじやないの」と、ささやく。

ジーク乞食は、生れてはじめて見るブドワール（婦人の聖堂）の濃艶な調子に圧倒されたように、部屋の片隅で、一つまみの

油汚れたボロのように立ちすくんでいた
「いいわ……でも、私、見ていただけでゆるしてちょうだい」

「ええ、見てらつしやい……どうなるか」

ここで、アンヌは何事かジャンヌの耳にささやくと、いそいで部屋を出ていった。
ジークは食はびつくりして「ウウウウ……」

「……とうなりながら、「金をくれないで行つてしまつた！ どうしたのだ」という意味とわかる手まねをした。

豪華な寝台の傍の、マホガニーの小卓に手早く純白のクロスをかけ、食器棚から皿やコップや壺やびんをとり出してならべおえたジャンヌは、

「ジークさん、安心していらつしやい。お姉さんは一寸お風呂にいらしたのよ。それまで私がお相手するわ。お肉やぶどう酒やいろんなもの……さあ、食べながら待つてね」

婉然と微笑みかけ、やさしく椅子をすすめられた乞食のジークは、しばらくもじもじしていたが、いきなり、手ずかみで鶏のソテーをつかみとりむしゃくしゃくと、黄色い反歯をかち合わせながらバタつきはじめた。



ク、あの魯鈍な顔が、生れかわつたように、弾猛な射すくめるような表情にかわり白い歯が、小さきみにカチ／＼と、とめどもなく、かち合はじめた。

ジャンヌは思わず胸をおさえた。心臓がしやにむに高鳴る。どうなることだろう……好奇心が高まれば高まるほど後頭部がうずくように痛んでくる。

「お姉さま……もう、やめて……これ以上は危険よ……この汚らしい乞食……やつぱり、男だつたのよ……男以上に男だつたのよ……あとで後悔なさるわ……ねえもう早く、お金をやつて、おかえしになつたら？」

「そうね……すこし、こわくなつたわ……もう、いいわね……」アンヌは、上わずつた声で、こつくりした。そして、指さきで小銭をつまみ、「はい、御礼よ」と、さし出すと、ジークは、そのグロブのように大きな垢黒い掌をひらいて受けとりざま、小銭ごと、アンヌの左手をすつぱり握り包み、ぐいぐいと、引きよせようとした。

「あらッ！ だめ……だめ……贈つてーね、かつて！」えらい力で引つぱられたまま、

くりかえしてさげんだ。すんでにベツトからころげおちようとしていた。

むりやりに、いたずらされて、こんなになつてしまつたものを、今さら……乞食のジークは、ウウウウという唸声の中に、これだけの意味をこめているのだらう。

木の芽は多眠を破つたのだ。

一しきり食堂からの音楽は急テンポの二拍子に代つた。時々、客たちの笑聲が起る。ジャンヌは、どうしてよいのか、途方にくれて立ちすくんでいる。今までは忍従してきたが、もう之以上ゆるさんぞというように歯ざしりをかみかみ、白痴はアンヌの肩へ手をかけた。

「あ、ダメー」アンヌは身をよじつた。身をよじりながら下を見た。この怪物が、こんな立派なものを！ と、眼が焼かれる思いだつた。

「やつぱり……ね……」と、美しいジャンヌも驚嘆の声を吞んだ。頭の空つぽな、とるにも足らぬこのみすばらしい天刑病の乞食に、神様は、こればかりは比類のないものを、お与えになつたのだ……

男は手を代えた！ ロバの耳でも引つぱる

ようにアンヌのふくよやかなのどをわしずかみにすると、いきなりベツドにたおした。そして、その不自由な蟹のような節くれ立つた指で気が狂つたように、身にまとつたばろをびり／＼とひき裂き、すつかり裸になつてしまつた。逞しく骨太い男の体になつた。が、争えない悪疾の斑点や乾いた腫のあとが、胸や腰や毛深い足や、腕一面に、みみずのように走つている。むーつと胸をつく不潔な体臭があたりかまわずひろがつてゆく。

「ウウウウ……」うなりながら、どす黒い唇を近よせてくる。

「いや……いや……いや……」

右に左に顔をよけるアンヌの眼はうるんでた。舌の根が、どう／＼な熱っぽい泥沼に吸いこまれた。ぜいぜい猪のように鼻息高く乞食はしつとりと濕つたアンヌの手をねじまげ、うしろ手にしつかとおさえつて、これでもかとおぼかり、岩のようにざら／＼した硬い指を、柔かな女の五本の指にからまして、逆に反らせ、痛がるのをかまわず、ぼきん／＼と、音をさせた。

「だめよ！ だめよ！ そんな乱暴しては

「！」たまりかねて、ジャンヌがうしろからジークの胸をひきはなそうとしたが、男の胸は鋼板のように重かった。

「ワワワ……ワワワ……」

ジークはこんどはアンヌをそのままにしておいて、いきなりジャンヌの方へむきなおり、猛獣のような勢で、とびかかっていた。

そして、ふせこうとするジャンヌの小さな両手をむんずとつかみ、うーんと力を入れて左右に振った。ジャンヌの体は、十字架にかけられたように十の字になった。

乞食はそのままぐんぐんと、ジャンヌの両手を高くもちあげながら、壁さわの鉤にさがつているサテンのベルトを口ではずすと、えらい力で真中から引きちぎり、不器用な手つきで、ジャンヌの両手を上へあげて別々にしぼり、大きく十の字なりに、壁の鉤にひっかけた。

ジャンヌの足さきは床から二三寸の間隔で宙に浮いている。

「ウウウウ……」白痴は唇の間から粘液のようなものをたらしながら、苦悶するジャンヌの美しい姿をながめていたが、こんど

はぐーんと背のびをしたかと思うと、その小さな唇を吸いはじめた。溶けるように甘い唇だった。チューチューと音をさせ、ごくくく／＼のどをならせ、彼女の香よい唾液を吸い避色の太いのどをびく／＼とうごめかした。すんなりとした両手の指が、堪えられない侮辱にあらがうように、虚空をまさぐる。

「ウウッ」と乞食はむさぼるように、乙女の両手の指を代る代る口の中で舌をからみ味わった。美食家の戦慄を味わい乍ら……。

全裸のひつつれだらけの男の膚には汗がにじみ出ていた。

早くも次の行動がはじまっていた。ジャンヌはこうして両手をはいりつけにされ、抵抗も出来ぬままに、すつかりズロースまで剃ぎとられてしまった。

「ウウッ」と、大理石の肌は矢つぎ卑なる畜型で埋まった。万力のような過しい親指と人さし指が、ピンク色のかあいい乳首をねじりむしった。みるみる豆粒のような乳首は紫色に腫れ上った。一度も素足で歩いたこともないような、なめらかな可愛い足指の一本一本にジークは前歯を思いきり深くえぐりつけた。乙女はあまりの痛みに身もたえして、ヒ

ーヒート泣きさけぶ。

一方、今しがた、ベッドにたおされ、綿のように弄ばれたアンヌは、このときはつとして我れにたえつた。見れば乞食ジークの片手は石膏細工のようにまっ白なジャンヌの脇の下をひつかみ、やわらかい腋毛をパリ／＼と音がするほど容赦もなくむしりつついている。そして、臭い息をふーと吹いて細い毛の断片を室内に吹きちらして、にたにたとわらつてゐる。どこから見出したのか、爪切りばさみで、打ちふるえる二本の内股を所きらわすつまみ上げ、ほんの一小片ずつだが、まっ白な肌をはさみ切りはじめた。見る見る鮮血が、美しい円柱ににじんでくる。ます／＼荒れ狂った天刑病者は、こんどは化粧台の上にあつた針金のヘヤーブラシを逆手ににぎるや、手にあまのような美しい乳房をめちや／＼にこすりつづけた。ブラシのあとは桃色の溝となつていくすじ目の血がにじんできた。くびれた腰に咬みついて、肉の中深く歯をつき入れた……もう乙女は泣きわめく力もなかった。

「ウウウ……」淫獣は、ついに、女の最後

のものを占領しようとするその一休みというところだろう、はげしい息で巨大な肩を鼓打たせながら、乙女の足もとに腰を下した。

「いけない！ それは……それだけはいけない！」友の危険を直覚したアンヌは、そいつとベッドをすり下りると、ホテルの芝生に面した窓をあけ、救いを呼ぼうと、片手を窓のハンドルにかけた。と、その幽かな音に早くもそれと感じたらしく、ジークはウーッと、狍々のようにうなり出した。そして、例のがに足で、のそのりそりとアンヌのうしろへしのび寄り、いきなり羽がはじめに抱きあげ、そのまま軽々とベッド

に運び、ぼーんと投げ出した。女の体はシートの上でマリのようにはずんだ。

「ウーッ」と、喊声ともつかぬ音を立てアンヌの上からおいかぶさるように抱きついた。もう、いくら泣いてもわめいても駄目だ……と、アンヌはあきらめた。せめてジャンヌだけでも汚さたくない……そう思つて、男のはげしい垢臭の間から、薄目をあけて「早く逃げて！」と合図した。

人造人間は、完全に息を吹込まれたのである。

情欲にわなわなと身をふるわせ、ぐいぐいとのかかってくる、むせるような酸臭、その力はブルドックだった。口もきけない動物！ 醜で



獣！

「ウウウ……」アンヌのか弱い手

首は、いつしかベルトできりきりと、ベッドにくくしつけられ、両足も、シートを襲いて縛った紐でベッドの外側へ大の字にくくしつけられ、アスバラガスの薬のように柔かな薔が雪白の谷間に、無残にもそよいでいた。

それでも、必死の力で体をくねらせた。が「ウウー！ ウウー！」の唸きとともに、がんと頬を平手うちになされ、大きな両手で乳房をもみしだかれた。

美しい唇を男の手はむりやりにめりくぐと大きく開かせた。黒い大きな指が、ぐいぐいと、紅唇をわつて中に突込んでゆく、そしてかあい舌をつまんでいじりまわす。その痛さは気が遠くなるほどだった。むりにつかみ出した柔かいルビー色の舌を、又しても大きな臭い歯が面白半分咬みしだく。狂い切った乞食は、のどにからんだ痰をゲップと音させて、乙女の口の中に吐き込んだ。

「ウウウー！」過しい種牛の火のような発情はさらにつづく。乙女はうつろな歌の中で口の中にべつとりかたまつてはなれぬ乞食の濃いどろ／＼な痰の臭気から妖しい、今



まで夢想もしなかつたうずくような快感を味わつたような気がした。

だが舌の先きはしびれていた。そしてついに、乞食は最後の幕を手荒く切りおとした。手も足も縛されたまま逃れようとすべもない、うつつ心で、「ジャンヌさん！ ジャンヌさん！

助けて！」と、幾度きけんだらう。が、もう、部屋にジャンヌの姿はなかつた。ジークが小値をなぶりつづけている間に、ジャンヌはこっそり脚めを解き、外へ救いを求めにいそいだあとだつたのであつた。

××

「でも……乞食のジークつて、やつぱり男だつたのね……驢馬じやなかつたのね……」
「お姉さま、まだそんな、のん気な事云つてらつしやるのね……お怒りにならないの……」
「……すんでの事で、大へんな目におあいになるどころだつたのに……」

二人は湯ぶねのふちに腰かけながら、昨日のおそろしかつた一幕を反芻していた。ぬけるように白い肉体は、二人ともに、おぞましい咬傷と掻傷と歯型の模様で入墨したようだ。お互いの忌むらしい記念物……二人は互いにそれを見るときもなく眺め合つて、怖ろしいばかりではなかつた、あの小時間のしびれるような感覚に胸の高鳴りを秘めているのだつた。

と、この時、浴場のそとの、にれの木の

植込みのあたりから、びたッ！びたッ！と素足で土をふむ音が入りまじつてきこえてきた。ホテルの窓からはすっかり灯が消えて、遠くゴーランクルの通山からふきおろしてくる風の音が深い夜の山の湯の寂寞を色濃くしていた。

「あらッ！ 誰か来るわ……」

ジャンヌはさつと顔色を変えた。上気した肌一面に粟が走った。

「今ごろ……おかしい……わ一人や二人じやなさそうね……だんぐこつちへ近づいてくるようね……どうしましょう……」アヌヌの唇も紫色に変わった。

「今日帰ればよかつたわ……今日帰ればよかつたわ……」ジャンヌはかくれ場をでも求めるように、思わず湯の中にあごまで沈めた。

谷のむこうの旧教々団の施設から抜け出してきた連中にちがいない……と、思うと二人は身も世もあらぬ恐怖に慄しそらだつた。

足音はびた、びた、びた……と、乱れながら近づく……腋を引いている患者もまじつているらしい重い足だ。不自由な体をむ

りに、足音だけは人並みに忍ばせようとするきこちなさが、一そうグロテスクだつた。

二人のヴィナスはしつかと抱き合つて湯槽の隅にちじまつている。

「いたよお！ ここにいたよお！」窓のそとの漆黒の闇の中から、眼のはれ上つた、鼻の潰れた大きな顔がぬつと現われて叫んだ。頭がふくれ上り一本も毛がない。兎のように目が赤くただれている。

「風呂場か、そいつはいいぞ」第二の声。

「フガフガフガフガ……」鼻にかかつたつぶれた言葉が、にこつた反響となつてつづく。

乙女は白蠟のように固くなつて、居すくむばかり……ガチャン！ えらい音がつづいた。

棒きれでドアやガラスを叩き割っている。内側からとさした鍵など物の役にも立たなかつた。四人だつた。一人は昨日の乞食ジークで

他の三人は、一層醜怪な結節顔で年齢の推測もできぬ程顔も手も形のくずれた施設患者達だつた。あまりにも顯著な病変の兆症のため、数年前から施設の柵外に出ることを禁じられていた連中だつた。

ジークから昨日の'avanture'を手柄鎖に手振り身振りで吹きまくられた三人は脳

天がしびれるほど興奮し、どうしても俺達にも拜ませろ、楽しませろと承知しなかつた。で、とどのつまりジークが案内をつとめたというわけらしい。

我れ勝ちに腰でしわばつたばろをむきおとし、醜くも歪つたなりに胴体をのけるようにして、タイルの上に跳りこんできた。局部がへしまがり、縮み込んで、どくどくと黄色な血膿を吹き出している大入道がまつさに、大手をひろげて、ざんぶとばかり湯けむりの這う浴槽にとびこんだ。夥しい波紋とともに、膏藥やガーゼがどろどろに浮上つた。

「お嬢さん、こわがることはありませんよ。久しぶりの娯楽だ。ゆつゝ可愛がつてあげますぜ」

つづいて三人、キーキーと奇怪なはしやぎ声を立ててとびこんできた。

「四人だな。さき様はお二方だ。仲よく二人が一人ずつ、ちよいだいするでしょう」いきなり一人がジャンヌの腕をむんずとつかんで力まかせにアヌヌから引きはなすと、横抱きにして、くずれ、えみわれた口を無器用にとがらせながら、ジャンヌの朱

唇をむさぼり吸つた。ジャンヌはむつちりとした両足をばたくもがく。と、こんどは小指と中指の缺け落ちてつる／＼の坊主になつた三本指の大きな手が、ジャンヌの両足を抱きしめながら、かあい膝小僧の小さなえくぼを、ぎゅつとつねり上げ、早くもみだらな所業に及ぼうとした。

アンヌは昨日の乞食ジークの餌食だつた。荒々しく首に腕をからみ、滑らかなくたびれたのどをあんぐりと嚙む。もう一人がうしろから羽がいじめにして、乳房をおさえ、胸もつぶれよとばかりしめつけた。

やがて、二人の乙女は、別々に、タイルの上に仰向けにおさえつけられてしまつた。ジャンヌの肉体の線は完全に近い艶麗美をそなえていた。片目のくすれた賊の男が頭のところに、三本指が足の方にかまえた。

「お前には腰から上をくれてやらあ、下の方は俺が先きだぜ」三本指の命令一下、賊男はむんずとジャンヌの両手をにぎり力まかせに頭の両側へ引き上げた。そして、小さく形のよい真綿のような掌をむりに二つ重ねた上に大きな膝をつき、身動きならぬようにした上で、美しい唇がけて崩れた

高月大三著・喜多玲子絵
B6判百餘頁美装本

時代小説
實小説
お小夜嵐

価三〇〇円
下三〇〇円

吾らな暗黒の嵐にもあそばれる美女お小夜の柔肌！きり／＼と噴込む瞳目の痛さに悶える姿男達の眼がなめるように覗き込む

伊藤晴雨著

凄艶女體 拷問私刑秘畫集

手梳和紙合紙付豪華麗麗彩色特製快入限定
會員頒布版 第一集 (五枚一組)

價五百圓 下共

晴雨隨筆 第一冊
實の四十八手

小型和裝美装
價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第二冊
繪物語血血郷談

小型和裝二色刷
價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第三冊
危機一髪畫譜

小型和裝美装
價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第四冊
與力同心岡ツ引

小型和裝美装
價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第五冊
性犯罪と私刑

小型和裝美装
價一三〇圓 下共

紅夢樓主人著 續劇凸版劇和装(同性色情史)
美少年論

價一〇〇圓 下共

右の書籍御希望の方は代理部宛現在
金書留又は小紙留にて御申込み下
さいませ向書留御送附御希望の方
は書留料加算御送金下さいませ

伊藤晴雨著
上製巻物

豪華絵巻物
価五〇〇円 下五〇〇円

美人十二支責め繪巻

十二支にちなむ責め場を古事逸話傳説等により世につたえられたものを先生独特の麗筆で描いた力作絵巻は先生快心の作、蒐集者垂涎のもの

喜多玲子筆コロタイプ八枚一組三百圓 下共

玲子悦虐姿態素描集(2)

凄艶の姿態を描く喜多玲子の傑作豪華秘帖

峰岸義一著
千零

B六判二五〇餘頁
夜 價二五〇圓 下二二〇圓

伊藤晴雨著
黒繩

A五判和裝美本頁餘頁
記 價三〇〇圓 下二四〇圓

伊藤晴雨著
實のこれくしょん

A五判和裝更紗表紙
價三〇〇圓 下二四〇圓

伊藤竹節編
小説に 實の代表名作選

菊判和裝美本
價三〇〇圓 下二四〇圓

伊藤晴雨著
十二カ月行事奇態刑罰圖譜

價五〇〇圓 下三二〇圓

アドロッド・シュトック著
被虐の家

B六判二二六頁
定價三三〇圓 下二四〇圓

日本特集出版社代理部

東京千代田神田神保町二ノ三四
振替口座東京二四二五一番

顔をおしつけ、がぶりと、のどをならして、ただれた腐臭の強い舌だらけの太い舌を押し入れて、香よい石鹸の上品な氣のしみた口の中をめちやめちやにかきまわし、あげ句のはてに、黒いぐきに乙女の舌をきつくはさんで、ルビーのような唇の間からくわえ出した。一方その両手は間断なく腋窩をくすぐったり、ぼつてりとしたお腹を撫でたり、じれたような唸り声を発しながらいきなりアザがつくほどつねつたり、垢のたまつた黒い爪で乳房をかきむしつたり、さては、跛で引きつった奇型な足で、いやというほど、乙女の顔をふみつけ、かかとで唇をぎりぎり踏みしだいたり……だんだんと兇暴さを加えていった。

と同時に、足下にうずくまっていた三本指はジャヌヌの腰を拘くと、舌なめずりしながら、まだ浅い緑の芝生に顔をうずめた。ジャヌヌは、この狂おしい痛みと悪臭と愛撫の中で感じてはならぬ妖しい快感を覚え、消えてしまふか、このまま溶けてしまふのではないかと自らを疑しむのだつた。一方、乞食のジークたちに弄ばれている

アンヌは、もうほとんど失神の一步手前まできていた。(訳者註。ここで、アンヌは二人の畸型男のために、物凄く責めに会うのだが、あまりに淫靡であり、描写が細かく長いので、約東の枚数を超過するため、ごく簡単に、抄訳しておく。)乞食のジークは元來のサディストだつたらしく、一度はげしく掻き立てられた潜在的憤怒はサディ的歡喜とともに応じ難く、用意してきた細い針金を、一本一本逆に反らせたアンヌの指に食いこむようにきつくまきつけ、海老責めの形で、それをうしろ手にねじまげ、その先端を足指の一つ一つにからませ、紙やすりの棒でかいた握り太の棒のさきで、体中を桃色に身もだえさせるが――まず、針金はふつくらとした指や手にくいこむ。ジークはウウウッと唸りながら、こんどは、紙やすりの棒でかいた女の髪の毛の中をかきまわす、髪は数本ずつ、それにからみ、根元からぬけおちる。ジークはこんどは相棒に手まねで、お前の領分を楽しめと指図する。片目鼻缺けの大人道は、熊手のような掌の中に、美術品のように均勢のとれたかの女の四足を楽々つかむ。それでも、拇指の

半分以上があまつている。ぎゅつとつかんだ四足妙麗な肉体を逆吊りのまま、ぐるぐるとこまのようにふりまわす。時々手をゆるめると、大手をひろげて受けとめる役に廻つたジークが、むんずと乙女の××をばげしい接吻と平手打ちで、責め立てる。

こうした烈しい弄びがくりかえされた末、二つの組の猿共は、言いあわしたように、それ／＼の乙女を手とり足とり左右から抱き上げて湯槽に入れて、体中二人がかかりでいじくりまわし、それにも飽きると、「さあ、おれたちの業病をいただかしてやれ」「ぬける程、根こそぎ伝染してやるんだ」と、わめきながら、再びほか／＼と柔かく潤つてきた湯上りの乙女の体を×××二人の乙女は身を弓なりにして反り乍ら空しい努力をつづけたが、天刑病のどす黒い菌は、柔かい円い腿をすべり、最後の瞬間は刻々と近ずいて来た。無意識の悲鳴は、時々二人の唇をついて出た……それは、処女の汚れない肌が悪魔の餌食となつた事をはつきりと知らせるものでしかなかつた。